

# **東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報**

**— 平成13年度 —**

**2002. 3**

**東大阪市教育委員会**

## はしがき

わが東大阪市の東にそびえ立つ生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。

平成11年度より、個人・小規模事業主を対象に遺跡内での個人住宅建設工事だけでなく、一定規模以下の賃貸共同住宅等建築工事に伴う発掘調査経費の一部を公費負担する制度を、国(文化庁)・大阪府教育委員会のご協力を得て実施しております。今回報告します遺跡の調査概要には、上記の公費負担による調査も含まれております。調査成果は次章以下に記すとおりですが、縄文時代から中世・近世期にいたる各種の遺構・遺物が多数発掘されました。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料と言えるでしょう。

本書が埋蔵文化財保護行政の実績報告書としてだけでなく、地域の歴史を掘り起こす冊子として広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました個人・関係機関に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

## はしがき

### 目次・例言

第1章 平成13年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 水走氏館跡第2次発掘調査	3
第3章 山畠古墳群第20次発掘調査	23
第4章 西ノ辻遺跡第44次発掘調査	45
第5章 意岐部遺跡第6次発掘調査	61
第6章 芝ヶ丘遺跡第12次発掘調査	101
第7章 巨摩廃寺遺跡第9次発掘調査	103

# 例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額10,000,000円）で実施した、個人住宅建設工事及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
- 調査は、調査原因に係る個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 一部の調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・溝状遺構
SB	掘立柱建物	SK	土坑
SX	その他の落ち込み状遺構		

- 現地調査の実施・進行、遺物整理および報告書作成にあたり、下記の方々からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。

志村 治恒・辻井 節・桜井 一義・米島 安一・藤井 一彦・中村 岩見  
渡辺 晃宏・市 大樹・水野 正好・木下 密運・小池 寛・小野友記子

## 第1章 平成13年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成13年度の文化財保護法第57条の2・3に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は平成14年2月28日現在で届出は598件、通知は67件、合計665件である。届出（通知）工事の内訳は下記のとおりである。

個人住宅	118件	分譲住宅	247件	共同住宅	21件	工場	3件	店舗	10件
その他建物	39件	道路	8件	学校	3件	宅地造成	7件	公園造成	2件
ガス	85件	電気	3件	水道	17件	下水道	101件	電話	1件

665件の届出（通知）の指導事項は発掘調査99件、工事立会239件、慎重工事327件であった。

本市教育委員会では、国庫補助事業としては発掘調査指示の内、次頁一覧表のものについて実施した。個人住宅建設に伴う発掘調査が4件、確認調査が10件、個人が実施する賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が2件、同発掘調査が3件、埋蔵文化財包蔵地外の試掘調査が1件である。

1は、前年度で確認調査が実施され第2層から弥生土器が出土し、建設工事に先立って発掘調査が必要であった。今年度ベタ基礎で埋蔵文化財に影響を及ぼす部分27m<sup>2</sup>について調査を実施した。調査の内容については第4章に記載している。

2は鉄骨3階建ベタ基礎、3は木造2階建ベタ基礎、4は木造2階建ベタ基礎、5は軽量鉄骨2階建布基礎、8は鉄骨2階建杭基礎、9は鉄骨3階建布基礎、10は軽量鉄骨2階建布基礎、11は木造2階建杭基礎、14は鉄骨造5階建ベタ基礎、18、19、20は木造2階建杭基礎の個人住宅である。2は0.3～0.4mが盛土であり、以下暗緑灰色シルト質細粒砂(旧耕土)、暗褐色シルト混じり中礫～巨礫、暗褐色粗粒砂～細礫であった。下2層は自然河川の堆積層である。3は0.5mまで盛土で、その下は暗赤褐色細礫混じり粗粒砂である地山が検出された。4は0.3mまで盛土で、その下は浅黄色細礫である地山が検出された。5は1.3mまで地盤改良を行なうということで確認調査を実施したが、すべて盛土であった。8は1.4m、9は2m、10は1m、8は0.2mの盛土の下に旧耕土があり、0.7mで浅黄色シルトの地山となる。9は1mの盛土の下に近現代の池の堆積物があり、1.8mで緑灰色礫混じり砂土の地山となる。10は0.3mの盛土の下に緑灰色シルト、にぶい黄褐色壤土、黄褐色壤土、暗灰黄色礫混じりシルトとなり1mで黄褐色細礫混じり壤土の地山となる。11は0.8mの盛土の下に谷筋の堆積物である灰色細礫混じり中粒砂、灰色細礫混じり中～細粒砂、灰黃褐色細礫混じり粗粒砂、灰オリーブ色粗粒砂、にぶい黄橙色細粒砂～極細粒砂が堆積する。14は1.7mまで確認し、1mの盛土の下に暗緑灰色シルト混じり粘土、暗青灰色中礫混じり粘土、暗緑灰色シルト混じり粘土と続くが埋蔵文化財は検出されなかった。18は古墳時代の落ち込み、土師器・須恵器、19は古墳～奈良時代の土師器・須恵器を検出した。

6は、瓜生堂遺跡の隣接地で、鉄筋コンクリート地下1階、地上4階杭基礎の開発計画であったので事前の試掘調査を実施した。地表下4mまで確認したが、既存の配水池の工事による攪乱であり埋蔵文化財は検出されなかった。

12は鉄骨造3階建ベタ基礎、15は木造2階建杭基礎、17は木造2階建ベタ基礎の個人住宅である。12は地表下1.4～1.55mで古墳～奈良時代の遺物包含層が検出された。第6章参照。15は地表下1.4～1.5mで奈良時代～中世の、1.5～1.7mで奈良時代の遺物包含層が検出された。第7章参照。17は0.4mで中世の遺物包含層と溝が検出されたが詳細については次年度に報告する。

13は鉄骨10階建杭基礎、16は鉄骨3階建ベタ基礎の共同住宅である。13は2.4mの盛土の下に植物遺体を含む灰色粘質シルト、オリーブ灰色シルト混じり細粒砂、灰色中粒砂と地表下4.2mまで確認、16は0.2～0.3mの盛土の下に旧耕土、床土があり、その下はすぐに暗灰色細礫混じりシルト質粘土の地山であり、両方とも埋蔵文化財は検出されなかった。

## 平成13年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
	水走氏館跡第2次発掘調査(賃貸共同住宅)	五条町1320	若松	平成13年1月15日～2月8日	183m <sup>2</sup>	平成12年度調査 本書第2章
	山畑古墳群第20次発掘調査(賃貸共同住宅)	瓢箪山町89-1	若松	平成13年2月13日～3月28日	200m <sup>2</sup>	平成12年度調査 本書第3章
1	西ノ辻遺跡第44次発掘調査(賃貸共同住宅)	弥生町1414-6	菅原	平成13年5月9日～5月25日	27m <sup>2</sup>	本書第4章
2	植附遺跡確認調査(個人専用住宅)	西石切町2丁目514,592-1,-5	菅原	平成13年5月29日	2.3m <sup>2</sup>	GL-1.1mまで埋蔵文化財を検出せず。支障なし。
3	芝ヶ丘遺跡確認調査(個人専用住宅)	北石切町2243-23	菅原	平成13年6月1日	9m <sup>2</sup>	GL-1.4mまで埋蔵文化財を検出せず。支障なし。
4	山畑遺跡確認調査(個人専用住宅)	上四条町1703-2,-3	菅原	平成13年6月8日	4m <sup>2</sup>	GL-0.8mまで埋蔵文化財を検出せず。支障なし。
5	楽音寺遺跡確認調査(個人専用住宅)	横小路町4丁目1467-1,-3	菅原	平成13年6月22日	4m <sup>2</sup>	GL-1.8mまで埋蔵文化財を検出せず。支障なし。
6	周知の埋蔵文化財包蔵地外の試掘調査	下小阪4丁目310-2,-18,-19	菅原	平成12年7月4日	12m <sup>2</sup>	GL-4.0mまで埋蔵文化財を検出せず。支障なし。
7	意岐部遺跡第6次調査(賃貸共同住宅)	御厨東2丁目716-1,-5	菅原	平成12年7月23日～9月20日	191m <sup>2</sup>	本書第5章
8	馬場遺跡確認調査(個人専用住宅)	日下町2丁目1482-5	勝田	平成13年8月22日	2m <sup>2</sup>	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
9	辻子谷遺跡確認調査(個人専用住宅)	中石切町1丁目629-4	勝田	平成13年9月10日	2m <sup>2</sup>	GL-2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
10	みかん山古墳群確認調査(個人専用住宅)	東豊浦町1142-6	勝田	平成13年9月21日	5m <sup>2</sup>	GL-1mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
11	植附遺跡確認調査(個人専用住宅)	中石切町3丁目18-1	菅原	平成13年9月27日	4m <sup>2</sup>	GL-1.7mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
12	芝ヶ丘遺跡第12次発掘調査(個人専用住宅)	中石切町4丁目2178-3	菅原	平成13年10月4日	7m <sup>2</sup>	古墳～奈良時代の遺物包含層を検出。土師器・須恵器出土。本書第6章。
13	高井田遺跡確認調査(賃貸共同住宅)	高井田西5丁目55	菅原	平成13年10月9日	15m <sup>2</sup>	GL-4.2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
14	植附遺跡確認調査(個人専用住宅)	西石切町2丁目240-1,241-2	菅原	平成13年10月11日	4m <sup>2</sup>	GL-1.7mまで確認。支障なし。
15	巨摩廐寺遺跡第9次発掘調査(個人専用住宅)	若江西新町3丁目6-20,13-5,-6	菅原	平成13年10月31日	4m <sup>2</sup>	奈良時代の遺物包含層を検出。土師器・須恵器・平瓦出土。本書第7章。
16	額田寺跡確認調査(賃貸共同住宅)	立花町402-1,-4,-8	菅原	平成13年11月30日	4m <sup>2</sup>	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
17	繩手遺跡確認調査(個人専用住宅)	南四条町754-1	菅原	平成13年12月5日	4.4m <sup>2</sup>	GL-0.4mから中世の遺物包含層、溝を検出。
18	山畑古墳群第21次発掘調査(個人専用住宅)	四条町479-3,-4	菅原	平成14年2月4日～2月18日	22.9m <sup>2</sup>	古墳時代の落ち込みを検出。土師器・須恵器出土。次年度報告予定
19	山畑古墳群第22次発掘調査(個人専用住宅)	瓢箪山町932-5	菅原	平成14年2月14日～3月5日	28.3m <sup>2</sup>	古墳～奈良時代の土師器・須恵器が多量に出土。次年度報告予定。
20	日下遺跡確認調査(個人専用住宅)	日下町7丁目776,781	菅原	平成14年3月1日	8m <sup>2</sup>	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。

## 第2章 水走氏館跡第2次発掘調査

### 1) はじめに

水走氏館跡は五条町に位置する、平安時代後期から江戸時代に亘り存した水走氏の屋敷の跡である。水走氏はとくに平安時代末期から室町時代前半にかけて中河内を中心に所領・諸職を有した中世の有力土豪で、河内一の宮・枚岡神社に奉仕しつづけていた。その記録は『水走文書』として残されている<sup>1)</sup>。館跡については『水走文書』の建長4年（1252）6月付けの「藤原康高譲状＝譲渡嫡男藤原忠持屋敷并所職私領等事」に「五条 屋敷一所」として（寝）殿、廊、惣門、中門、土屋、廐屋、倉、雜舎など9つの建物が記されており、当時の土豪（武士）の館（屋敷）状況を知る上で貴重な記述となっている。

昭和48年（1973）に実施された第1次調査では、中世末から近世初頭にかけての建物跡（柱穴）、溝、池泉状遺構と、瓦（中～近世）、瓦質土器（擂鉢・火舎など）、土師質土器（羽釜）、土師器皿、陶磁器、木製品（下駄・漆器など）、かんざし、貸銭（寛永通宝）などの中世前半から近世後半にわたる遺物が検出されている<sup>2)</sup>。また、当該地の南には文化8年（1812）に造立された水走氏墓塔が建っている（図版1）。

平成12年4月12日付で志村治恒氏から、五条町1320における賃貸の共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があった。当該地は、第1次調査箇所にあたり、代理者を通じて協議を行ない、建設工事に先立つ造成工事時の立会調査を実施するとともに、建物基礎工事部のうち既調査部分を除いた約183m<sup>2</sup>を対象として、平成13年1月15日から2月8日までの間、発掘調査を実施した。

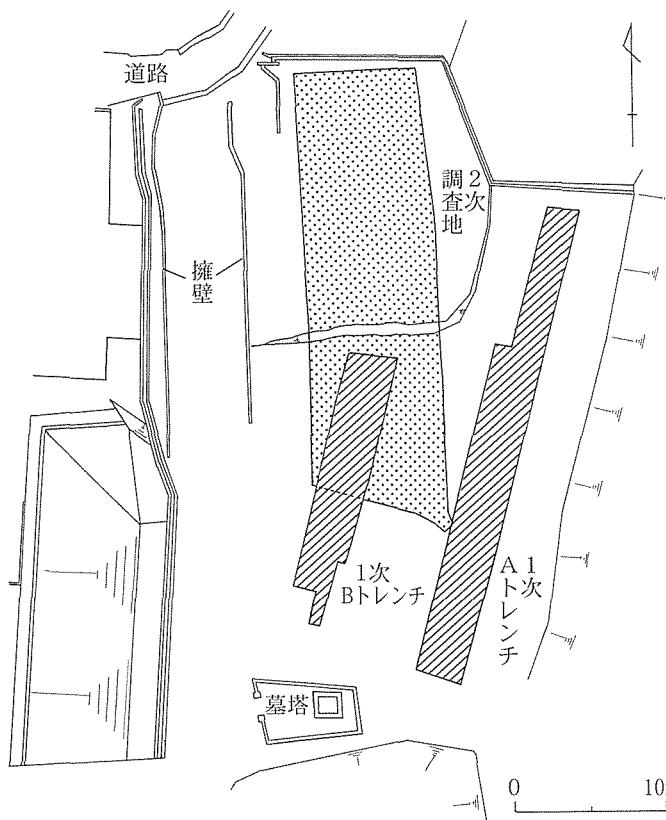
### 注

1) 「第七類 水走文書」『枚岡市史 第三巻 史料編（一）』 枚岡市役所 1966年。

2) 『東大阪市埋蔵文化財調査概報12 水走氏館跡の調査』 東大阪市教育委員会 1973年。



第1図 調査地位置図 (1/2500)



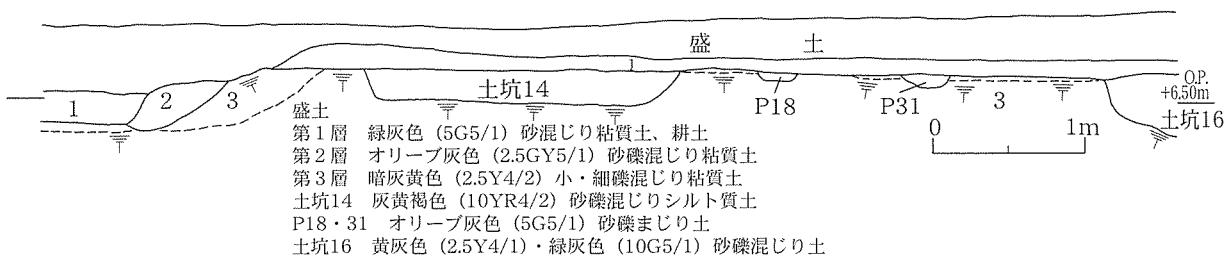
第2図 調査トレンチ位置図 (1/500)

調査を実施し、土師器皿、陶器甕、中・近世の平・丸瓦、奈良時代後期の平瓦の各片と五輪塔の火輪などを検出・採取した。

調査は、盛土および旧耕土（第1層）・第2層と、第1次調査Bトレンチ内の埋め戻し土の大半を機械と人力を併用して除去し、第3層=地山および西整地土（近世前半）上面を精査して遺構の検出および掘削作業を行なった。申請場所は近年まで畠地であったが、調査開始時には造成に伴う擁壁がほぼ完成した荒蕪地で、調査対象地にはその工事に伴う残土=盛土が厚く（0.1～0.5m）堆積し、この盛土内から土師器、陶器、国産・輸入磁器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瓦、埴輪、貨錢など多くの遺物が出土した。

#### 立会調査および表採・盛土内出土遺物（第4・5・10図 図版4～8・10）

1～3は土師器皿。1はやや丸味をおびた底部から、ヨコナデにより屈曲しつつ外方にひろがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。口径8.4cm。2は小さな底部から、大きく外方にひろがる口縁部。口縁端部はやや尖り気味におわる。口径8.8cm。3は丸味をおびた底部から、屈曲して内弯する口縁部。口縁端部は尖る。口径9.7cm。



第3図 東壁断面図一部

#### 2) 基本層序（第3図 図版1）

盛土および旧耕土を除去すると西側（整地に伴う客土）以外の大半は地山=遺構検出面であった。

##### 盛土

第1層 緑灰色砂混じり粘質土

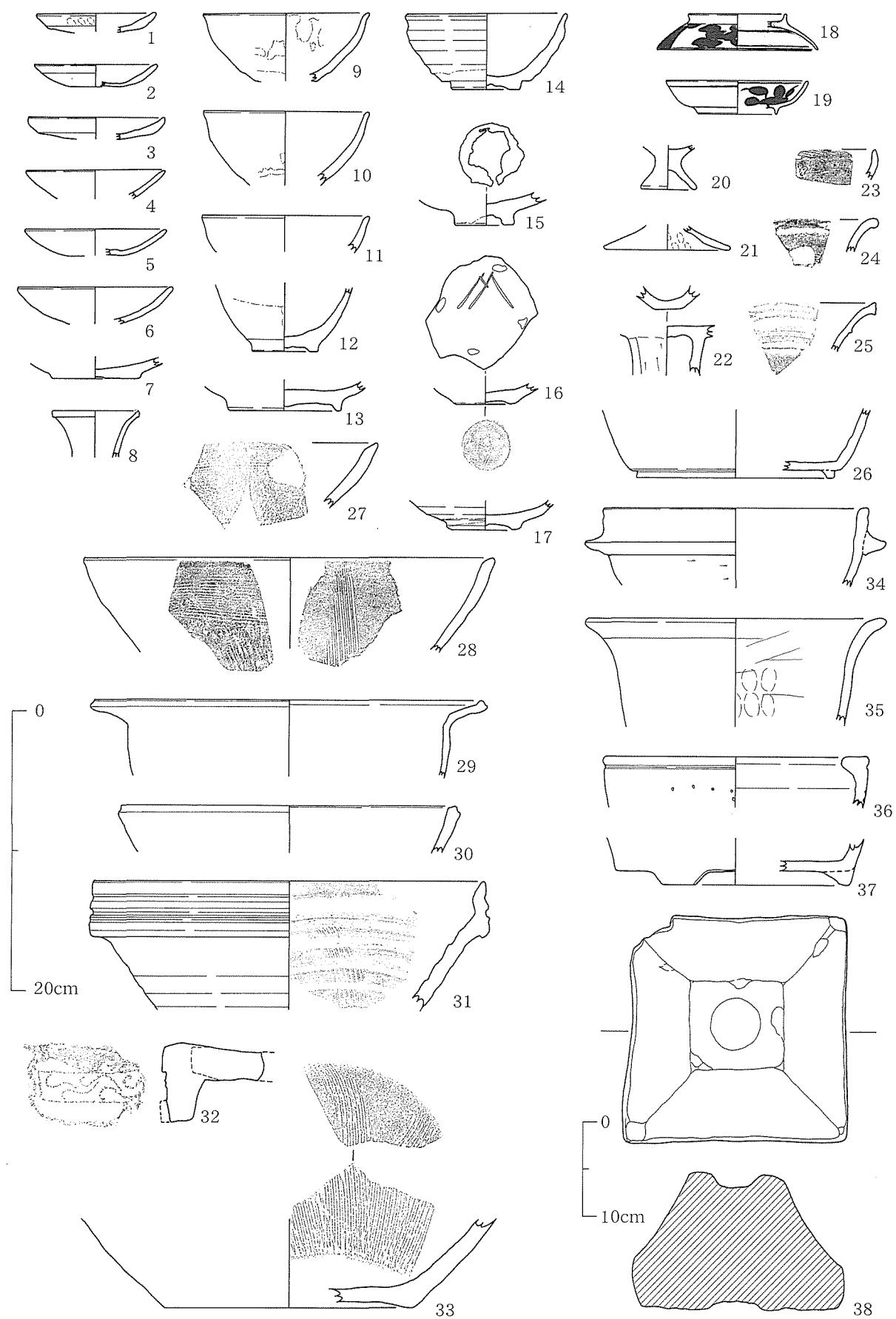
第2層 オリーブ灰色砂礫混じり粘質土

第3層 暗灰黄色小・細礫混じり粘質土、地山

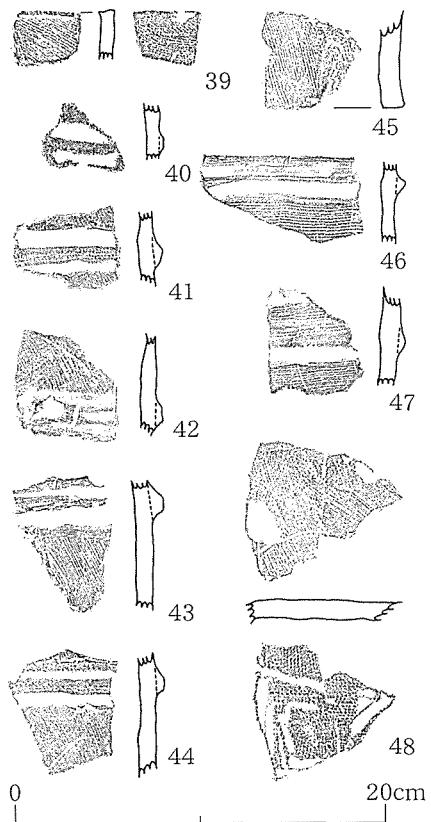
ただし、西側には近世前半の整地土=オリーブ灰色（2.5GY5/1）・にぶい黄色（2.5Y6/4）中～細礫粒砂混じりシルト質土が見られた。

#### 3) 遺構と遺物

建築工事に先立つ造成工事は、工事車輌の搬入などに伴う道路の確保と擁壁の設置で、盛土とともに一部切土作業があった。その切土箇所を対象にして立会



第4図 盛土内出土遺物



第5図 盛土等出土埴輪

7は緑釉陶器碗の底部。内外面に黄緑の釉をかける。軟質の胎土で京都産と思われる。9・10・14は瀬戸・美濃焼の天目茶碗。口縁部外面と体部内面に濃褐色の鉄釉、体部下半に褐色のサビ釉を施すもの(9・10)、施さないもの(14)とがある。9・10は同一個体の可能性がある。共に口径11.6cm。14は口径11.4cm、器高5.4cm、底径4.8cm。13は中国製磁器の碗底部。内外面共に深緑色の釉を施し、底部外面には蛇の目釉ハギが見られる。底径7.8cm。15・16は肥前陶器の皿底部、17は碗底部。15は内面見込みに砂目の目跡と高台疊付にも砂目の跡が見られる。内外面共に淡灰白色の釉が施される。底径は4.2cm。16は内面見込みに胎土目の目跡が見られる。外面底部は無釉で記号のような線刻がある。内面には灰色の釉が施され、『山』のような絵を描いた絵唐津。底径4.0cm。17は淡い灰色の釉を施し、高台付近は無釉。見込みに胎土目の目跡が3箇所見られる。底径4.5cm。18は肥前磁器の碗蓋。内面口縁部に2条と見込みに1条の界線、外面には口縁部に1条の界線と草花文様の染付が施される。口径11.5cm、器高2.6cm、つまみ径7.0cm。

20～22は土師器高坏。20はミニチュア。裾径3.9cm。21

は「ハ」の字形に広がる裾部をもつ。裾径8.8cm。22は脚柱部にヘラケズリで面取りが施されている。

23・26は須恵器坏身。23は細片のため詳細は不明。26はやや「ハ」の字形にひろがる高台をもつ坏身。平底から直線的に外方にひろがる体部。調整は外面底部ヘラケズリを施す以外はロクロナデが見られる。

28は大和型瓦質擂鉢。口縁部内面が外側にわずかに膨らむ面をもち、口縁端部は尖り気味に終わる。調整は外面口縁部横方向、体部は縦方向のハケメ、内面には8条/2.7cmの擂目が施される。口径29.2cm。29は土師器甕。直線的に上方にのびる体部から口縁部は外折する。口縁端部は上方につまみ、面をもつ。調整は内外面共にナデが施される。30は東播系須恵器捏鉢。口縁部の断面形がほぼ方形を呈する。口径23.8cm。31・33は備前焼擂鉢。口縁部上端と下端を強くヨコナデすることによって2条の凹線を口縁部外面に施す。内面には9条/2.8cmの擂目が見られる。口径27.8cm。33は底部。10条/3.9cmの擂目を体部には密に施される。底径17.6cm。

32は唐草文軒平瓦。瓦当面縦幅5.4cm。

36・37は瓦質火舍。36は平面円形を呈する。体部はやや内弯しながら、口縁端部を内側へ引き出し、上方に幅のある平坦な面をもつ。口縁部外面に1条の沈線がめぐり、体部には刺突文が施される。口径18.6cm。37は3本の逆台形の脚部をもつ。体部外面にヘラミガキが施される。底径16.2cm。38は五輪塔の火輪部。幅24.5cm、高さ14.7cm。

39・41・45～48は埴輪。39・41・45～47は円筒埴輪、48は形象埴輪。39は口縁部。上方に面をもち、調整は外面に縦方向のハケメ(8/cm)、内面には縦方向の強いナデが施される。41は外面に縦方向のハケメ(8/cm)調整を施し、タガは断面台形をもつ。円孔の痕跡が残存。45は底部。底部に面をもち、調整は外面に縦方向のハケメ(8/cm)、内面には縦方向の強いナデが施される。46は外面に縦方向のハケメのち横方向のハケメ(7/cm)を施し、タガは突出度がややあまい。内面には一部に斜方向のハ

ケメ(9/cm)とナデが見られる。47は外面に横方向のハケメ(8/cm)を施し、タガは突出度があまい。内面には縦方向のナデが見られる。48は家形埴輪の可能性もあるが、定かではない。調整は外面に不定方向のハケメ(8/cm)、内面にはナデが施される。

82・83は貨銭。82は寛永通寶、初鑄1636年。83は風化し詳細不明(元豊通寶、初鑄1078年か)。

近世前半整地内出土遺物(第4・5・10図 図版5～8・10)

4～6は土師器皿。小さな底部から、大きく外方にひろがる口縁部。4の口縁端部はやや尖り気味におわる。口径9.8cm。5・6の口縁端部は丸くおさめる。5の口径は10.0cm、6は11.0cm。

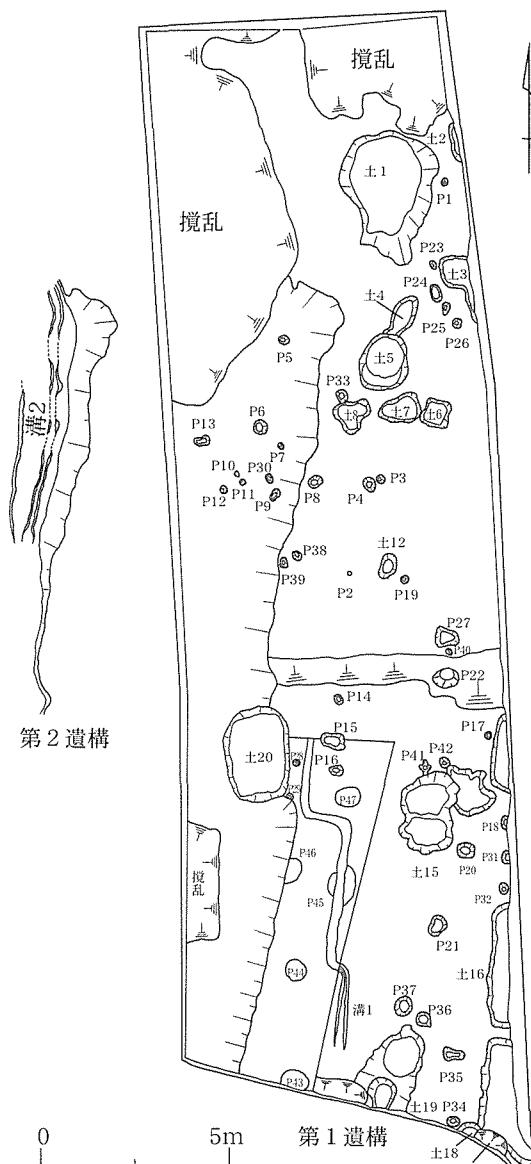
8は備前焼瓶の口縁部。漏斗状にひろがる口縁部。口縁端部は上下に肥厚する。口径6.1cm。9・10は肥前陶器。11は瀬戸・美濃焼の皿。内外面に濃褐色の鉄釉。口径11.8cm。12は内面と外面体部に淡灰白色の釉、底部は無釉が見られる。底径4.5cm。19は肥前磁器皿。外面口縁部と高台脇に界線、高台疊付には砂目の痕跡、内面には草花文様の染付が見られる。口径10.1cm、器高2.4cm、高台径5.6cm。

24・25は須恵器。24は壺の口縁部。漏斗状にひろがる口頸部から口縁端部は丸くおさめ、下方にやや拡張する。調整は内外面共に回転ナデ調整を施す。25は甕の口縁部。ゆるやか外反する口頸部から、口縁端部は面をもつ。頸部外面には鈍い凸線が巡り、調整は内外面共に回転ナデを施す。

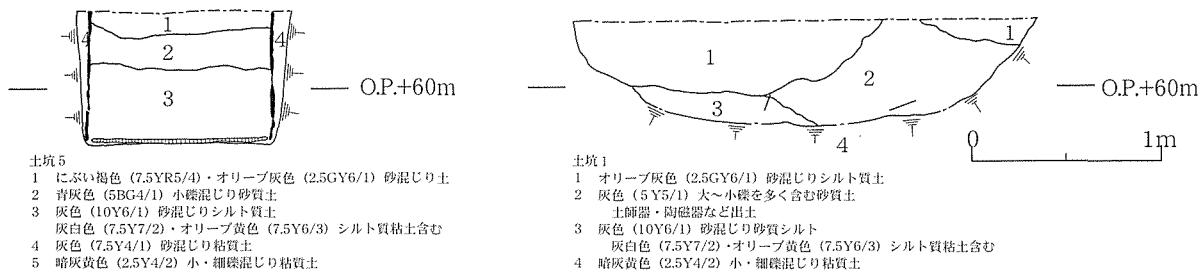
27・34・35は瓦質土器。27は大和型擂鉢。口縁部内面が外側にわずかに膨らむ面をもち、口縁端部は尖り気味に終わる。調整は体部内外面共に横方向のハケメを施す。34は羽釜。直線的に外方に広がる体部から口縁部。口縁部外面は強いヨコナデによる段が見られる。水平につく幅の狭い鍔がつき、鍔端部は面をもつ。調整は鍔直下から下部にかけて横方向のヘラケズリ、内面にはナデが施される。口径18.6cm。35は円形の火舎。直線的に広がる体部から、口縁部は外反する。口縁端部はやや丸くおさめる。口径20.8cm。

40・42・43は円形埴輪。40は外面に縦方向のハケメ(9/cm)、内面にはナデ調整を施し、タガは断面台形をもつ。42は外面に斜方向のハケメ、内面にはナデ調整を施す。タガは断面台形をもつ。円孔の痕跡が残存。43は外面に斜方向のハケメ(10/cm)、内面には縦方向のナデを施す。タガは断面台形をもつ。

77・78・81は貨銭。77は祥符元寶、初鑄1008年。78は熙寧元寶、初鑄1068年。81は元豊通寶、初鑄1078年。



第6図 第1・2遺構平面図



第7図 土坑5・1断面図

#### 第1遺構（第6図 図版1）

当該地西側は近世前半の段階で大量の盛土=客土をして整地し、その西端には石垣が積み上げられていた（調査開始時には擁壁工事すでに除去されていた）。その整地土および地山上面において土坑17基（土坑1～20）、ピット47個（P1～47）、溝1条（溝1）を検出した。以下、主要な遺構・遺物について記す。

土坑3、12、14、16は、埋土内から以下のように土師器、陶磁器など中・近世の遺物も出土したが、ガラス片などを含み、近・現代の遺構であった。

#### 土坑3出土遺物（第9図 図版4・10）

71は肥前磁器。外面体部に草花文様の染付、高台に2条の界線が見られる。高台畳付には砂目のちカキ取りが施される。口径14.0cm、器高7.1cm、底径5.2cm。

72は肥前陶器の天目茶碗。口縁部外面と体部内面に濃褐色の鉄釉、体部下半に褐色のサビ釉を施す。口径11.6cm、器高4.8cm、底径4.3cm。

#### 土坑16出土遺物（第9図 図版4・9）

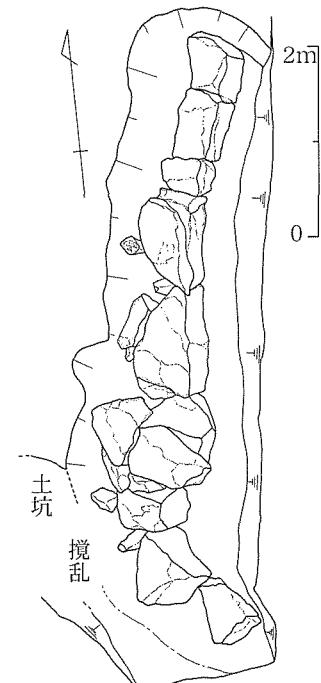
60は土師器皿。丸底から外方に広がる口縁部。口縁端部はやや尖り気味に終わる。口縁端部一部に煤が付着のため灯明皿と思われる。口径8.1cm。61・62は肥前陶器。共に口縁部外面と体部内面に濃褐色の鉄釉、体部下半に褐色のサビ釉を施す。61は内面見込みに2箇所の胎土目が見られる。口径10.8cm、器高4.1cm、高台径2.8cm。62は口径11.4cm。63は東播系甕。

丸味を帯びた体部から、短く立ち上がる頸部、口縁部は外折し丸くおさめる。調整は内外面共に回転ナデを施す。口径19.4cm。64は肥前磁器の碗底部。内面見込みに草花文様の染付が見られる。高台径4.5cm。

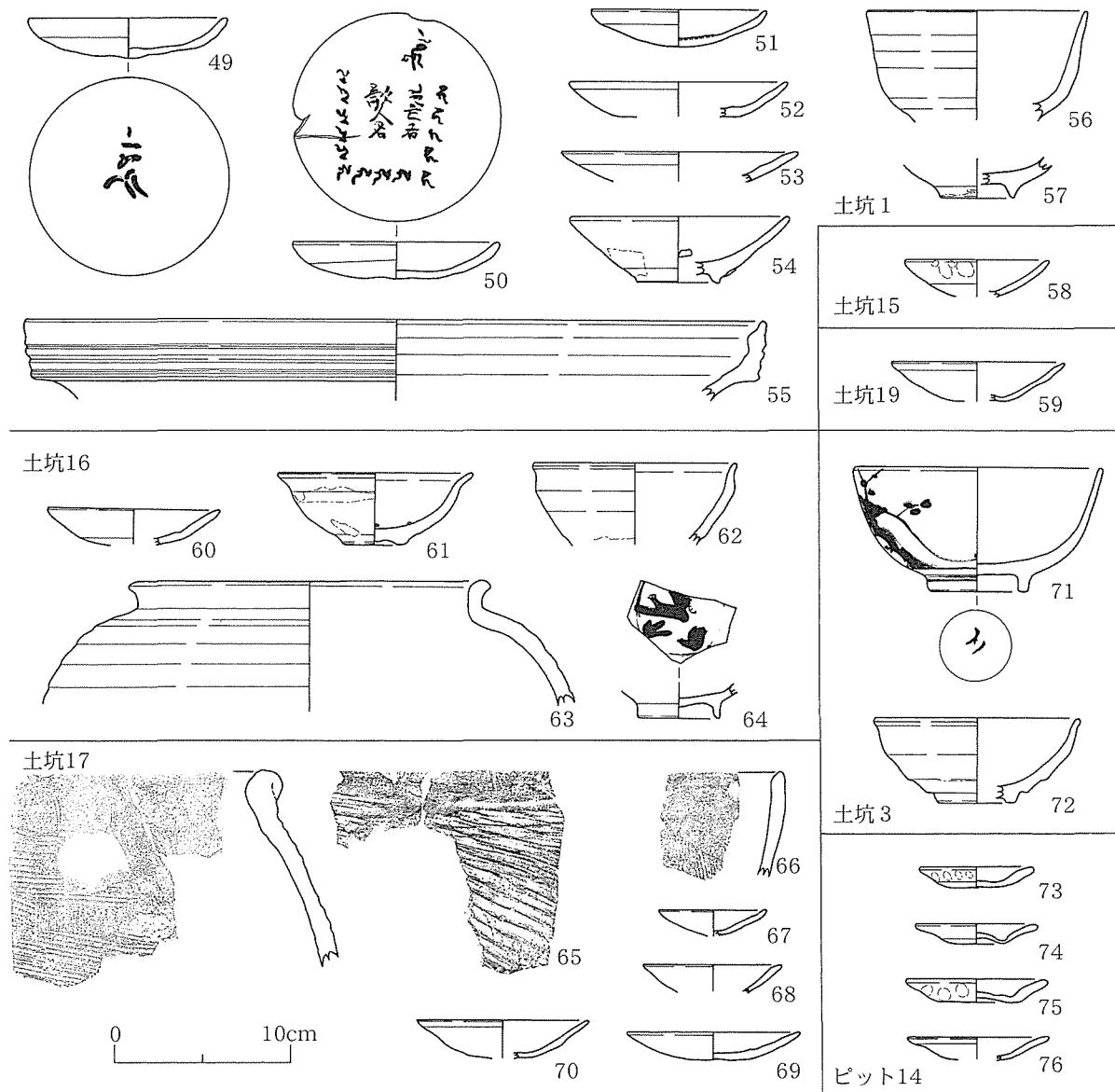
土坑1 2.5m、3.6m、深さ0.53mを測り、平面は貝形、断面逆台形状を呈していた。底部付近に堆積状の灰色砂混じり砂質シルトー第3層ーが見られたが、大半は埋土ー第1・2層ーであった。とくに第2層は大～小礫を多量に含む灰色砂質土で、土師器皿、陶磁器などの遺物が出土した（第7図）。

#### 土坑1出土遺物（第9図 図版4・8）

49～53は土師器皿。49・50は墨書き器で、共に口縁部は平底から外方に広がり、端部を丸くおさめる。49は外面底部中央に梵字の「三名」が書かれている。口径11.2cm、器高2.3cm。50は内面に梵字の「三名」5文字づつで3方を囲んだ中に「三名 敵人名」とあり、その上に梵字の「三名」が書かれている。口径11.6cm、器高2.1cm。51は丸底から口縁部は屈曲して上方に延びる。口縁端部は丸くおさめる。口径9.9cm、器高2.1cm。52・53は平底と思われる底部から、直線的に外方にのびる口縁部。口縁端部



第8図 土坑17石列平面図



第9図 各遺構内出土遺物

はやや丸くおさめる。52は口径12.2cm、53は13.3cm。

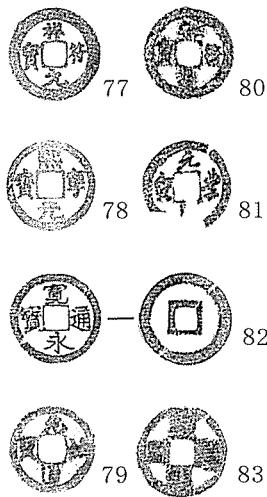
54・56は肥前陶器の碗。内面見込みと外面高台脇に胎土目の目跡が見られる。内外面共に淡灰白色の釉が施される。口径12.2cm、器高3.8cm、高台径4.5cm。56は内外面共に灰色の釉を施す。口径12.4cm。

55は備前焼擂鉢。口縁部上端と下端を強くヨコナデすることによって3条の凹線を口縁部外面に施す。口径41.6cm。

57は肥前磁器。内外面共に灰色の釉を施す。高台疊付は釉のカキ取り。高台径4.2cm。

土坑4 南側が土坑5によって切断されていた。平面細長い舌状を呈し、検出の長さ2.4m、幅0.7m、深さ0.09mを測った。埋土は黄灰色(2.5Y5/1)砂混じりシルト質土で、土師器、須恵質土器、円筒埴輪(第5図44 図版8)の各片などが出土した。

土坑5 径1.5~1.25m、深さ0.68mの円筒形を呈し、内部に径0.96mのヒノキ科ヒノキ属材円形底板と同材木皮の側枠による桶を安置してあった。埋土は3層に分かれ(第7図)、桶、土師器、瓦質土器、瓦、陶磁器などが出土した。



第10図 出土貨銭拓影(1/2)

土坑15 平面奇形の小判形を呈し、南北2.1m、東西1.5m、0.6mを測った。土坑内は上部下位で南北2穴に分かれていた。埋土は灰色（5Y4/1）砂礫混じり土で、土師器、須恵器、黑色土器、磁器、鉄器、貨銭などが出土した。

#### 土坑15出土遺物（第9図 図版10）

58は土師器皿。丸底から、そのまま外方に広がる口縁部。口縁端部はやや尖り気味におわる。口径8.1cm。79・80は貨銭。79は元符通寶。初鑄1098年。80は祥符通寶。初鑄1008年。

土坑17 トレンチ南北隅で西南部分のみ検出し、土坑18および攪乱で一部欠損していた。検出の長さ3.5m、幅2.5m、0.48mを測った。側壁に沿つて自然石を1～2段に並べた石列があり、内面側をほぼそろえていた。側壁と石列の間に緑灰色（10GY4/1）・にぶい黄褐色（10YR5/1）砂混じりシルト質土の裏込めがあり、土師器、瓦質土器などが出土した。内は上層の埋土—オリーブ灰色（5G5/1）砂混じりシルト質土と、下層の堆積土—灰色（10YR5/1）シルト質粘土に分かれ、土師器、瓦質土器、須恵質土器などが出土した。池状の遺構と思われる。

#### 土坑17出土遺物（第9図 図版9）

65は瓦質甕。頸部をもたず、体部から口縁部に続く。口縁端部は、外側に肥厚し丸味をもつ。口縁部からやや下の体部外面に並行タタキ（1.5/cm）、内面には横方向のハケメ（4/cm）調整が施される。

66は瓦質の大和型擂鉢。内湾気味に立ち上がる体部から口縁部に続き、口縁端部は丸くおさめる。外面口縁部付近にハケメ、内面体部には擂目（4/cm）が施される。

67～70は土師器皿。67はやや尖り気味の底部から外方に広がる口縁部。口縁端部は尖り気味におわる。口径6.1cm。68は直線的に外方に広がる口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。口径7.9cm。69・70は小さな底部から、外方に広がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。69の口径は9.8cm、70は9.7cm。

土坑18 調査地外に広がるとともに一部攪乱をうけていた。検出の1.2m、深さ0.35mを測り、土坑内は緑灰色（5GY5/1）砂混じり粘質土で、下部はやや粘質が強く、マツ属（6個）・ヤマモモ（16個）・キイチゴ属（3個）・ウメ（1個）・スモモ（15個）・サンショウ（1個）・ウリ（15個）などの種子を含んでいた。

土坑19 平面はやや縦長の蒲鉾形を呈し、南北2.4m以上、東西1.6m以上、0.47mを測る。埋土は灰黄色（10YR4/3）・暗青灰色（5BG4/1）砂、中～細礫混じり粘質土で明黄褐色（10YR6/8）粘質土の中・小塊および炭を含んでいた。その中から黑色土器、土師器、陶磁器などが出土した。

#### 土坑19出土遺物（第9図 図版10）

59は土師器皿。上げ底であろう底部から、直線的に外方に広がる口縁部。口縁端部はやや丸くおさめる。口径9.8cm。

土坑20 地山および西整地上面にかけて検出した。平面小判形を呈し、南北2.4m、東西1.4m、深さ0.86mを測る。埋土は灰色（5Y5/1）砂混じり土で、土師器皿、陶器甕、磁器碗、須恵質土器、平瓦などの破片が出土した。

土坑2、6～8はいずれも浅く無遺物で、性格・時期は不明である。土坑9～11は極めて浅い窪地であった。

ピットは47個検出したが、そのうち5個（P43～47）は第1次調査Bトレンチのもので、新たに検

出したのは42個となる。P5～7、9～13・34は近世前半の整地土上面で検出したP4・8とともに埋土は暗青灰色(5BG3/1)シルト質土で炭化物を含んでいた。いずれも近世後半以降。

#### P14出土遺物 (第9図 図版10)

73～76は土師器皿。74・75は上げ底から屈曲して外方に広がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。

74の口径6.8cm、器高1.1cm。75の口径8.0cm、器高1.3cm。73・76は小さな平底から、屈曲して外方に広がる口縁部。口縁端部はやや丸くおさめる。73は口径6.4cm、器高1.2cm。76は口径8.0cm。

溝1 第1次調査Bトレーニングで検出されていた細S字状溝のつづき。東方向からさらに屈曲して南方向に延び、浅くなっていた。北側への延長部は確認できなかった。溝内は灰色(5Y5/1)砂混じりシルト質土であったが、遺物は出土しなかった。

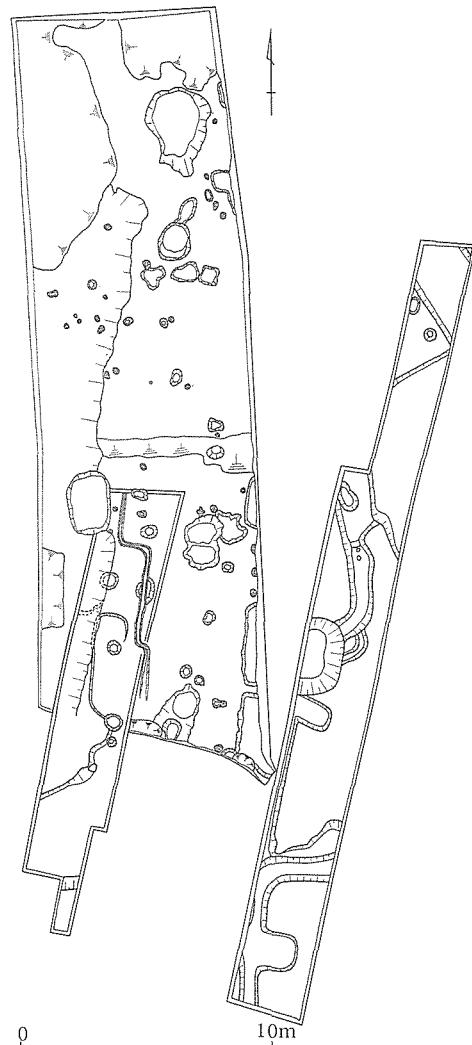
#### 第2遺構 (第6図 図版3)

調査地西側の近世前半の整地土を取り除いた緩やかな地山(第3層)の傾斜面で2条の溝(溝2・3)を検出した。溝は整地に伴う削平などで溝3の西肩はほとんどなく、ところどころが途切れ、極めて浅く、全体状況は不明である。溝内はオリーブ灰色(2.5GY6/1)砂混じりシルト質土で、溝2からは土師器、須恵器の小・細片が少量出土したのみであった。

#### 第1次調査との関連

本調査地内西南部に第1次調査Bトレーニング北部域があつて、その遺構・トレーニング跡および方位によって、今回検出した遺構との関連をつかむことができた。それによって合体した遺構図が第11図である。

第1次調査Bトレーニングで建物跡とされた3ピットに対応するものは検出されなかつた。検出したピットはいずれも浅く、消滅しているものを考慮しても、具体的な建物状態を見いだすことができなかつた。第1次調査Aトレーニングで竹などの多くの植物遺体を含んだ池泉遺構があつたが、今回の調査の土坑17も周囲に石垣を廻らした16世紀後半ごろの池状遺構と考えられる。第1次調査の池泉遺構から南へ延びる溝(松毬・ドングリなど出土)があり、両者は連結されていたのかもしれないが不明。第1次調査Bトレーニングの細い溝は屈曲して南へ延びていたが、除々に浅く削なって消滅し、その性格については確認できなかつた。第1次調査では確認されなかつたが、Bトレーニング西、すなわち本調査地の西側の大半は近世前半の整地(石垣を伴う盛土)であり、その上面等から検出された遺構—上記の建物跡など—はそれ以降のものとなることが判つた。両調査を合わせても室町時代後半以降の屋敷状況ですら十分に垣間見ることはできなかつた。



第11図 第1・2次調査全体平面図

#### 4)まとめ

今回の調査においては室町時代後半から明治時代に至る遺構と古墳時代から江戸時代に亘る遺物を検出した。当該地は近世前半の段階で西側に大量の盛土=客土を施して整地し、一部には石垣を積み上げていた。この盛土内には円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器、土師器などの古墳時代の遺物、平瓦、土師器などの奈良時代の遺物、黒色土器椀、瓦器椀・皿、土師器皿、瓦質羽釜・擂鉢、土師質羽釜、青磁碗、白磁碗、東播系土器、国産陶磁器類、平瓦・丸瓦、貨銭など平安時代から江戸時代初頭にいたる遺物を多量に包含していた。東部には横穴式石室を有する方形墳の五条古墳があるが埴輪は伴わず、近辺に埴輪を伴う古墳の存在を窺わせる。奈良時代の瓦を有するのは南西部に位置する河内寺跡と考えられ、広い範囲から土（遺物を包含した）が搬入されてきたことを物語っている。

『水走文書』に見える康高の館<sup>1)</sup>、すなわち水走氏館跡については本調査地およびその一段下の土地といわれてきた<sup>2)</sup>。確かに第1・2次調査において当時（13世紀後半ごろ）の遺物—瓦器椀など—は出土している。しかし、近世前半および近・現代の整地に伴う削平があったとはいえ、鎌倉時代に遡りうる明確な遺構は検出されていない。

水走氏の館は『大阪府全志』（枚岡南村・大字河内）によると、天正7年（1579）、当時の当主で枚岡神社の神官であった左近（有忠、1593年卒）が、織田信長に逐われ大和に遁れて「邸舎遂に墟となれり」とあり、館はこの時期に廃絶したことになる。しかし、近世の村絵図に「水走屋敷」とあることや明治9年の「水走春忠上地」絵図一四百五十五番字山田、畠式反壱畝六歩一があること<sup>3)</sup>などから、江戸時代以降も本地に水走氏の屋敷が存続していたことはまちがいない。このことから今回確認した近世前半の大掛かりな整地は、屋敷の再建との関係を窺わせているのかもしれない。ただ、中世期の館の中心部については南側の畠地など近隣の場所に求められることになると考えられよう。

また、遺物として特に注目されるのは、土坑1から出土した2枚の墨書き土師器皿である。1つ（49）は底部外面に梵字の「ムニ」、もう1つ（50）は内面に梵字の「ムニ」を凹状に配し、上に梵字の「ムニ」、中に「口三名、敵人名」とあって、呪詛的な性格をもつ内容と思われる。この土器はその型式および供伴遺物—備前擂鉢など—から16世紀後半頃のものと考えられる。これに関しては、『水走文書』の水走系図の有忠=左近のところに、彼を織田信長に讒言したもの（石黒右近）がいたという記事等<sup>4)</sup>も興味深い。

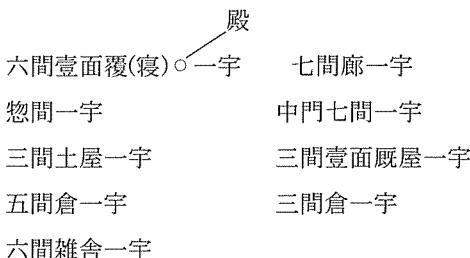
注：1)『水走文書』の「藤原康高譲状写」にみえる館状況

（『枚岡市史 第三巻 史料編1』 枚岡市役所 1966年より一部改変）

譲渡 嫢男藤原忠持屋敷并所職私領等事

合

一屋敷一所



2) 藤井直正 ①「水走氏と水走文書のこと」『郷土誌ひらおか』 河内郷土研究会 1963年、②「水走氏の人びと」『郷土史のたのしみ』 財団法人東大阪市文化財協会 1997年。

3) 藤井、前掲注1の①。

4)『水走文書』内の水走氏系図には「天正二年戌九月石黒右近依讒言。而織田信長公大勢指向」とある。

図版1 水走氏館跡第2次調査 遺構



水走氏墓塔（西より）



遺構全景（南より）

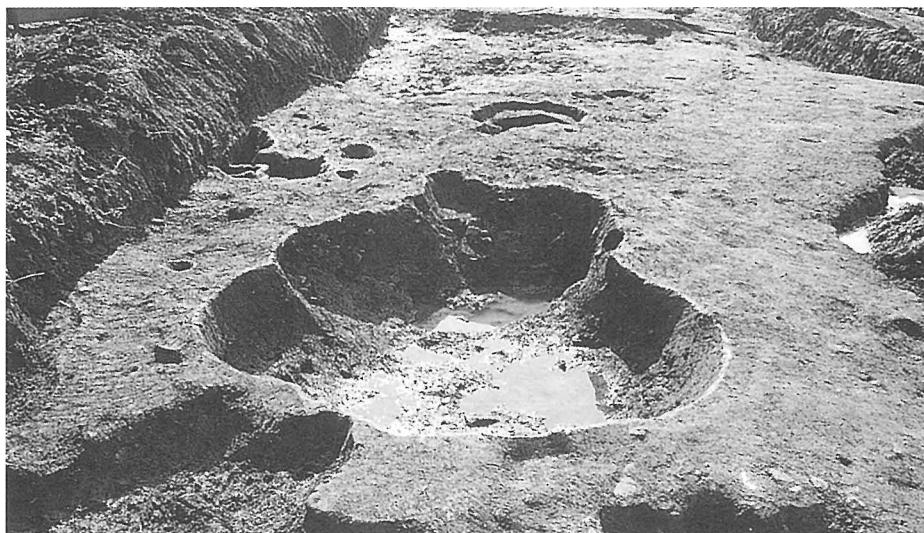


土坑5（北より）

図版2

水走氏館跡第2次調査

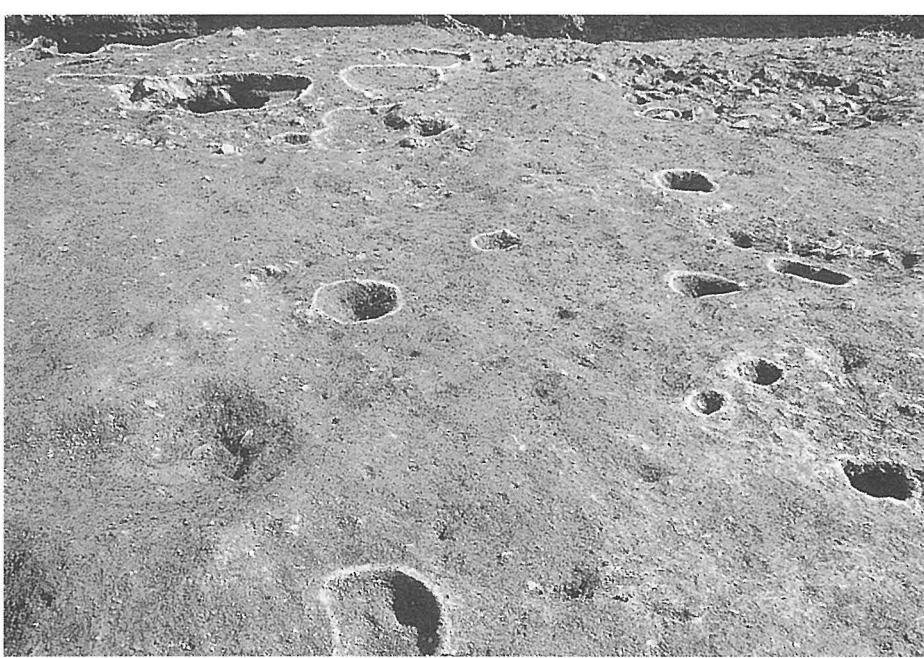
遺構



土坑1（北より）

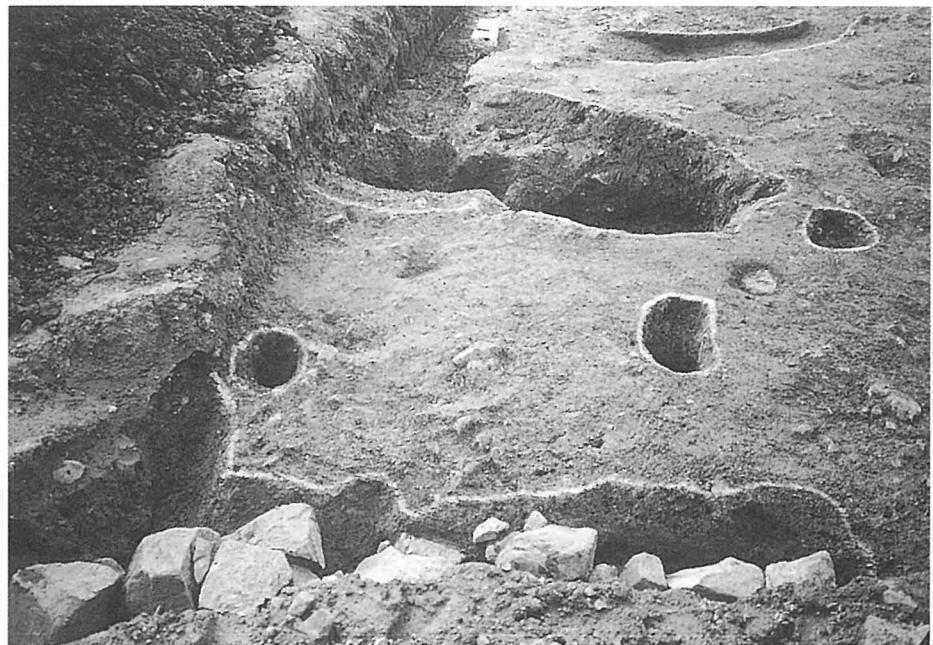


土坑1断面（北北西より）



トレンチ中央遺構—土坑4～8など—（西より）

図版3 水走氏館跡第2次調査 遺構



トレンチ南東部遺構—土坑17・19など—（東より）

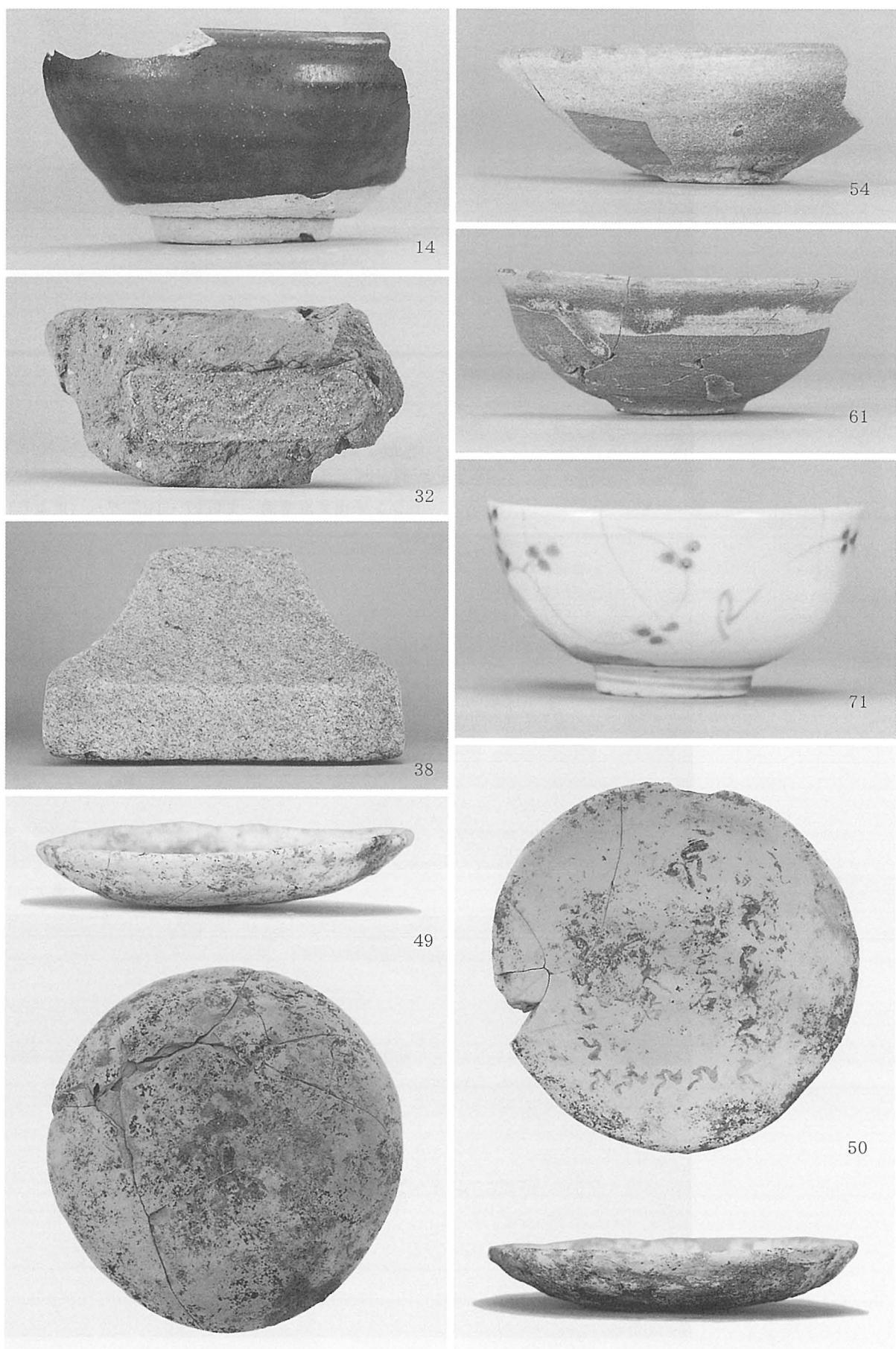


土坑17（東より）



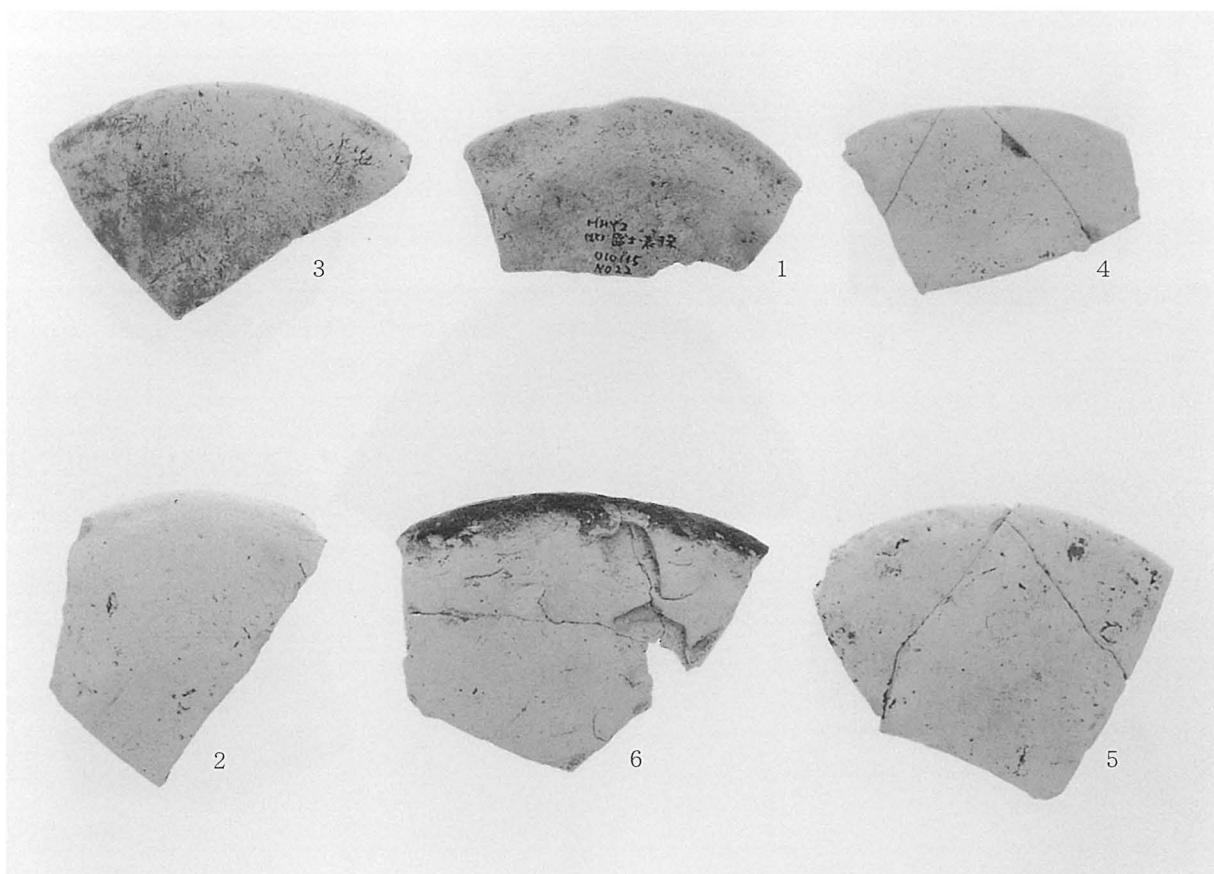
西落ち・溝2など（北より）

図版4 水走氏館跡第2次調査 遺物

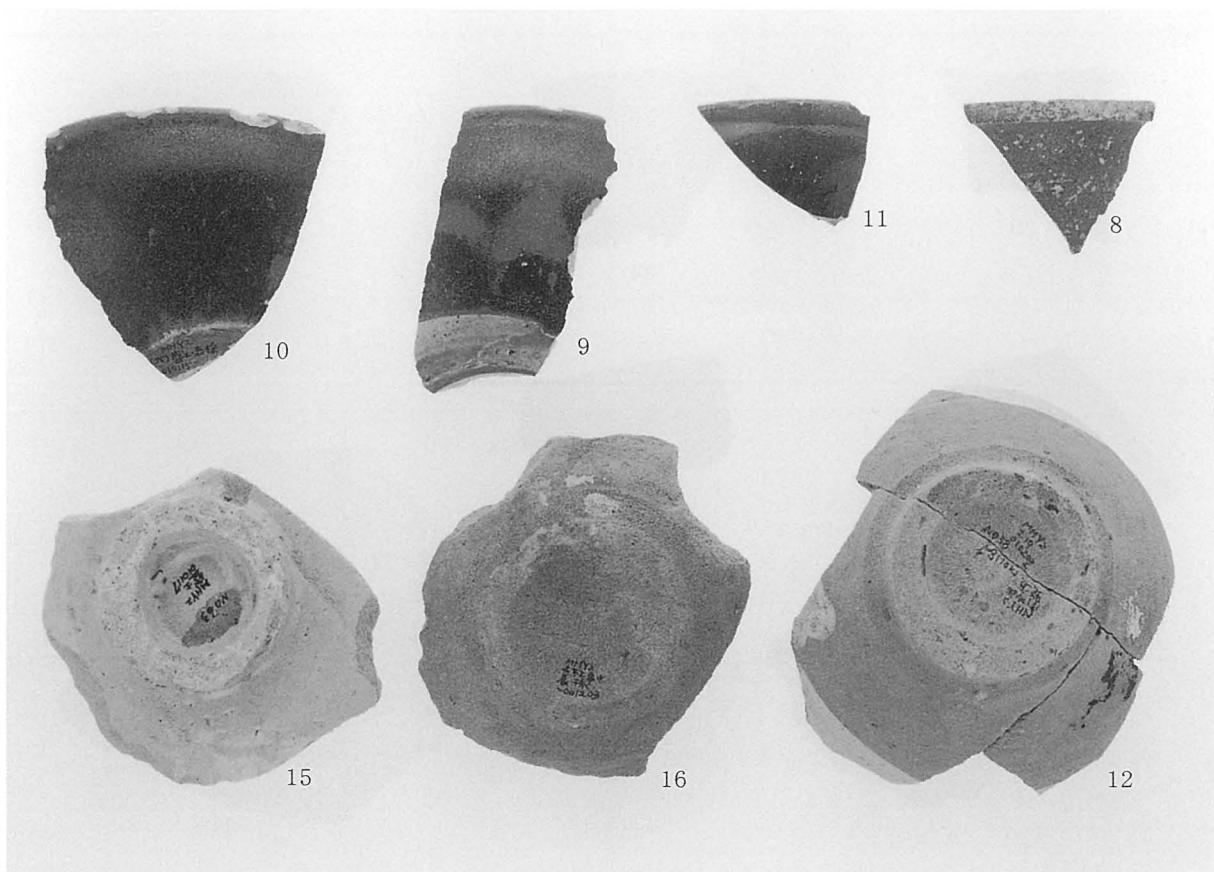


盛土内出土 (14・32・38) 土坑1出土 (49・50・54) 土坑16出土 (61) 土坑3出土 (71)

図版5 水走氏館跡第2次調査 遺物



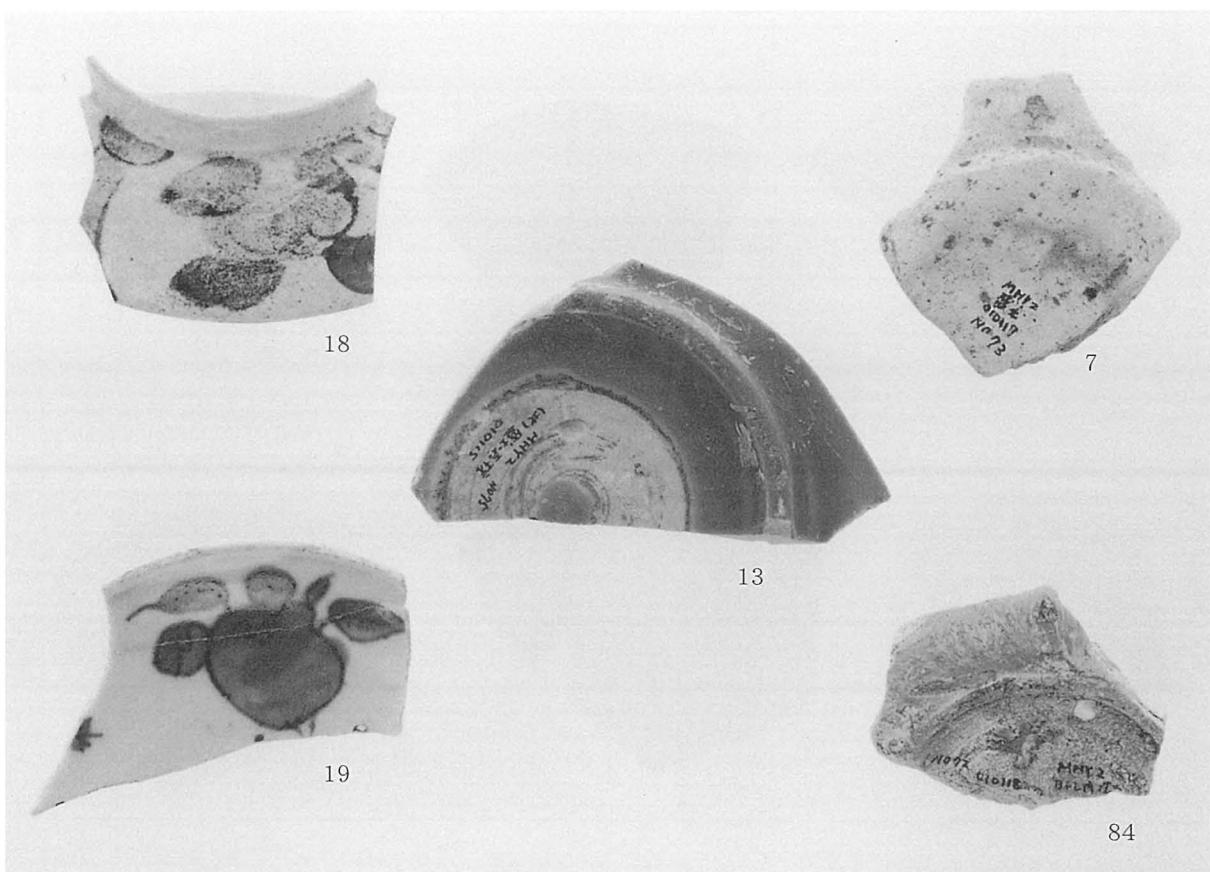
盛土内出土（1～3） 整地土内出土（4～6）



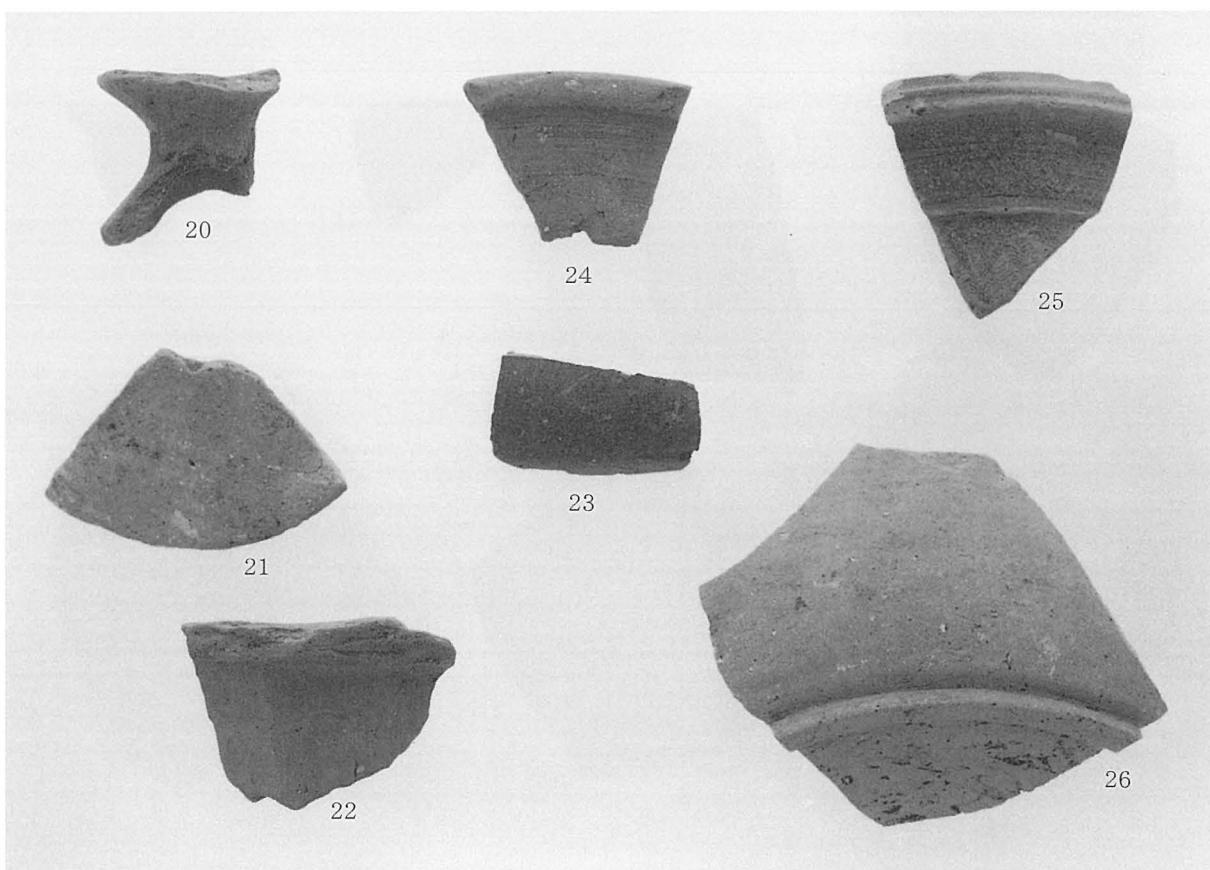
整地土内出土（8・11・12） 盛土内出土（9・10・15・16）

図版 6

水走氏館跡第2次調査  
遺物

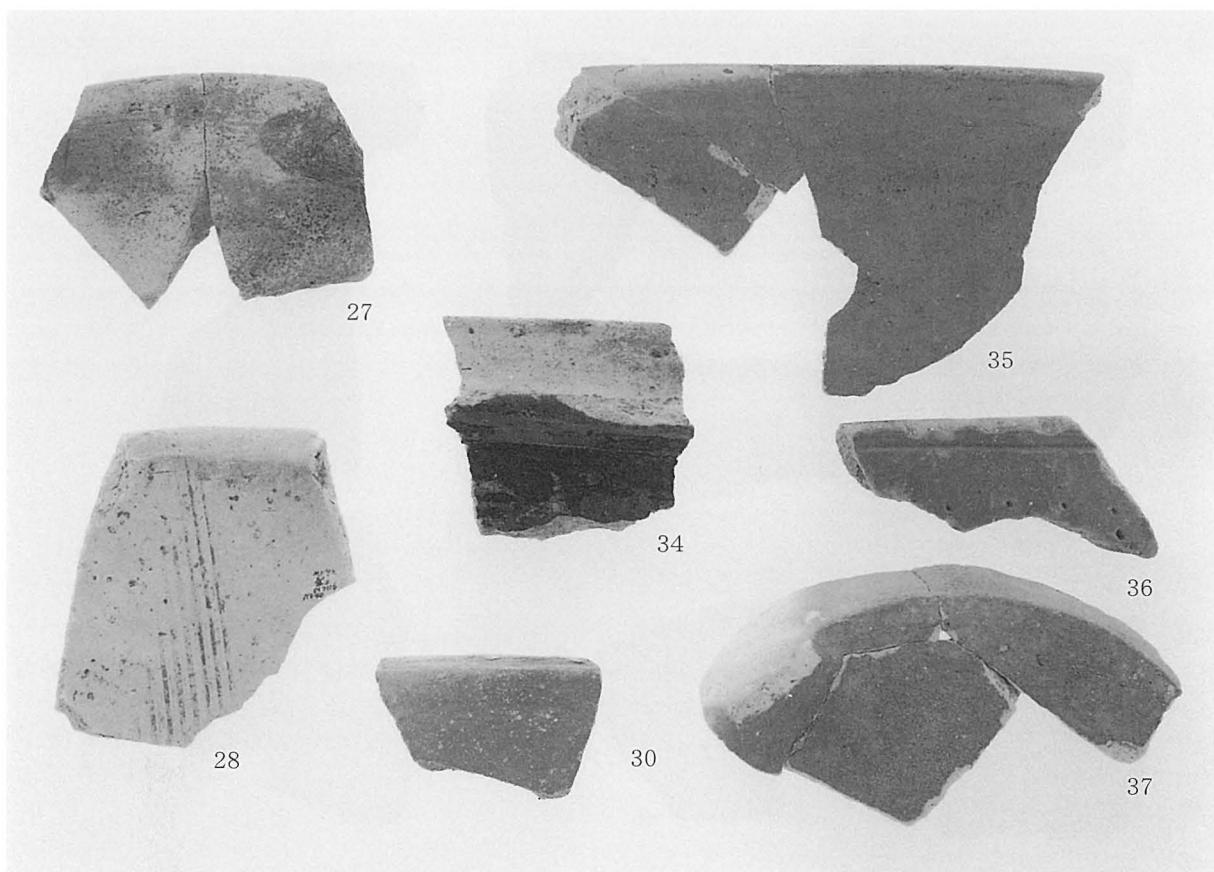


盛土内出土 (7・13・18・84) 整地土内出土 (19)

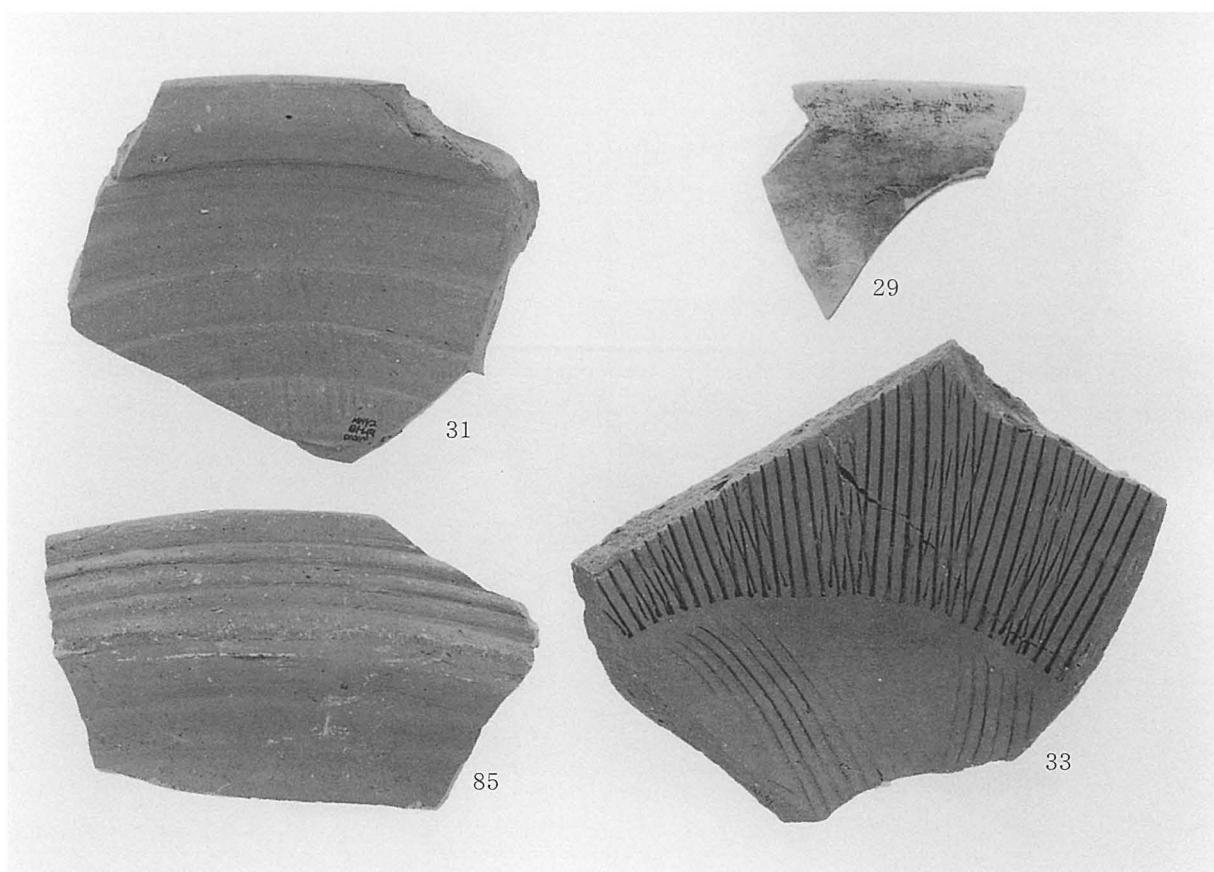


盛土内出土 (20~23・26) 整地土内出土 (24・25)

図版7 水走氏館跡第2次調査  
遺物



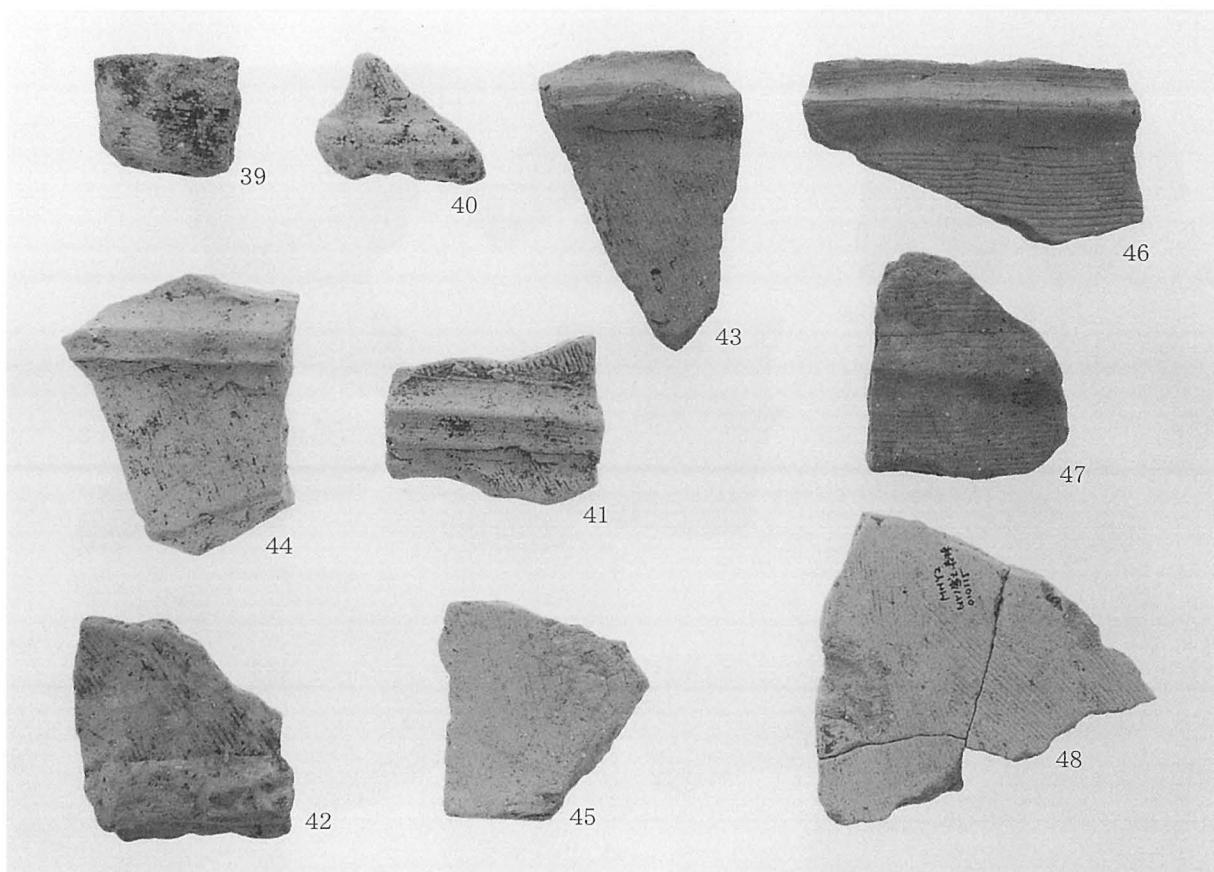
整地土内出土 (27・34・35) 盛土内出土 (28・30・36・37)



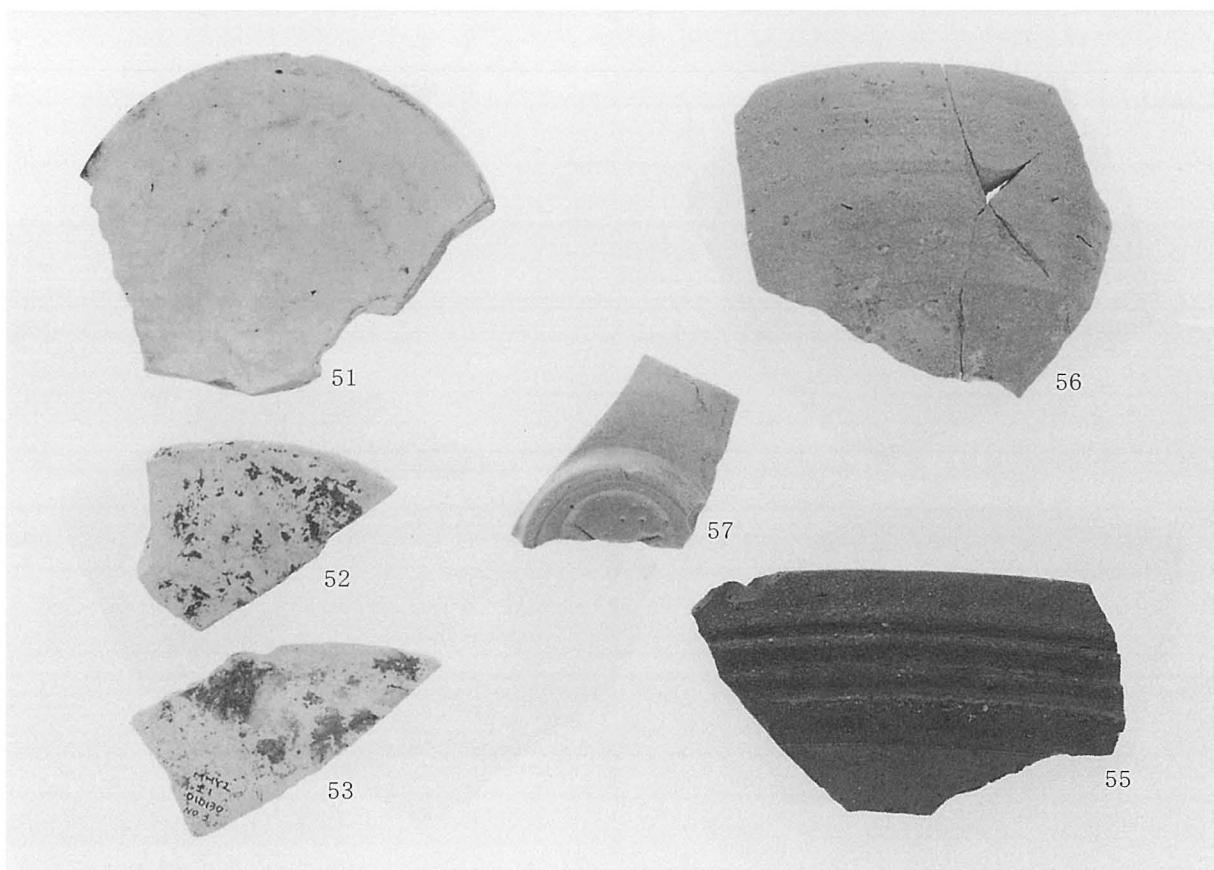
盛土内出土 (29・31・33・85)

図版8

水走氏館跡第2次調査  
遺物

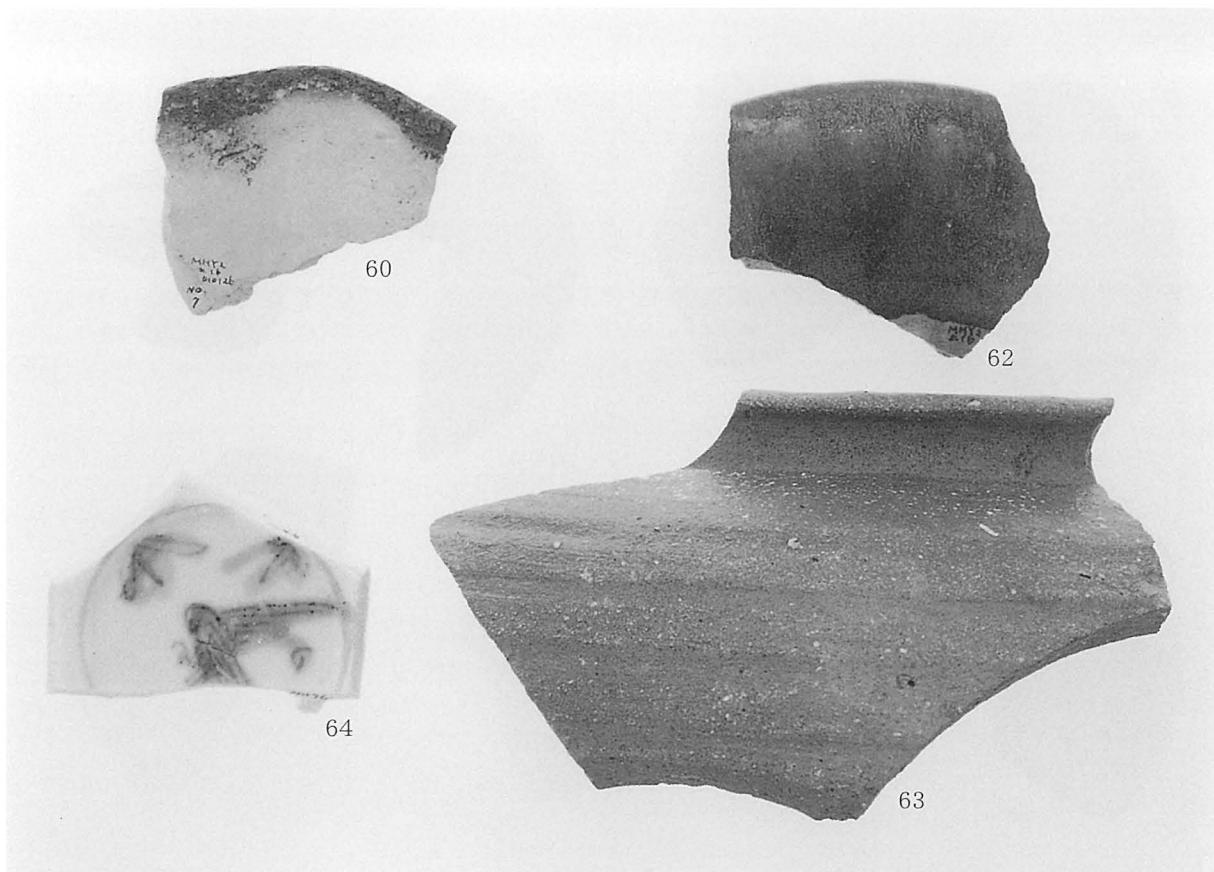


盛土内出土 (39・41・45~48) 整地土内出土 (40・42・43) 土坑4出土 (44)

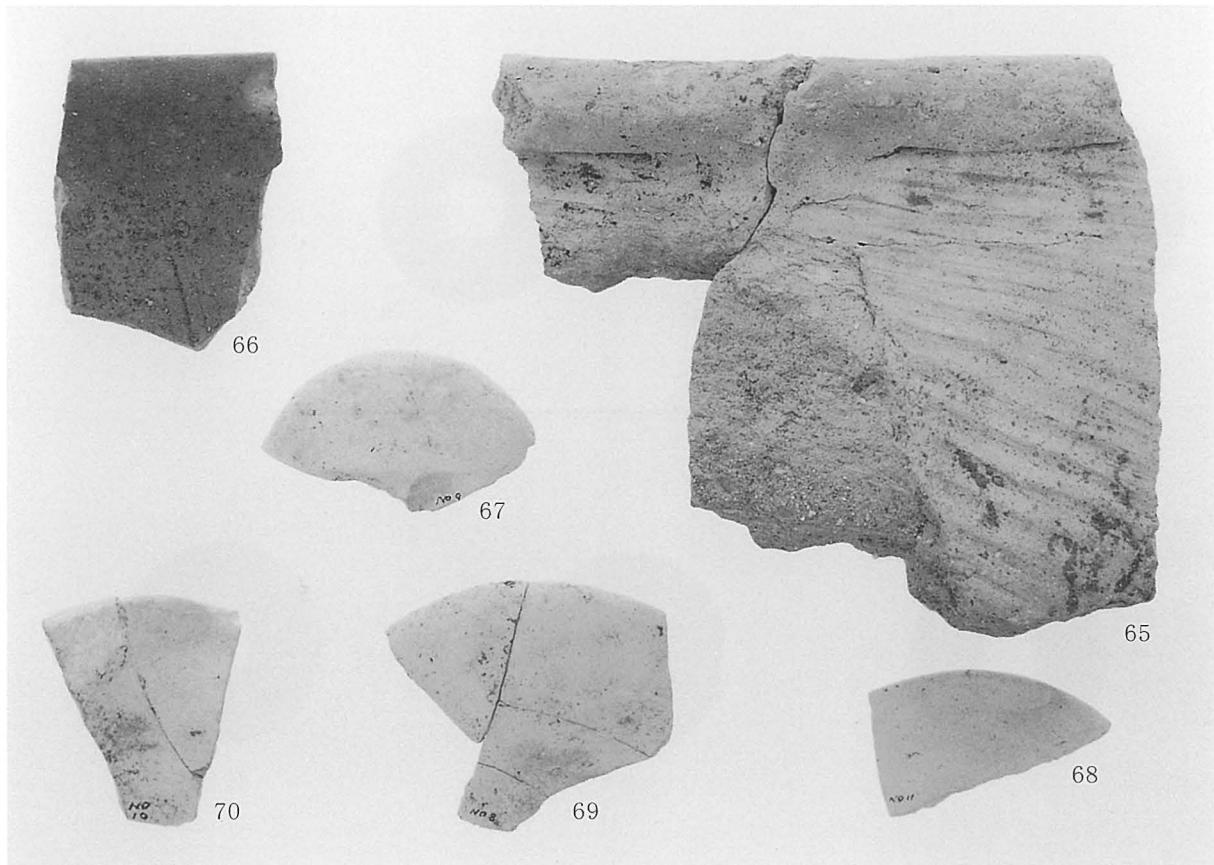


土坑1出土 (51~53・55~57)

図版9 水走氏館跡第2次調査 遺物



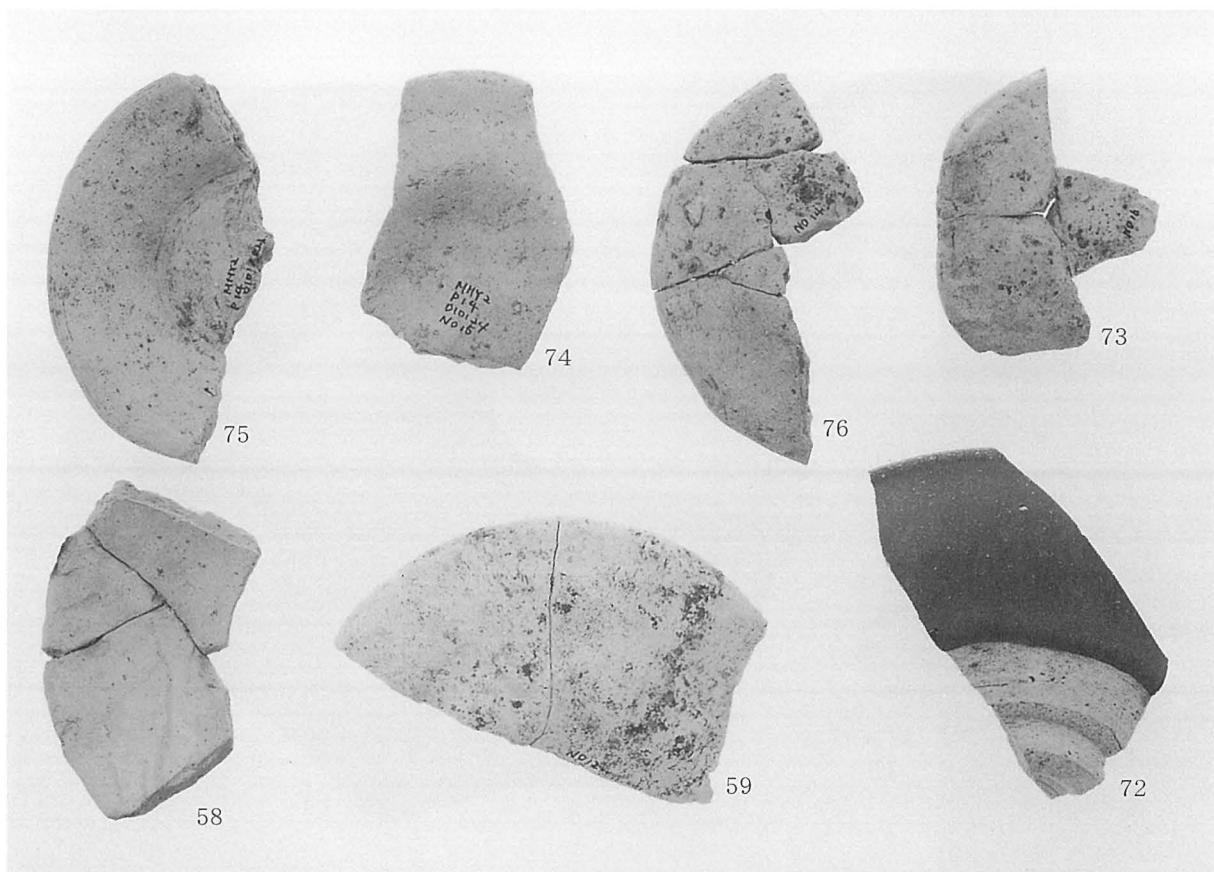
土坑16出土 (60・62~64)



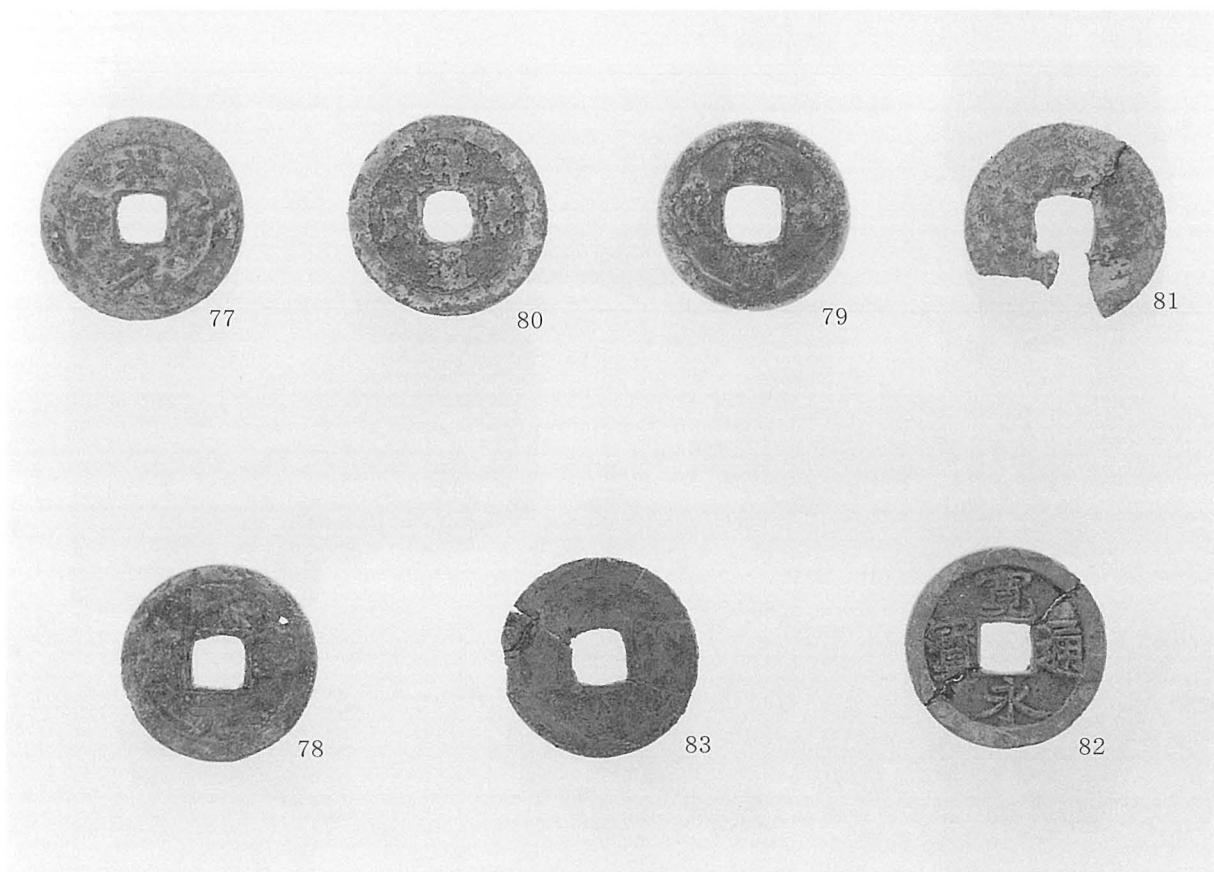
土坑17出土 (65~70)

図版  
10

水走氏館跡第2次調査  
遺物



土坑15出土 (58) 土坑19出土 (59) 土坑3出土 (72) P14出土 (73~76)



整地土内出土 (77・78・81) 土坑15出土 (79・80) 盛土内出土 (82・83)

### 第3章 山畠古墳群第20次発掘調査

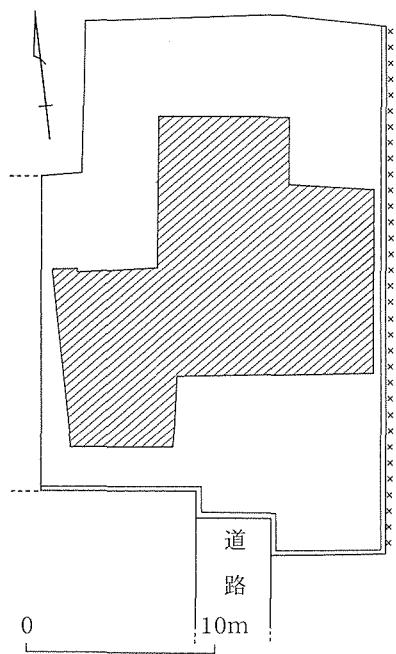
#### 1) はじめに

山畠古墳群は、瓢箪山町・上四条町・客坊町に広がる6世紀前半から7世紀初頭にかけての群集墳で、その中に弥生時代後期の山畠遺跡を内在している。これまで68基の古墳が確認されているが、後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くは破壊・欠損し、現存しているのは半数以下の約30基にすぎない。古墳の多くは径10~15mの円墳であるが、中には瓢箪山古墳などの双円墳や方墳、上円下方墳もみられる。蓋形・人物などの形象埴輪や円筒埴輪の出土しているものもあるが、極めて少ない。墳丘上などに小豊穴式石室・羽釜棺を伴うものも若干知られているが、主体部の多くは横穴式石室である。石室内には組合式石棺もあったが、多くは複数の木棺が納められていたようである。遺物には須恵器・土師器などの土器類をはじめ、大刀・鉄鎌・刀子・工具などの鉄製品、耳環や石製・ガラス製の玉などの装身具類があり、特に杏葉、轡など馬具類の出土割合の多いことが注目されている。郷土博物館の西方部一帯からは後期旧石器時代のナイフ型石器、縄文時代早期の押型文土器とともに弥生時代後期の豊穴住居や弥生土器・石器が検出されており、高地性集落と考えられている。山畠古墳群の西方には古墳時代から近世にわたる複合遺跡の市尻遺跡が存する。この遺跡からは古墳時代後期前半の掘立柱建物・溝、奈良時代の道遺構と、須恵器、土師器、製塩土器、動物・植物遺体など多くの遺物が検出されている。

平成12年12月15日付けで辻井節氏から、瓢箪山町89-1における賃貸の共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があった。当該地は周知の瓢箪山古墳と消滅している鬼塚古墳の間に位置することなどから、12月21日に試掘調査を実施し、土師器・製塩土器を検出した。この結果に基づき、代理者を通して協議を行い、埋蔵文化財に影響を与える基礎工事部分約200m<sup>2</sup>を対象として、平成13年2月13日から3月28日までの間、発掘調査を実施した。



第1図 調査地位置図 (1/2500)



第2図 トレンチ位置図

## 2) 基本層位 (第3図 図版1)

### 盛 土

- 第1層 青灰色砂、細礫混じりシルト質粘土。旧耕土。
- 第2層 主はオリーブ黄色砂、小・細礫混じり砂質シルトで3種に分層。床土。須恵器・土師器・陶磁器の細片出土。
- 第3層 主は浅黄色砂混じり粘土質シルトと黄灰色小・細礫混じりシルト質粘土のブロックで3種に分層。近世末ないし近代初頭の整地土。地山を主とした混土層。須恵器・土師器・陶磁器片など出土。
- 第4層 暗オリーブ灰色砂、中～細礫混じりシルト質粘土。暗黄褐色砂質シルト粒含む。中世の整地土。須恵器・土師器・韓式系土器・製塩土器・瓦器・玉類などの遺物と焼土塊・粒を包含。
- 第5層 褐色砂、細礫混じりシルト質粘土。
- 第6層 灰オリーブ色砂、小・細礫混じりシルト質粘土。
- 第7層 明黄褐色砂混じりシルト質粘土、灰色粘土含む。第6・7層は地山。

## 3) 遺構と遺物

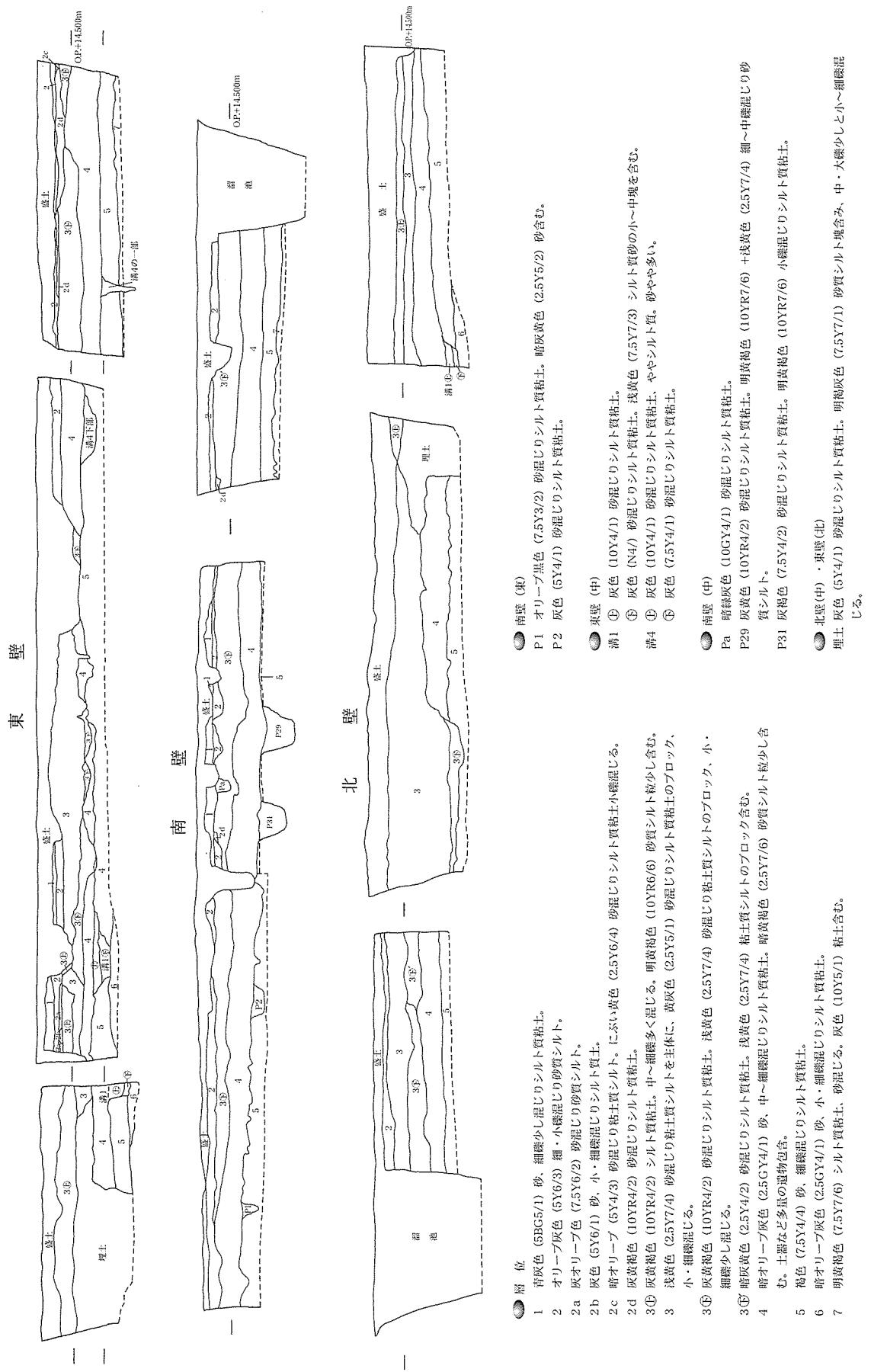
調査は、調査地全範囲の盛土と第1層および西端部で確認した近・現代の溜池（コンクリート擁壁伴う）内埋土の大半を機械掘削によって除去した。第4層上面まで全面調査した後、残土処分（場内処理）の関係から以下の調査は東・西2回に分け、反転して実施した。

遺構としては第2・3層上面で近代のピット3個・土坑1基・溝1条を確認し－第1遺構面－、第4層上面で杭・柱が残存する近世後半ごろの土坑・ピット、第5・6層上面において竪穴住居・掘立柱建物・溝・ピット・土坑、第7層上面で土坑・ピットを検出した。上記のように第2～4層の各層から遺物は出土したが、とくに第4層は弥生土器・須恵器・土師器・韓式系土器・製塩土器・玉などの多くの遺物を包含していた。以下、第4層上面遺構について簡単にふれた後、第3・4層出土遺物と第5および7層上面の遺構・遺物を記していく。

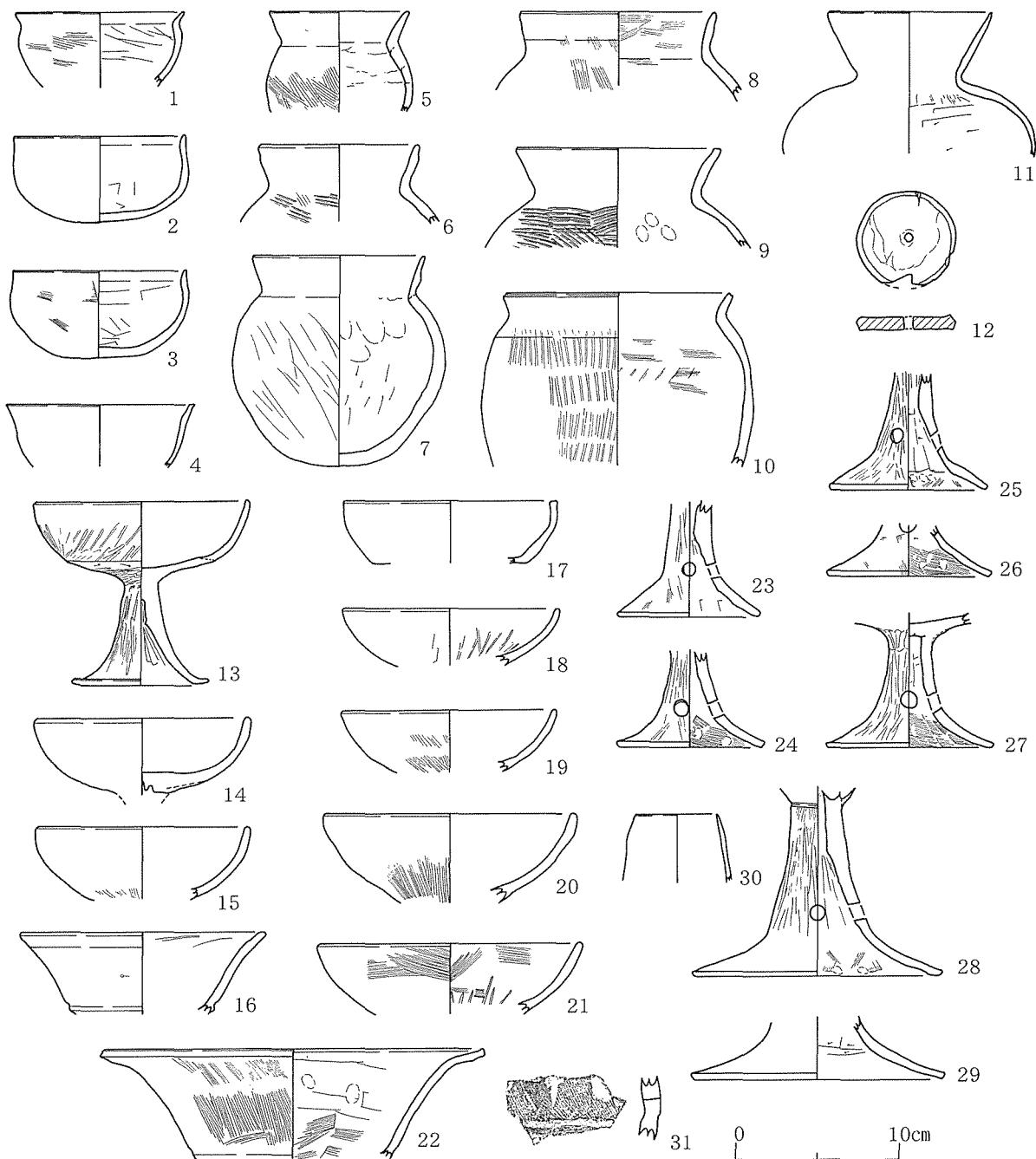
### 第4層上面遺構－第2遺構面－（図版1）

第4層上面において土坑2基（土坑A・B）、ピット4個（Pa～d）を検出した。土坑Aは北東隅、土坑Bは北西隅でそれぞれ各一部を検出した－形状不明、深さ1m以上－。径0.15～0.2mの丸太を2本一組にして打ち込んだ柱が土坑Aには4組、土坑Bには3組あった。各柱は0.07～0.05mの丸太ないし板を横木として断面四角の鎌によってつながれていた。また、Pa・Pbには径約0.1mの丸太2本一組を、Pdからは1本の柱を検出した。埋土は灰色砂混じりシルト質土で、明褐灰色砂質シルト塊、中～細礫含む。これらの柱材の残存する土坑・ピットがどのような建造物に伴うものかは不明。近世後半～末。

第4層は中世（12世紀代）の整地層であり、瓦器碗片・土師器皿片とともに弥生土器、須恵器などの遺物片を多量に包含していた。とくに東北部域からは焼土塊（図版1）をはじめ、須恵器、土師器、製塩土器、韓式系土器、ガラス・碧玉製の玉などが出土した。



第3図 土層断面図



第4図 第4層内出土遺物実測図

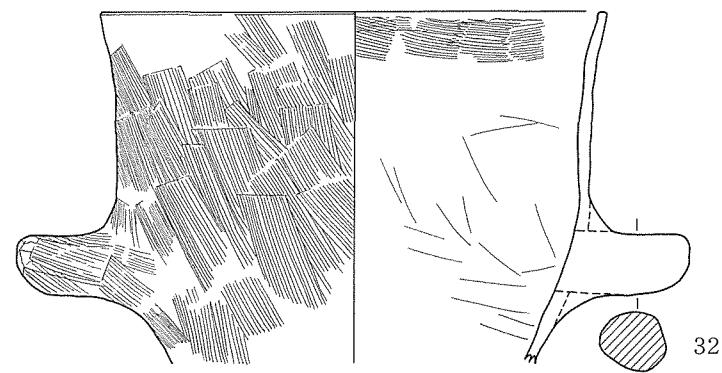
第4層出土遺物（第4～7図 図版4～10）

1～4は小型浅鉢。1は丸味を帯びた体部から、口縁部は「く」の字形に外反する。調整は外面ハケメ、内面は工具によるナデが施される。口径10.3cm。2・3は小さな平底から丸味を帯ながら立ち上がる体部から、口縁部はそのままつづく。口縁端部は尖り気味におわる。2は外面風化のため詳細不明、内面には工具によるナデ調整が施される。口径10.3cm、器高5.3cm。3は外面にハケメ、内面には工具によるナデ調整が施される。口径10.6cm、器高5.3cm。4は丸味をもちながら外方に広がる体部、口縁部はそのままつづく。口縁端部は上方に面をもつ。調整は内外面共に風化のため詳細不明。口径11.4cm。5～10は甕。5は丸味をもつ体部から、「く」の字形に外弯する口縁部。口縁端部はやや尖り気味におわる。調整は外面ハケメ(6/cm)、内面は工具によるケズリが施される。口径

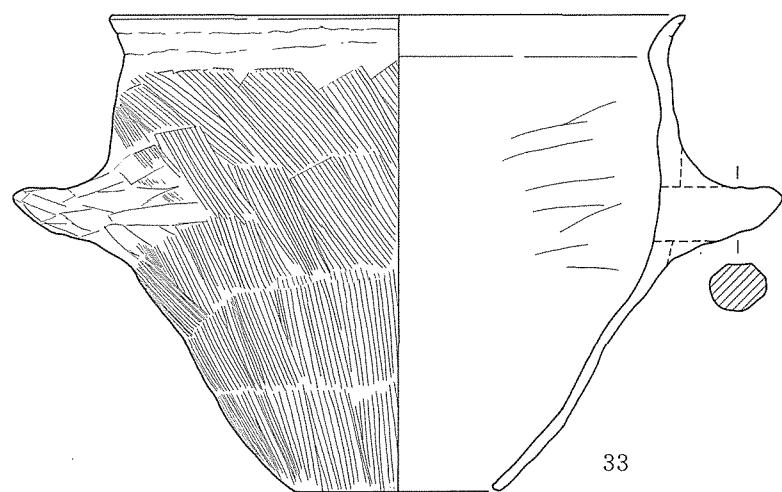
8.4cm。6は直線的に「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面ハケメ(6/cm)後にタタキ(3.5/cm)、内面にはナデが施される。口径9.4cm。7は球体部から直線的に外方に開く口縁部。口縁端部はやや丸くおさめる。調整は外面工具によるナデ、内面にはユビオサエとヘラケズリが施される。口径10.4cm、器高13.0cm。8はやや直線的に外方へ広がる口縁部から、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径11.8cm。9は「く」の字形に外弯する口縁部から、口縁端部は上方に面をもつ。調整は外面タタキ(4/cm)、内面はナデが施される。口径12.3cm。10は丸味をもつ体部から、短く外弯する口縁部。口縁端部は面をもち凹む。調整は外面タタキ(2.5/cm)、内面にはハケメが施される。口径13.6cm。11は直口壺。丸味をもつ体部から、直線的に「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は内傾し丸くおさめる。調整は内面体部にしづり目とヘラケズリ、外面には風化のため詳細不明。口径9.9cm。12は紡錘車。長さ6.0cmのほぼ正円をなし、中心には0.6cmの円孔を穿つ。側縁には工具による面取りがなされる。ナデ調整が施される。13~29は高坏。坏部には椀形を呈するもの(13~15・17~21)と漏斗状にひらく口縁部をもつもの(16・22)がある。椀形をなす口縁端部の形態には丸味をもつもの(14・18~20)、上方に面をもつもの(17)、外方に面をもつもの(13・15・21)がある。13は外面ハケメ後ヘラミガキ調整を施す。口径12.8cm、器高11.3cm、裾径8.4cm。14~22は脚柱部欠損。14は内外面共にナデ調整を施す。口径12.8cm。15は外面にハケメ調整が見られる。口径12.8cm。16~22は坏底部から屈曲して1条の凸線をもち、体部から口縁部にかけて外方に広がる。16は内外面共に風化のため詳細不明。口径14.8cm。22は内外面共にハケメ(11/cm)調整を施す。口径23.0cm。17は内外面共に風化のため詳細不明。口径13.0cm。18は内面に放射状の暗文が施される。口径13.0cm。19は外面にハケメ(4/cm)調整が施される。口径13.0cm。20は外面にハケメ(10/cm)調整が施される。口径15.0cm。21は内外面共にハケメ(11/cm)調整が施される。口径15.8cm。23~29は高坏の脚柱部。23~28には1ヶ所の円孔が穿かれている。23は外面ハケメ後ヘラミガキ調整が施される。裾径8.4cm。24は内外面共にハケメ(7/cm)調整が施される。裾径8.8cm。25は外面ヘラミガキ、内面には工具によるナデが見られる。裾径9.4cm。26は内外面共にハケメ(7/cm)調整が施される。裾径9.7cm。27は外面ヘラミガキ、内面にはハケメ(10/cm)調整が施される。裾径10.0cm。28は外面ハケメ後ヘラミガキ、内面にはハケメ(12/cm)調整が施される。裾径14.8cm。29は内面ヘラケズリが施される。裾径15.0cm。30は製塙土器。内傾する体部から口縁部は内弯し、口縁端部は丸くおさめる。調整はナデ。口径5.0cm。31は円筒埴輪の一部。円孔の痕跡が見られる。外面ハケメ(9/cm)、内面はユビオサエが施される。

32~34は甌。32は底部欠損。体部に断面円形の把手をもつ。器形は直立する体部から、口縁部は外弯し、口縁端部は上方に面をもち終わる。外面には密な斜め方向のハケメ(9/cm)、内面口縁部には横方向のハケメ、体部には工具によるナデが施される。口径26.6cm。33は「く」の字形に外反する口縁部をもつ。把手は断面円形。調整は外面密なハケメ(13/2.5cm)、内面には一部工具によるナデが施される。口径30.2cm、器高25.3cm、底径10.8cm。34の底部には7ヶ所の円孔が穿かれ、ほぼ直線的に外方に広がる口体部、口縁端部は上方に面をもち終わる。把手は断面円形。口径25.9cm、器高27.4cm、底径8.8cm。

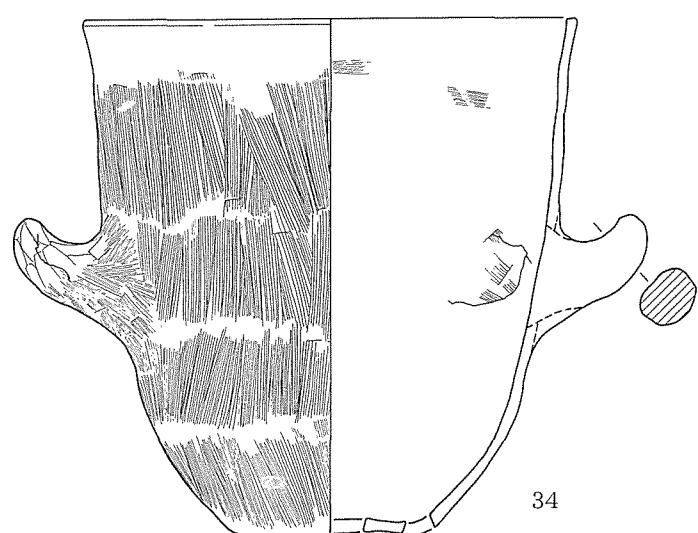
35~54は韓式系土器。35~42・54は格子状、43~47は繩蓆文、48~50は格子と繩蓆文、51~53は平行タタキ文。38は壺。平底から直線的に外方に広がる体部。外面底部付近はタタキ後ナデが施される。底径6.6cm。39は壺。平底から丸味を帯びる体部、なだらかに外弯する口縁部。口縁端部は外方に面をもつ。調整は外面格子状のタタキ(4/cm)、内面にはナデが施される。口径9.4cm、器高8.2cm、底径7.0cm。54は甌。直線的に外方に開く体部から、「く」の字形に外折する口縁部。口縁端部は外方



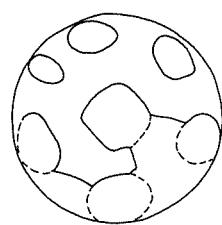
32



33

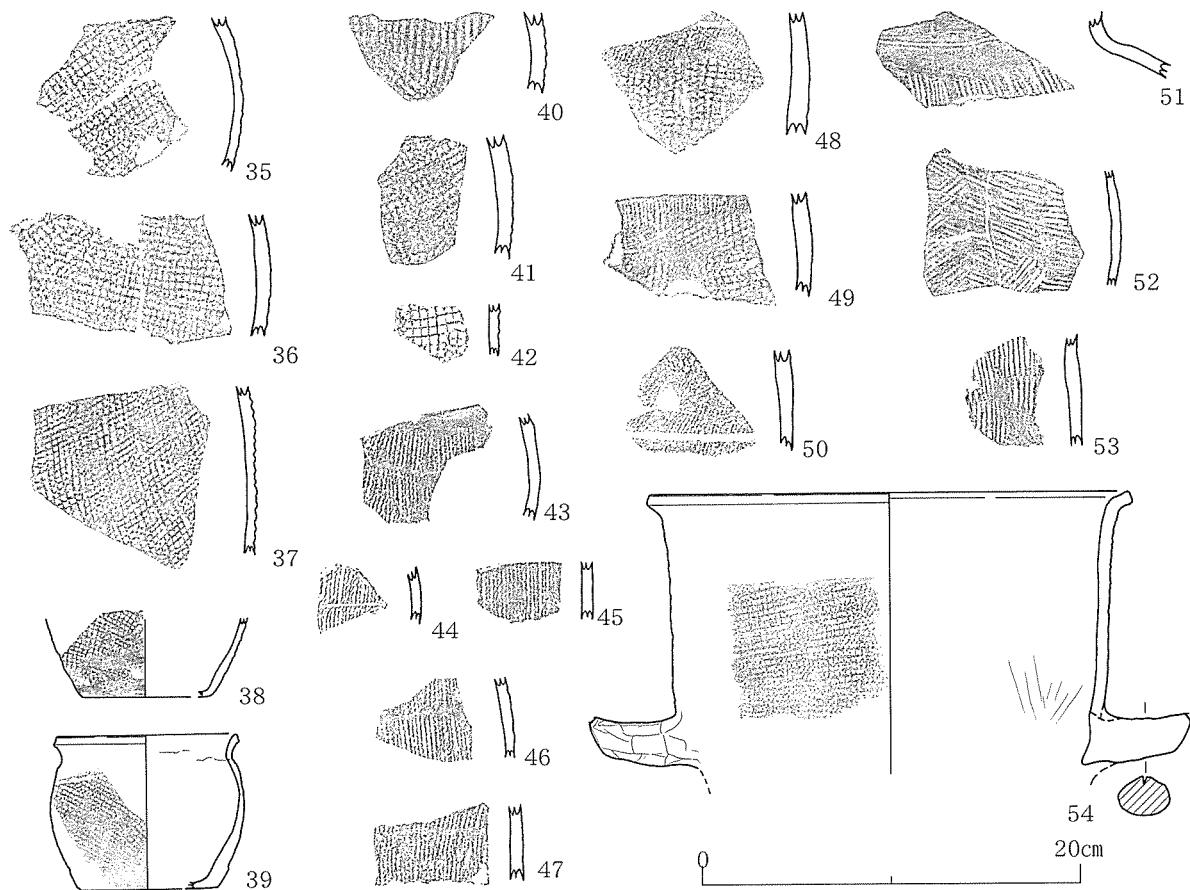


34



0 10cm

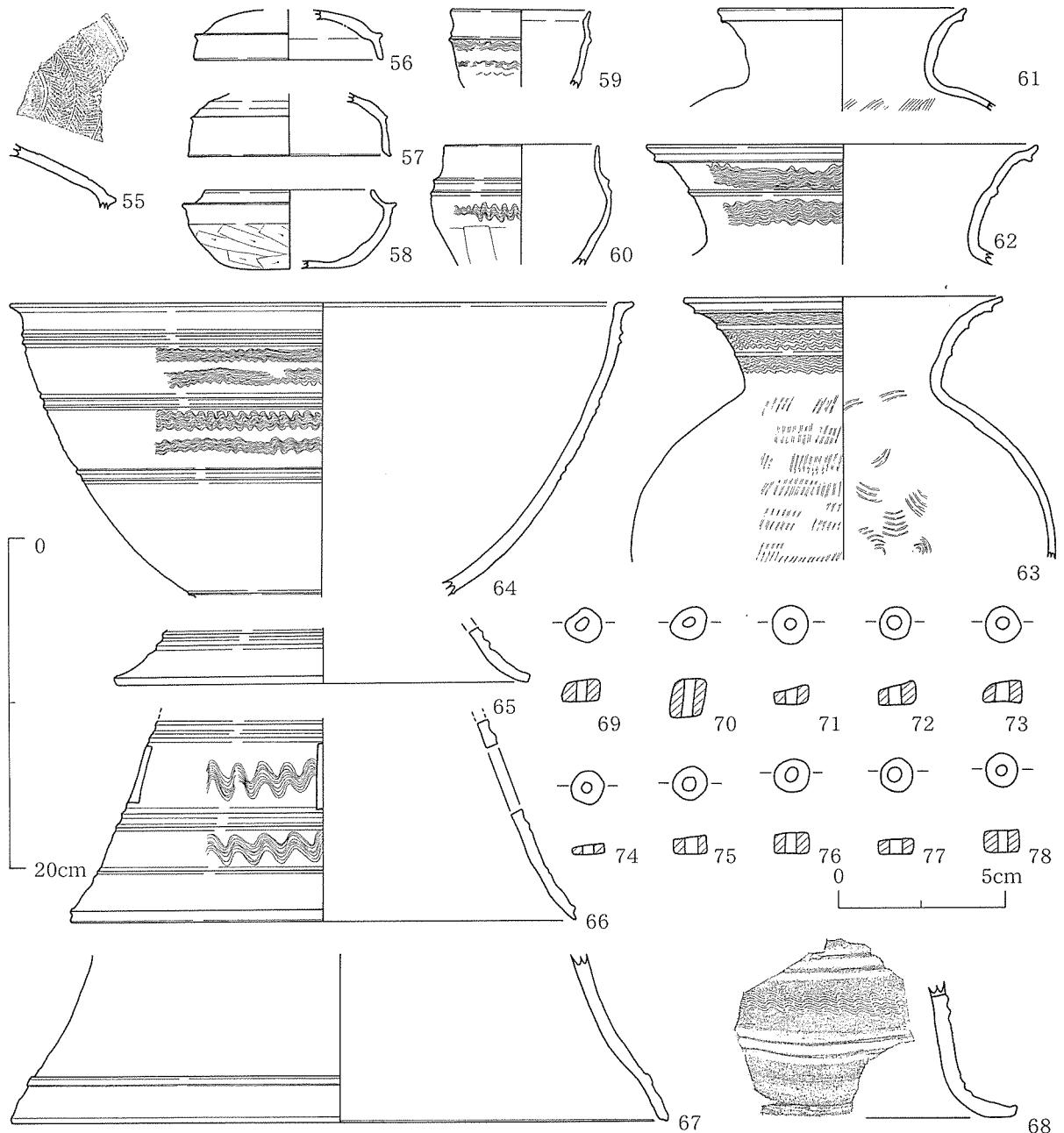
第5図 第4層出土内甌実測図



第6図 第4層内出土韓式系土器実測図

に面をもつ。調整は外面格子状のタタキ(3/cm)、内面には工具によるナデが施され、体部に断面円形の把手がつく。口径25.2cm。

55～68は須恵器。55は高坏の蓋。外面天井部に3条の沈線の間に、ヘラ工具による羽状文が施される。56・57は坏蓋。56は口縁部の立ち上がりが短く、器高は低い。口縁端部は下方に面をもち、稜は鈍い。天井部は灰かぶりのため詳細不明。口径11.2cm。57はやや外傾気味の立ち上がりから、にぶい稜をもつ。口縁端部は内傾し、凹面をもつ。天井部には稜に近い所まで回転ヘラケズリを施す。口径12.1cm。58は坏身。小さな平底をもち、内弯しながら外方に開く体部から、口縁部は内折する。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面底部に静止ヘラケズリを施す。口径10.1cm、器高4.8cm。59・60は碗。59は口縁部と体部の境に1条の凸帯をもち、その下方に2帯の櫛描波状文を施す。口縁部は「く」の字形に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面は灰かぶりのため詳細不明。口径8.4cm。60は丸味をもつ体部から直立する口縁部。体部と口縁部の境に2条の凸帯をもち、その下方に波状文(6/0.6cm)を施す。口径9.2cm。61～63は甕。61は肩の張る体部からゆるやかに外反し、頸部から口縁部へとつづく。口縁端部に1条の凸帯が巡り、口縁端部は丸味をもつ。外面体部に厚く灰かぶりのため調整不明、内面には平行タタキが施される。口径14.7cm。62は直線的に外方に広がる頸部から、口縁部は内面に強いヨコナデによって段をもち、外面には1条の凸帯が巡り、口縁端部は丸くおさめる。外面頸部に1条の凸帯とその上下に2条からなる波状文(12/1.5cm)を施す。口径23.4cm。63はなで肩の体部からゆるやかに外反し、頸部から口縁部へとつづく。口縁端部に1条の凸帯が巡り、口縁端部は面をもつ。外面頸部には2条からなる凸帯とその間に3条の櫛描波状文(7/1.1cm)、体部は平行タタキのちナデ消し、内面体部には同心円文タタキが施される。口径19.0cm。64～68は器台。64は台部。丸味をもちながら外方にひろがる体部から、口縁部は外折し、上方に面をもつ。外面体部に



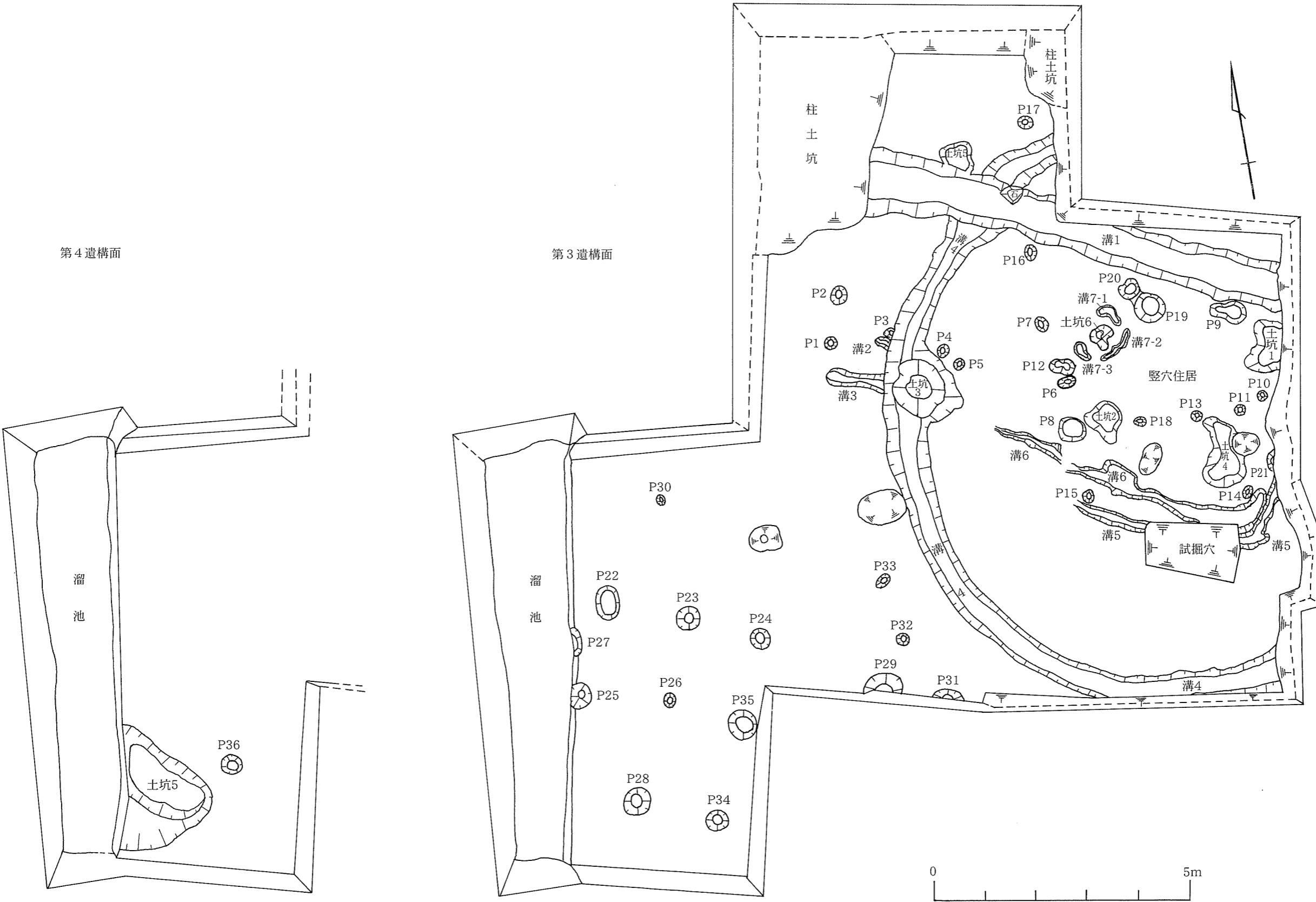
第7図 第4層内出土須恵器・玉実測図

2条一組の凸帯を3本、その間に2条の櫛描波状文(11/1.2cm)が巡る。口径37.4cm。65~68は脚部。

65は「ハ」の字形にひろがる裾部から、裾端部は面をもつ。細片のため定かではないが、2条の凸帯一部に透かし窓が施される。裾径24.6cm。66はやや直立気味の脚部から、裾端部は凹面をもつ。外面に1条もしくは2条の凸帯がめぐり、その間に櫛描波状文(8/1.1cm)と方形の透かし窓が施される。

裾径24.6cm。67は「ハ」の字形にひろがる裾部から、裾端部は下方に凹面をもつ。外面裾部付近に1条の断面方形の凸帯が巡る。裾径39.4cm。68は大きく外方に広がる裾部、裾端部は面をもつ。外面に2条一組の凸帯を2本、その間に櫛描波状文を施す。細片のため詳細不明。

69・70はガラス製小玉、71~78は滑石製白玉。69は長さ0.53cm、幅0.6cm、厚さ0.35cm、重さ0.17g、色調はコバルトブルー。70は長さ0.52cm、幅0.57cm、厚さ0.56cm、重さ0.25g、色調は深い緑色。71は長さ0.59cm、幅0.54cm、厚さ0.28cm、重さ0.12g、色調深い緑色。72長さ0.50cm、幅0.51cm、厚さ0.36cm、重さ0.12g、色調深い緑色。73は長さ0.56cm、幅0.53cm、厚さ0.32cm、重さ0.14g、色調暗灰色。



第8図 第3・4遺構面平面実測図

74は長さ0.61cm、幅0.52cm、厚さ0.81cm、重さ0.07g、色調暗灰色。75は長さ0.51cm、幅0.53cm、厚さ0.32cm、重さ0.12g、色調暗灰色。76は長さ0.52cm、幅0.53cm、厚さ0.35cm、重さ0.15g、色調暗灰色。77は長さ0.51cm、幅0.53cm、厚さ0.27cm、重さ0.09g、色調暗灰色。78は長さ0.54cm、幅0.53cm、厚さ0.31cm、重さ0.14g、色調暗灰色。

#### 第5・6層上面遺構－第3遺構面－（第8図 図版2）

溝7条（溝1～7）、土坑5基（土坑1～5）、ピット31個（P1～31）を検出した。以下、主な遺構と出土遺物について記す。

#### 溝1 調査地北部を東南東から西南西方向に

ほぼ真直ぐに延びる。幅0.75～1.38m、深さ0.2～0.25mを測り、断面逆台形状を呈していた。上部は灰色（10Y4/1）砂混じりシルト質粘土、下部は灰色（N4/）砂混じりシルト質粘土で浅黄色（7.5Y7/3）シルト質砂、中～細礫含み、土師器甕・壺・高坏、須恵器、製塩土器などが出土した。

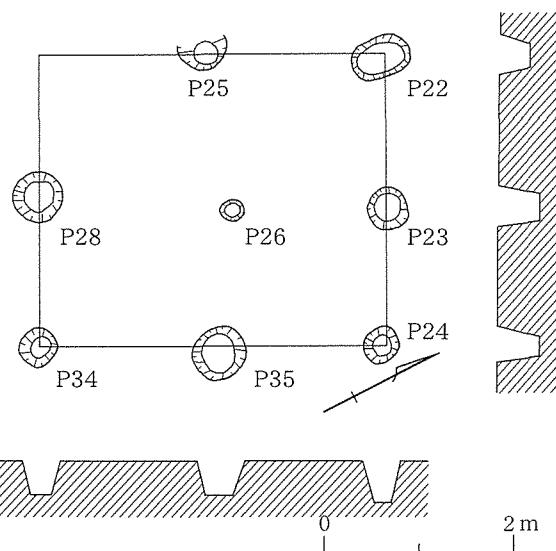
溝4 北東部は調査地外になるが、径約11mの環状を呈し、西部分内側よりに円形の窪地＝土坑3があった。溝の幅0.5～1m、深さ0.06～0.22m、溝は断面逆台形状で、上部は灰色（10Y4/1）砂、シルト質砂混じりシルト質粘土、下部は灰色（7.5Y4/1）砂混じりシルト質粘土で、土師器甕・壺、須恵器、韓式系土器、製塩土器、焼土などが出土した。この溝は下記の竪穴住居を取り巻くように環状にまわっていたものと思われる。

溝1は住居廃絶後に穿かれものであるが、埋土は溝4の上部とほぼ同じで、出土遺物も時期差はほとんど見られず、その交叉部の北東角に自然石を配してあったことから、最終的には同時期に活用していたと思われる。

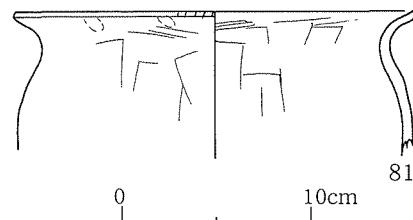
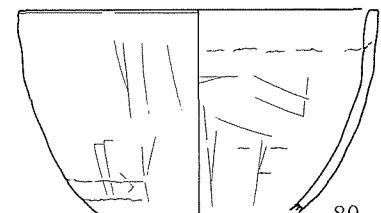
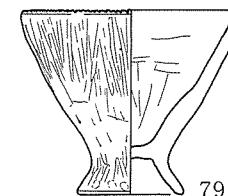
#### 竪穴住居

トレント中央東側で、二重のL字状の溝（溝5・6）を検出した。幅0.5～0.15m、深さ0.1～0mを測った。一辺約5m四方の方形竪穴住居の外周溝の一部と考えられる。しかし東側のほとんどは調査地外で、西および北側は削平されていた。溝5・6は試掘穴および整地時＝第4層の攪乱により欠損または途切れていた。埋土は灰色（5Y5/1）シルト質粘土と黄褐色（2.5Y5/3）砂混じりシルト質粘土の混土で、土師器甕・壺、製塩土器の小・細片、焼土粒などが出土した。

西側中央付近には取り付けの竪が設けられていた。この周辺の上層－第4層下部－には、削平・攪拌により崩壊した竪の焼粘土塊・粒が見られた。（図版2）。この層内はとくに甕・甕などの煮沸具や玉類および須恵器・土師器を多く包含していた。竪跡部は中央を少し掘り窪め（土坑6、幅0.45m、深さ0.07m）、3方向に浅い溝が穿かれていた（溝7群、幅0.2～0.1m、深さ0.04m）。



第9図 掘立柱建物実測図



第10図 土坑3出土土器実測図

### 掘立柱建物（第9図 図版3）

柱穴は径0.6～0.35m、深さ0.3～0.4mを測るP22～25・28・34・35の7ピットで（1ピットは現代の溜池で破損）、いずれも埋土は上部がにぶい赤褐色（5Y4/3）・暗赤褐色（5YR3/2）砂混じりシルト質土で黄褐色（10YR6/6）砂粒を含み、下部は灰色（7.5Y5/1）砂混じり粘質土で、土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器などの破片が出土した。南北3.6m×東西3.1mの2間四方の掘立柱建物で、中央付近に支柱穴（P26）一径0.25m、深さ0.05m、埋土は上記のP22などの上部と同じがあり、倉庫と思われる。

また、P27・29・31は径0.5～0.6m、深さ約0.4mを測る大型の柱穴。埋土は明黄褐色シルト質粘土粒、小礫～砂混じりの灰褐色シルト質粘土で、土師器（壺・甕など）・韓式系土器片が出土し、掘立柱建物に伴うものと考えられる。

土坑3 溝4によって上部のほとんどが削平されていた。検出径1.5m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色（7.5Y4/1）砂混じりシルト質粘土で、弥生土器片などが出土した。

### 土坑3出土遺物（第10図 図版5・7）

79～81は弥生土器。79は小型台付鉢。「ハ」の字形に広がる台部をもつ。小さな平底から直線的に外方に広がる体部から口縁部につづく。口縁端部は丸くおさめ、外方にキザミ目をもつ。調整は内面工具によるナデ、外面にはケズリのちヘラミガキが施される。口径11.4cm、器高9.8cm、底径5.4cm。80は鉢。楕円形を呈する体部から、口縁部は垂直に延び、口縁端部は上方に面をもつ。調整は内外面共に工具によるナデが施される。口径18.8cm。81は甕。内傾する体部から、なだらかに外弯する口縁部。口縁端部は外方に面をもちキザミ目をもつ。調整は内外面共にヘラケズリを施す。口径21.2cm。

### 第7層上面遺構—第4遺構面—（第8図 図版3）

調査地南西域の第7層上面においてピット1個（P36）・土坑1基（土坑7）を検出した。P36は径0.4m、深さ0.08mの浅鉢状を呈し、埋土は灰褐色（7.5GY4/2）・褐色（7.5Y4/3）砂、小・細礫混じりシルト質粘土。土坑7は西部分を近・現代の溜池によって破損していた。残存幅南北2.4m、東西1.2m、深さ0.68mを測り、北側よりは長楕円形の擂鉢状を呈していた。埋土は上部が灰褐色（7.5Y4/2）砂、小・細礫混じりシルト質粘土で、下部が黒褐色（10YR3/1）砂、小・細礫混じりシルトであった。両遺構からはまったく遺物は出土せず、性格・時期とも不明である。

## 4)まとめ

今回の調査では弥生時代後期、古墳時代後期前半、江戸時代後半の遺構と、弥生時代から江戸時代に亘る遺物を検出した。この中でも古墳時代後期の資料=遺構・遺物がその大半を占めていた。本調査地の西方にある市尻遺跡第1次調査地でも、古墳時代後期前半の掘立柱建物（ピット群）・溝・土坑を須恵器・土師器・製塩土器などの多くの遺物とともに検出している<sup>1)</sup>。しかし、今回の遺構—竪穴住居・掘立柱建物・環状溝など—と遺物—須恵器・土師器など—はさらに一段階遡るもので、韓式系土器の割合も極めて高い。このことから本調査地から市尻遺跡に亘る地域は、5世紀代から6世紀初頭に渡来系の人々の集落が営まれていたと考えられる。ただ、その住居域の中心は時の推移とともに本調査地周辺部から西方の市尻遺跡部に移行したものと思われる。また、6世紀前半から7世紀初頭に盛行する本地周辺から東部山麓地域に点在する山畠古墳群より先行し、その関係については今後の課題といえよう。

注：1)「市尻遺跡第1次発掘調査報告」『東大阪市文化財協会概報集－1997年度－』財團法人東大阪市文化財協会1998年

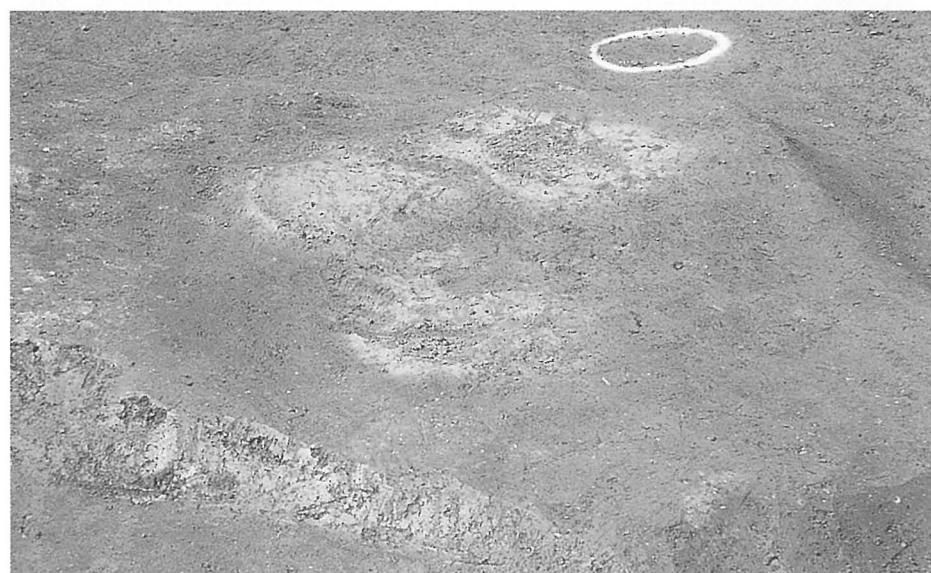
図版 1 山畠古墳群第20次調査 遺構



南壁一部分・中央一（北より）



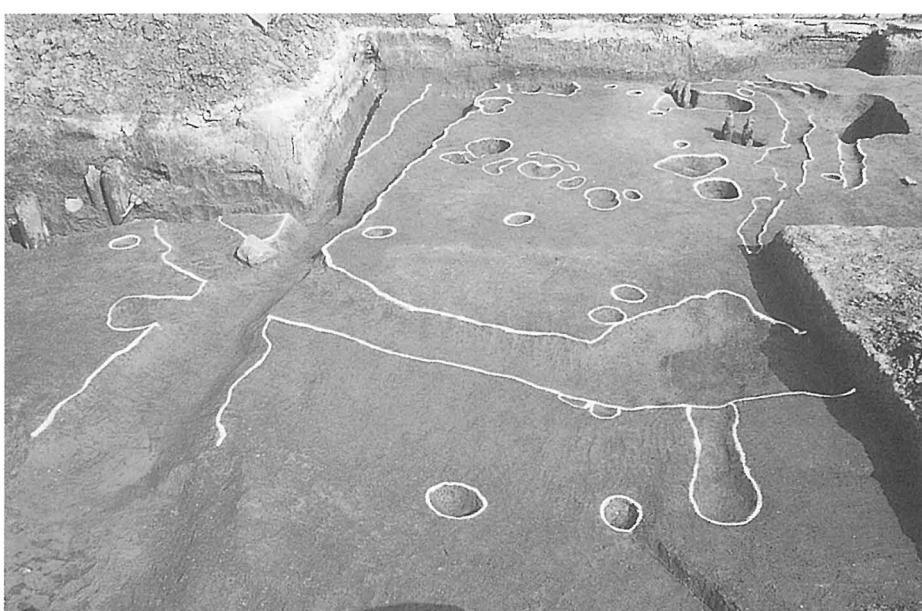
第3層上面遺構—土坑B—（北より）



第4層下部焼土塊群（南より）



第5層上面遺構－1－（南より）



第5層上面遺構－2－（西より）

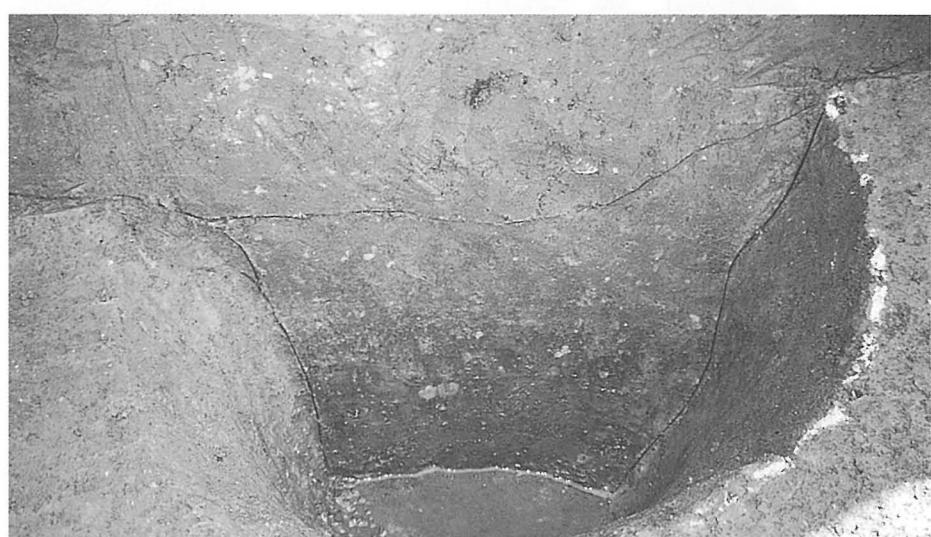


第5層上面遺構－3－（西より）

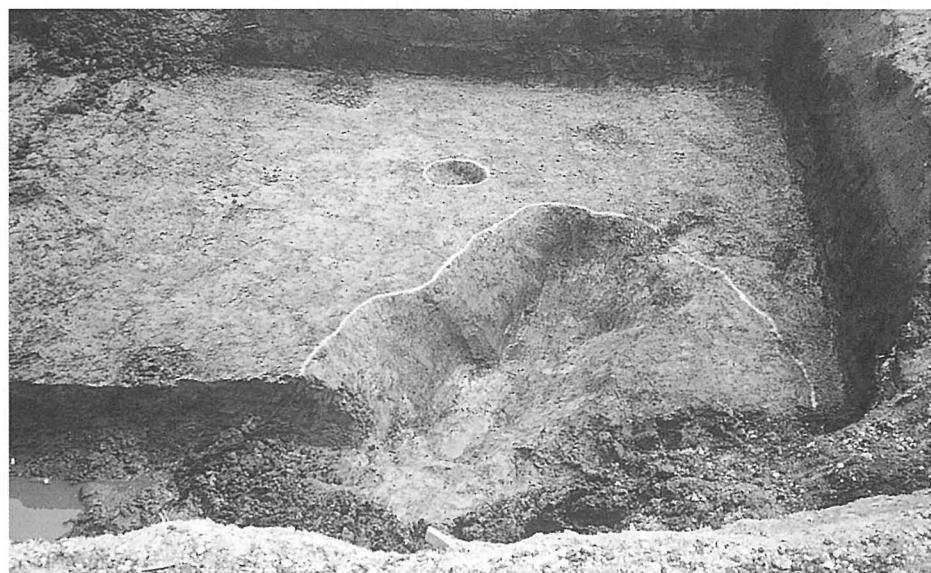
図版 3 山畠古墳群第20次調査  
遺構



溝1断面（西より）

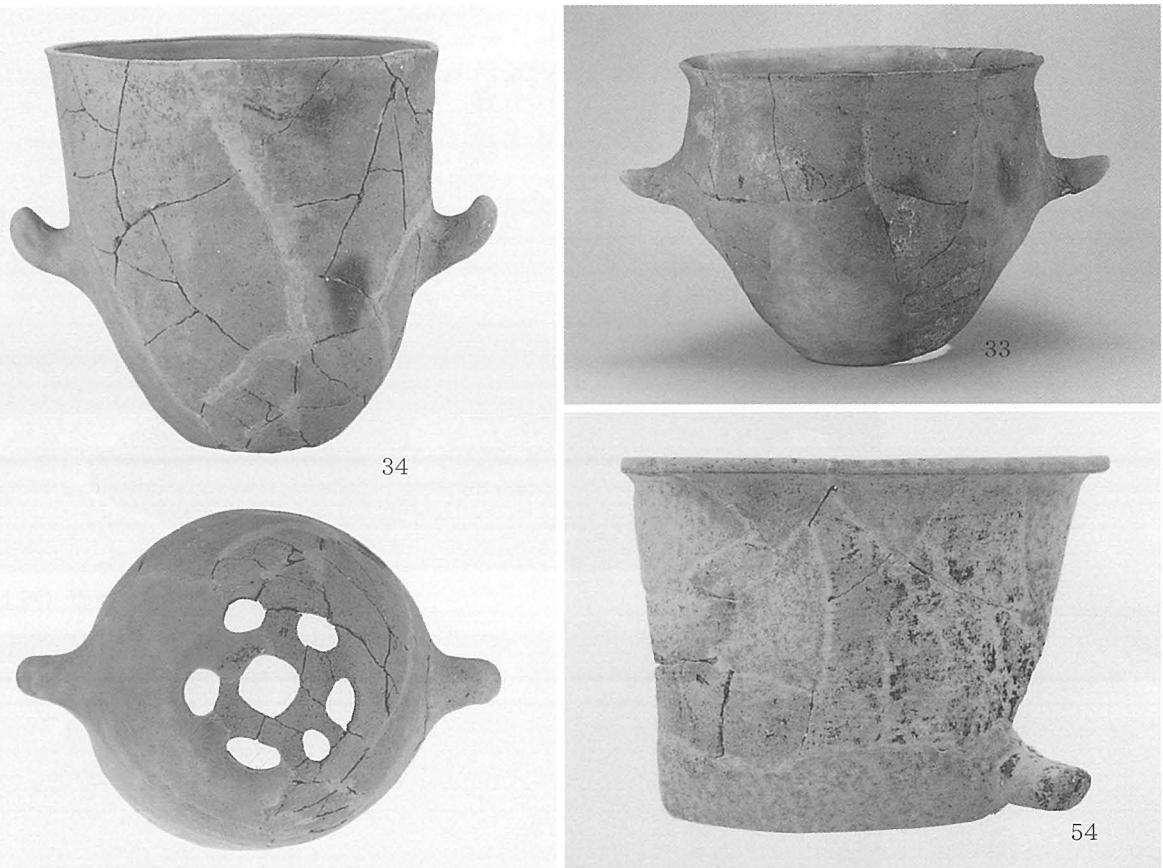


P29断面（北より）

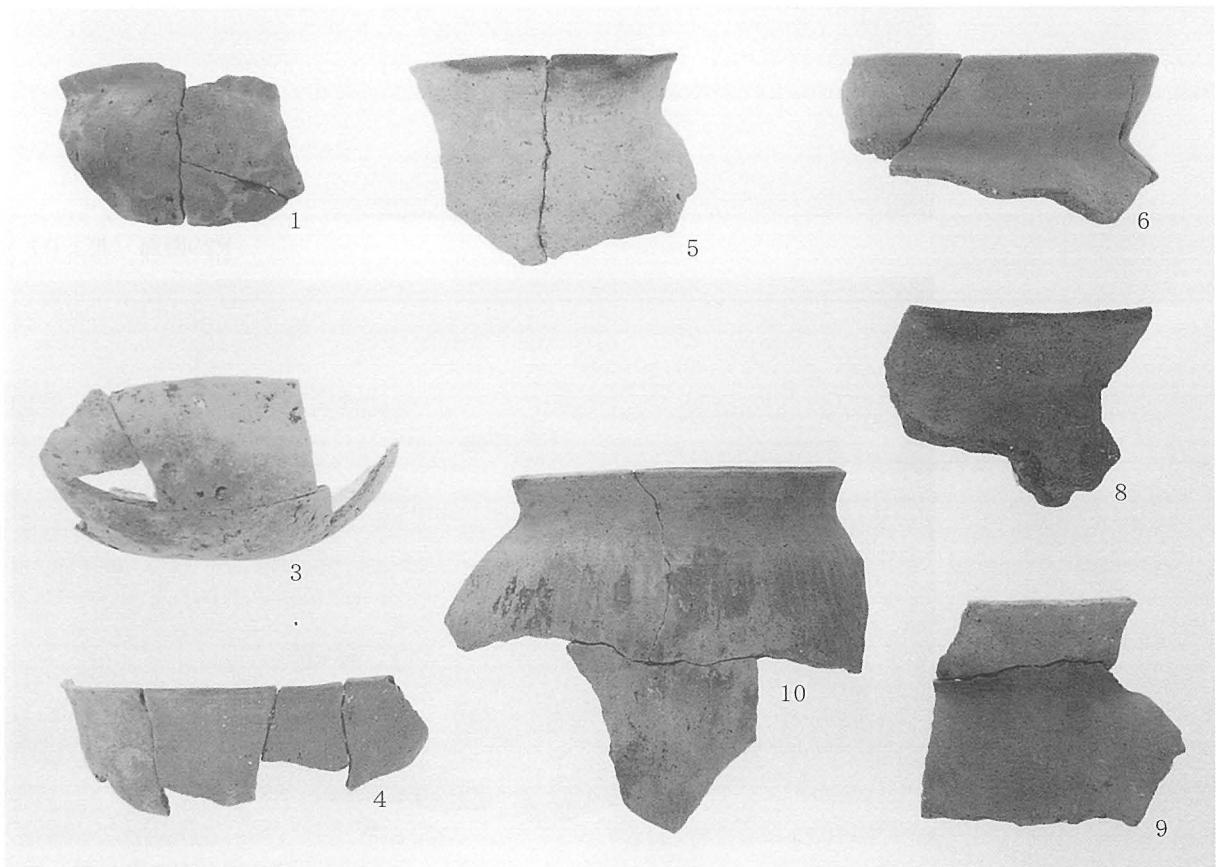


第7層上面遺構（西より）

図版4 山畠古墳群第20次調査  
遺物

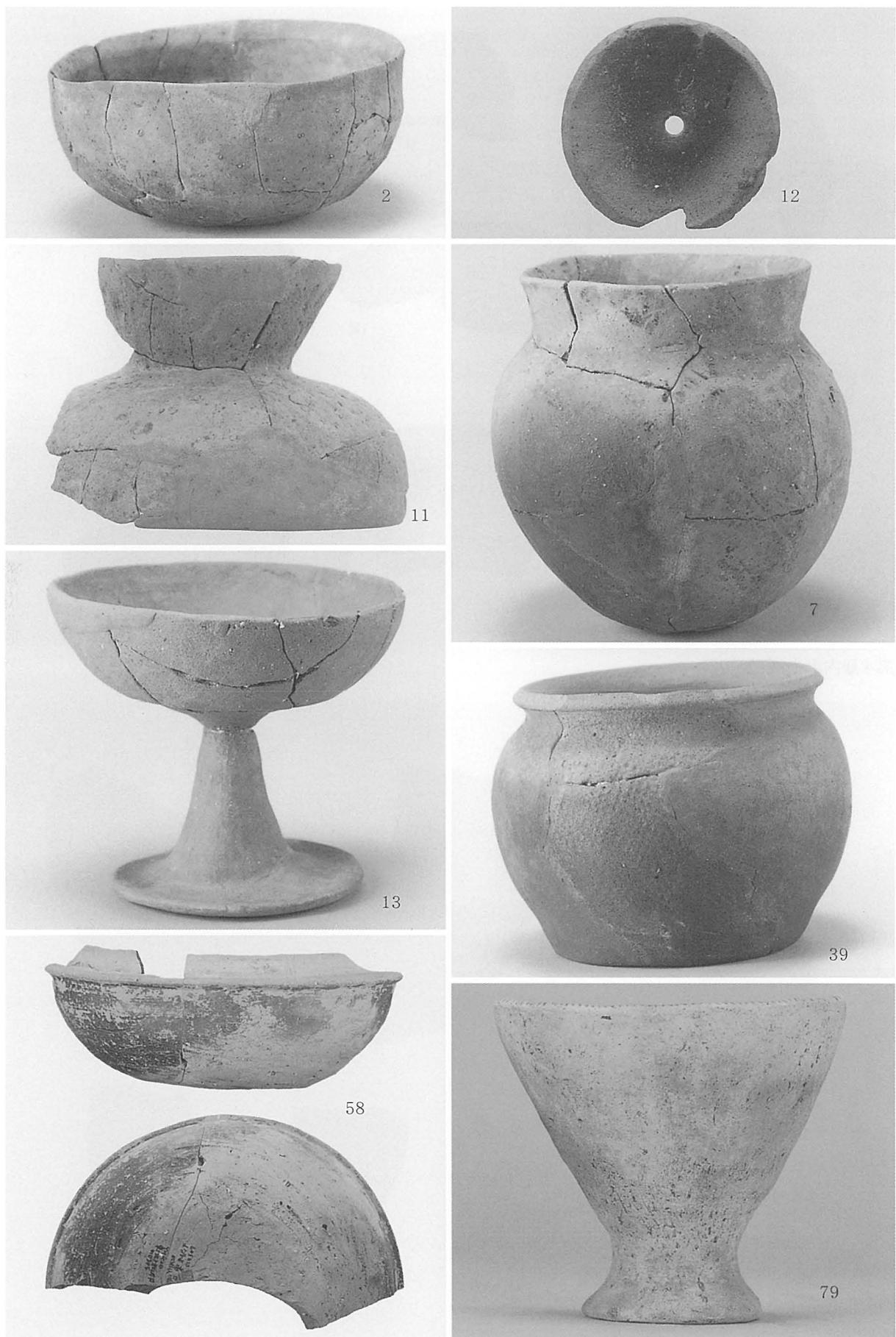


第4層内出土 (33・34・54)



第4層内出土 (1・3~6・8~10)

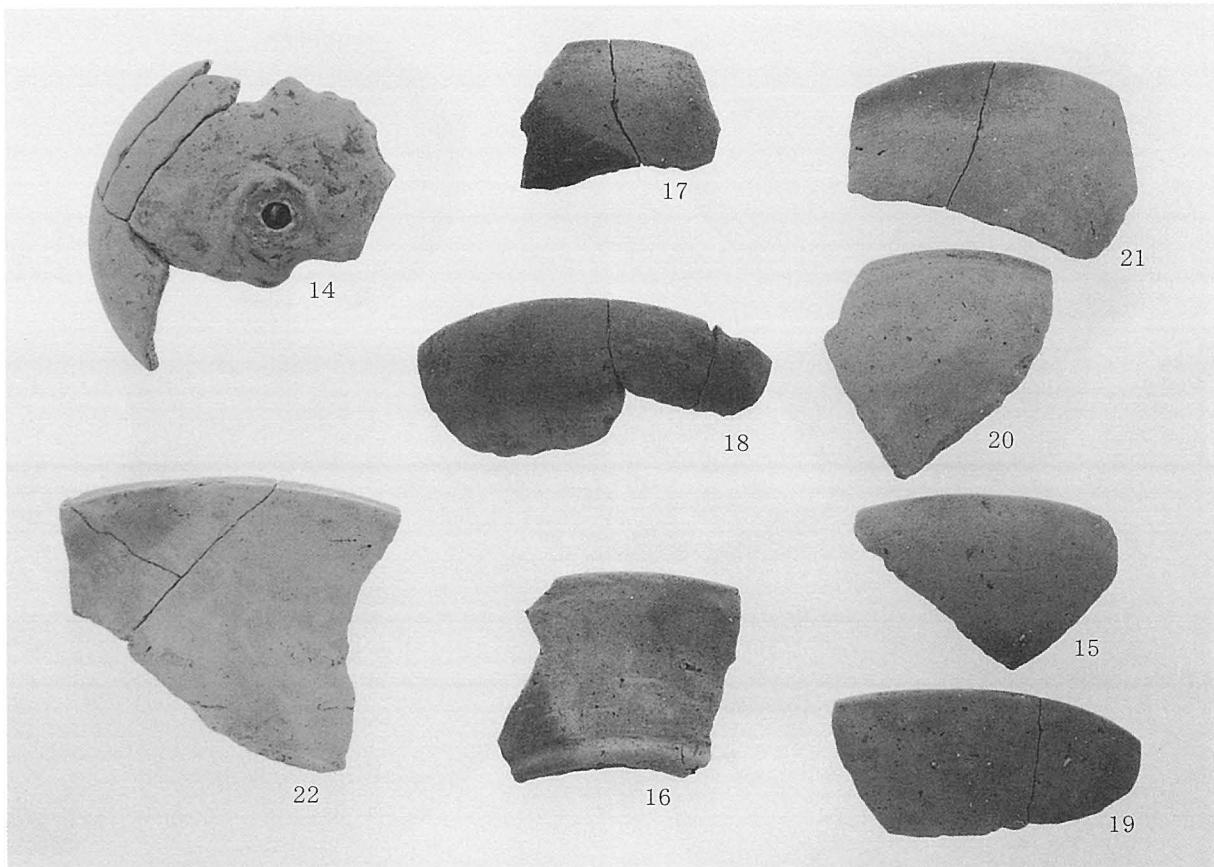
図版5 山畠古墳群第20次調査 遺物



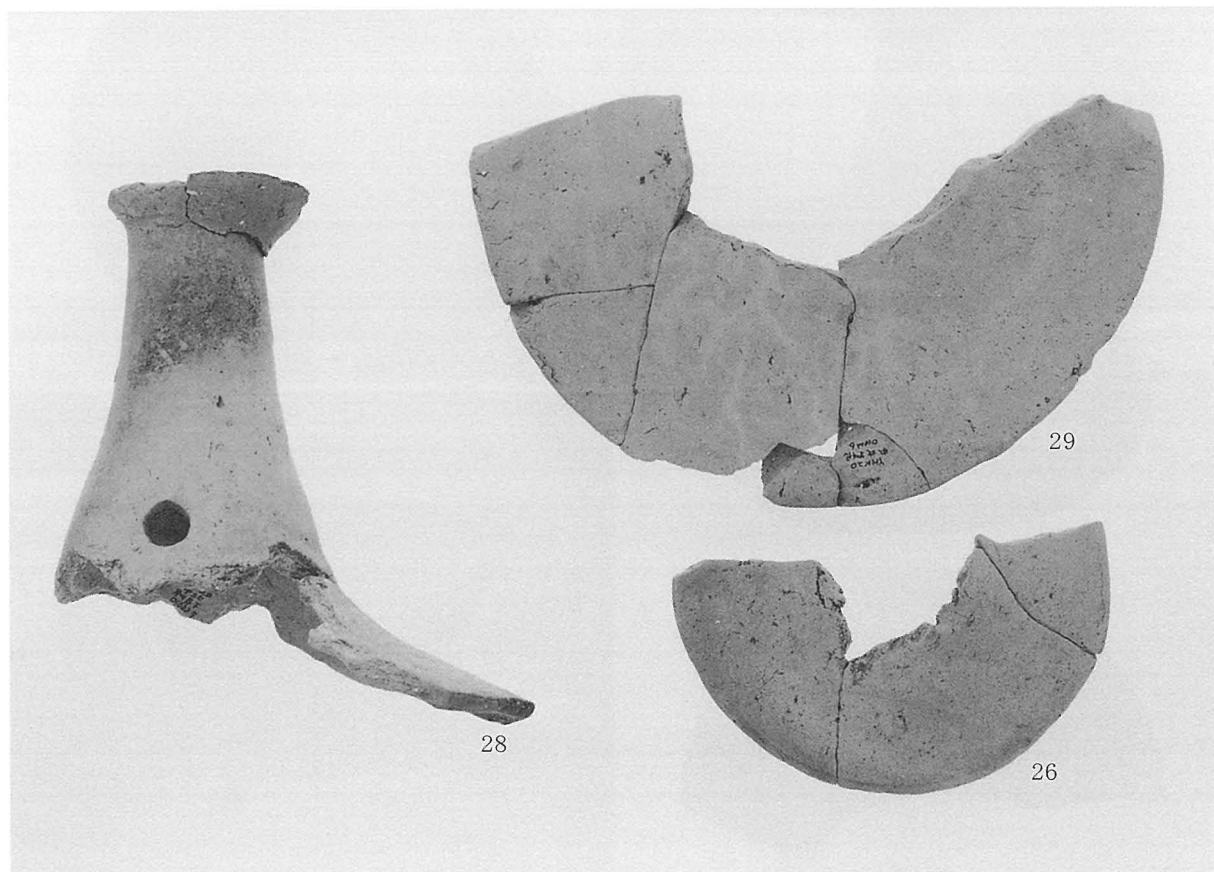
第4層内出土（2・7・11~13・39・58）土坑3出土（79）

図版 6

山畠古墳群第20次調査  
遺物



第4層内出土 (14~22)



第4層内出土 (26・28・29)

図版 7 山畠古墳群第20次調査 遺物



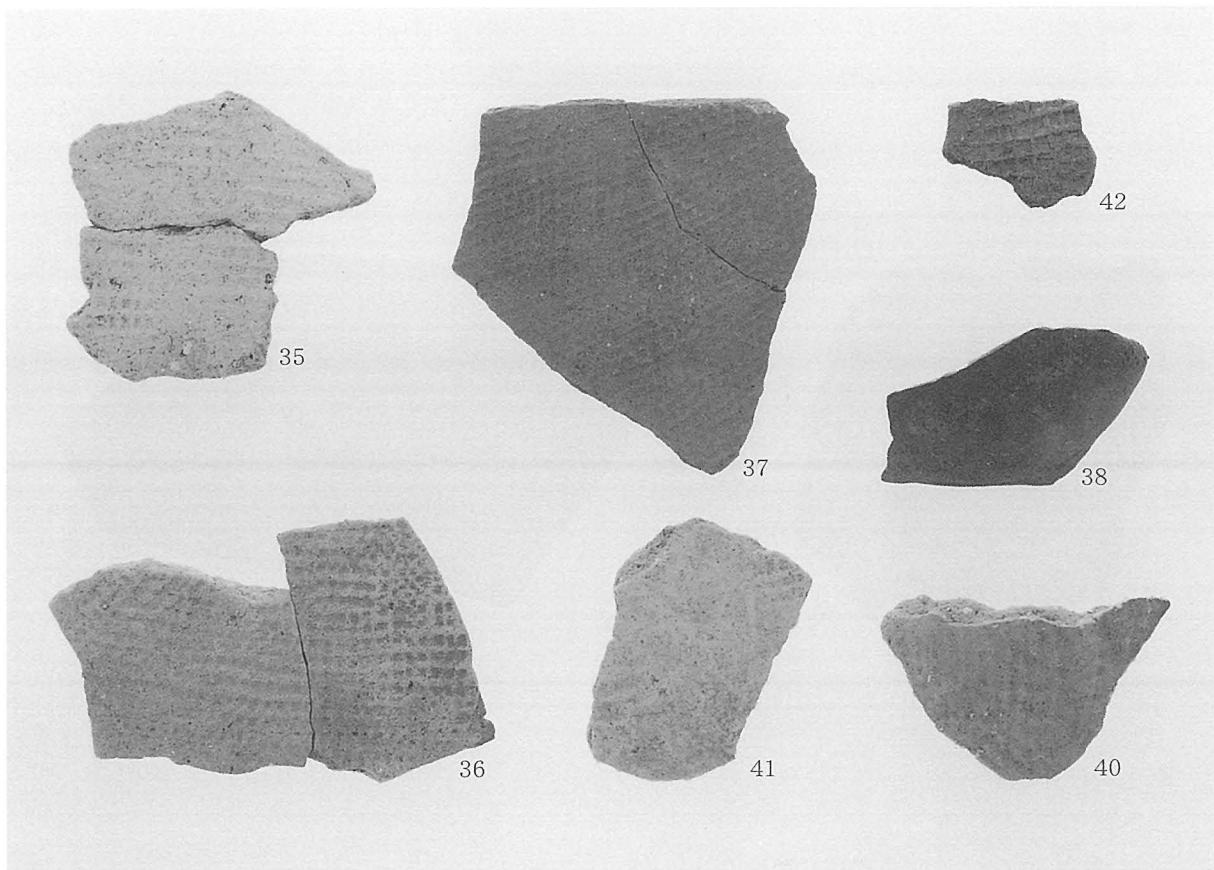
第4層内出土 (30・31)



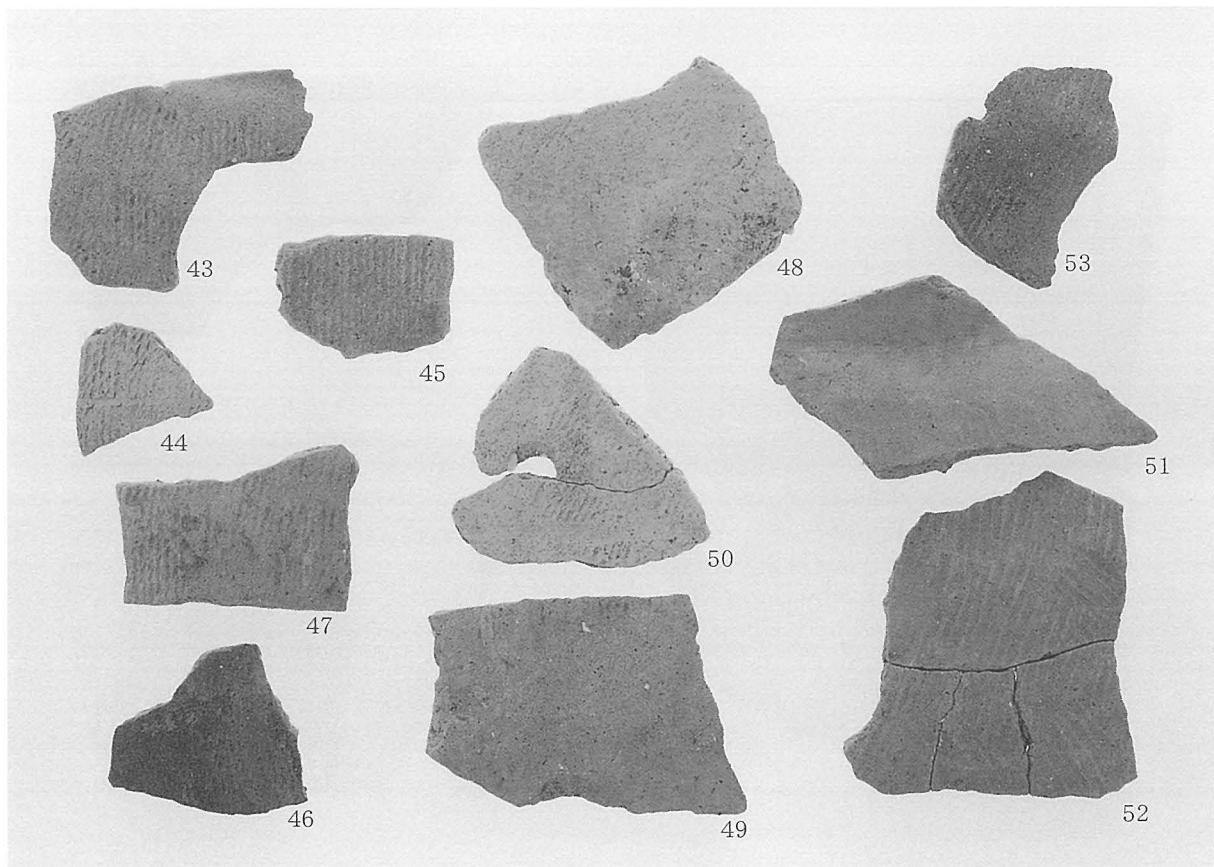
第4層内出土 (32) 土坑3出土 (80・81)

図版8

山畠古墳群第20次調査  
遺物

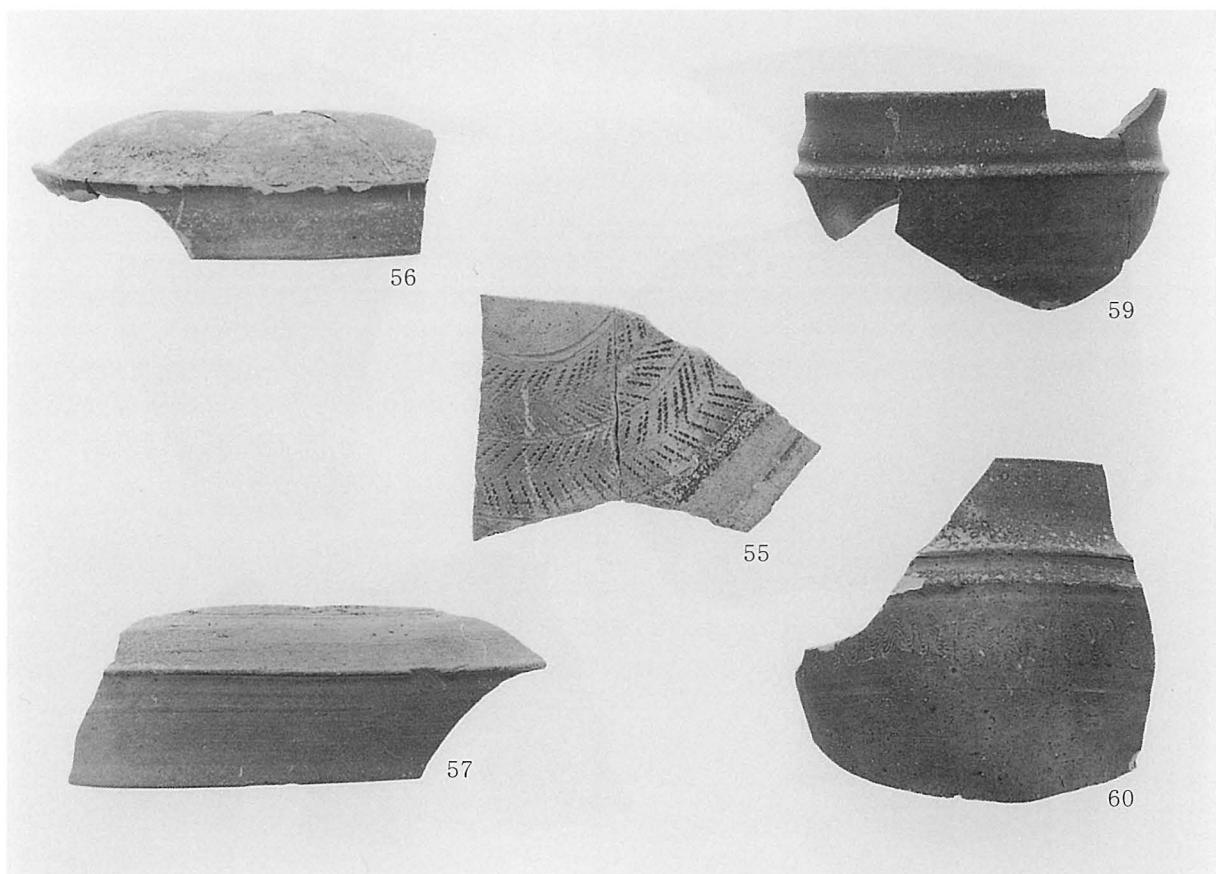


第4層内出土 (35~38・40~42)



第4層内出土 (43~53)

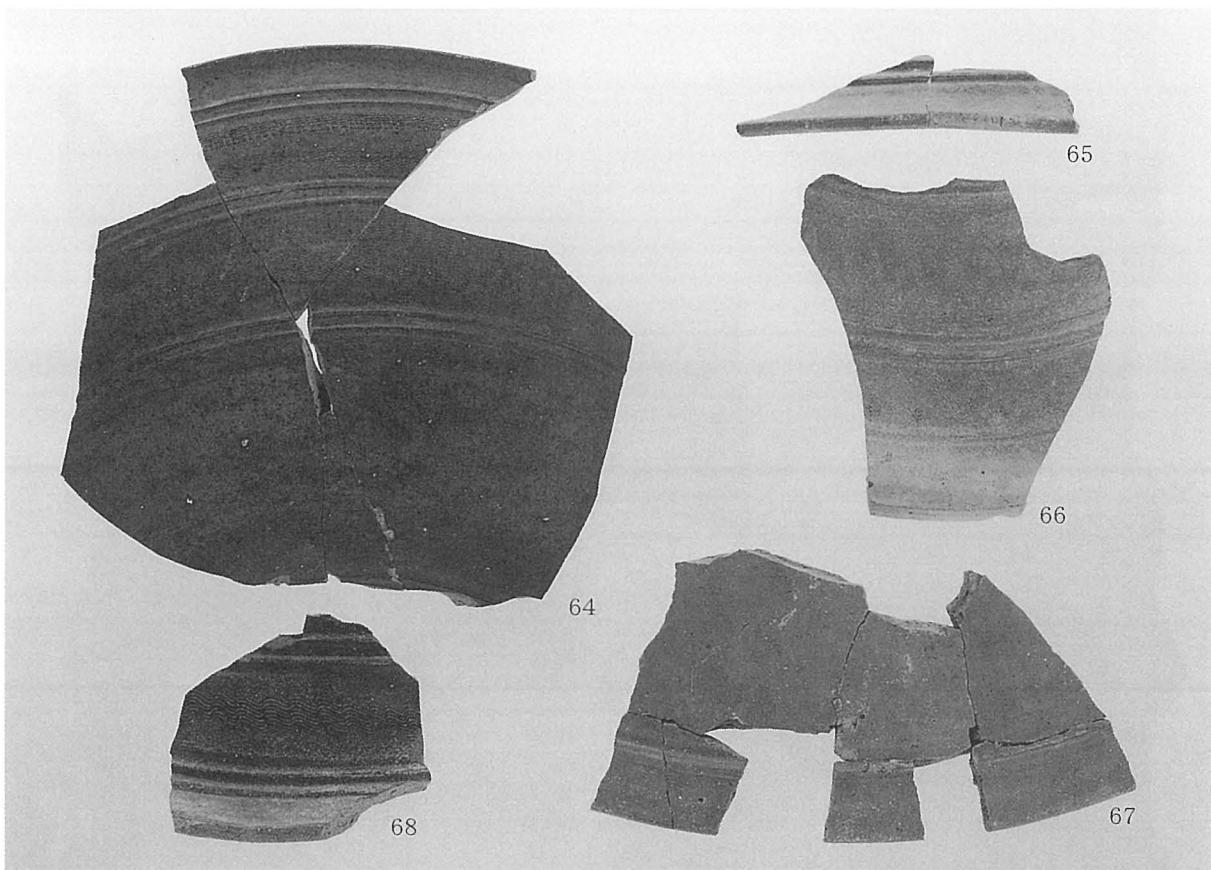
図版9 山畠古墳群第20次調査 遺物



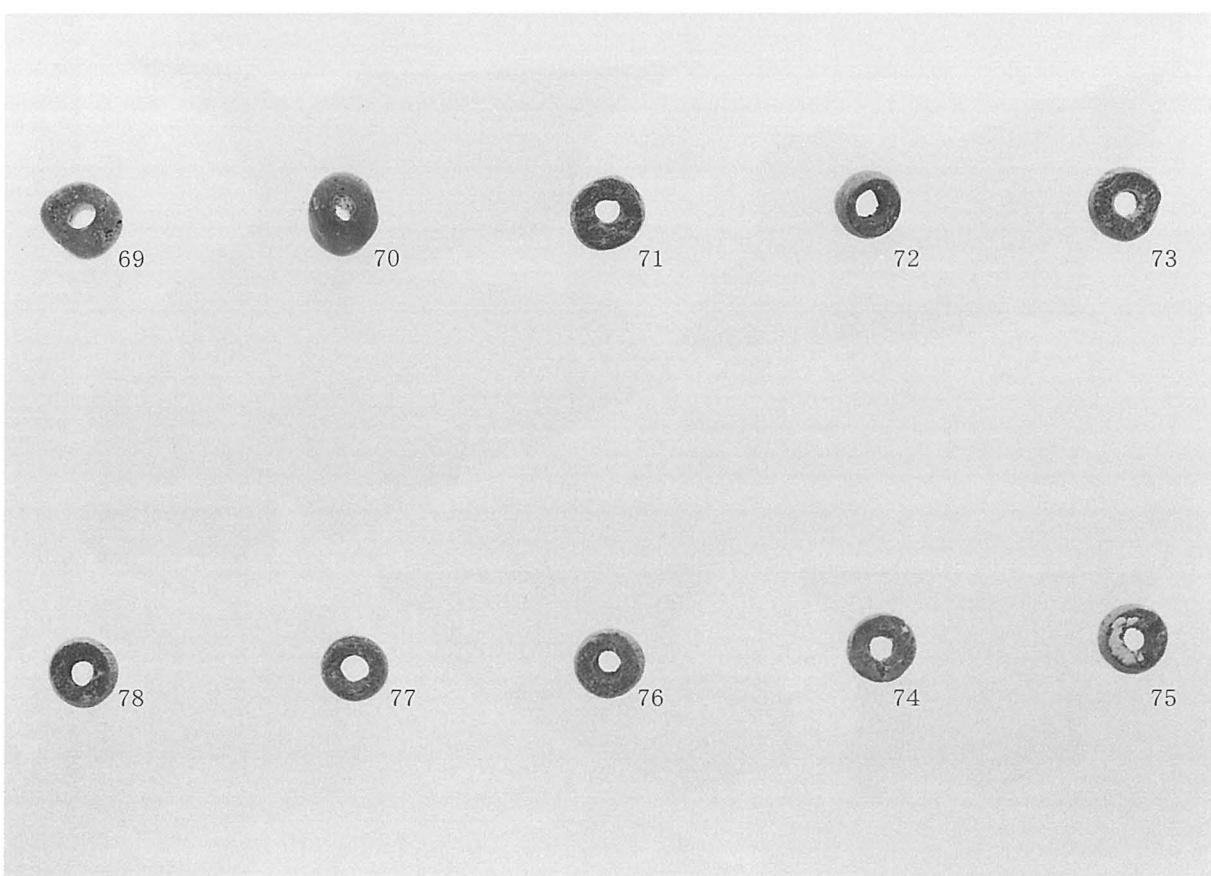
第4層内出土 (55~57・59・60)



第4層内出土 (61~63)



第4層内出土 (64~68)



第4層内出土 (69~78)

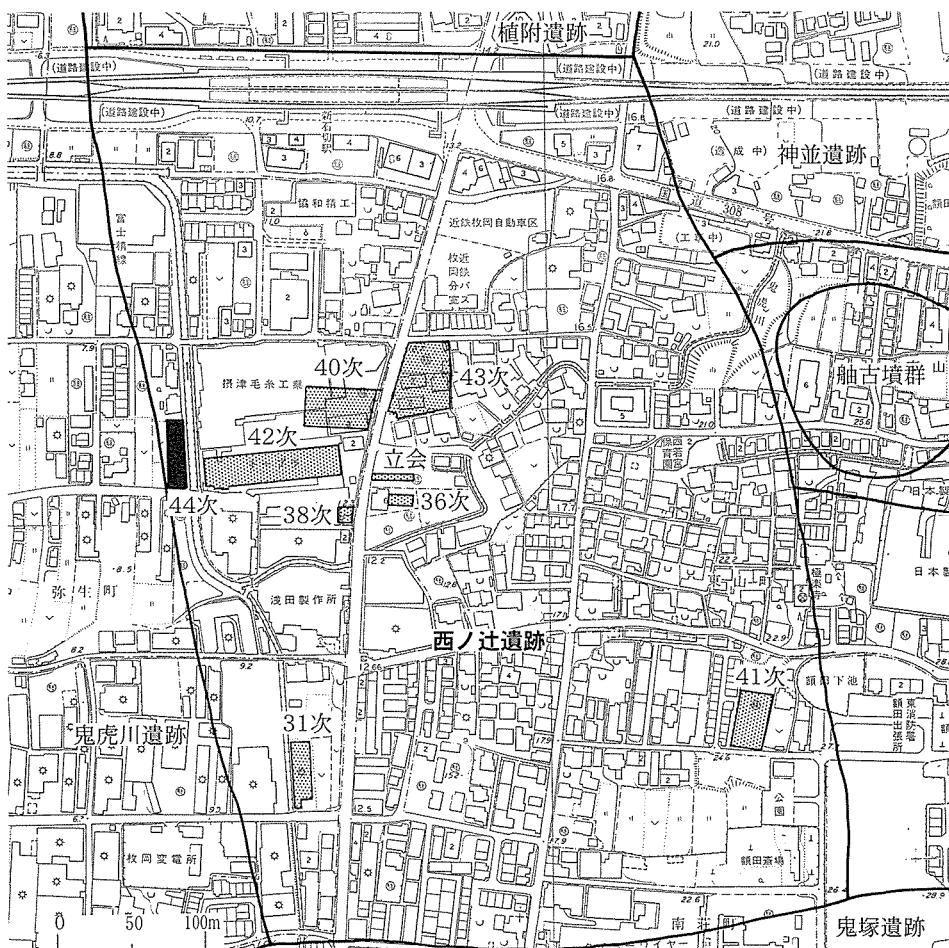
## 第4章 西ノ辻遺跡第44次発掘調査

### 1) はじめに

今回調査した箇所は、東大阪市弥生町1414番地の6で、西ノ辻遺跡の最西端に位置する。約10m西で鬼虎川遺跡と接している(第2図)。旧の小字地名では「五之坪」の中央部にあたり、地形では標高約10mの扇状地上に立地する。

平成12年12月、個人から賃貸用共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。翌13年1月に確認調査を実施したところ、灰色細礫混じりシルト層から弥生土器が出土した。このため、届出者と東大阪市教員委員会文化財課とは埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ね、地盤改良工事により埋蔵文化財が破壊される箇所を対象に発掘調査を実施することで合意した。調査トレンチは長さ20.8m幅1.3mで、約27m<sup>2</sup>である。調査は平成13年5月9日から5月25日まで実施した。

西ノ辻遺跡の発掘調査は今回で44次を数える。第1次から第43次までの調査成果は別途報告書(東大阪市教育委員会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成12年度－』、2001年。)に譲ることとし、ここでは調査箇所の傾向を述べるにとどめたい。西ノ辻遺跡の調査は国道308号線関係事業に伴うものが大半で、遺跡の北端・西端を中心に行われてきた。そのため調査成果が豊富で各時期の集落様相が捉えやすい北部とは対照的に、中～南部の様相が不明であったことは否めなかった。ところが、近年中部で大規模小売店や高層共同住宅の開発が相次ぎ、前記の状況が一変しつつある。例えば、第43次調査では、弥生時代中期～後期・古墳時代・奈良時代末～平安時代初頭・中世期の4期の遺構面が検出された。とくに弥生期の遺構として竪穴住居・井戸・土坑・ピットが発見され、当該地の周辺に、居住域が広がることが判明した。なお、隣接する鬼虎川遺跡第39次発掘調査の概要について触れておく。共同住宅の浄化槽埋設に伴うもので、平成7年10月に3日間実施した。調査の結果、地山層上面で弥生中期の遺構を検出した。落ち込み内から完形の壺が出土した。胴部下半に穿孔をもつものがみられ、付近に方形周溝墓が存在することが推定される。



第1図 西ノ辻遺跡と中～南部の調査地

## 2) 西ノ辻遺跡とその周辺の遺跡(第1図)

西ノ辻遺跡は、東大阪市東山町・弥生町・南荘町・宝町・西石切町3丁目にわたる縄文時代から江戸時代にいたる集落遺跡で、遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mに及ぶと推定されている。本遺跡が所在する額田・石切地区は、前記の国道308号線関係事業に伴う大規模な調査が行われたことによって、埋蔵文化財の宝庫となっている。東に隣接する神並遺跡では、縄文時代早期の集石土坑や焼土坑などの遺構が検出され、大量の押型文土器が出土し脚光を浴びた。早期の土偶や有舌尖頭器も発見されている。西の鬼虎川遺跡は弥生時代中期の拠点集落として著名である。従前より青銅器の鋳型などが発見され注目されてきたが、最近大型のヒスイ製勾玉がみつかり、在地首長の富の象徴として貴重な成果となった。南には鬼塚遺跡がある。縄文時代晚期の住居址や再葬墓のほか、奈良～平安時代の集落が検出されている。該期の井戸から多量の墨書き土器が出土した。集落内での祭祀、とくに神との共同飲食の場で使用されたものと推定されている。西北には白鳳期の創建にかかる法通寺跡や延喜式内社の石切劍箭神社が鎮座し、連綿と人々が活動する場となっている。

## 3) 層位 (第3図)

調査はコンクリート片等のガラが混じる盛土層(第1A層)のみ機械で除去し、以下は人力による掘削を行った。調査で検出した層位は以下のとおりである。

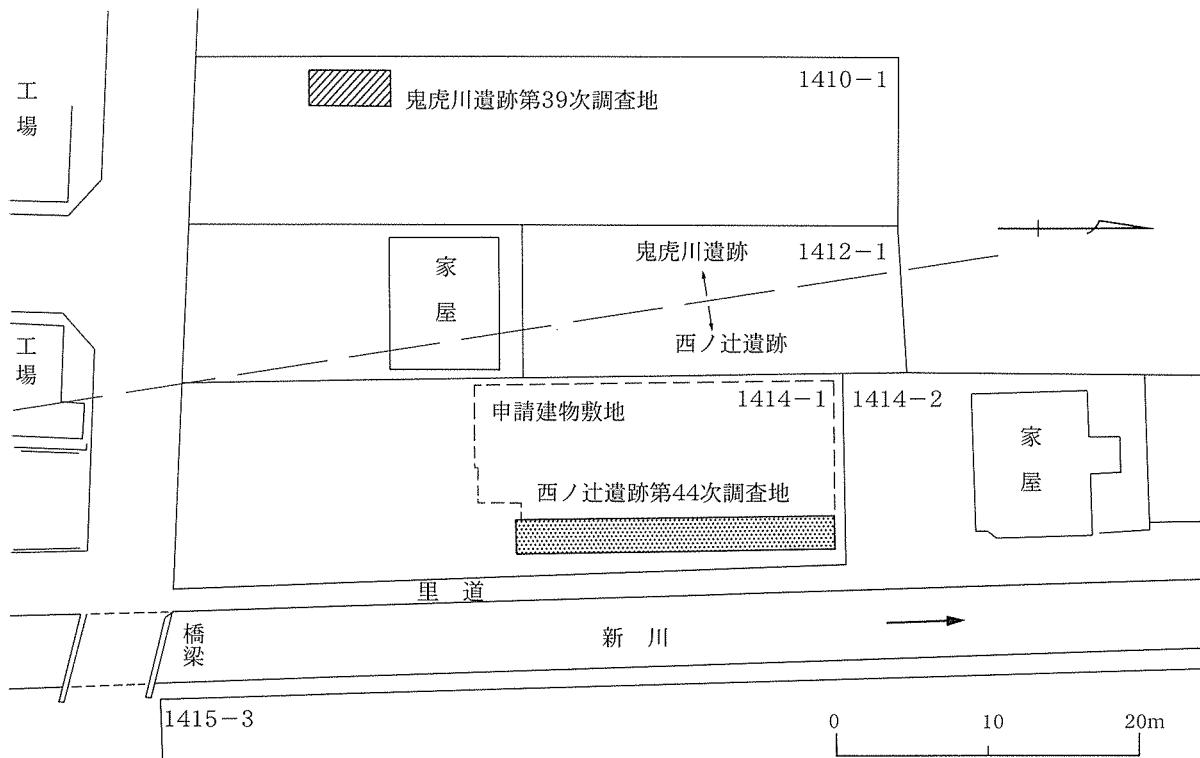
第1層 駐車場造成時の盛土と近代の攪乱層を併せて1層とする。1B層は客土、1C層は真砂土。

第2層 旧耕土層である。混入品として縄文土器を含む。層厚10cm。

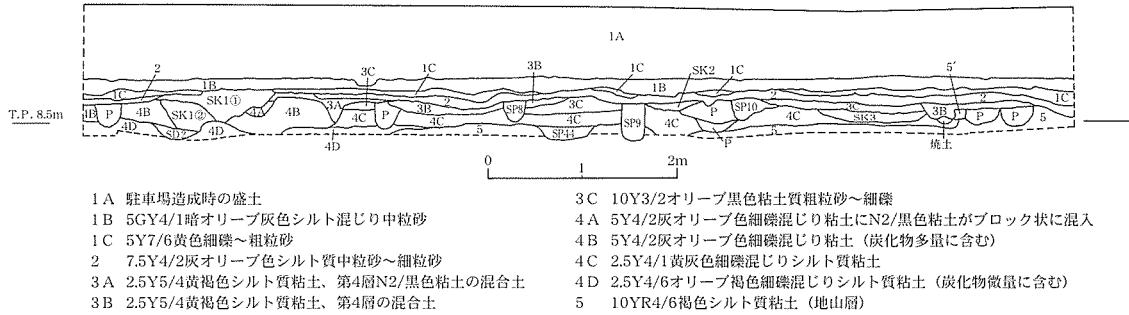
第3層 弥生時代中期の遺物包含層。3層に区分される。低位の第3C層から遺物の出土が多い。上面は上層の遺構面を形成する。北側ではこの層を除去すると直下に地山面が露出する。層厚15cm。

第4層 縄文～弥生時代の遺物包含層。縄文期の遺物が主体を占める。4層に区分される。上面は下層の遺構面を形成する。調査地の南側にのみ分布する。層厚10cm～30cm。

第5層 地山層である。



第2図 調査トレンチの位置と周辺の地形



第3図 調査地西壁土層断面図

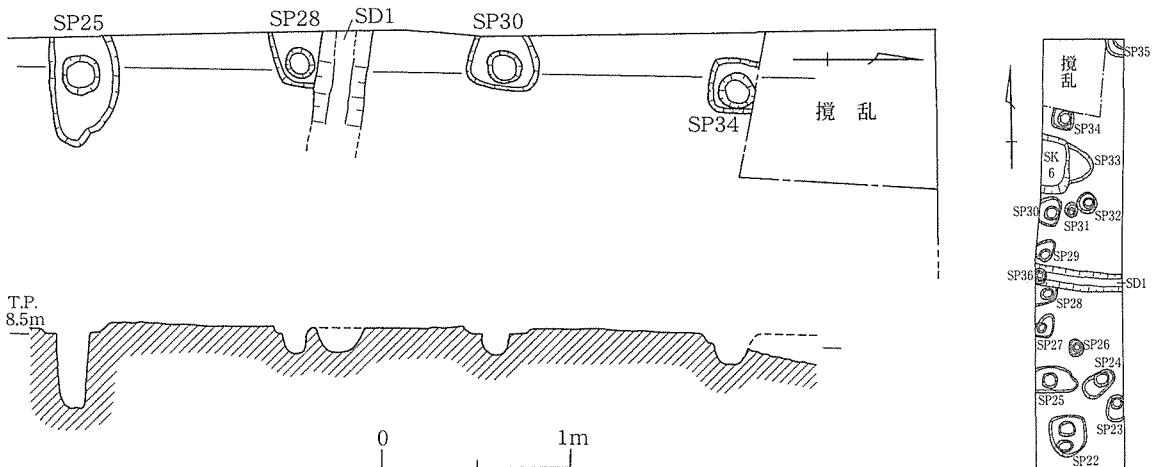
#### 4) 検出した遺構

上層遺構（第4図）ピット35個・土坑6基・溝1条を検出した。ピットの詳細データは下層遺構とともに別表に掲出した。ピットの埋土は次の4つのパターンに分類できた。

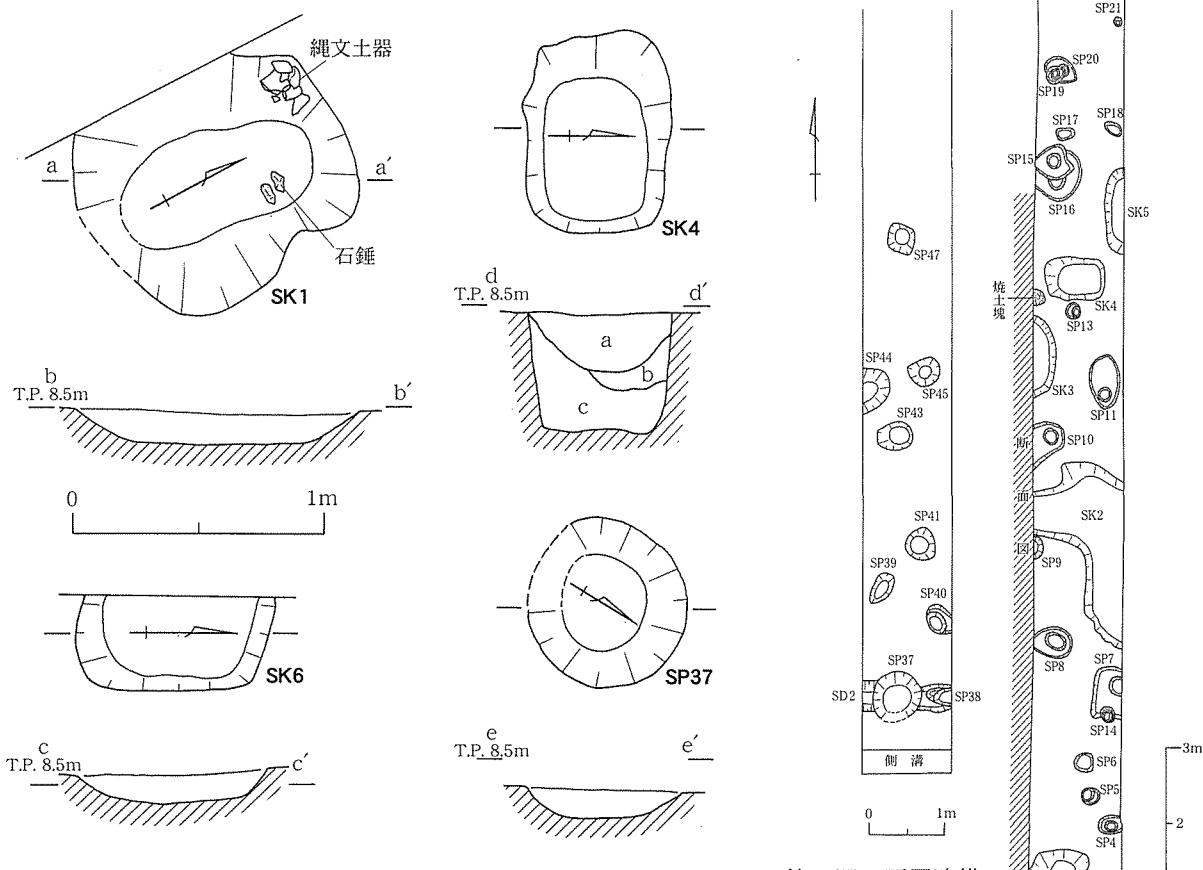
種別	柱痕跡埋土	柱掘形埋土
①	N2/黒色粘土質シルト(細礫の有無で2つに区分可能)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入
②	N2/黒色粘土質シルト(細礫の有無で2つに区分可能)	10YR4/6褐色シルト質粘土(地山層)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入
③	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルトに7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトがブロック状に混入
④	2.5Y4/1黄灰色粘土	10YR4/6褐色シルト質粘土(地山層)に2.5Y4/1黄灰色粘土がブロック状に混入

上記の埋土パターンと出土土器の年代観を組み合わせた結果、SP25-28-30-34(すべて②)を柱通りとする掘立柱建物の存在が推定できる(第6図)。この柱通りは1.2mのピッチで南北方向に走る。SP30から平安期の土師器甕(第9図25)が出土している。したがって②を埋土とする掘立柱建物は当該期の所産に推定される。①・③・④のピット群には弥生期のものが含まれる。この点は後述する。土坑のうち主要なものは第7図に図示した。SK1は平面が円形で断面が皿形を呈する。径1.1m、深さ13cmを測る。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗粒砂混じり粘土。縄文土器・弥生土器と石錘が出土した。SK2は溝状の浅い落ち込みを呈する。東側の最大長は2.2m、深さは中央部で7cmを測る。SK3は円形を呈すると思われる。現況の最大長1.1m、深さは9cmを測る。埋土はSK2・SK3ともSK1と同じである。SK4は平面方形、断面箱形を呈する。長辺0.8m、短辺0.58m、深さ56cmを測る。埋土は3層に分かれる。aはN2/黒色中粒砂混じりシルトに焼土を少量含む。bは7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルトに10YR4/6褐色シルト質粘土(地山層)がブロック状に混入する層。cは10Y3/2オリーブ黒色細礫混じり粘土である。遺物は僅少であった。SK5は一部のみ検出した。最大長1.15m、深さは5cmであった。SK6は現況で一辺0.75m、深さ12cmを測る。埋土はSK5と共に、10YR4/6褐色シルト質粘土(地山層)に2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土が混ざる層である。SD1は幅25cm、深さ8cmを測る。東から西へ流下する小溝である。

下層遺構（第5図）ピット9個と溝1条を検出した。南半部で第4層の除去後、地山層上面で検出した。ピット内から凸帯文土器のみ出土するものは少なく弥生土器が混在するものが多い。このため所属時期は概ね弥生時代中期と推定できる。平面形は円形・橢円形が多く認められる。その中でSP37はほぼ正円形を呈するものである(第7図)。深さは13cmを測る。SD2は幅30~40cm、深さ8cmを測る。東から西へ流下する。



第6図 SP25・28・30・34の柱通り実測図



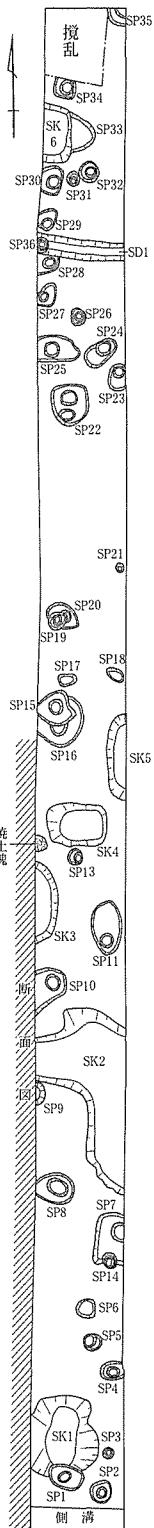
第7図 主要な土坑・ピット実測図

第5図 下層遺構平面図

## 5) 出土遺物

今回の調査では、コンテナー3箱の遺物が出土した。ただし前記したように、遺物包含層の遺存状態は悪く、遺構の一括出土もみられなかった。このため、以下の記述は遺構別・遺物包含層別ではなく、遺物の種別ごとに、たとえば土器は縄文土器・弥生土器のように時期の古い順に、遺構と包含層をまとめて記すことにした。まとめでも触れるが、縄文土器(晩期凸帯文土器)が比較的多く出土したのが、大きな成果であった。

第4図 上層遺構平面図



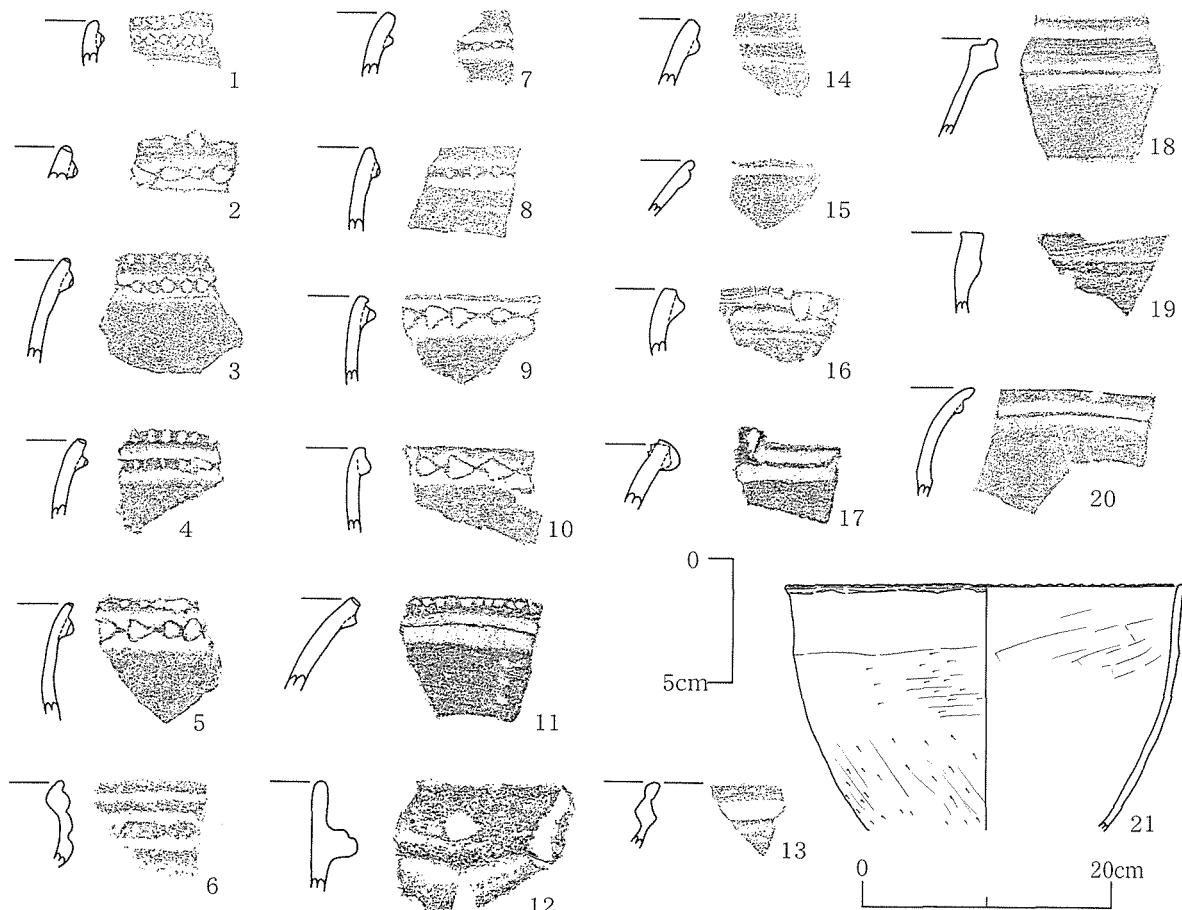
## 西ノ辻遺跡第44次調査検出ピット一覧表(1)

遺構名	遺構面	平面形態	長辺	短辺	深さ	柱痕跡土	柱掘形埋土			出土遺物		
							繩文土器	弥生土器	土師器	土師器	土器	石器
SP1	I	楕円形	46	31	14	10Y4/2オリーブ灰色粘土質シルトがブロック状に混入	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP2	I	円形	27	15	15	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP3	I	円形	17	16	16	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP4	I	楕円形	32*	23	13	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP5	I	円形	23	12	12	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP6	I	円形	24	7	なし		10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP7	I	方形	64	39*	23	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP8	I	楕円形	53*	40	11	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトにN2/黒色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP9	I	円形	28	13*	40	なし	N2/黒色粘土質シルトに焼土を含む	○	○	○	○	
SP10	I	楕円形	59*	43	13	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルトに7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトがブロック状に混入	○	○	○	○	
SP11	I	長楕円形	72	40	15	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルトに7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトがブロック状に混入	○	○	○	○	
SP12	I	楕円形	43	30*	22	なし	焼土が充填	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP13	I	円形	23	9	5Y4/1灰色細礫混じり粘土	5Y4/1灰色粘土と焼土の混合土	○	○	○	○		
SP14	I	円形	18	24	24	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	10YR3/3暗褐色粘土質シルトがブロック状	○	○	○	○	
SP15	I	不定円形	50*	47	10	5Y4/1灰色細礫混じり粘土	5Y4/1灰色粘土にN2/黒色粘土質シルトと第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混入)	○	○	○	○	
SP16	I	円形	67	43*	9	2.5Y4/1黄灰色粘土	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1黄灰色粘土がブロック状に混入	○	○	○	○	
SP17	I	楕円形	23	15	12	なし	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP18	I	楕円形	26	14	12	なし	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP19	I	円形	25	9	5Y4/1灰色細礫混じり粘土	5Y4/1灰色粘土にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○	○	○	○	○	
SP20	I	楕円形	46	30	9	2.5Y4/1黄灰色粘土	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1黄灰色粘土がブロック状に混入	○	○	○	○	
SP21	I	円形	11	7	なし		N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	(遺物なし)	
SP22	I	円形	54	21	21	N2/黒色粘土質シルト(細礫～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○	○	○	○	
SP23	I	楕円形	35	22*	8	2.5Y4/1黄灰色粘土	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1黄灰色粘土がブロック状に混入	○	○	○	○	

## 西ノ辻遺跡第44次調査検出ピット一覧表(2)

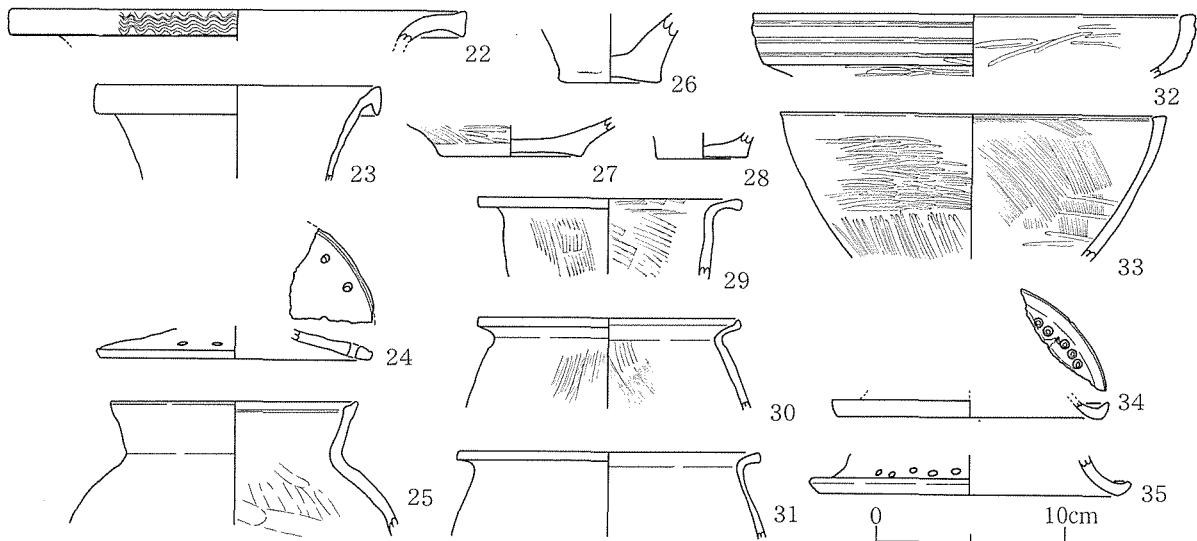
遺構名	遺構面	平面形態	長辺	短辺	深さ	柱痕跡埋土		柱掘形埋土		出土遺物	
						柱痕跡埋土	柱掘形埋土	繩文土器	弥生土器	土師器	土器
SP24	I	楕円形	46	28	15 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○ (中期)	○ (中期)		
SP25	I	楕円形	58*	35	48 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○ (中期)	○ (中期)		○
SP26	I	円形	23	10	2.5Y4/1 黄灰色粘土	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1 黄灰色粘土がブロック状に混入				(遺物なし)
SP27	I	不定円形	31	26*	9 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入				
SP28	I	方形	30*	28*	11 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入				
SP29	I	円形	30	8	2.5Y4/1 黄灰色粘土	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1 黄灰色粘土がブロック状に混入				(遺物なし)
SP30	I	方形	39	28*	10 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○ (中期)	○ (平安)		
SP31	I	円形	19	7	7 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入				(遺物なし)
SP32	I	円形	27	20	2.5Y4/1 黄灰色粘土	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)に2.5Y4/1 黄灰色粘土がブロック状に混入	○ (中期)	○ (中期)		
SP33	I	円形	55	30*	8 なし	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入				○
SP34	I	方形	29	25*	15 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○ (中期)	○ (中期)		○
SP35	I	円形	23*	23*	9 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)にN2/黒色粘土質シルトがブロック状に混入	○ (中期)	○ (中期)		○
SP36	I	方形	18	13*	6 む)	N2/黒色粘土質シルト(細繹～粗粒砂を多く含む)	①第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)を主体に10Y2/1 黑色シルト混じり粘土が混入。繊維～粗粒砂含む。 ②10Y2/1 黑色シルト混じり粘土	○ (中期)	○ (中期)		○
SP37	II	正円形	63	12	16 が混じる	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)を主体に10Y4/1 灰色シルト質粘土[多]、10Y2/1 黑色シルト質粘土[少]	○ (中期)	○ (中期)		○	
SP38	II	楕円形	36*	22	16	第5層地山層(10YR5/6黄褐色シルト質粘土)を主体に10Y4/1 灰色シルト質粘土[多]、10Y2/1 黑色シルト質粘土[少]	○ (中期)	○ (中期)		○	
SP39	II	楕円形	46	26	7	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)				(遺物なし)	
SP40	II	楕円形	45	33	14	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)				○	
SP41	II	不定円形	42	40	9	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)				○	
SP43	II	楕円形	45	36	16	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)	○ (中期)	○ (中期)		○	
SP44	II	円形	60	35	7	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)	○ (中期)	○ (中期)		○	
SP45	II	円形	40	11	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)	○ (中期)	○ (中期)		(遺物なし)		
SP47	II	方形	45	40	5	10Y4/2灰黄褐色シルト質粘土(第5層地山層<10YR5/6黄褐色シルト質粘土がブロック状に混じる)	○ (中期)	○ (中期)			

縄文土器（1～21） 滋賀里IV式（一部を除き）に併行すると考えられる。1～12・14・16・19～21は深鉢。肩部に屈曲をもつ形態(3～5・9～12・16・20・21)がある。口唇部にキザミと口縁部下に1条のキザミメ突帯をめぐらせるもの（1～5）、口縁部下にキザミメ突帯文を1条めぐらすもの（7～10）、口縁部と胴部を区画する半隆帯文を施すもの（6）、口唇部にキザミメを施すもの（11）、口唇突帯に1条の沈線をめぐらすもの（12）、口縁部下に突帯をめぐらすもの（14・16）、口縁端部を断面方形状に肥厚させたもの（19）、口縁端部上面にキザミメを施すもの（21）がある。1～5は胎土に角閃石・長石・石英・くさり礫を含み、口唇部と突帯には工具によるD字キザミメが施される。1は口唇部小V字キザミメ、突帯部に小O字キザミメがつく。色調は褐色（10YR4/4）を呈し、調整は内外面共に丁寧なナデが施される。第2層出土。2は口唇D字キザミメ、突帯部にD字キザミメがつく。色調は外面明褐色（7.5YR5/6）、内面にはにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、調整は内面にナデが施される。第3層出土。3は口唇部小V字キザミメ、突帯部小D字キザミメがつく。色調は外面ににぶい黄橙色（10YR6/4）、内面にはにぶい黄橙色（10YR4/3）を呈し、調整は内外面共に丁寧なナデが施される。4は口唇部O字キザミメ、突帯部D字キザミメがつく。色調は外面黄褐色（10YR5/6）、内面には黄褐色（10YR5/6）・灰白色（2.5Y8/1）を呈し、調整は内外面共にナデを施す。5は口唇部・突帯部共にV字キザミメがつく。色調は外面褐色（10YR4/4）、内面には暗褐色（10YR3/3）・黒褐色2.5Y3/2）を呈し、調整は内外面共にナデを施す。また内面には煤付着がみられる。SP38出土。6は内外面共に灰白色（10YR8/2）を呈し、胎土には白・黒・赤色砂粒を含む。調整は著しい摩滅のため詳細不明。中期後葉～後期初頭に属す。第4層出土。7は内外面共ににぶい赤褐色を呈し、胎土には長石・石英・



第8図 縄文土器実測図

雲母を含む。調整は内外面共にナデが施される。第4層出土。8は突帯部にO字キザミメがつくと思われる。色調は外面明黄褐色(10YR6/6)・灰白色(10YR7/1)、内面には灰白色(10YR7/1)・暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、胎土には角閃石・雲母・長石・石英・くさり礫を含む。調整は内外面共に丁寧なナデが施される。SP16出土。9は口唇部を面取りし、突帯部にはD字キザミメがつく。色調は内外面共に黒色(5Y2/1)を呈し、胎土には長石・石英・くさり礫・雲母・角閃石を含む。調整はナデが施される。第3層出土。10は突帯部にD字キザミメがつく。色調は内外面ともににぶい黄橙色(10YR6/4)を呈し、胎土には長石・石英・くさり礫・雲母・角閃石を含む。第3層出土。11は口唇部に小O字キザミメがつく。色調は外面にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面は黒褐色(10YR3/1)を呈し、胎土には長石・石英・雲母を含む。調整は内外面共に丁寧なナデが施される。12は内外面共に淡黄色(2.5Y8/3)・オリーブ黒色(5Y3/1)を呈し、胎土には長石・石英を含む。調整は内外面共著しい摩滅のため詳細不明。中期後葉～後期初頭に属す。14は外面黒褐色(7.5YR3/2)、内面には褐灰色(10YR4/1)を呈し、胎土には長石・石英・雲母を含む。調整はナデが施される。第4層出土。16は口唇部を面取りする。色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR6/4)を呈し、胎土には角閃石・長石・石英・くさり礫・雲母を含む。調整は口縁部内外面共にナデ、外面体部はヘラケズリが施される。内面には黒斑が見られる。第3層出土。19は口唇部を面取りする。色調は外面橙色(7.5YR7/6)、内面には淡黄色(2.5Y8/3)を呈し、胎土には角閃石・長石・石英を含む。調整は内外面共に丁寧なナデが施される。第3層出土。20は外面明黄褐色(10YR6/6)、内面にはオリーブ黒色(5Y3/1)・明黄褐色(10YR6/6)を呈し、胎土には長石・石英・雲母・角閃石・くさり礫を含む。第3層出土。21は内弯しながら立ち上がる体部から、肩部は稜をもつが口縁部は外反せず、口縁端部は外折し、口唇部を面取り後C字キザミメがつく。外面黒褐色(10YR3/1)、内面灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土には石英・長石・雲母・角閃石・くさり礫を含む。調整は外面体部にヘラケズリが施される。13・15・17・18・21は浅鉢。13は口縁部が「く」の字形に屈曲する。内外面共に明褐色(7.5YR5/6)を呈し、胎土には角閃石・くさり礫・長石・石英を含む。調整は内外面共にナデが施される。15は口縁部に1状の沈線がめぐる事によって擬突帯が生じる。外面明黄褐色(10YR6/6)・黒褐色(2.5Y3/2)、内面には灰白色(2.5Y8/1)・黒褐色(2.5Y3/2)を呈し、胎土には雲母・長石・石英を含む。調整は摩滅のため詳細不明。第3層出土。17は口縁端部に断面三角形の突起が見られる。外面にぶい黄褐色(10YR5/3)・黒色(10YR2/1)、内面には暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈し、胎土には角閃石・長石・石英が含む。調整はナデが施される。



第9図 弥生土器・土師器実測図

第3層出土。18は口縁部内面に段をもつもの。内外面共にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈し、胎土には長石・石英・くさり礫・角閃石を含む。調整は内外面共に丁寧なナデが施される。第4層出土。

#### 弥生土器(22~24・26~35)

22・23は広口壺。22は大きく外反する口縁部から、口縁端部に面をもつ。調整は内外面共にナデを施す。口縁端面には櫛描波状文、外面には黒斑が見られる。口径24.0cm。在地産。第3層出土。23は漏斗状に広がる口頸部から、口縁端部は下方に拡張する。調整は内外面共に摩滅のため詳細不明。口径14.9cm。在地産。第3層出土。24は壺の蓋。笠形を呈し、口縁部に2個1組の紐孔が見られる。調整は内外面共にナデが施される。口径14.2cm。在地産。SP1出土。27は壺底部。外面に密なヘラミガキ、内面にはナデ調整が施される。外面に黒斑あり。底径7.2cm。在地産。SK1出土。29~31は甕。29はやや直立する体部から口縁部は外反し、口縁端部は面をもちおわる。調整は内外面共に荒いハケメ(5/cm)を施す。口径13.8cm。在地産。第3層出土。30は内傾する体部から、「く」の字形に外反する口縁、口縁端部は上方につまみあげる。調整は内外面共にハケメ(5/cm)を施す。口径13.8cm。在地産。第3層。31は内傾する体部から外折する口縁部、口縁端部は面をもちおわる。調整は摩滅のため詳細不明。内外面に黒斑あり。口径15.8cm。在地産。南壁北壁断面出土。

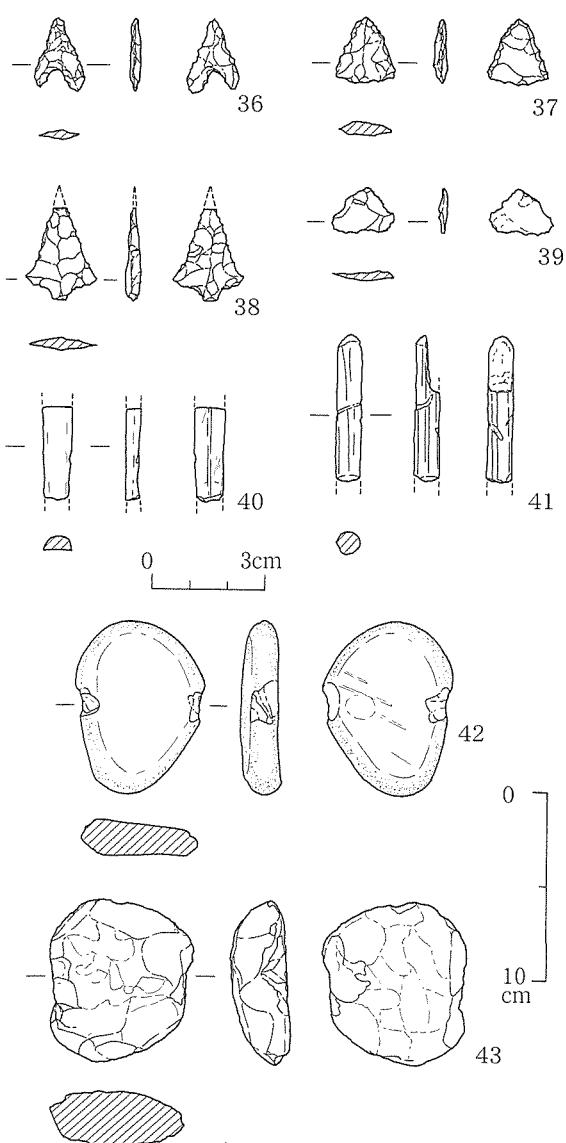
26・28は甕底部。26は上げ底氣味の底部をもつ。ナデ調整を施す。底径5.0cm。SP37出土。28は平底。ナデ調整を施す。底径4.8cm。第3層出土。32は高壺。壺部は下半が斜め上方から、屈曲して上方にのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。外面口縁部上方に3条の凹線文をもち、内外面共にヘラミガキ調整を施す。口径23.2cm。在地産。SK1出土。33は鉢。内弯しながら外方にのびる口体部から、口縁端部は上方に面をもつ。内外面共にハケメ(9/cm)のちヘラミガキ調整を施す。口径20.2cm。在地産。34・35は台付鉢の脚部。共に「ハ」の字形に広がる裾部をもち、円形竹管による無数のスタンプ文が見られる。34は内外面共にナデ調整を施す。裾径14.0cm。在地産。SK1出土。35は内外面共にナデ調整を施す。裾径15.8cm。在地産。第3層出土。

#### 土師器甕(25)

丸味をもつ肩部から屈曲して、口縁部は直線的に外方に広がる。口縁端部は内側に肥厚する。調整は内外面共にナデ調整を施す。口径13.0cm。在地産。SP30出土。

#### 石製品(36~43)

36~39・42は打製石器、40~42は磨製石器。36は凹基無茎式石鏃。長さ1.95cm、幅1.35cm、厚



第10図 石製品実測図

さ0.3cm、重さ0.48g。色調は灰色(7.5Y4/1)。SK2出土37は平基無茎式石鏃。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm、重さ0.85g。色調は暗灰色(N3/)。弥生包含層出土。38は凸基無茎式石鏃。長さ2.45cm、幅1.85cm、厚さ0.35cm、重さ1.15g。色調は暗灰色(N3/)。第3層出土。39は剥片。長さ1.2cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ0.26g。色調は暗灰色(N3/)。第3層出土。40は碧玉製管玉。長さ2.5cm、幅0.8cm、厚さ0.35cm、重さ0.51g。色調は明緑灰色(10GY7/1)。弥生包含層出土。41は管玉未製品。長さ3.85cm、幅0.55cm、厚さ0.65cm、重さ2.57g。色調は明褐色(7.5YR5/6)・黒褐色(10YR3/1)。第3層出土。42・43は石錘。両側に紐の抉りが施される。42は長さ9.25cm、幅6.85cm、厚さ1.9cm、重さ158.41g。色調は灰オリーブ(5Y6/2)。SK1出土。43は長さ8.65cm、幅7.6cm、厚さ2.8cm、重さ294.70g。色調は灰色(7.5Y6/1)。第4層出土。

#### 6) まとめ

今回の調査では、27mと極めて限られた調査区であったが、西ノ辻遺跡の西端部の様相に新たな知見を加えることができた。ここでは調査成果を箇条書きで列挙し、まとめに代えておきたい。

(1) 今回検出した遺構には、ピット・土坑・溝などがある。上層・下層の2面にわたり検出した。東隣の第42次調査では後世の耕作跡を除くと、縄文時代以前・弥生時代中期・古墳時代後期・奈良～平安時代前期・中世期の5時期の遺構が確認されている。この成果と今回の結果とを付き合わせて上層・下層の遺構面の時期を考えてみたい。

(2) 上層遺構面で検出されたピットは、前記のように埋土から4つのパターンに分類できた(p.47)。このうち②のピットから土師器甕が出土した。この甕は器形から神並遺跡第26次遺跡SD25出土例に近似しており、9世紀中葉の年代が与えられる。

(3) いっぽう、土質的には①は②と類似し土師器片が含まれ、奈良～平安時代に推定できよう。④は調査地の北側に集中し、切り合い関係から②より古相で柱掘形埋土に地山層が認められる。出土遺物はごく一部の混入品を除いて縄文～弥生土器である。これらのことから④を埋土とするピットは弥生時代中期に属すると考えられる。凹線文の土器から中期後半を中心とした時期に比定できよう。下層遺構面のピットや溝には弥生時代以降の遺物を含んでおらず、弥生時代中期の所産と考えられる。

(4) 出土遺物では縄文時代晚期の凸帯文土器が中量出土したことが注目される。これらは少なくとも弥生時代以降の二次堆積によるもので一括性に乏しいが、時期的には滋賀里IV式期にまとまりを見せており。二次堆積による凸帯文土器の出土という点も第42次調査の様相と同一である。今回の調査ではプライマリーな縄文時代晚期の遺構を捉えられなかったが、土器の分布から、新川を介在して第42次から第44次の調査地付近に晚期の生活域が存在した可能性が高い。晚期集落の生活面を破壊して弥生中期集落が築かれたことが推定できる。

(5) 西ノ辻遺跡の縄文時代晚期の遺構は、北部検出の谷筋で若干の遺物が出土しているほかは、現況では第31次調査地の溝が唯一のものである(第1図)。ただし第31次調査地は第42・44次調査地から南へ約200m隔たっており、報告者が推定しているように南に接する鬼塚遺跡の集落様相と相關関係をもつものと思われる。この晚期集落の範囲追及のためにも本遺跡の南西部での調査事例が増加することが期待される。

#### 【参考文献】

- ・(財)東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第31次発掘調査概報』(『東大阪市文化財協会概報集－1996年度(1)－』所収、1997年)。
- ・東大阪市教育委員会『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』、2001年。
- ・東大阪市教育委員会『市営若宮住宅建替工事に伴う 神並遺跡第26次発掘調査報告』、2001年。

図版1  
西ノ辻遺跡第44次調査

遺構



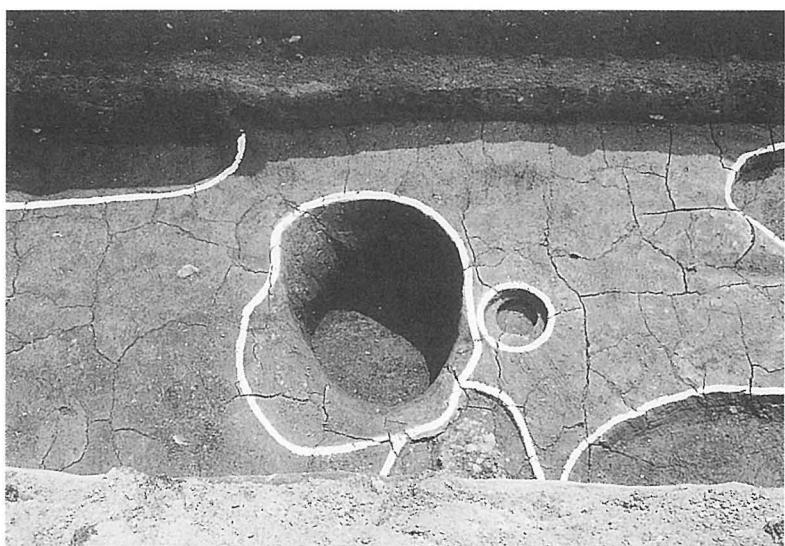
図版  
2

西ノ辻遺跡第44次調査

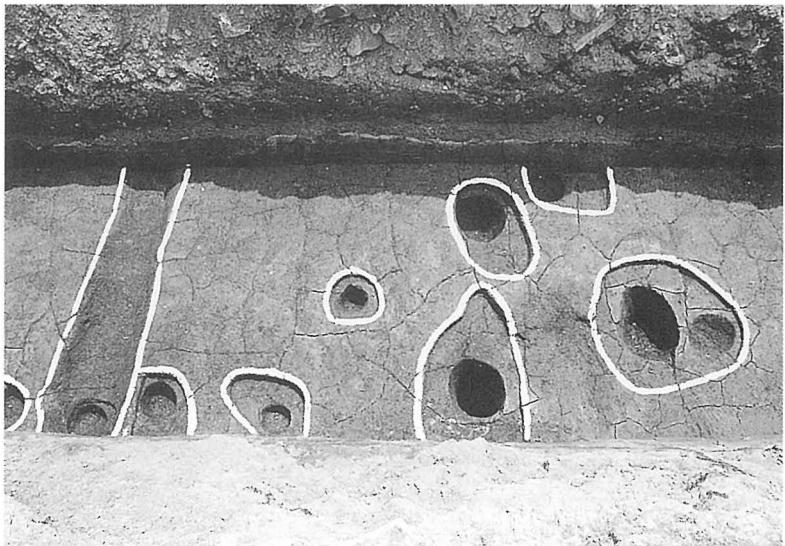
遺構



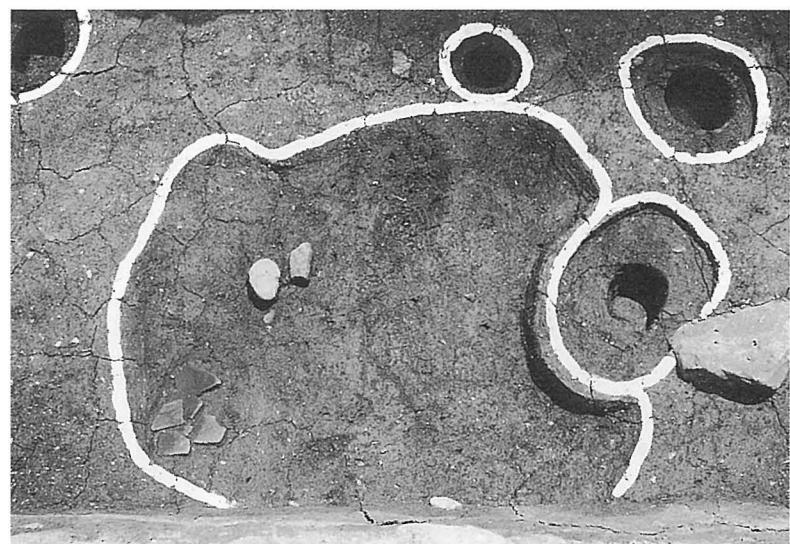
SK4内遺物出土状況（西より）



SK4ほか掘削後状況（西より）



調査地北側上層遺構掘削後状況  
(SP25-SP28ほかの柱通り、西より)



SK1内縄文土器他出土状況  
(西より)



下層遺構掘削後状況（南より）

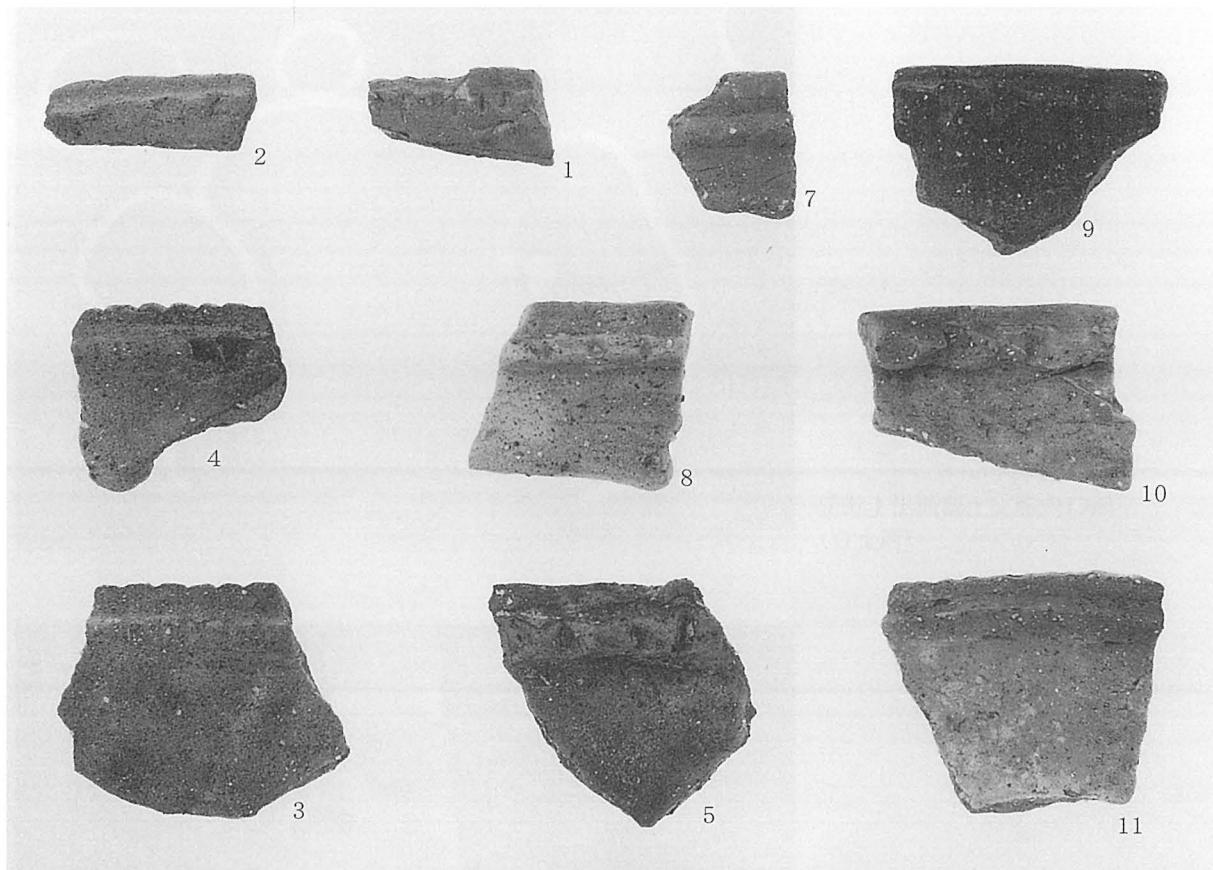


西壁断面（SP8・SP9ほか）

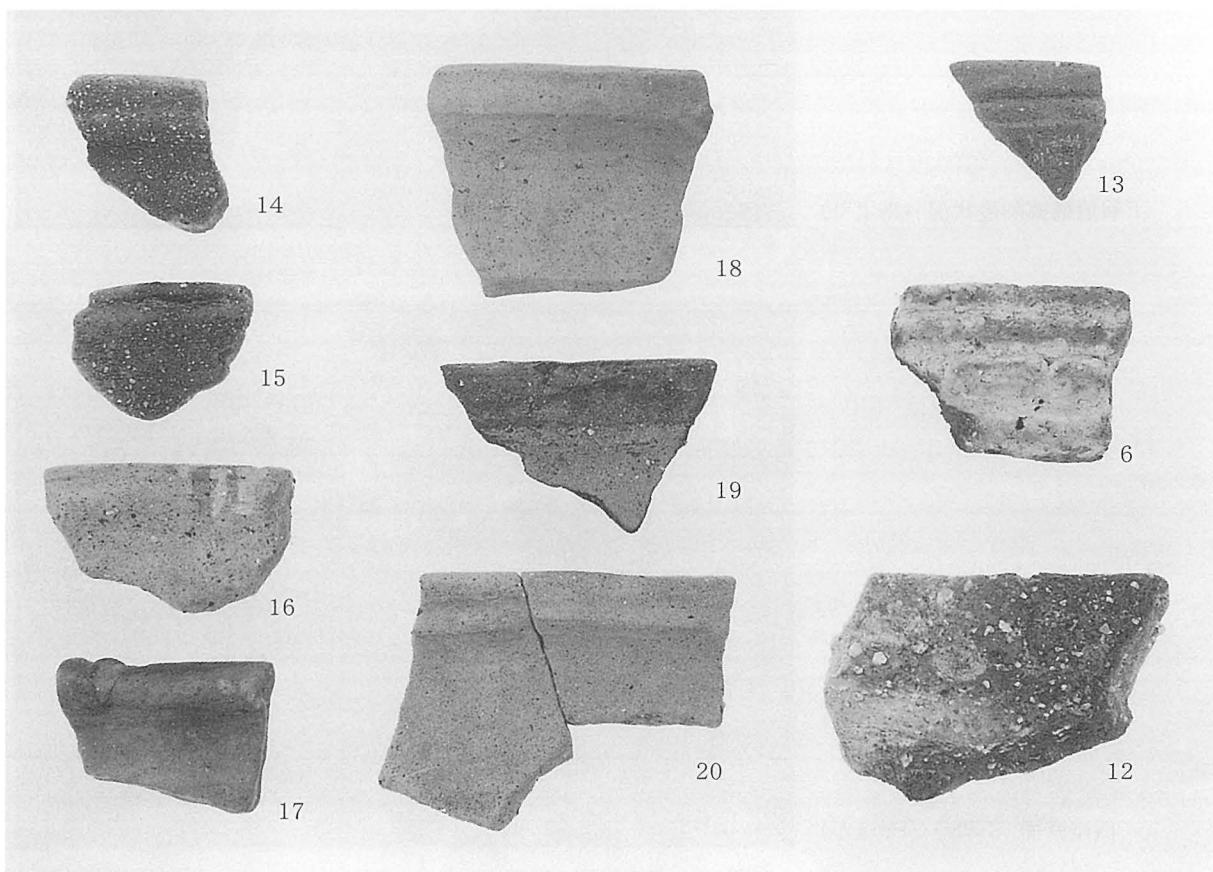
図版  
4

西ノ辻遺跡第44次調査

遺物

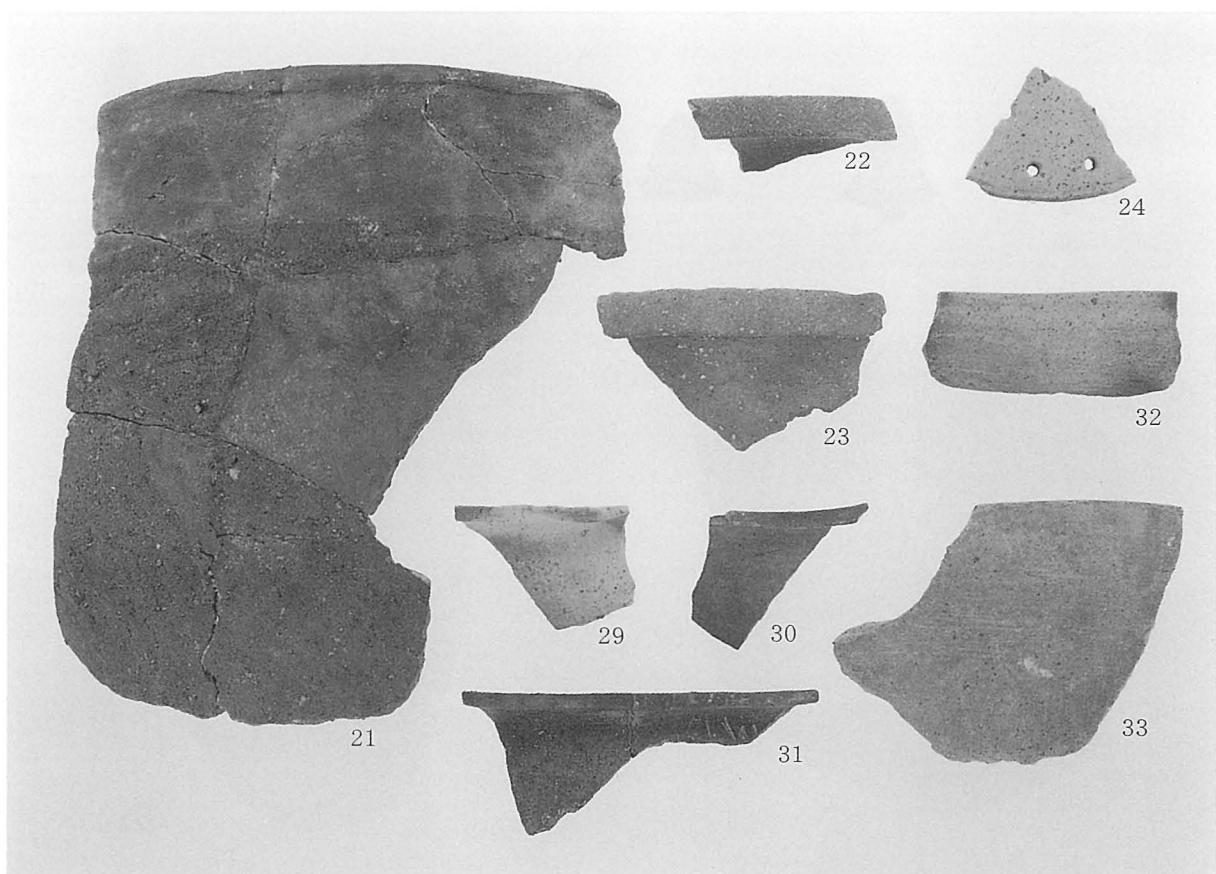


第2層出土 (1) 第3層出土 (2・9・10) 第4層出土 (3~5・7・11) SP16出土 (8)

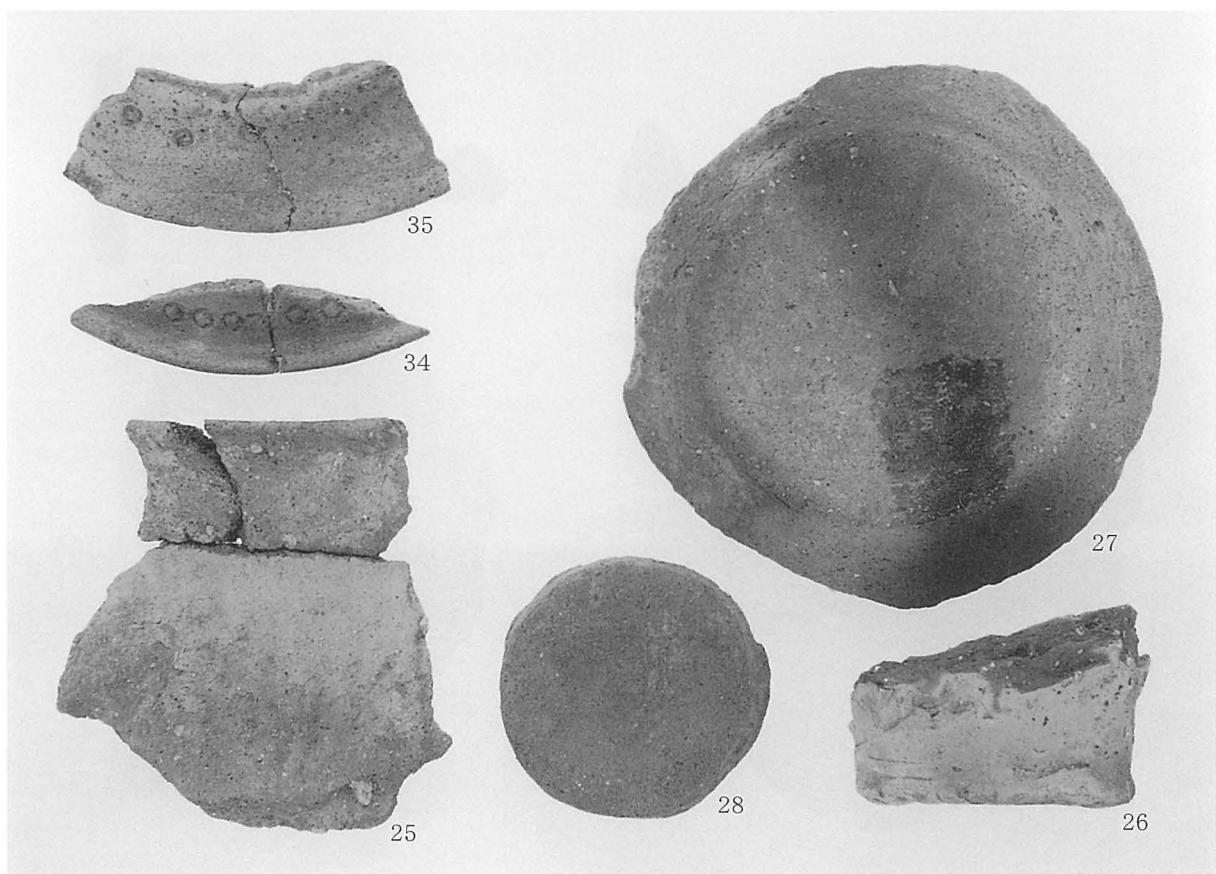


第4層出土 (6・12・14・18) 第3層出土 (13・15~17・19・20)

図版5 西ノ辻遺跡第44次調査 遺物



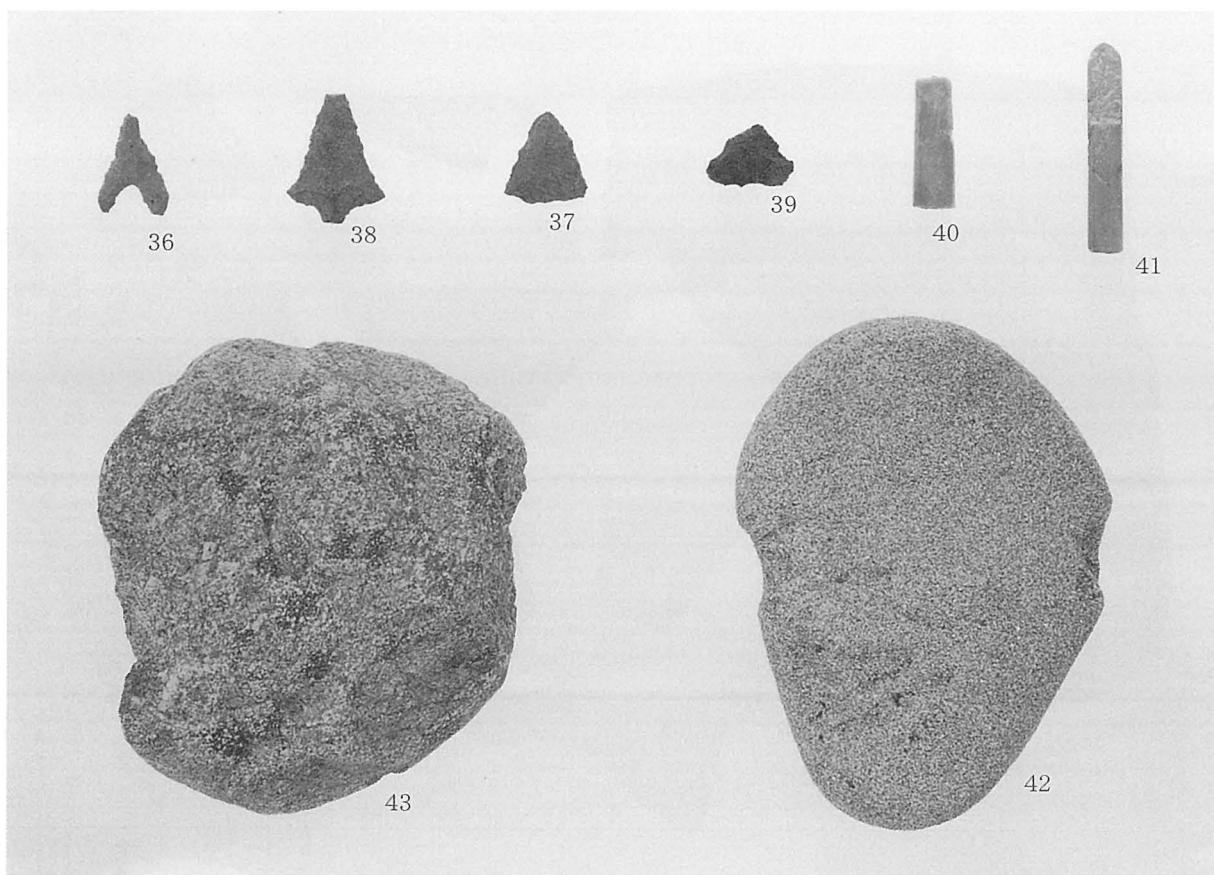
出土地不明(21) 第3層出土(22・23・29・30・33) SP1出土(24) 南壁北壁断面出土(31) SK1出土(32)



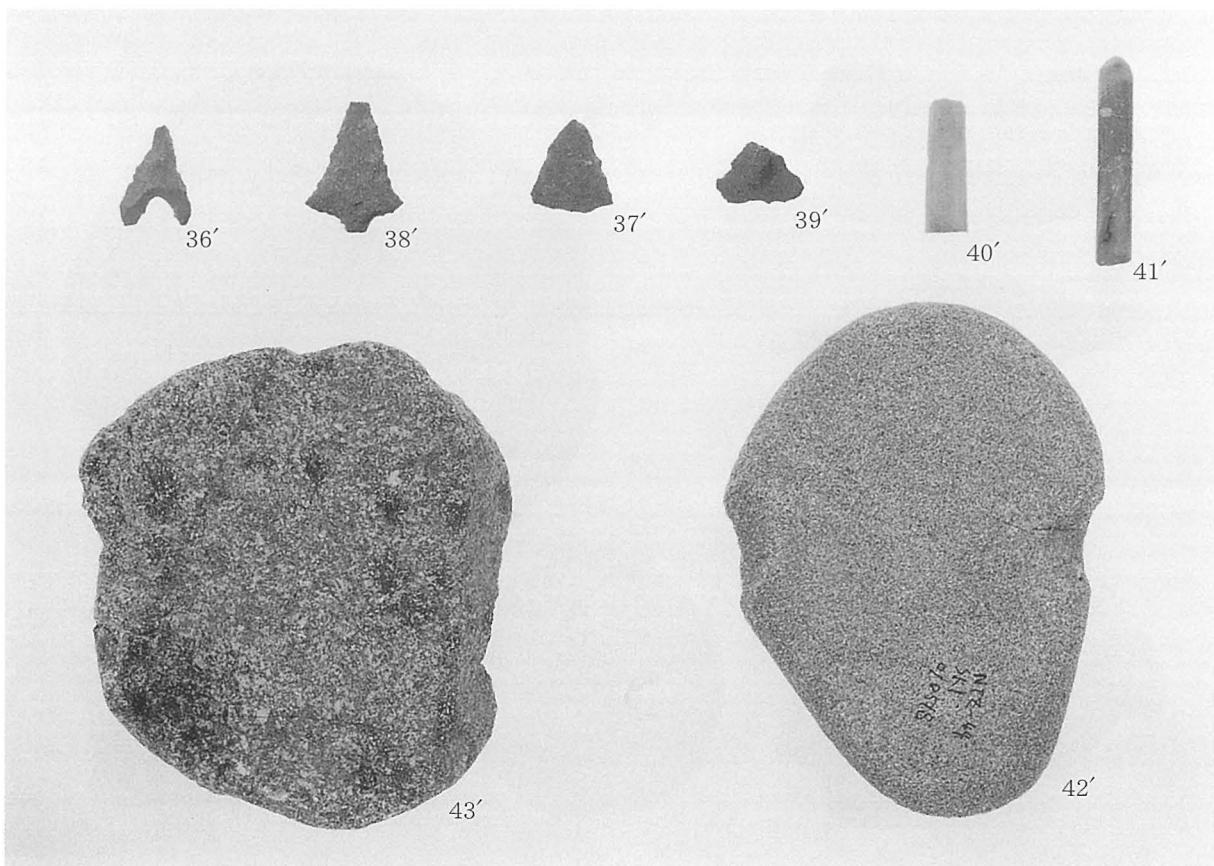
SP30出土(25) SP37出土(26) SK1出土(27・34) 第3層出土(28・35)

図版6

西ノ辻遺跡第44次調査  
遺物



SK 2 出土 (36) 弥生包含層出土 (37・40) 第3層出土 (38・39・41) SK1出土 (42) 第4層出土 (43)



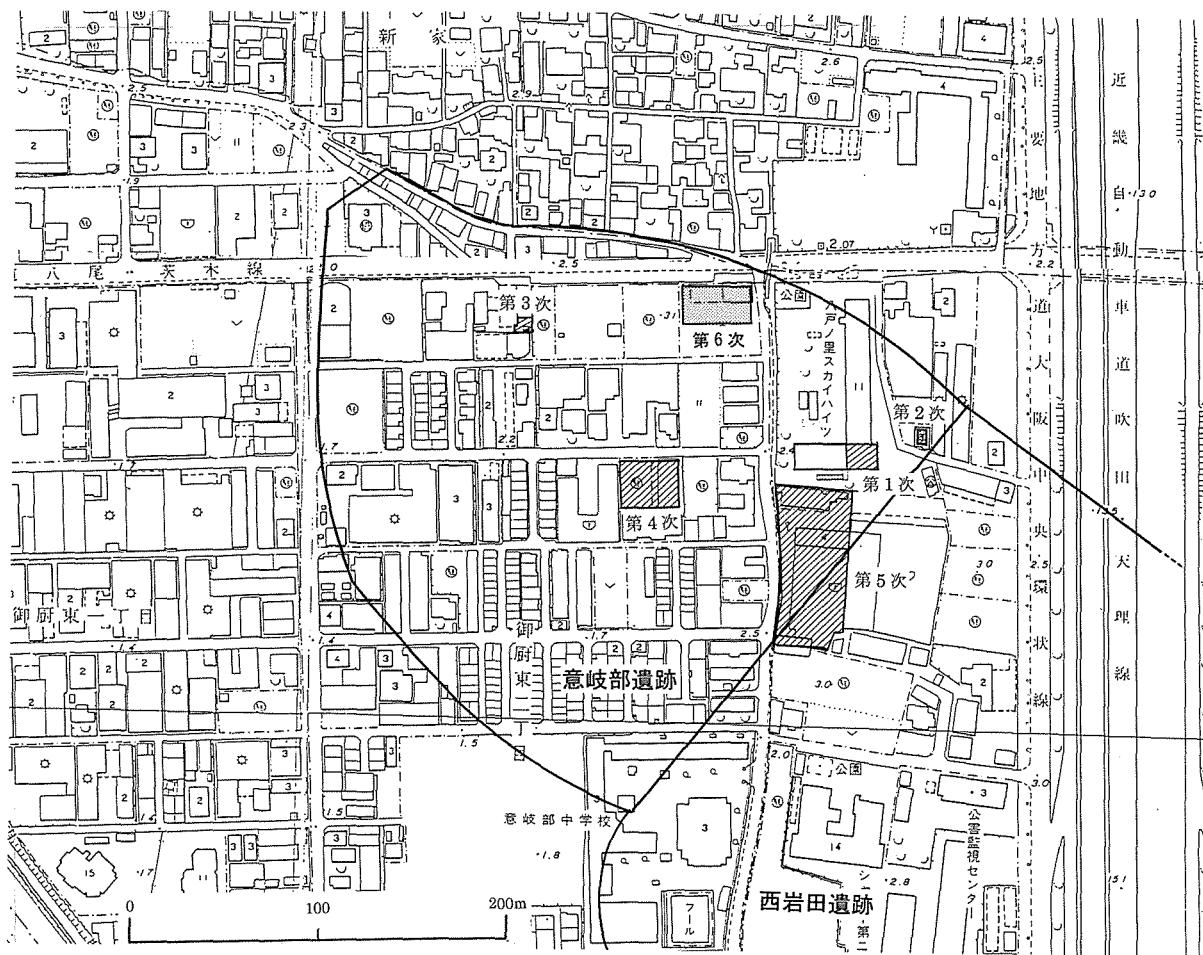
SK 2 出土 (36') 弥生包含層出土 (37'・40') 第3層出土 (38'・39'・41') SK1出土 (42') 第4層出土 (43')

## 第5章 意岐部遺跡第6次発掘調査

### 1) はじめに

今回調査した箇所は、東大阪市御厨東2丁目716-1・716-5番地にあたり、意岐部遺跡の範囲内では北端に位置する。調査地は現況で標高T.P.約+2.5mに立地する。因みに、調査地の東側道路は東大阪市発足前の旧布施市と旧河内市の境界にあたり、旧布施市の最東端に位置することになる。

平成13年5月、当該地において賃貸用共同住宅を建設する予定の個人から、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。東大阪市教育委員会では、工事実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断し、確認調査が必要な旨、届出者に通知した。確認調査は平成13年6月に実施した。調査の結果、設定した試掘トレンチ2箇所全てに古墳～奈良時代の遺物包含層が認められた。とくに西側のトレンチからは古墳時代中～後期の遺物が中量出土し、そのベース面となる灰色粗粒砂層が東へ傾斜することが確認された。この傾斜は自然の地形とは逆方向であり、ベース面上面での遺構の存在が予想された。このため、届出者と東大阪市教育委員会とは協議を重ね、共同住宅の基礎杭打設箇所191m<sup>2</sup>について事前の発掘調査を実施することで合意した。なお東端の箇所については機械を併用した調査を行った。調査は国庫補助事業として東大阪市教育委員会文化財課が担当し、平成13年7月23日から9月20日まで実施した。調査箇所の位置から、意岐部遺跡の北部域での古墳時代集落の様相把握が調査の目的となつた。また、旧の暗峠奈良街道に近接するため、原初的な街道の形成時期の追求もあわせて期待されるところとなつた。



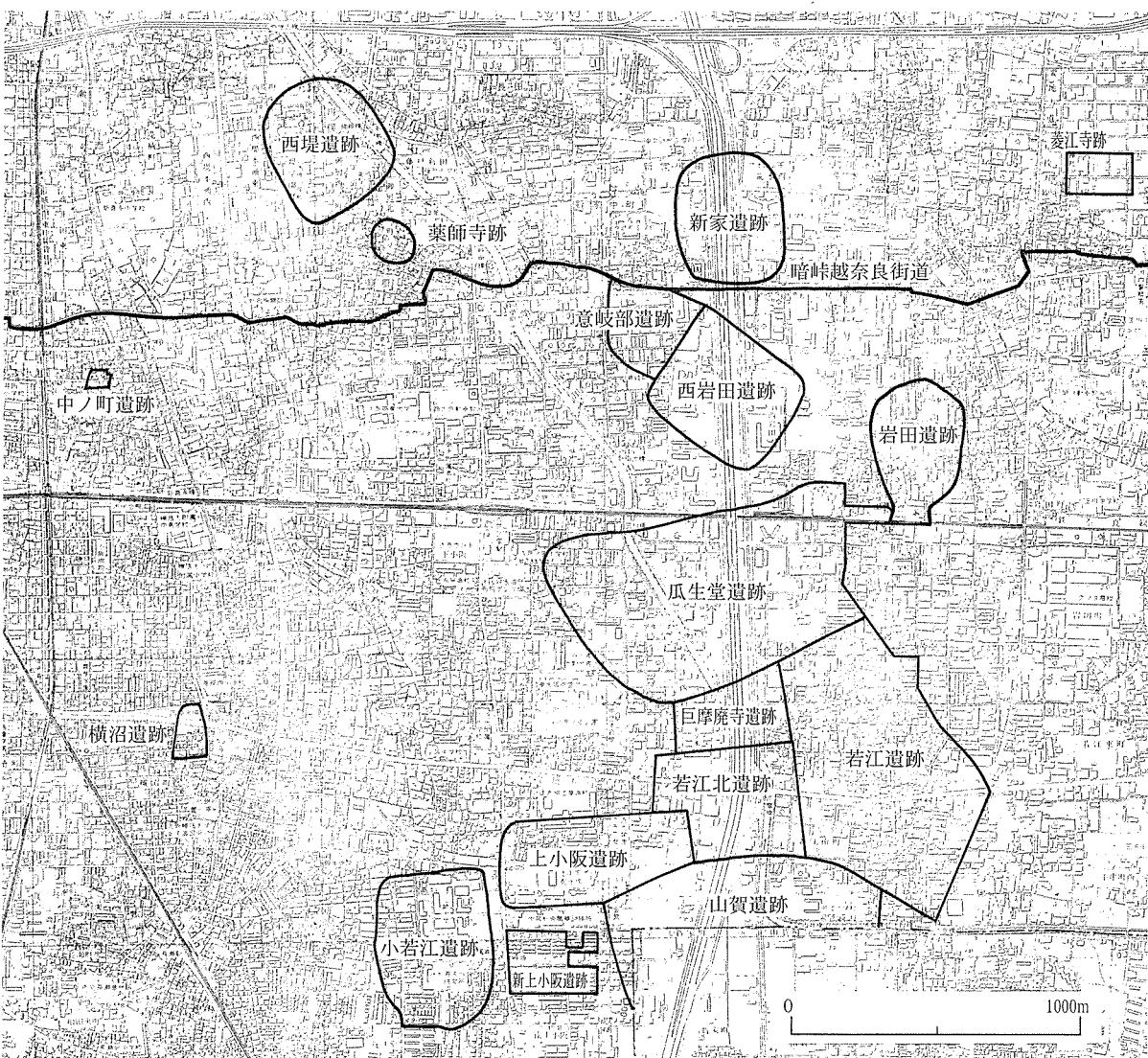
第1図 意岐部遺跡の範囲と調査地点位置図

## 2) 意岐部遺跡の位置と環境

意岐部遺跡は、東大阪市御厨・御厨東2丁目・西岩田3丁目にわたる、古墳時代から江戸時代にいたる集落遺跡である。遺跡の範囲は東西約120m、南北約140mに及ぶものと推定されている。意岐部遺跡は旧大和川が形成する微高地上に立地すると考えられ、標高T.P.2~3mに広がっている。

現在意岐部遺跡は河内平野の中央部に位置し、高層のビルや住宅が林立している。縄文時代の海進期には海中に埋没していた。河内潟から河内湖への変化の中で、海退と旧大和川諸川が運ぶ土砂の堆積作用により、現平野の南部から中部にかけて徐々に氾濫原や微高地が形成していったと考えられている。弥生時代には旧大和川支川の下流域低地の突端にあたり、入江に面した景観が復元される。時期は下るが、『万葉集』卷四に所載の、大伴旅人が「草香江の入江にあさる葦鶴のあなたづたづし友なしにして」と詠める歌が意岐部遺跡周辺の原初的な景観を示すものと考えられる。

意岐部遺跡の歴史的な環境について、周辺遺跡の動向を探ってみたい。北東にある新家遺跡では、縄文時代晚期の土器や殻を閉じたセタシジミ・ヤマトシジミが発見され、河内潟の古環境を知ることができる。意岐部遺跡周辺で、自然地形の変遷と耕作地の拡大及び集落の形成が有機的に関連付けられるのは弥生時代に入ってからである。東に接する西岩田遺跡や瓜生堂遺跡からは前期の遺構・遺物



第2図 意岐部遺跡と周辺の遺跡

が発見されている。山賀遺跡では盛土状遺構から多量の前期土器が出土している。中期になると瓜生堂遺跡が河内湖南岸の拠点集落となる。瓜生堂遺跡はマウンドが遺存する方形周溝墓で著名であったが、該期の居住域とその様相については不明な点があった。近年、遺跡の北部で弥生IV期前半に建て替えを行なった掘立柱建物が多数発見され注目される。後期には引き続き瓜生堂遺跡で集落が営まれるとともに、西岩田・巨摩廃寺・若江北・上小阪など瓜生堂遺跡の周辺に集落が拡散する傾向が窺われる。古墳時代には、東隣の西岩田遺跡で庄内～布留式土器とそれに伴う竪穴住居が検出されている。意岐部遺跡の西北1.3kmにある西堤遺跡では布留式期の集落が発見され、この頃には意岐部－西堤を繋ぐラインが低湿地から集落を營造しうる微高地へと変化していたことが窺われる。薬師寺跡は御厨天神社の故地である。御厨天神社は延喜式内社の意岐部神社の論社となっており、近代の意岐部村もこの名に負っている。以上、微高地上には弥生時代以降の遺跡・史跡が点在している。

### 3) 意岐部遺跡の調査(第1図・第1表)

意岐部遺跡は昭和15年(1940)、道路建設に伴う地上げ作業の際に遺物が出土し遺跡の発見となった。遺物には古墳時代中～後期の土師器・須恵器、奈良～平安時代の土師器・須恵器・石製模造品がみられる。以降、意岐部遺跡の調査は今回で6次を数える。ここで既往の調査成果について第6次調査地を中心にまとめておきたい。

第1次調査 第6次調査地から南東へ100mの地点。地表下1mで遺構面を確認。幅10～30cm、深さ5～30cmの溝が直交して約30条、南北と東西に延びていた。一辺40cmの方形ピットも3個検出。これらは出土土器から古墳時代後期(6世紀後半ごろ)の遺構と推定されている。なお、この調査に先立つ試掘調査で第6次調査地から東60mの地点にトレンチが設けられており、そこでは中世期以降の溝状遺構を検出したとされる。この点については後述する。未報告。

第2次調査 第6次調査地から南東へ120mの地点。試掘調査。二次堆積の土師器・須恵器・瓦器小片が少量出土したにとどまった。

第3次調査 第6次調査地から西へ80mの地点。4期の遺構面を確認。第1遺構面では近代以降の落ち込みとピットを検出した。第2遺構面では江戸時代後期の溝を検出。第3遺構面は地表下1mで鎌倉時代ごろの土坑8基・ピット5個を検出した。第4遺構面は地表下1.1～1.2mで古墳時代後期の溝3条・土坑1基・落ち込み1カ所・ピット7個を検出した。また下層で庄内～布留式土器が多量に出土した。これらは間層が介在して2層から一括出土したもので型式変遷をみる上で貴重である。

第4次調査 第6次調査地から南へ80mの地点。溝状トレンチ2本と一辺13mの正方形トレンチに分かれて調査。溝状トレンチでは中世期・平安時代・古墳時代ごろの3時期の遺構を検出。正方形トレンチでは4期の遺構面を確認。第1～第2遺構面では平安～中世期の溝1条・土坑5基・ピット7個を検出。第3遺構面では平安時代の溝9条・土坑16基・ピット15個を検出した。第4遺構面は古墳時代の土坑16基・ピット9個・溝3条を検出した。この遺構面では丁寧な整地が施されていたとされる。また遺構の密集度から古墳時代集落の中心が北東方向へ延びることを推定されている。

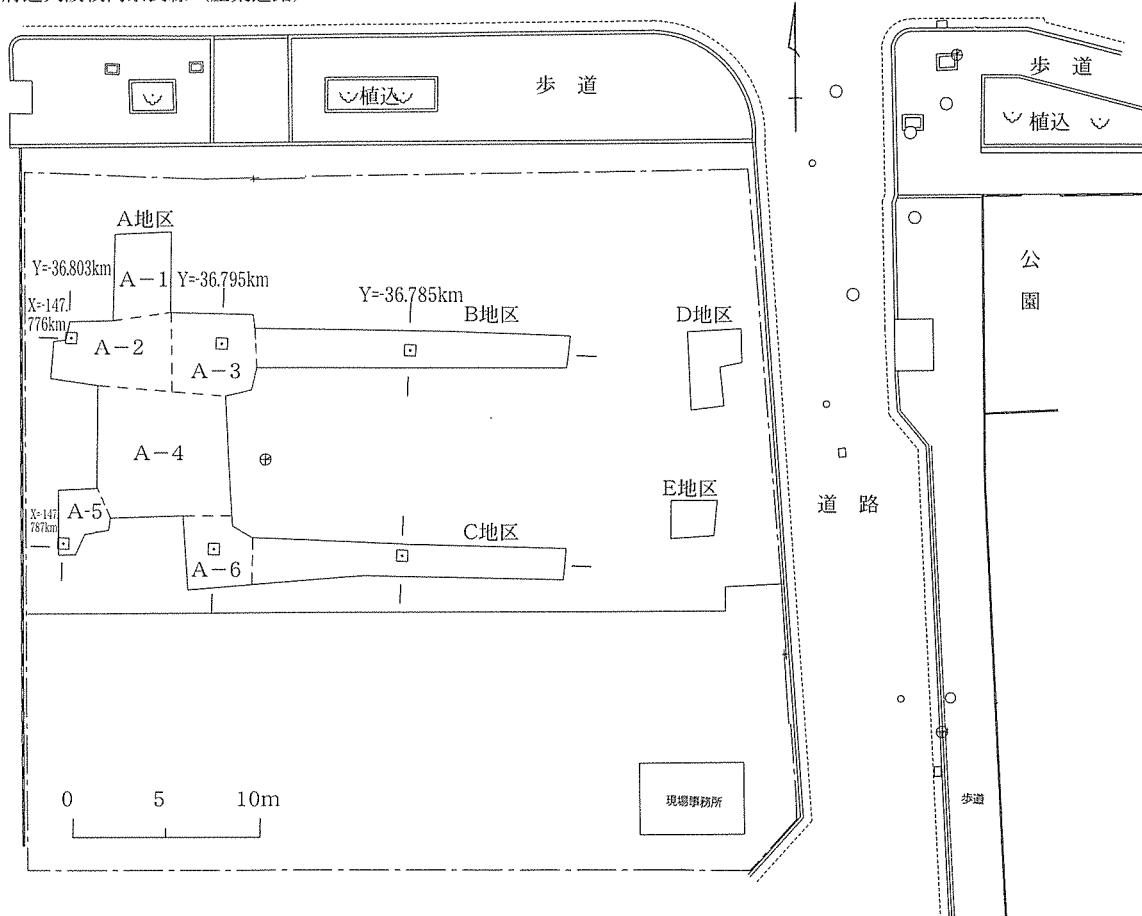
第5次調査 第6次調査地から南へ120mの地点。調査区の南東側は西岩田遺跡に包摂される。中世期・平安時代・古墳時代中～後期・古墳時代前期の4時期の遺構が検出されているようである。とくに幅5mを超える畦畔遺構は奈良時代末期を遡る可能性があると指摘されている。未報告。

以上の既出の遺構面を総合すると、中世期以前において、①鎌倉時代を中心とした中世期、②一部奈良時代を含む平安時代、③古墳時代中～後期、の3時期に収斂できる。ただし、意岐部遺跡周辺は近世～近代まで連綿と水田・畑地として利用されており、遺構面の検出レベルからこの時期の攪乱が広範囲に行なわれていることが窺え、中世期以前の遺構面検出には種々困難を伴うことになった。

次数	調査原因	実施期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査地	調査主体	報告書
1次	共同住宅建設	1978.2.17～ 1978.3.12	200	西岩田3丁目111	東大阪市遺跡 保護調査会	
2次	国庫補助事業 (範囲確認調査)	1980.1.10～ 1980.1.11	試掘 2箇所	西岩田3丁目111・951	東大阪市教育委員会	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要1979年度』1980年3月
3次	ガソリンタンク 埋設工事	1988.4.15～ 1988.5.2	41	御厨東2丁目714-6	(財)東大阪市 文化財協会	『東大阪市文化財協会概報集 －1997年度』1998年3月
4次	賃貸共同住宅建設	1999.10.25 1999.12.9	250	御厨東2丁目681-4	東大阪市教育委員会	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成11年度－』 2000年3月
5次	店舗建設	2000.4.26～ 2000.5.31	664	西岩田3丁目113-1,113-2, 113-6,114-1～3,115～120, 125,956	(財)東大阪市 文化財協会	
6次	賃貸共同住宅建設	2001.7.23～ 2001.9.20	191	御厨東2丁目716-1,716-5	東大阪市教育委員会	本書

第1表 意岐部遺跡の調査一覧表

府道大阪枚岡奈良線（産業道路）



第3図 意岐部遺跡第6次調査トレンチ位置図

#### 4) 調査の概要

##### (1) 調査方法・調査トレンチと地区割(第3図)

発掘調査はまず現代の盛土層と旧耕土層を機械で除去しそれ以下を人力で掘削して進める方法を

とった。後述の池沼状遺構の最上層は近代以降の堆積によるところからその掘削には適宜機械を使用した。

調査トレンチは工事の基礎杭や地下施設が密集して全面が調査対象となった箇所をA地区、基礎杭の通りで溝状トレンチとなった箇所を北からB地区、C地区と仮称して調査を進めた。A地区とB地区、A地区とC地区は調査当初若干離れていたが、遺構面認識のための断面精査などで連続したほうが調査の能率が高まると判断し、調査依頼者の理解を得た上で接続した。A地区は基礎杭の位置関係から4箇所の張り出し部があるためこれを便宜的にA地区の地区割に援用した。したがってA地区をA-1からA-6に細分した。C地区・D地区は排土の仮置きの関係から、B地区・C地区の調査終了後に着手した。この両地区は機械を併用して調査した。前記のように今回の調査では各時期の遺構面認識と検出遺構の精細な記録が求められることから、国家座標系による基準杭の打設が必要となった。基準杭の打設業務は、有限会社西田測量設計に委託して実施した。

## (2) 層位と遺構面(第4図・第5図)

後述の池沼状遺構が調査地の中央に位置しているため、その東側と西側では土層の堆積物や堆積状況が一変していた。今回の調査の層位は調査終了後、A～C地区の各土層に含まれる遺物の年代観から総合的に勘案して得られたものである。D地区・E地区は別記としA～C地区の層序を以下に記す。

第1層 現代の盛土層。調査地は直前まで駐車場として利用されておりその時点での盛土と、府道大阪枚岡奈良線築造工事での地上げ土に分けられる。

第2層 近代～現代の旧耕作土である。細粒砂混じりの粘土を基本とする。3層に区分される。第2B層は調査地全域に広がる。一部が池沼状遺構(遺構面I)の最上部の堆積土となっている。

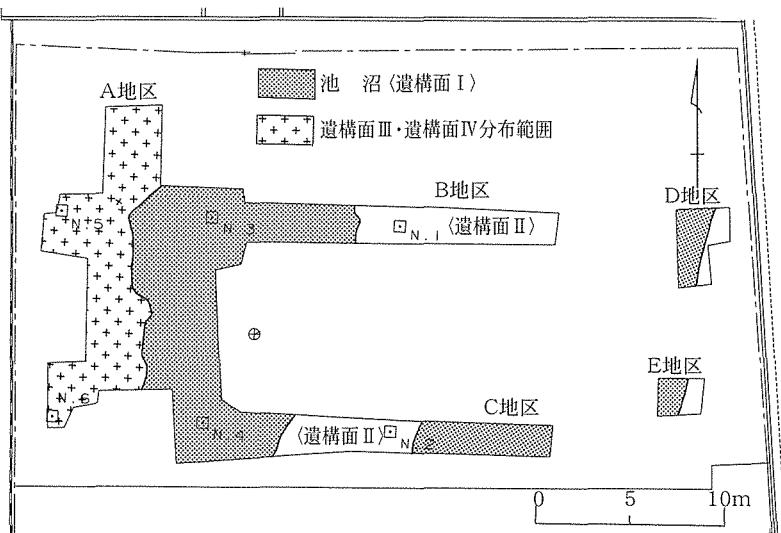
第3層 黄褐色の粗粒砂を基軸にする層。2層に区分される。B地区・C地区では第3B層上面が遺構面を形成する(遺構面II)。図示不可能な小片であるが、第3B層には古墳～平安時代の遺物に混じり鎌倉時代の瓦器碗片が出土している。したがって堆積の時期は中世期ごろに推定できる。また地沼状遺構上層の堆積土を構成する土層である。

第4層 青黒色～暗オリーブ色の中粒砂～粗粒砂。2層に区分。第4A層は池沼状遺構の下層堆積土を構成。第4B層はB～C地区のベース層である。出土遺物は古墳～平安時代に属するが、A地区の様相から堆積時期は平安時代をかなり下るものと考えている。以上の第3層・第4層はB～C地区のみで認められたものである。

第5層 灰色系のシルト質土である。古墳時代中～後期から奈良・平安時代にかけての遺物包含層。A地区の西側、第2層の直下に広がる。遺存の良好な箇所で層厚約15cm。

第6層 黄褐色系のシルト質土である。古墳時代中～後期の遺物包含層。上面は奈良～平安時代の遺構面を形成する(遺構面III)。3層に区分される。ただし第6C層は遺物の出土が稀薄であった。遺存の良好な箇所で層厚約30cm。

第7層 黄褐色系のシルト～シルト質粘土。今回の調査の

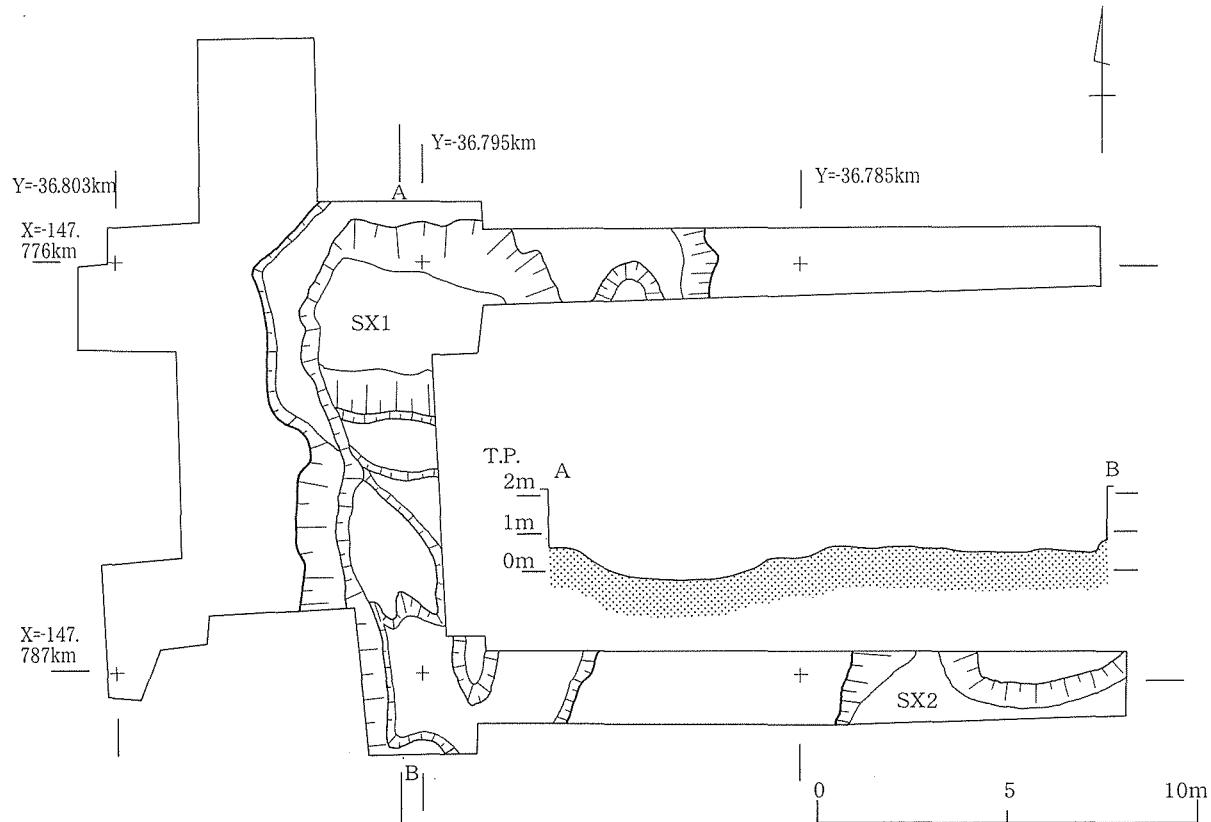


第4図 池沼状遺構・遺構面の概略図

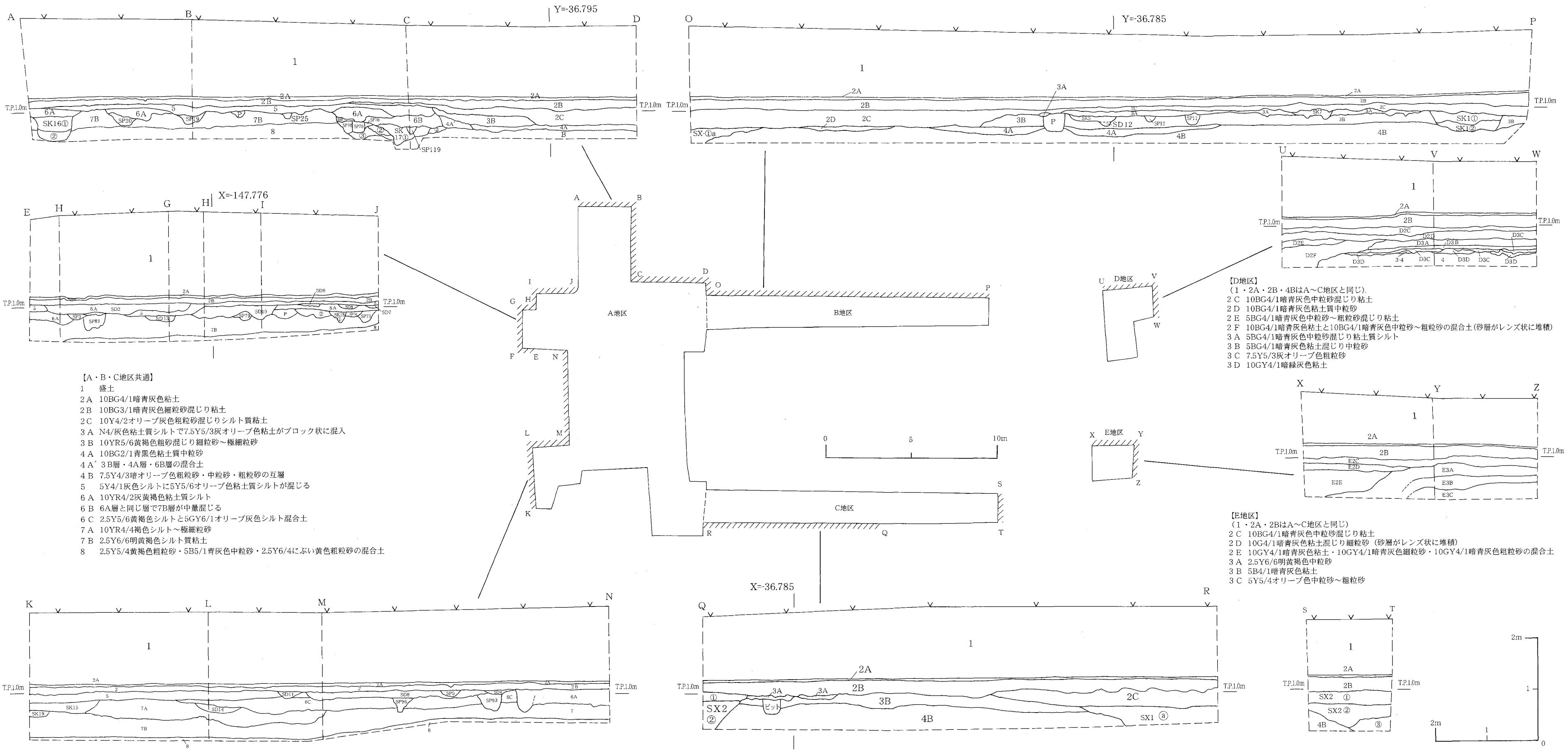
ベース層である。上面は古墳時代中～後期の遺構面を形成する(遺構面IV)。2層に区分される。A地区南西端(A-5区)では南側トレンチ外へ傾斜し凹地に第7A層が堆積していた。

第8層 黄色系の粗粒砂。A地区北端(A-1区)では層厚80cm以上。湧水が著しい。A地区壁面際の確認掘りトレンチで極微量の庄内式土器片が出土した。以上の第5層～第8層はA地区西側でのみ確認した土層である。

今回の調査で確認した遺構面について再度確認しておきたい。先に見たように各地区によって堆積した土層が異なり、このために時期の異なる遺構面が各所に分散している。遺構面ⅠはA・B・C地区、第2層下部で検出した。遺構は池沼状遺構(SX1・SX2)である。遺構面ⅠはB地区・C地区の第3B層上面で検出した。遺構にはピット・溝・土坑がみられる。遺構面ⅡはA地区、第6層上面で検出した。遺構には掘立柱建物・ピット・溝・土坑がある。遺構面ⅢはA地区、第7層上面で検出した。遺構には掘立柱建物・ピット・溝・土坑がある。ここで簡便な調査を行なったD地区・E地区の層位と成果について触れておく。調査は機械を併用する形で行なった。地表下2.3mまで掘り下げたが湧水が激しく危険なため以下の調査は中止した。層位はA～C地区に準拠し関連をもたせるようにした。その結果、D地区では第2層が6層に、第3層が4層に細分できた。E地区では第2層が5層に、第3層が3層に区分できた。いずれも第2層の下部(第2D層～第2F層)は東から西へ傾斜しており、C地区で検出した池沼状遺構SX2の一部を構成するものと考えられる。周辺のベース層となる第4B層はD地区で確認された。第2層各層の出土遺物はいずれも近世期～近代期の遺物に摩滅した古墳時代の土器が認められる程度であった。なお、D地区北西隅の第2F層の最下部で奈良時代に属すると考えられる土馬が後世の混入品とともに出土している(第13図7)。



第5図 池沼状遺構SX1・SX2実測図

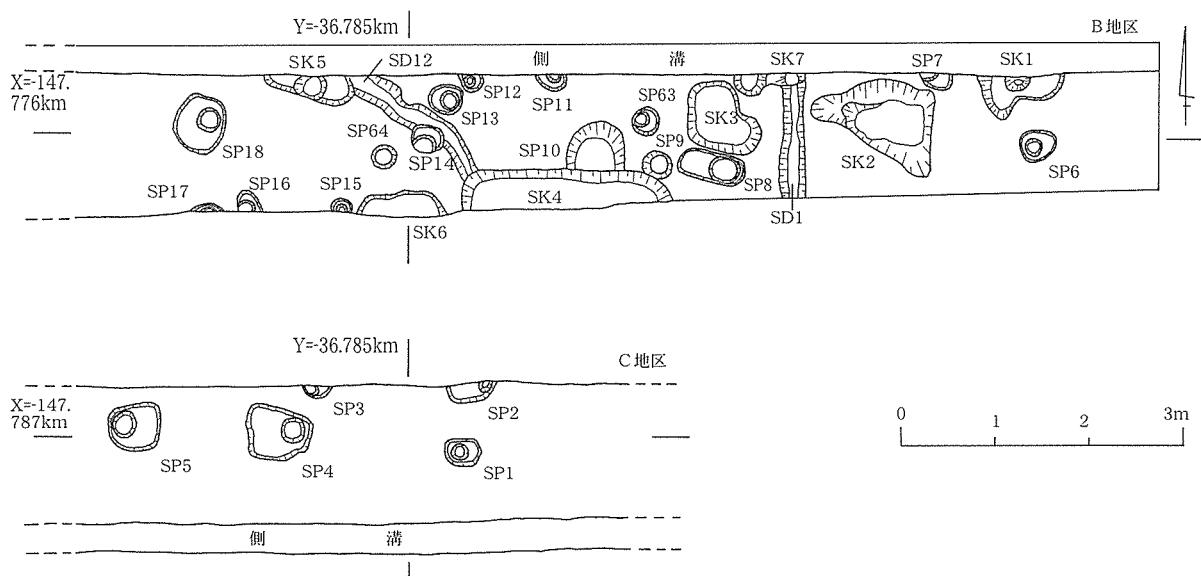


第6図 意岐部6次各地区土層断面図

### 3) 検出した遺構

**遺構面 I(第4図・第5図)** 地沼状遺構を2カ所検出した。SX1は調査地中央を占地。平面形は長楕円形を呈するものと推定される。東西方向は7.8~12.3m、南北方向は現況で14.7mを測る。縦断面で各々地沼の2段目の肩が認められ南北方向は約17m程度の規模を有したと推定される。A地区での最大深は1.29mである。南から徐々に傾斜し北側で最深部をもつ。埋土は大きく3層に区分される。上層は第2C層の下部である。中層はマンガン粒を含む7.5YR5/8明褐色粘質シルトと中~粗粒砂の互層である。下層は5BG4/1暗青灰色粘土を主体に7.5Y7/2灰白色中粒砂をレンズ状に含む層である。下層が地沼の機能層で中層段階に一時耕地となり凹地状のところに第2C層で整地されたと考えられる。SX1の西側は遺構面III・IVを破壊しており、出土遺物は古墳~平安時代に属するものが大半を占める。中~下層からは第15図31・32・39の中世期遺物が少量出土した。SX1は中世~近世期に機能し、上層の明治期段階で埋没したものである。SX2は調査地東側を占地。B地区の東側では地沼が認められず、北側が尖る楕円形を呈するものかと考えられる。C地区からE地区までの東西方向は約13.5m、C地区での最大深は0.96mを測る。C地区では底面のレベル差から東から西へ、また北へ流下する。また断面は緩やかなU字形で一部溝状を呈する。溝状部はC地区東側からA地区北側へ通じSX1と一体化した形となる可能性がある。埋土はSX1と同様の土質で3層に区分された。近世期の陶器片が少量出土した。機能・埋没の時期はSX1と同様である。

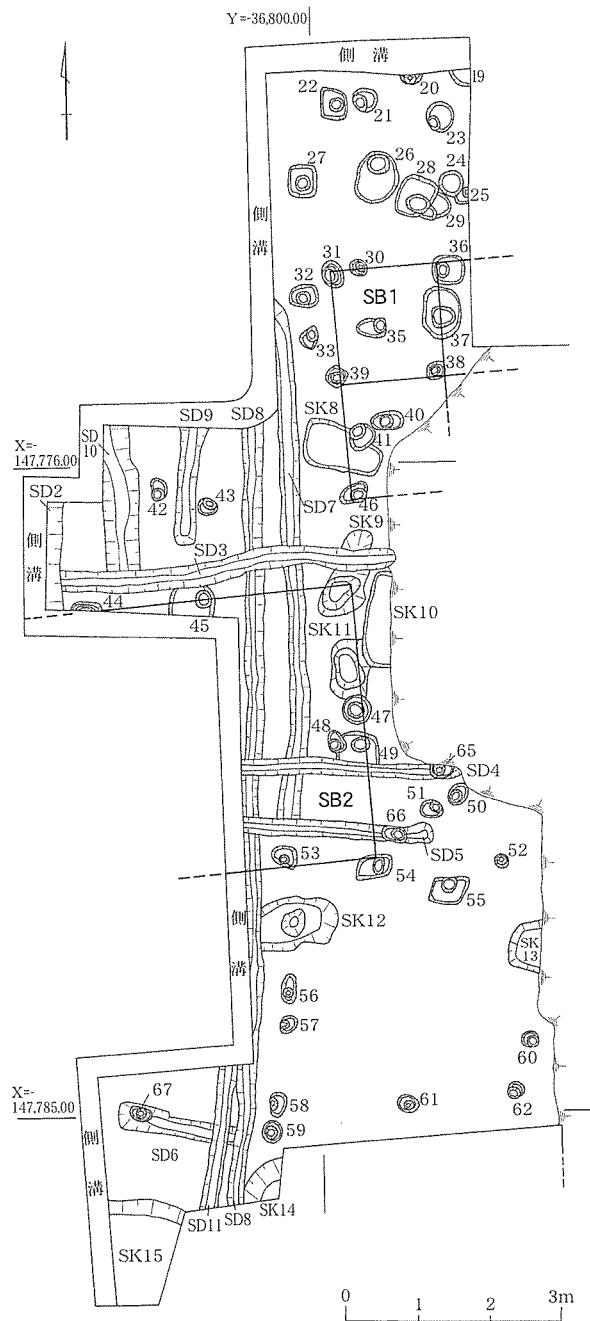
**遺構面 II(第7図・第2表)** B地区でピット15個・土坑6基・溝2条、C地区でピット5個を検出した。前記したようにこれらの遺構は中世期以降の所産と考えられる。主要なもののみ説明する。SK1(断面第6図)は不定円形である。現況で長径0.9m、短径0.45m、深さ36cmを測る。埋土は2層に分かれ、①層は第3A層と第3B層の混合土、②層は第3B層と第4B層との混合土であった。混入品の須恵器坏蓋(第13図25・26)が出土した。SK2は隅丸三角形を呈する。長辺1.28m、短辺0.92m、深さ34cmを測る。埋土は第3B層を主体としN4/灰色シルト質粘土が混じる層である。SK3は不定円形。径0.75m、深さ16cm。埋土は第3B層に中粒砂を多く含む層である。SK4は方形と推定され、現況で最大長2.2mを測る。深さは0.6mまで確認した。近世期の陶器片が出土し、該期の井戸と考えられる。SD1は幅20~28cmの小溝で深さ8cm。底面のレベル差はほぼ均等であった。SD12は幅20~30cmで深さ5cm。南から屈曲して北へ流下する。埋土はSD1・SD12ともSK2と同じである。



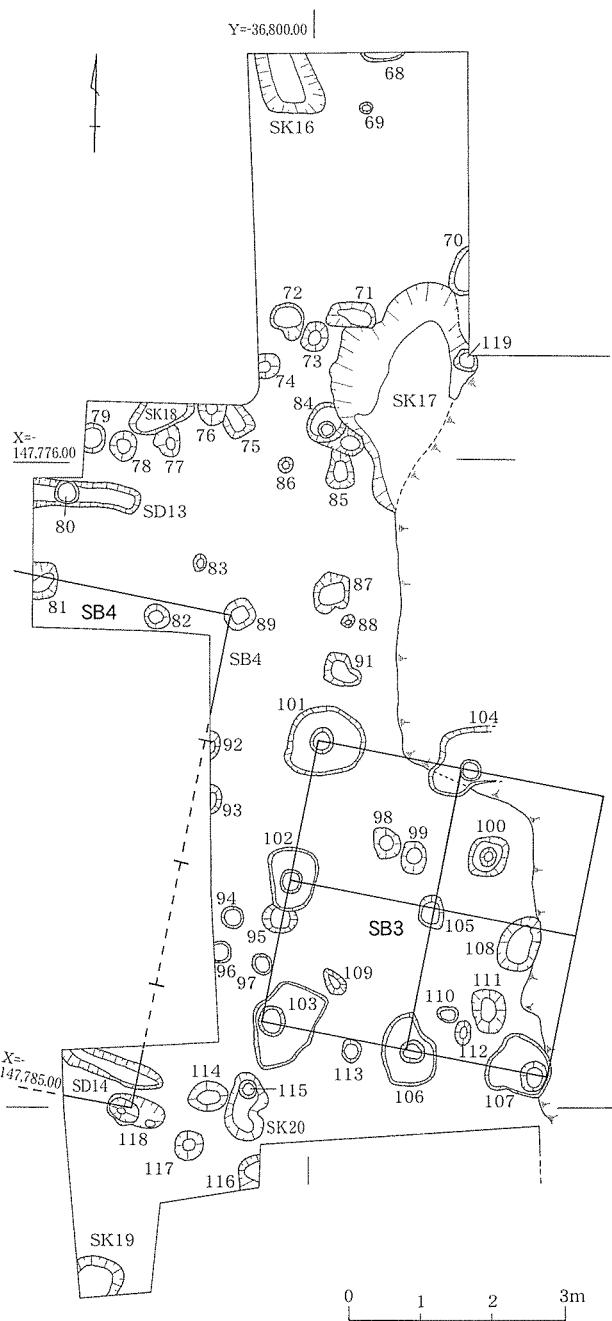
第7図 B地区・C地区 遺構面II検出遺構平面図

遺構面III(第8図・第10図・第11図・第2表) A地区の第6層上面で、掘立柱建物2棟・ピット46個・土坑8基・溝10条を検出した。古墳時代の混入品が著しいが出土遺物から、これらの遺構は奈良～平安時代に属するものと考えている。なお、土坑とピットの区別は便宜的で土坑の番号を付けたもの中にピット状遺構がかなり含まれている。ここでは現場で使用した名称を踏襲した。

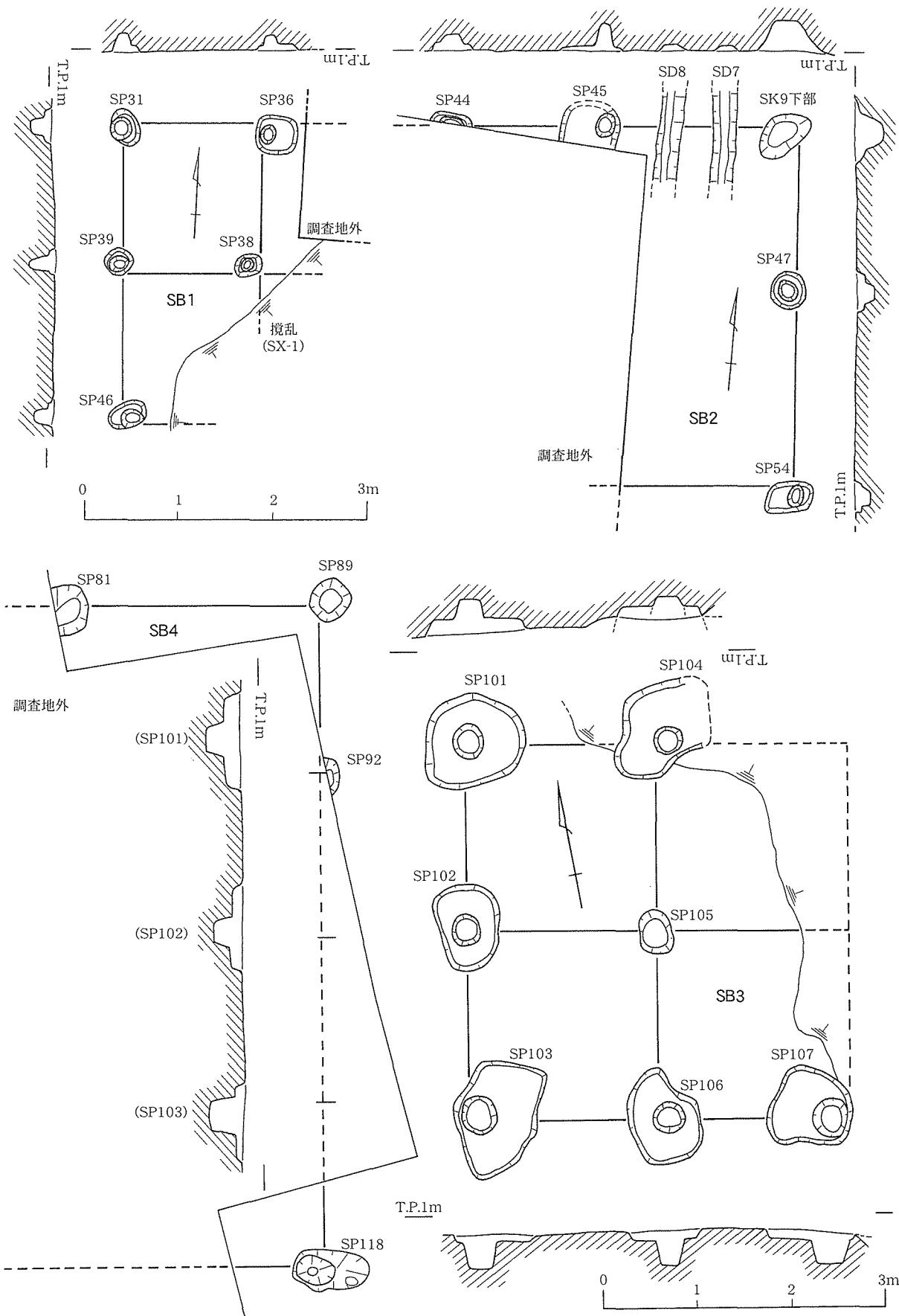
① 掘立柱建物(第10図) 今回建物の平面プランの復元にあたっては、ピットの埋土と出土遺物を優先した。まずSB1が復元でき、その主軸方向と同一の建物がもう1棟復元できた。SB1はSP31・SP39・SP46・SP36・SP38で構成される。総柱建物。倉庫と考えられる。南北方向は真北に対して5° 西へ



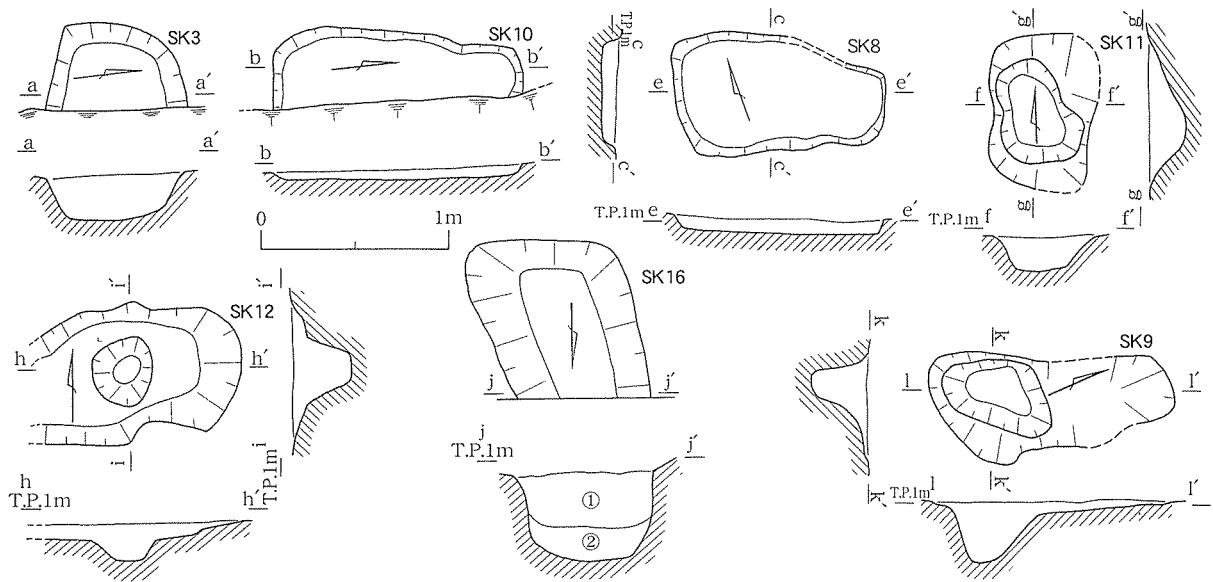
第8図 A地区遺構面III検出遺構平面図



第9図 A地区遺構面IV検出遺構平面図



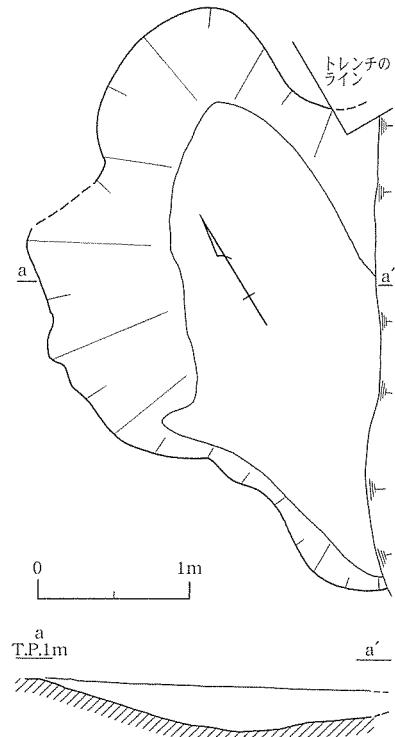
第10図 掘立柱建物SB1～SB4実測図



第11図 SK8～SK13・SK16実測図

振る。東西2間×南北2間の建物と推定される。東西の柱間は1.5m、南北の柱間は1.6mを測る。床面積は9.6m<sup>2</sup>となる。出土遺物はSP31から須恵器壺蓋・土師器壺(第14図28・29)がみられた。SB2はSK9下部・SP45・SP44・SP47・SP54で構成される。SB1の1.2m南に位置する。南北の主軸方向はSB1と同じ。現況で東西2間×南北2間分が復元できる。柱通りから東西方向へはもう1間延長する可能性がある。東西の柱間は1.8m、南北の柱間は1.9m。床面積は13.68m<sup>2</sup>以上。なお、今回は復元できなかったがピットの位置関係からSK12-SK13のライン以南にもう1棟の掘立柱建物の存在が予想される。またSB1の北側では長径が70cm前後の規模をもつ大型のピットが密在し、この面の掘立柱建物を中心とした遺構が北西方向に広がることがわかる。

②土坑(第11図) 密集して検出されている。SK8はA-1～A-2で検出。方形を呈する。長辺1.12m、短辺0.67m、深さ8cmを測る。埋土は第6層・5Y4/1灰色シルト・10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂混じりシルトの混合土。SK9はA-2で検出。長楕円形を呈する。長径1.28m、短径0.59m、深さ30cmを測る。下部はピット状の落ち込みをもつ。埋土はSK8と同じ。土師器壺(第13図23)が出土した。SK10は西半のみA-4で検出。方形を呈する。長辺は1.32m、短辺は現況で0.42m、深さは7cm。埋土は第6層主体で2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトがブロック状に混入する層である。土師器壺(第13図21)が出土した。SK11はSK10に切られる土坑である。繖形状の楕円形を呈する。長径0.83m、短径0.52m、深さ20cmを測る。中央でピット状に凹む。埋土は2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトを主体に第6層が混入する層である。土師器・須恵器の小片が出土した。SK12はA-4の南側で検出。西側をSD8に切られる。繖形状の楕円形を呈する。長径は現況で1.12m、短径は0.76m、深さ20cmを測る。中央で凹む。埋土はSK10と同じ。土師器壺(第13図24)が出土した。SK13はA-4の東側で検出した。円形を呈すると思われる。現況で長径0.75m、短径0.47m、深さ25cmを測る。埋



第12図 SK17実測図

土はN4/灰色粗粒砂混じり粘土質シルト。土師器・須恵器の小片が出土した。SK14・SK15はともにA-5で検出。SK15は浅い落ち込みを呈する。埋土はSK14～15とも第6層を主体に10YR4/3にぶい黄褐色シルトを少量含む層である。SK15では混入品の古墳時代土器が少量出土した。

③溝(第8図) 東西方向と南北方向に直行する溝群を検出した。このうちSB1はSD3とSD7に区画された内部に配置されており、建物の区画溝の性格を持つものが含まれよう。概ね幅25～30cm、深さ5cm程度の規模である。南北溝は北から南へ、東西溝は西から東へ流下する。切りあい関係から南北溝は東西溝より古い段階で掘られている。埋土も溝の方向でまとまりを持つ。ただしSD2は切り合いから最も新しいもので埋土も他の溝とは大きく異なり、平安時代の末期に下る可能性がある。

遺構面IV(第9～12図) A地区の第7層上面で、掘立柱建物2棟・ピット51個・土坑5基・溝2条を検出した。これらの遺構には一部上層遺構からの混入品を除いて、古墳時代中～後期の遺物が含まれることから、概ね該期の所産と考えている。ただし西南隅のA-5区の遺構については、ベース層となる第7B層が南へ傾斜し、その上部に堆積する第7A層を遺構面とするため、奈良～平安時代に下るもののが認められる。

①掘立柱建物とピット群(第9図・第10図) SB3はSP101・SP102・SP103・SP104・SP105・SP106・SP107で構成される。総柱建物。南北方向を主軸として10° 東へ振る。東西2間×南北2間の建物。東西、南北とも柱間は2mを測る。床面積は16m<sup>2</sup>。SP105を除き掘形は大型で長軸90～127cmを測る。古墳時代集落の主要建物である。各ピットから古墳時代中期の土師器・須恵器・製塩土器が出土している。SB4はSB3と同一の主軸方向で推定復元したものである。SB3の西1.55mに位置する。SP81・SP89・SP92・SP118で構成すると考えられる。SP89～SP118間は7mを測り、SP92を含めて柱間1.75mとして南北4間分が復元可能である。推定であるが、SP89～SP118間の中央のピットはSP102～SP105の柱通りの延長線上に位置することになる。SP118からは古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した。SB3の内部にあるSP100には柱根が遺存していた(図版5)。なお、これら建物の北方、SK17周辺には切り合うピットが密集している。建て替えを伴った1棟以上の建物の存在が推定される。

②土坑・溝(第11図・第12図) SK16はA-1の北端に位置する。方形を呈する。長辺は現況で0.84m、短辺は0.4m、深さ46cmを測る。埋土は2層に分層できた。①層は2.5Y4/2暗灰黄色粘土を主体に第7層がブロック状に混入する層である。炭化物を含む。②層は第8層を主体に①層をブロック状に含む層である。SK17はA-1～A-2で検出した。不定円形を呈する。現況で長径3.2m、短径1.9m、深さ24cmを測る。埋土は第7層・第8層・N4/灰色粘土の混合土である。土坑の西南隅では古墳時代の土師器・須恵器が密集して出土した。製塩土器のブロック、砥石もみられる(図版6)。今回の調査では最も一括性の高い遺物群である(第13図)。土坑壁面の一部が竪穴状を呈することから、壁面際や底面などを精査したが、周溝や柱穴の痕跡は認められなかった。SK19はA-5区、遺構面IVの西南隅で検出した。円形を呈すると思われる。現況で径0.7m、深さ10cmを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色粘土である。溝はSD13・SD14の2条があるが、いずれも一部の検出にとどまった。溝状の土坑の可能性がある。

## 5) 出土遺物

今回の調査では、コンテナー25箱分の遺物が出土した。遺物の記述にあたっては、まず一括性の高いSK17からを行い、土坑(SK)、ピット(SP)、溝(SD)、池沼状遺構(SX)、各遺物包含層の順に説明を加えるものとする。遺構は遺構面別に概要を記している。それとの整合と理解に役立つよう、遺構名の後部に所属する遺構面を注記した。

第2表 意岐部遺跡第6次調査検出ピット一覧表(1)

遺構名	地区	遺構面	平面形態	柱掘形		柱痕跡	検出面 からさ く深さ	柱痕跡埋土	柱掘形埋土	出土遺物			備考
				長軸	短軸					奈良～平安期	古墳中期	時期不明	
SP1	C	II	楕円形	38	27	17	15	2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混じりシルト	第3B層を主体に10Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP2	C	II	楕円形	53+	19+	15+	17	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層を主体に10Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。	○(土師)			
SP3	C	II	円形	28+	13+	10+	13	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層を主体に10Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。	○(製塙)			
SP4	C	II	方形	68	53	25	25	2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混じりシルト	第3B層を主体に10Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。		○(製塙)	○(土師)	
SP5	C	II	方形	52	48	25	16	2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混じりシルト	第3B層を主体に10Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師・須恵)	
SP6	B	II	楕円形	37	33	18	13	2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混じり粘土。	第3B層を主体に2.5Y5/1黄灰色粘質シルトが混入。	○(須恵)	○(須恵)		
SP7	B	II	楕円形	34+	17+	17	22	10YR4/1褐色シルト。	第3B層を主体に2.5Y5/1黄灰色粘質シルトが混入。				
SP8	B	II	長楕円形	70	32	31	17	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。			○(土師・須恵)	
SP9	B	II	円形	28	—	18	13	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。			○(須恵)	
SP10	B	II	円形	60	52+	—	17	—	第3B層主体。N4/灰色シルト質粘土が混入。	○(土師・須恵・製塙)	○(須恵)		
SP11	B	II	円形	30+	16+	13	17	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP12	B	II	楕円形	22+	21+	12	12	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP13	B	II	楕円形	36	32	18	14	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP14	B	II	円形	28+	—	17+	11	N4/灰色シルト質粘土。(中粒砂含む)	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP15	B	II	円形	20	13+	10	11	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP16	B	II	楕円形	27+	23+	18	14	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP17	B	II	楕円形	33+	9+	21+	11	N4/灰色シルト質粘土。(中粒砂含む)	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。				
SP18	B	II	楕円形	59	51	22	21	10YR3/3暗褐色シルト質粘土。	第3B層、10YR3/3暗褐色シルト質粘土、2.5Y6/6明黄褐色粘質シルトの混合土。				
SP19	A	III	(不明)	28+	26+	—	5	—	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP20	A	III	楕円形	30+	13+	17	9	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP21	A	III	楕円形	35	30	20	11	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP22	A	III	方形	41	37	18	12	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	○(土師)		○(須恵)	
SP23	A	III	円形	39	—	19	6	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	○(須恵)		○(土師)	
SP24	A	III	円形	36	—	—	16	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP25	A	III	円形	23	19+	10	8	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。			○(土師)	
SP26	A	III	楕円形	73	57	27	46	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師・須恵)	○(土師・須恵・製塙)		
SP27	A	III	方形	45	39	22	12	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。		○(製塙)		
SP28	A	III	方形	58	51	30	14	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	○(土師)			
SP29	A	III	楕円形	41	25+	19	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			○(土師・須恵)	
SP30	A	III	小方形	25	15	17	11	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	○(土師)		○(須恵)	
SP31	A	III	楕円形	39	29	23	20	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	○(土師)		○(須恵)	
SP32	A	III	楕円形	41	32	20	13	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師)		○(須恵)	
SP33	A	III	楕円形	30	25	21	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師)	○(製塙)		
SP35	A	III	楕円形	43	26	18	30	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師・須恵)			
SP36	A	III	隅丸方形	45	41	21	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師・須恵)	○(土師・須恵)		
SP37	A	III	楕円形	70	53	35	33	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師・須恵・製塙)	○(土師・須恵・製塙)		
SP38	A	III	円形	25	—	15	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			○(土師)	
SP39	A	III	方形	27	27	19	26	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師)	○(須恵)		
SP40	A	III	楕円形	45	27	19	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	○(土師)	○(土師・製塙)		

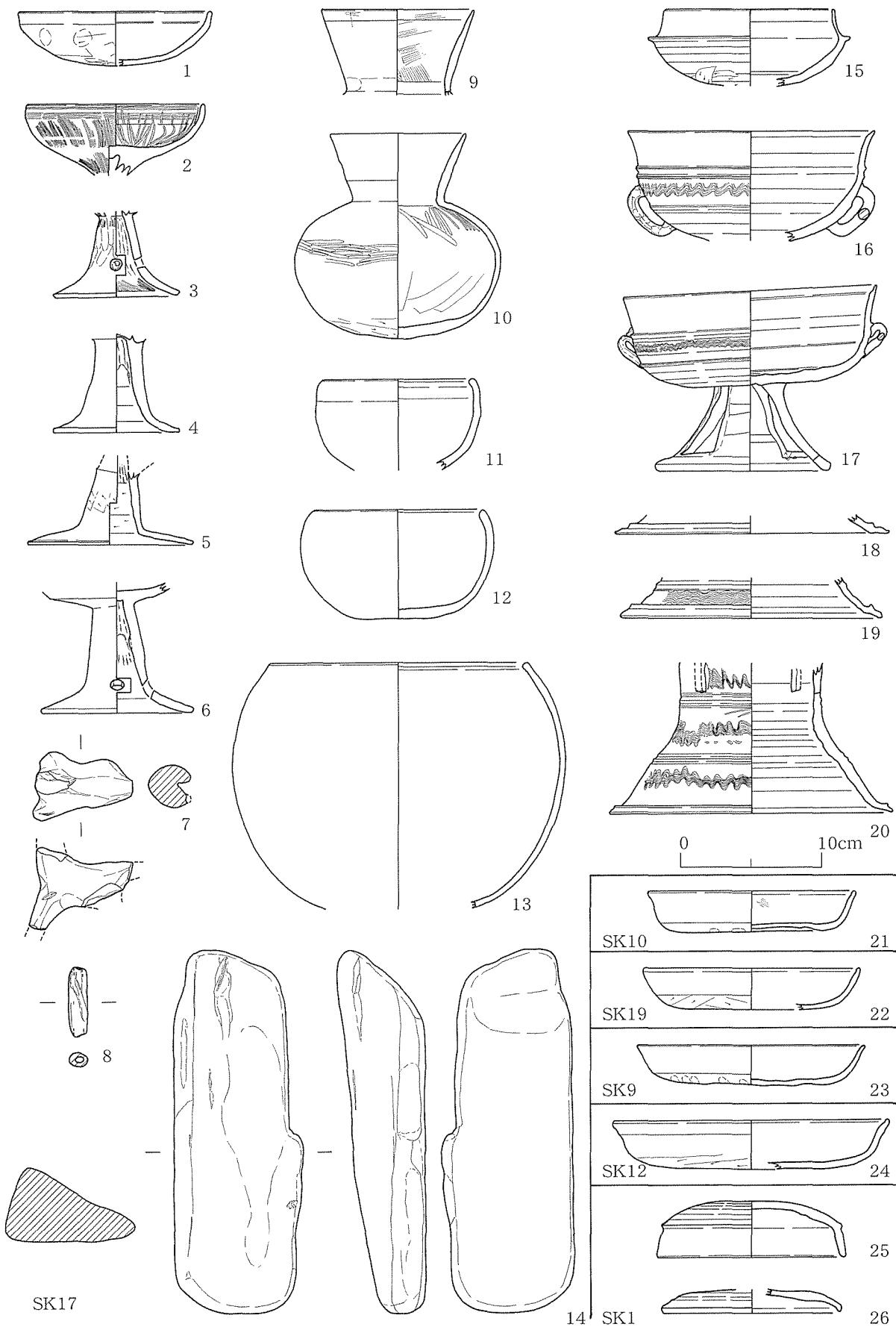
第2表 意岐部遺跡第6次調査検出ピット一覧表(2)

遺構名	地区	遺構面	平面形態	柱 摂 形		柱痕跡 長軸	柱痕跡 短軸	検出面 からの深さ	柱痕跡埋土	柱 摂 形 埋 土	出土 遺 物			備 考
				柱	摂						奈良～平安期	古墳中期	時期不明	
SP41	A	III	円形	39	33	25	13	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	O(土師)		O(須恵)		
SP42	A	III	楕円形	29	21	17	11	5Y4/1灰色細粒砂混じりシルト。	第6A層に5Y4/1灰色シルトがブロック状に混入。			O(土師・須恵)		
SP43	A	III	円形	28	24	20	10	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			O(土師・須恵)		
SP44	A	III	楕円形	44+	12+	27+	11	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			O(土師)		
SP45	A	III	円形	62	43+	24	28	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。(炭化物中量含む)	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	O(土師・須恵)				
SP46	A	III	楕円形	42	26	19	15	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。(炭化物中量含む)	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	O(土師)				
SP47	A	III	正円形	41	—	23	16	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。	O(土師)				
SP48	A	III	楕円形	32	23	16	13	7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土に2.5Y4/1黄灰色粘土を含む。	第6A層 主体に7.5YR4/2灰褐色粘土、2.5Y4/1黄灰色粘土の混合土。	O(土師)		O(須恵)		
SP49	A	III	隅丸方形	60	40+	25	19	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。	O(土師・須恵)	O(土師・須恵)			
SP50	A	III	楕円形	34	24	20	13	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。					
SP51	A	III	円形	30	25	15	9	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。		O(土師)			
SP52	A	III	円形	20	—	15	22	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。		O(土師・須恵)	O(土師)		
SP53	A	III	楕円形	32	27	15	10	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。					
SP54	A	III	方形	47	31	32	10	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			O(土師)		
SP55	A	III	方形	47	41	20	18	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。		O(土師・製塙)	O(土師)		
SP56	A	III	長楕円形	40	17	15	13	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。			O(土師)		
SP57	A	III	円形	23	21	13	36	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルト。	第6A層に2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混じりシルトがブロック状に混入。		O(須恵)	O(土師)		
SP58	A	III	楕円形	33	23	13	21	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。		O(土師・製塙)			
SP59	A	III	円形	28	—	17	19	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。	O(土師)				
SP60	A	III	円形	23	—	16	31	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。		O(土師・製塙)	O(土師)		
SP61	A	III	円形	27	23	13	12	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。					
SP62	A	III	円形	24	—	17	12	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。					
SP63	B	II	円形	27	—	17	14	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。					
SP64	B	II	円形	26	—	17	10	N4/灰色シルト質粘土。	第3B層主体。N4/灰色中粒砂～粗粒砂多く含む。					
SP65	A	III	楕円形	33	18+	15+	7	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。					
SP66	A	III	楕円形	33	22	17	21	2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。	第6A層に2.5Y4/1黄灰色粘質土がブロック状に混入。					
SP67	A	III	楕円形	32	20	14	20	N3/暗灰色粘土混じりシルト。	7.5YR4/3褐色細粒砂混じりシルトにN3/暗灰色シルトを含む。			O(土師)		
SP68	A	IV	楕円形	61+	13+	—	3	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			O(土師・須恵)		
SP69	A	IV	楕円形	20	14	—	5	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。					
SP70	A	IV	楕円形	71+	29+	—	9	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。		O(土師・須恵)			
SP71	A	IV	長方形	69	34	—	35	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。					
SP72	A	IV	不整円形	53	46	—	27	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	O(土師・須恵)	O(土師・須恵)		SD7 直下	
SP73	A	IV	円形	41	35	—	11	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			O(須恵)		
SP74	A	IV	円形	33	29+	—	8	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。		O(土師・須恵)			
SP75	A	IV	隅丸方形	48+	39	—	11	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。					
SP76	A	IV	円形	30	29+	—	15	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			O(土師)		
SP77	A	IV	円形	40+	37	—	15	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	O(土師)	O(土師・製塙)		SD9 直下	
SP78	A	IV	円形	42	37	—	28	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。		O(土師)			
SP79	A	IV	円形	41	28+	—	12	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	O(土師)	O(土師・製塙)		側溝内	

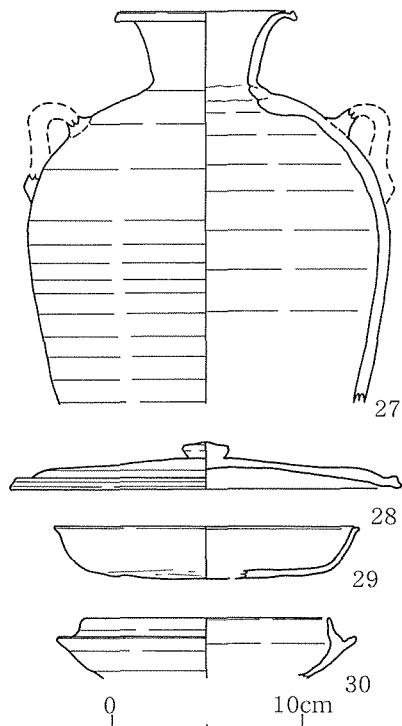
第2表 意岐部遺跡第6次調査検出ピット一覧表(3)

遺構名	地区	遺構面	平面形態	柱掘形			柱痕跡 検出面 からの深さ	柱痕跡埋土	柱掘形埋土	出土遺物			備考
				長軸	短軸	径				奈良～平安期	古墳中期	時期不明	
SP80	A	IV	正円形	34	—	—	11	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP81	A	IV	隅丸方形	51	34	—	35	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。		○(須恵)	
SP82	A	IV	正円形	34	—	—	17	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。		○(土師)	
SP83	A	IV	楕円形	24	17	—	6	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP84	A	IV	楕円形	85+	56+	25	41	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。	○(土師・須恵・製塙)		
SP85	A	IV	楕円形	56+	39	—	16	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP86	A	IV	円形	22	—	—	9	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP87	A	IV	不整円形	58	49	—	27	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・須恵)		SK9直下
SP88	A	IV	円形	20	17	—	5	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP89	A	IV	円形	43	—	—	18	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。		○(製塙) ○(土師)	
SP91	A	IV	不整円形	52	44	—	17	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。	○(土師)		SK11直下
SP92	A	IV	楕円形	39+	21	—	12	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			
SP93	A	IV	楕円形	42+	16+	—	19	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP94	A	IV	正円形	31	—	—	10	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			○(土師)
SP95	A	IV	円形	47	—	—	22	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師)
SP96	A	IV	円形	31	24+	—	8	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。	○(須恵)		
SP97	A	IV	円形	32	27	—	9	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP98	A	IV	不整円形	45	38	—	17	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・製塙)		
SP99	A	IV	不整円形	47	35	—	14	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			○(土師)
SP100	A	IV	隅丸方形	55	53	25	40	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土。	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師・須恵)	
SP101	A	IV	円形	107	—	34	34	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細粒砂。	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂主体に第7B層が混入。	○(土師・須恵・製塙)			
SP102	A	IV	長楕円形	90	68	32	27	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細粒砂。	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂主体に第7B層が混入。			○(須恵)	
SP103	A	IV	不整方形	127	90	41	38	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細粒砂。	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂主体に第7B層が混入。	○(土師・須恵・製塙)			
SP104	A	IV	不整円形	93+	86	30	32	第8層主体に2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトを含む。	第8層主体に2.5Y4/2暗灰黄色粘土がブロック状に混入。	○(須恵)	○(土師)		
SP105	A	IV	楕円形	46	34	—	12	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(須恵)	○(土師)	
SP106	A	IV	不整円形	101	75	34	38	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細粒砂。	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂主体に第7B層が混入。	○(土師・須恵・製塙)			
SP107	A	IV	不整円形	91	87	41	39	2.5Y4/2暗灰黄色シルト質細粒砂。	2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂主体に第7B層が混入。	○(土師・製塙)			
SP108	A	IV	楕円形	80	53	—	29	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・須恵・製塙)		
SP109	A	IV	楕円形	41	26	—	12	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			
SP110	A	IV	円形	30	23	—	7	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP111	A	IV	楕円形	60	45	—	37	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・須恵)		庄内式 妻も出土
SP112	A	IV	楕円形	34	22	—	7	—	—	第7B層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			
SP113	A	IV	円形	32	26	—	14	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			
SP114	A	IV	楕円形	55	41	—	12	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。			○(土師)
SP115	A	IV	正円形	24	—	—	12	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。		○(土師・須恵)	
SP116	A	IV	楕円形	45+	32+	—	13	—	—	第7A層主体で5Y4/1灰色粘土がブロック状に混入。			○(土師・須恵)
SP117	A	IV	円形	40	—	—	15	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。(やや砂質)	○(製塙)	○(土師)	
SP118	A	IV	長楕円形	80	41	—	46	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・須恵)		
SP119	A	IV	円形	34	30	—	—	—	—	2.5Y4/2暗灰黄色粘土。	○(土師・須恵・製塙)		

S K17出土遺物【遺構面IV】(1~20・78~89) 1~6・9~13は土師器、7・8は土製品、14は石製品、15~20は須恵器。1は壊身。丸底から内傾する体部。口縁部は上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は外面体部ヘラケズリ、内面にはナデが施される。口径13.6cm、器高3.8cm。色調灰褐色(5YR5/2)を呈する。2~6は高壊。2は壊部。平底から内弯しながら口縁部につづく。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面ハケメ(12/cm)、内面にはハケメのち放射状暗文が施される。口径12.3cm。色調内面橙色(5YR7/6)、外面にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。3~6は脚部。3は「ハ」の字形に広がる裾部から、裾端部は面をもつ。脚裾部堺に2方向の円孔を穿つ。調整は内外面共にハケメ(9/cm)のちナデが施される。裾部径8.6cm。色調内面橙色(5YR7/6)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。4は「ハ」の字形に広がる裾部から、裾端部は面をもつ。調整は内外面共に著しい磨滅のため詳細不明。裾部径8.9cm。色調内面橙色(5YR6/6)、外面橙色(5YR7/6)を呈する。5は裾広がりの脚柱部から、屈曲して外方に広がる裾部。裾端部は面をもつ。調整は内外面共にヘラケズリが施される。裾部径11.6cm。色調橙色(5YR6/6)を呈する。6はなだらかに「ハ」の字形にひろがる裾部、裾端部は丸くおさめる。脚裾部堺に3方向の円孔を穿つ。調整は著しい磨滅のため詳細不明。裾部径10.4cm。色調内面明赤褐色(2.5YR5/6)、外面橙色(2.5YR5/6)を呈する。8は土錘。長さ5.0cm、幅1.3cm、厚さ1.05cm、孔径0.55~0.7cm。ナデ調整が施される。色調明赤褐色(5YR5/6)を呈する。9・10は直口壺。9は直線的に外方に広がる口縁部、口縁端部はやや尖り気味におわる。調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径10.7cm。色調内面明赤褐色(5YR5/6)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。10は球形の体部に外方に広がる口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。調整は外面体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、内面工具によるナデが施される。口径9.5cm、器高14.6cm。色調内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。11~13は鉢。11は丸味を帯びた体部から内弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共にナデが施される。口径10.4cm。色調内面灰白色(2.5Y7/1)、外面黄灰色(2.5Y6/1)を呈する。12はやや平底から丸味を帯びた体部、口縁部は内弯し、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共に剥離のため詳細不明。内面は全て煤付着。口径12.2cm。色調内面暗灰色(N3/)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。13は体部から口縁部まで球体をなす。調整は内外面共に剥離のため詳細不明。口径18.2cm。色調内面浅黄橙色(10YR8/3)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。外面に煤付着。14は砥石。全面砥面として使用。長さ25.7cm、幅9.3cm、厚さ6.0cm。色調灰白色(7.5YR7/1)を呈する。15は壊身。丸味を帯びる底部から、受け部は水平につき、口縁部は長く内傾する。口縁端部はやや面をもつ。調整は外面底部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径11.9cm。色調内面灰色(N6/)、外面灰色(N4/)を呈する。16・17は無蓋高壊。16は外面体部に断面円形の把手をもち、口体部境には2条の凸帶をもつ壊部。凸帶下には櫛描波状文(9/0.6cm)が見られる。調整は外面底部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径17.3cm。色調内面灰白色(N7/)、外面灰白色(N8/)を呈する。17は「ハ」の字形にひろがる脚部に、4方向からなる三角形の透かし窓。壊部は平底からなだらかに上方にのびる口縁部、口縁端部は内側に段状の凹みをもつ。外面体部に断面橢円形の把手をもち、口体部境には1条の凸帶をもつ壊部。凸帶下には櫛描波状文(7/0.7cm)が見られる。調整は外面底部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径17.8cm、器高13.3cm、裾部径11.7cm。色調内面赤灰色(5R5/1)、外面灰色(N4/)を呈する。18~20は器台脚部。18は「ハ」の字形にひろがる脚部から、裾部は屈曲し水平をなす。外面裾部境に1条の凸帶がめぐる。調整は回転ナデが施される。裾部径19.2cm。色調内面灰褐色(5YR5/2)、外面灰褐色(5YR4/2)を呈する。19はなだらかに「ハ」の字形に広がる裾部から、裾端部は丸くおさめる。外面裾部境に2条の凸帶がめぐり、その凸帶間に櫛描波状文(8/cm)が施される。裾部径18.4cm。色調内面灰白色(5Y8/1)、外面暗青灰色(10BG4/1)



第13図 SK1・SK9・SK10・SK12・SK17・SK19ほか出土遺物実測図



第14図 SP31・SP71・  
SD3出土遺物実測図

色調灰白色 (2.5Y8/2) を呈する。88は口径4.2cm。色調内面浅黄橙色 (7.5YR8/3)、外面灰白色 (10YR8/2)を呈する。89は口径4.3cm。内面赤橙色 (10R6/6)、外面赤灰色 (2.5YR5/1) を呈する。

SK10出土土器【遺構面III】(21) 土師器坏身。平底から内傾しながら外方に伸びる口縁部。口縁端部は丸くおさめ、内側に1条の沈線が施される。調整は内外面共に著しい磨滅のため詳細不明。口径14.6cm、器高3.0cm。色調内面橙色(5YR7/6)、外面淡黄色(2.5Y8/3)を呈する。

SK19出土土器【遺構面IV】(22) 土師器坏身。底部欠損。内傾しながら立ち上がる口縁部。口縁端部はやや尖り気味で、内側に段をもつ。調整は外面底部にヘラケズリが施される。口径15.2cm。色調内面淡黄色(2.5Y8/3)、外面橙色(5YR6/8)を呈する。

SK 9 出土土器【遺構面III】(23) 土師器坏身。平底から内傾しながら立ち上がる口縁部。口縁端部は外折し尖り気味に終わる。調整は著しい磨滅のため詳細不明。口径16.2cm、器高2.9cm。色調橙色(5YR7/6)・浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。

SK12出土土器【遺構面III】(24) 土師器坏身。平底から内傾しながら立ち上がる口縁部。口縁端部は外傾し、内側に沈線をもつ。調整は外面底部にヘラケズリが施される。口径19.4cm。色調淡黄色 (2.5Y8/3)を呈する。

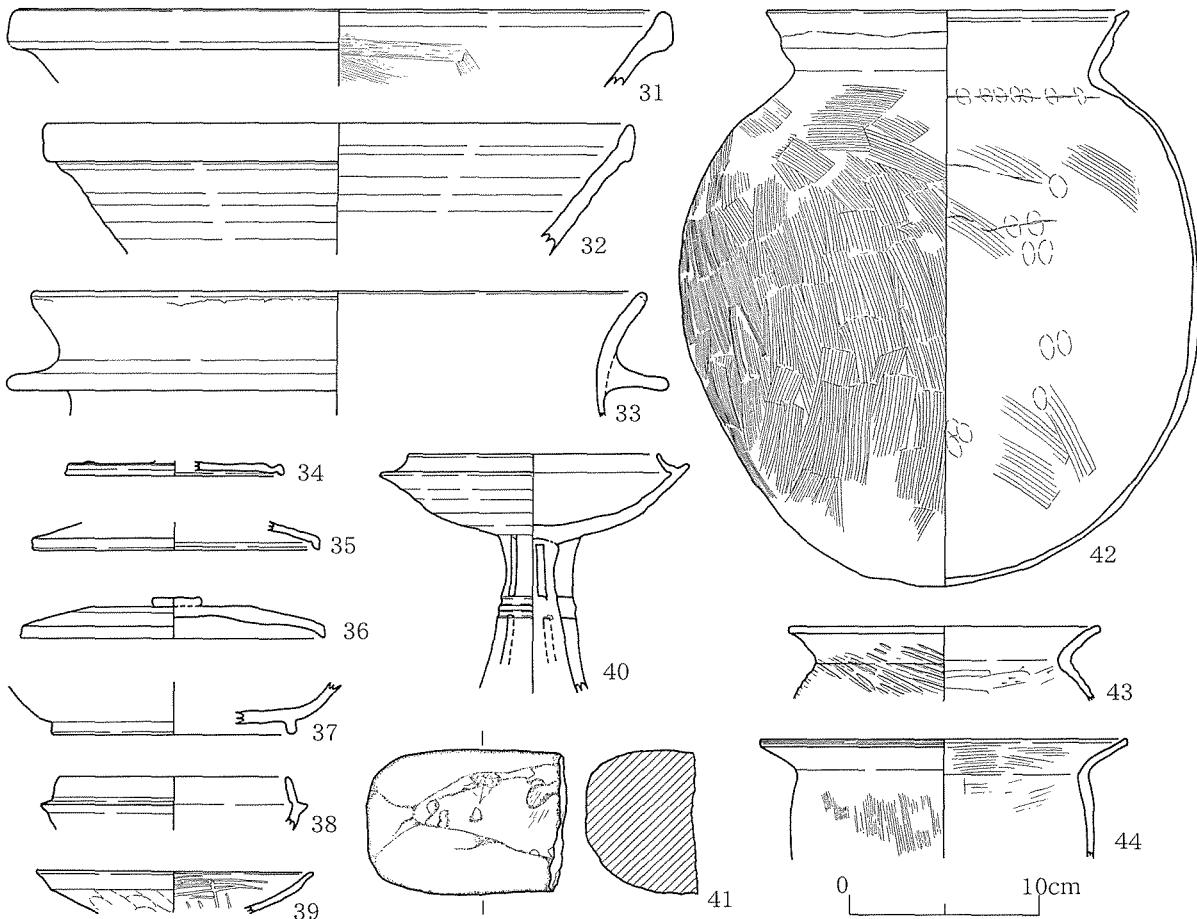
SK1出土土器【遺構面II】(25・26) 須恵器坏蓋。25は外方に広がる口縁部に、ややにぶい稜がつく。調整は内面天井部は仕上げナデ、外面天井部全面に回転ヘラケズリが施される。口径13.2cm、器高4.1cm。色調明青灰色(5PB7/1)を呈する。26はつまみ付タイプの坏蓋。やや平らな天井部に、口縁端部は下方へ屈曲し尖り気味に終わる。調整は内外面共に回転ナデが施される。口径12.5cm。色調灰白色(N7/)を呈する。

SP71出土土器【遺構面IV】(27) 須恵器長頸壺(瓶子)。両肩部に耳の痕跡。底部欠損。なで肩から屈曲して、漏斗状に広がる口頸部、口縁端部は上方につまみ上げる。内面頸部に二段接合痕が見られる。調整は回転ナデが施される。口径9.2cm。色調灰色(5Y6/1)を呈する。

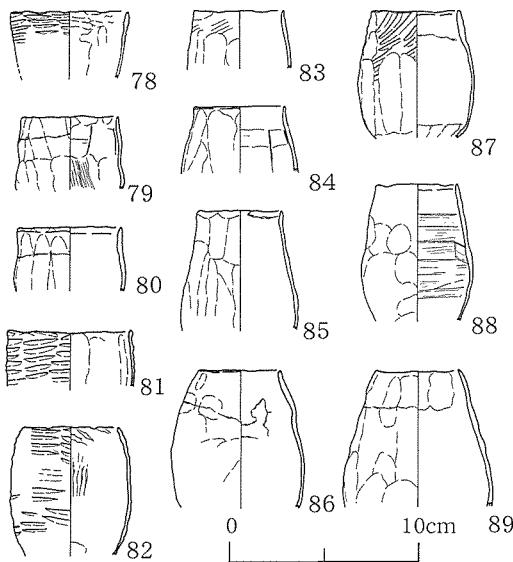
SP31出土土器【遺構面Ⅲ】(28・29) 28は須恵器坏蓋。宝珠つまみをもつ。ほぼ水平に近い天井部から、その端でZ字状にカーブを描き、口縁端部は下方へ屈曲する。調整は全体を回転ナデ、内面天井部に仕上げナデが施される。口径20.4cm、器高2.5cm。色調明青灰色(5BG7/19)を呈する。29は土師器坏身。平底から内弯しながら立ち上がる口縁部、口縁端部は外折し丸くおさめる。調整は外面底部ヘラケズリが施され、内面には煤付着。口径15.9cm。色調内面黒色(10YR2/1)、外面にぶい橙色(5YR6/4)を呈する。

SD 3 出土土器【遺構面Ⅲ】(30) 須恵器坏身。たちあがりがやや短く内傾し、端部は尖り氣味におわる。受部はやや短く上方にのび端部は丸くおさめる。調整は外面底部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径12.8cm。色調内面灰色(N6/)、外面灰白色(N7/)を呈する。

SX 1 出土遺物【遺構面 I】(31~44) 31・32は東播系須恵器捏鉢。共に口縁端部を上下に拡張させる。31は内面体部に工具によるナデが施される。口径34.0cm。色調灰色(N6/)を呈する。32は回転ナデ調整が施される。口径31.0cm。色調灰色(N6/)を呈する。33は土師器羽釜。なだらかに外弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。外面体部には水平の鍔がめぐる。調整は内外面共にナデが施される。口径31.3cm。内面口縁部に煤付着。色調灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。胎土に角閃石を含む生駒西麓産。34~36は須恵器坏蓋。34は平らな天井部から、その端でZ字状にカーブを描き、口縁端部は下方へ屈曲する。調整は内面天井部仕上げナデが施される。口径11.5cm。色調灰色(N6/)を呈する。35は「ハ」の字形にひろがる天井部、口縁端部は下方へ屈曲する。口径15.0cm。色調灰色(N6/)を呈する。36は外面天井部に偏平なつまみをもつ。口径16.0cm、器高2.2cm、つまみ径2.65cm。色調灰白



第15図 SX1出土遺物実測図



第16図 SK17出土製塙土器実測図

色(N7/)を呈する。37・38は須恵器坏身。37は高台をもつ。底径12.8cm。色調灰白色(N7/)を呈する。38は立ち上がり短くやや内傾し、水平な受部をもつ。口径12.0cm。色調内面灰色(N7/)、外面灰色(N5/)を呈する。39は瓦器椀。口縁端部が丸味をもつ和泉型。内面には並行線状暗文が施される。口径14.6cm。色調暗灰色(N3/)・灰白色(N8/)を呈する。40は須恵器高坏。裾部欠失。長脚2段透かし。坏身は立ち上がり短く内傾し、上向きの受部、端部は丸くおさめる。外面底部1/3回転ヘラケズリ、内面底部に仕上げナデが施される。口径13.2cm。色調青灰色(5PB6/1)を呈する。41は砥石。一部に砥面が見られる。長さ10.7cm、幅7.75cm、厚さ6.0cm。色調灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。42~44は土師器甕。42は球形をもつ体部、外反する口縁部、口縁端部は内側に肥厚する。調整は内外面共ハケメ(4/cm)が施される。口径19.0cm、器高30.7cm。色調内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。外面に煤付着、黒斑あり。43は「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は外面平行タタキ(2/cm)、内面はヘラケズリが施される。口径16.4cm。色調灰黄色(2.5YR7/2)を呈する。44は直立気味の体部、口縁部は外折し、口縁端部は上方につまみ上げる。調整は内外面共ハケメ(10/cm)が施される。口径19.2cm。色調橙色(2.5YR6/6)を呈する。

A地区 第2層出土遺物 (45~52) 45は土師器皿。内弯しながら立ち上がる口縁部、口縁端部は肥厚する。調整は外面ヘラケズリが施される。口径20.0cm。色調内面明褐灰色(7.5YR7/2)、外面浅黄橙色(7.5YR8/4)・橙色(5YR7/8)を呈する。46は土師器鉢。内弯する体部から口縁部にかけて断面が厚くなり、口縁端部は断面方形をなす。調整は著しい摩滅のため詳細不明。口径21.0cm。色調橙色(2.5YR7/6)・橙色(5YR7/6)を呈する。47は土師器甕。なだらかに外反する口縁部、口縁端部は上方に面をもち凹む。調整は外面タタキが施される。口径19.4cm。48~51は須恵器坏身。48~50は断面方形の「ハ」の字形の高台をもつ。48は口径13.0cm、器高3.7cm、底径11.0cm。49は底径11.6cm。色調灰白色(N7/)を呈する。50は口径15.4cm、器高5.8cm、底径10.8cm。色調内面暗青灰色(5BG7/1)、外面暗オリーブ色(2.5GY4/1)・明青灰色(5BG7/1)を呈する。51は椀形をなす口体部、口縁端部は丸味をもつ。調整は口縁直下から底部に回転ヘラケズリが施される。口径15.4cm、器高5.5cm。色調緑灰色(10GY6/1)を呈する。52は砥石。3面砥面として使用。長さ7.4cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm。

第7層出土土器 (53) 土師器高坏。椀形をなす体部から口縁部、口縁端部はやや尖り気味に終わる。調整は内外面にヘラミガキが施される。口径11.6cm。色調浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。

第3層出土土器(54) 須恵器坏身。断面方形の「ハ」の字形の高台をもつ。調整は内外面共著しい風化のため詳細不明。口径24.0cm、器高4.6cm、底径21.0cm。色調灰白色(N8/)を呈する。

第2~3層出土土器 (55・56) 55は須恵器坏身。平底から直立気味に立ち上がる口縁部、口縁端部は水平にのびる。外面底部は未調整。口径11.2cm、器高2.3cm。色調緑灰色(10GY5/1)を呈する。56は土師器甕。なだらかに「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は上方につまみ上げる。調整は著しい風化のため詳細不明。口径15.8cm。色調浅黄橙色(10YR8/3・10YR8/4)を呈する。

第5層出土土器 (57~59) 57は須恵器坏身。平底から丸味をもつ体部、口縁部は内傾し、口縁端

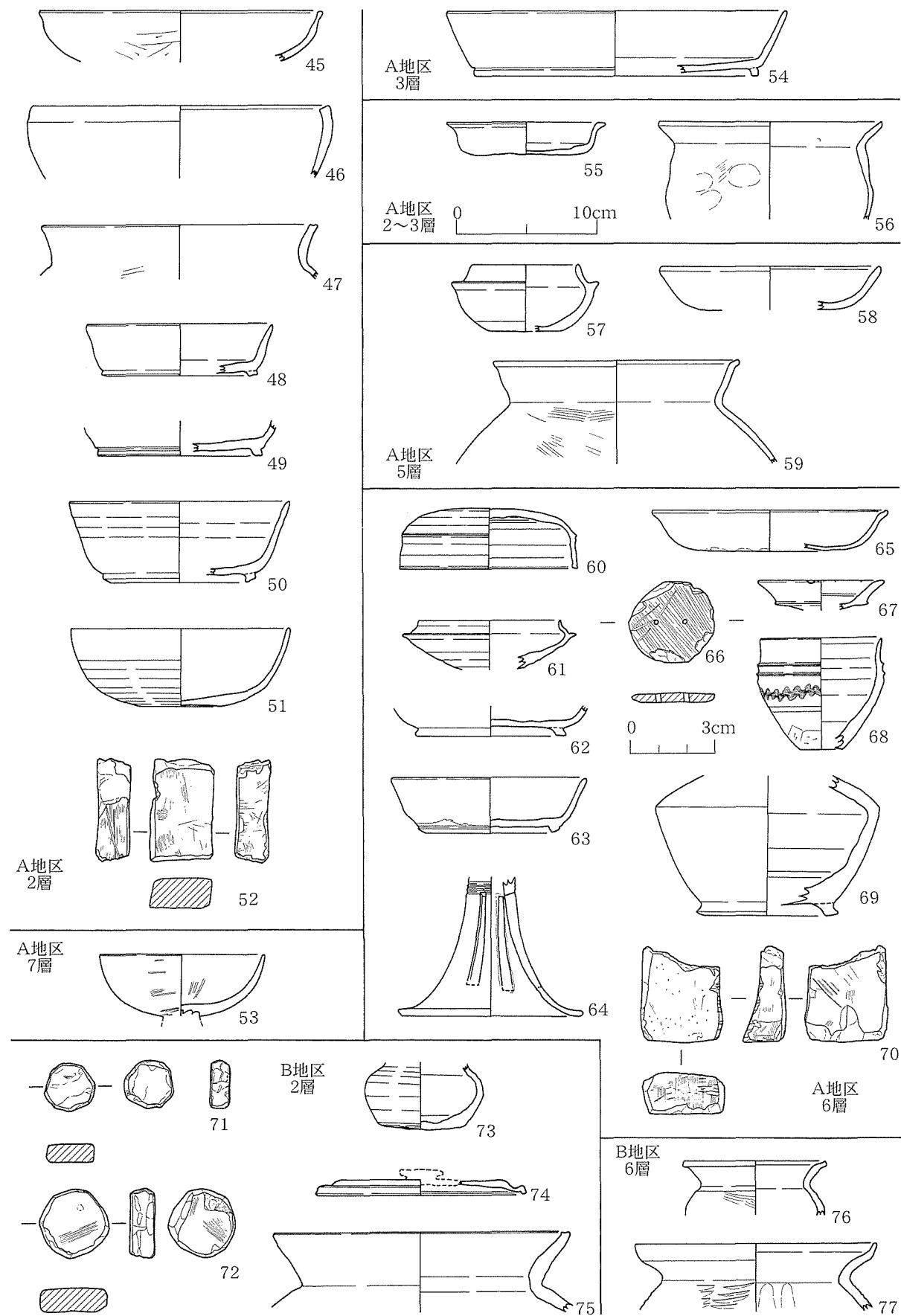
部は丸味をもつ。受部は水平。調整は外面1/3回転ヘラケズリが施される。口径7.5cm、器高4.8cm。色調灰色（N5/）を呈する。58は土師器坏身。なだらかに外傾する口縁部、口縁端部は外方に面をもつ。調整は著しい風化のため詳細不明。口径15.6cm。色調内面淡黄色（5Y8/3）、外面橙色（7.5YR7/6）を呈する。59は土師器甕。「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は外方に屈曲し丸くおさめる。調整は外面ハケメ（5/cm）、内面は著しい剥離のため詳細不明。口径17.4cm。色調内面淡黄色（5Y8/3）、外面淡黄色（2.5Y8/3）を呈する。

第6層出土遺物（60～70）60は須恵器坏蓋。平らに近い天井部から、口縁部は直下に下がり、口縁端部は面をもつ。やや尖り気味の稜がつく。調整は内面天井部に仕上げナデ、外面天井部3/4は回転ヘラケズリが施される。口径12.7cm、4.3cm。色調内面青灰色（5PB6/1）、外面灰白色（N7/）を呈する。61～63は須恵器坏身。61の口縁部は内傾し短く、口縁端部は屈曲し上方にのびる。受部は水平。調整は外面底部2/3回転ヘラケズリが施される。口径10.0cm。色調青灰色（5PB6/1）を呈する。62・63は断面方形の「ハ」の字形の高台をもつ。62は底径10.6cm。色調オリーブ灰色（2.5GY6/1）を呈する。63の調整は内面底部仕上げナデ、外面底部は回転ヘラケズリが施される。口径13.8cm、器高3.9cm、底径9.0cm。色調灰白色（N7/）を呈する。64は須恵器高坏。坏部欠損。長脚2段透かしと思われる。裾部径12.5cm。色調青灰色（5PB6/1）を呈する。65は土師器坏身。丸味をもちながら立ち上がる体部から、口縁部は外弯し、口縁端部は内側にやや肥厚する。調整は著しい摩滅のため詳細不明。口径16.6cm。色調内面橙色（7.5YR7/6）、外面褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。66は滑石製双孔円板。表・裏共に研摩痕が明瞭に残存。長さ・幅3.0cm、厚み0.3cm。67は須恵器小型皿。直線的に外方にのびる口縁部、口縁端部はやや尖り気味におわる。口体部境に1条の凸帯がめぐる。口径9.0cm。色調灰色（N6/）を呈する。口縁部内面に煤が見られることから、灯明皿とも考えられる。68は須恵器把手付コップ。小さな平底から外方にひらく体部、口縁部は上方にのび、口縁端部は尖り気味におわる。口体部境に2条の凸帯がめぐり、その下部に櫛描波状文（11/0.8cm）がみられる。調整は外面底部付近にヘラケズリが施される。口径8.6cm、器高7.9cm、底径3.0cm。色調内面青灰色（5PB6/1）、外面明青灰色（5PB7/1）を呈する。69は須恵器壺。断面方形の「ハ」の字形の高台、張りのある肩部をもつ。調整は外面自然釉付着のため詳細不明。底径10.2cm。色調内面灰白色（N7/）、外面オリーブ灰色（10Y4/2）を呈する。70は砥石。全面砥面として使用。長さ6.9cm、幅5.9cm、厚さ3.0cm。表面に研摩痕が見られる。

B地区 第2層出土遺物（71～75）71・72は瓦製円板。平瓦からの転用品。71は長さ・幅3.5cm、厚さ1.3cm。色調暗灰色（N3/）を呈する。72は長さ・幅4.9cm、厚さ1.7cm。色調暗灰色（N3/）を呈する。73は須恵器小型壺。平底から丸味をもつ体部。調整は内面底部仕上げナデ、外面底部は回転ヘラケズリとヘラ切が施される。色調灰色（N6/）を呈する。74は須恵器坏蓋。平らな天井部から、その端でZ字状にカーブを描き、口縁端部は下方へ屈曲する。口径14.8cm。色調灰色（N6/）を呈する。75は須恵器甕。「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は上方に面をもち凹む。口径21.0cm。色調灰白色（N7/）を呈する。

第3層出土土器（76・77）弥生土器甕。外面体部に平行タタキが見られる。76はなだらかに外反する口縁部、口縁端部は面をもつ。口径10.0cm。色調内面橙色（5YR6/8）、外面にぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。77は「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は上方にのびる。口径17.0cm。色調内面オリーブ色（2.5Y4/4）、外面にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。

D地区 第2F層出土遺物（第13図7）土馬が出土している。胴部と前足の一部残存。全体をユビ調整で施される。細片のため詳細不明。色調赤褐色（5YR4/8）を呈する。



第17図 各遺物包含層出土遺物実測図

## 6) まとめ

今回の調査では、池沼による攪乱を受けながらも古墳時代中～後期・奈良～平安時代の2つの遺構面を確認することができた。以下、調査成果を要約し、まとめとしておきたい。

### (1) 意岐部遺跡の古代集落について

既往の調査成果から、第4次の北、第3次の東に集落が広がるとされていたが、今回大型の総柱建物SB3が検出され、第6次調査地が古墳時代中～後期集落の中心部の一角を担うのは確実となった。市域の古墳時代掘立柱建物については中西克宏の集成がある。その中で西岩田遺跡第10次調査倉庫1はSB3とは南に約250m隔たる。従前本遺跡と西岩田遺跡とは一体化して理解する向きがあったが、建物の位置関係からも別個の集落様相をもつことが判明した。また北端のSK16は掘立柱建物の柱穴の可能性があり、生活域はさらに北西に広がることになる。この場合、暗峠奈良街道の前身古道(日下直越)は調査地周辺には該当しないことになる。いっぽう、奈良～平安期の遺構面については、当時どの郷に所属したのかが問題となろう。『和名類聚抄』若江郡所載の郷として、「弓削 刑部 新治 巨麻 川俣 錦部 余戸」が掲出されている。現行の地名事典では本遺跡周辺を川俣郷とするが、川俣は現在も地名が遺称され私見によれば納得しがたい。余戸はアマルベと訓み地名考証は低調であるが、「戸数增加による新立の郷」と解釈できる。今回検出の集落が「余戸郷」に相当するのではないか。その傍証として式内社意支部神社の問題がある。意支部神社は論社で〔御厨〕天神社と長田神社が候補となっている。ただいずれにせよ意岐部遺跡から北西に隔たっており、奈良～平安期に集落として立地できる環境にあったか疑問である。その点からも余戸郷への措定を仮説として呈示したい。

### (2) 出土遺物について(数字は図番号に対応)

出土遺物で最も量が多いのはSX1出土品である。SX1はベース層となる粗粒砂層を抉るため主体は庄内期から中世期に及ぶ。31・32は東播系須恵器捏鉢で器形から13世紀代と思われる。39は和泉型の瓦器碗で13世紀後半に属する。いずれもSX1の機能時期の資料と考えられる。他方SX1の西肩は2面の遺構面を掘り込みかつ整地するためその直下で古墳～奈良時代の遺物が密集していた。古墳時代中～後期遺構面ではSK17の出土遺物が注目される。16・17は須恵器無蓋高壺で田辺編年のTK208型式に相当する。12・13の口縁部が内彎する鉢は布留遺跡布留(西小路)地区L.N.45出土例、佐田遺跡SX101出土例に類似品が求められる。佐田遺跡SX101出土例では内彎口頸壺にTK208型式の須恵器壺が伴っており、SK17出土土器の年代観が首肯されよう。ただ15の須恵器壺身はTK23～TK47型式に併行するものと見られる。これらのことからSK17出土土器は5世紀後半～末ごろに属するとの見通しをもつことができよう。遺構面の時期についてはさらに時間幅がある資料群が混在すると捉えており、古墳時代中～後期に推定している。SK17では製塩土器のブロックが検出したことも特色である。88は截頭卵形を呈し内面は貝殻調整が顕著である。85は88と比べて胴部が膨らむ器形をもつ。この相違は産地の違いを表すものとみられ、88は紀淡産、85は大阪府沿岸産と考えられる。なお81は備讃瀬戸産と推定される。伴出の砥石は塩生産工程に関わる遺物かと考えられる。

《文献》〔第3次調査〕(財)東大阪市文化財協会『東大阪市文化財協会概報集－1997年度－』1998年。

〔第4次調査〕東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成11年度－』2000年。

田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ、1966年。

埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡布留(西小路)地区 古墳時代の遺構と遺物』、1996年。

奈良県立橿原考古学研究所編『南郷遺跡群Ⅱ[奈良県史跡名勝天然記念物調査報告73]』、1999年。

棚橋利光「意支部神社」(式内社研究会編『式内社調査報告4(河内国)』、皇學館大学出版部、1979年。

中西克宏「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の建物跡と遺物」『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡調査報告書』2002年。

意岐部遺跡第6次調査

遺構



調査前の状況（南東より）



A地区～B地区  
SX1掘削後全景（西より）



A地区  
SX 1 掘削後状況（南より）

図版  
2

意岐部遺跡第6次調査

遺構



C地区  
SX 2 掘削後状況（西より）

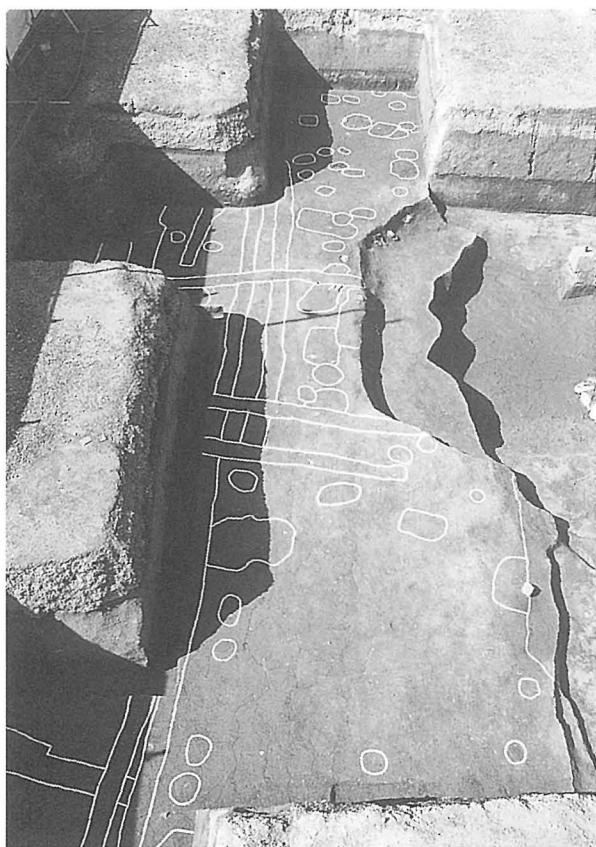


B地区  
遺構面 II 掘削後状況（東より）



C地区  
遺構面 II 掘削後状況(西より)

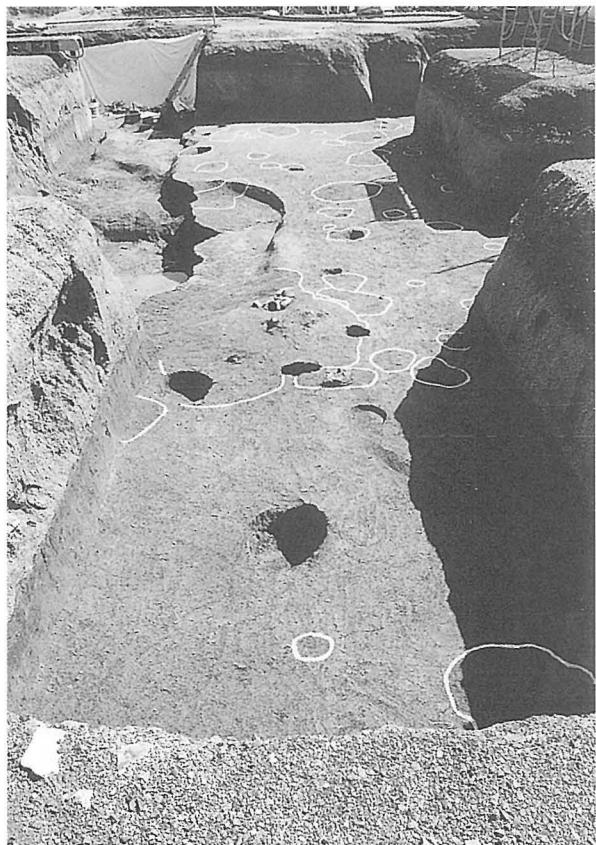
図版3 意岐部遺跡第6次調査 遺構



遺構面III A地区検出全景（南より）



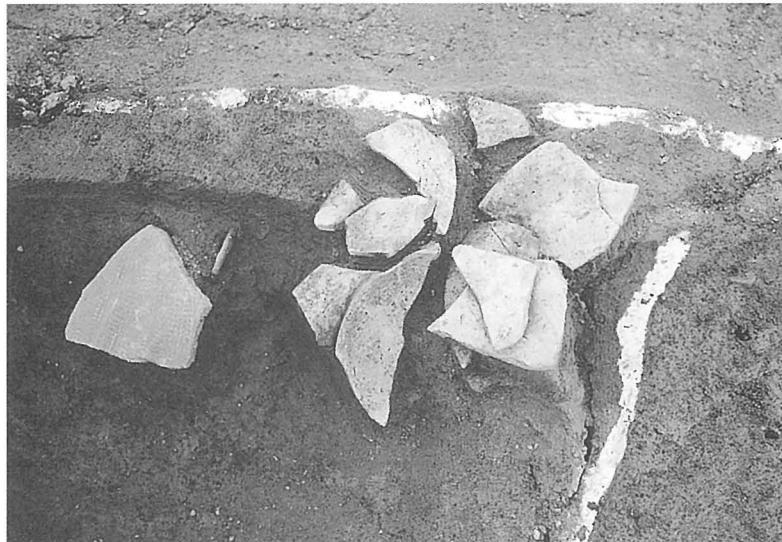
遺構面III A地区掘削後全景（南より）



遺構面IV A地区検出全景（北より）



遺構面IV A地区掘削後全景（南より）



遺構面Ⅲ A地区SK 9内  
土師器一括出土状況（南より）



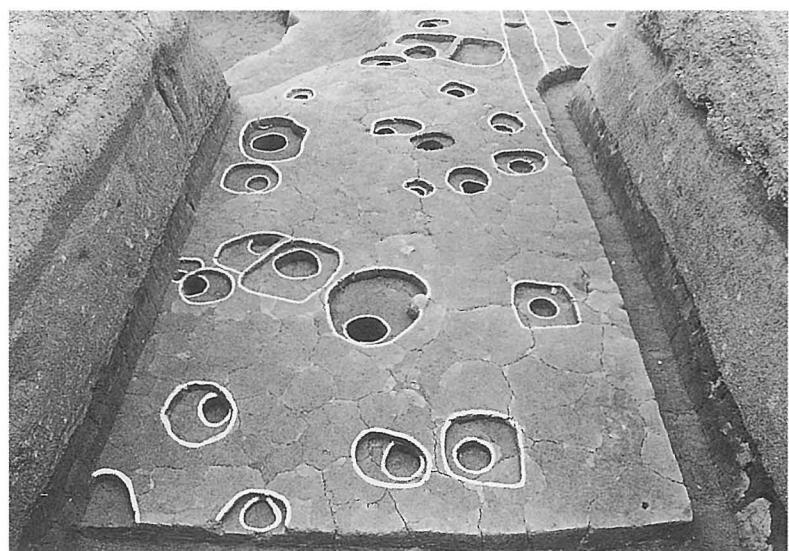
遺構面Ⅲ A地区SK10内  
土師器杯出土状況（西より）



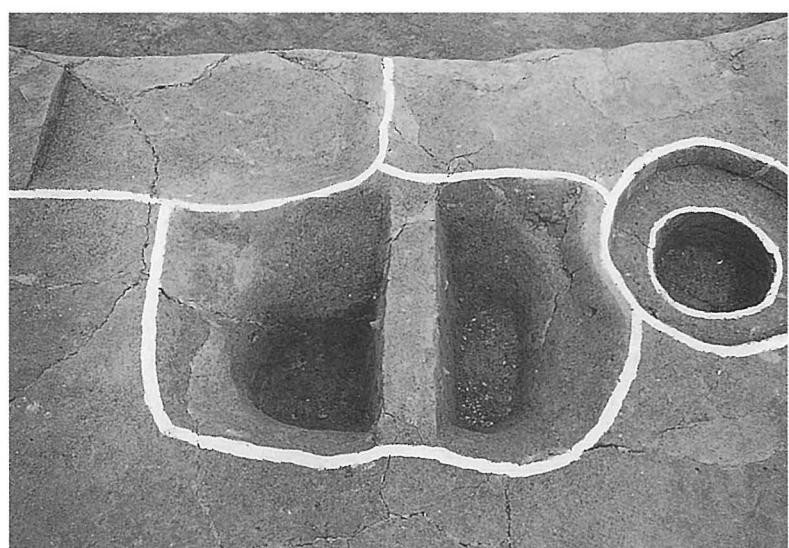
遺構面Ⅲ A地区SP31内  
土器出土状況（南より）

図版5 意岐部遺跡第6次調査

遺構



遺構面III  
A地区のピット群（北より）



遺構面III A地区  
SK11掘削後状況（西より）

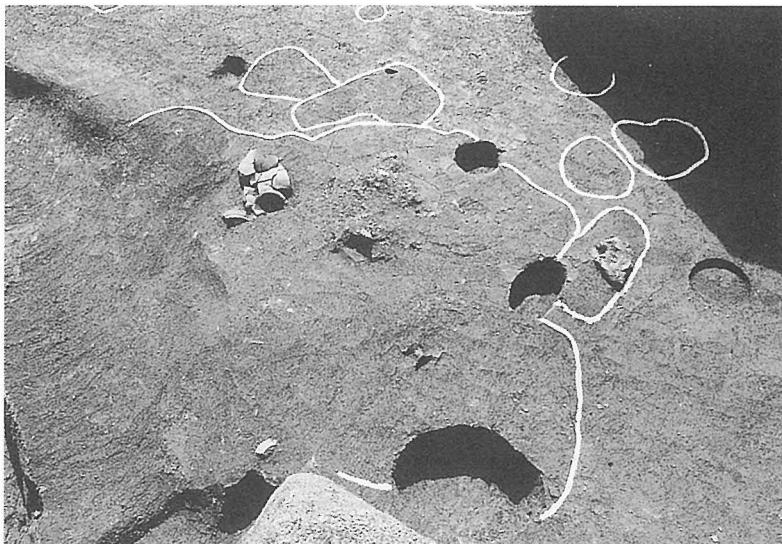


遺構面IV A地区SP100内  
柱根遺存状況（西より）

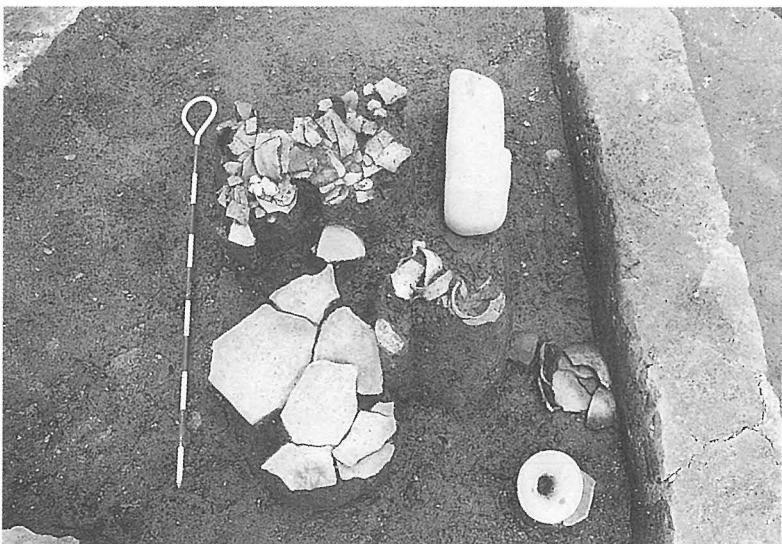
図版6

意岐部遺跡第6次調査

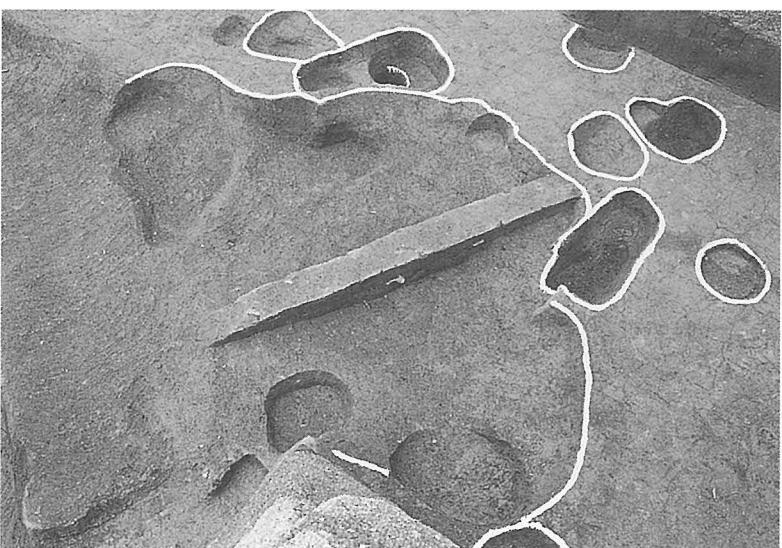
遺構



遺構面IV A地区  
SK17検出状況（北東より）

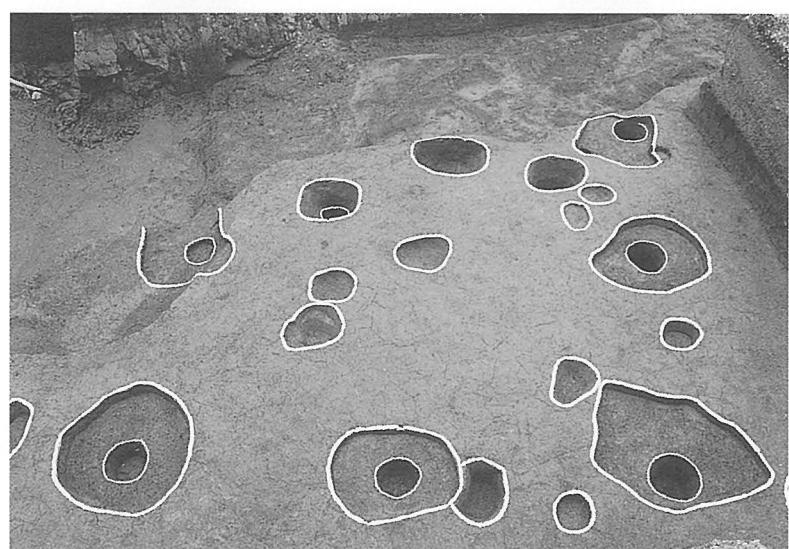


A地区 SK17内遺物出土状況  
(東より)



遺構面IV A地区  
SK17掘削後状況(北東より)

図版7 意岐部遺跡第6次調査  
遺構



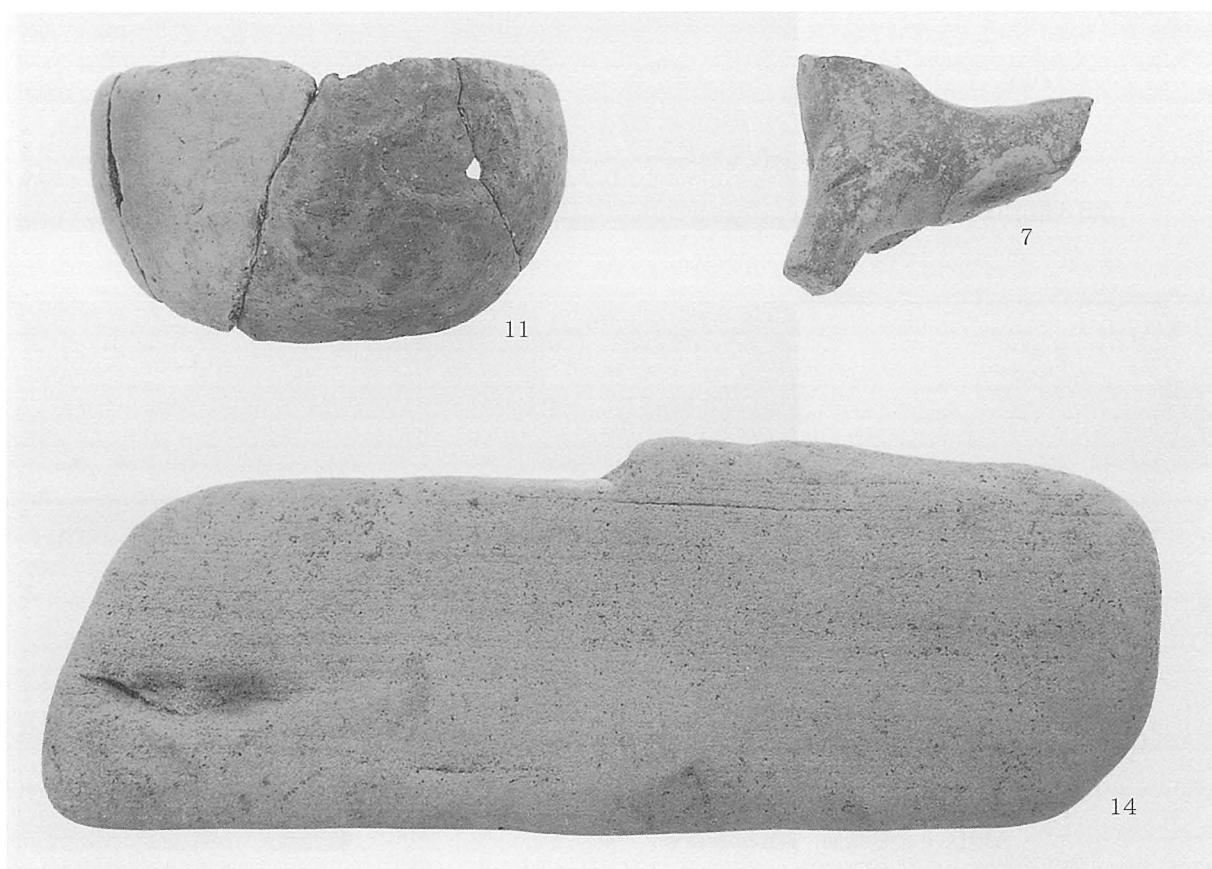
図版8

意岐部遺跡第6次調査

遺物

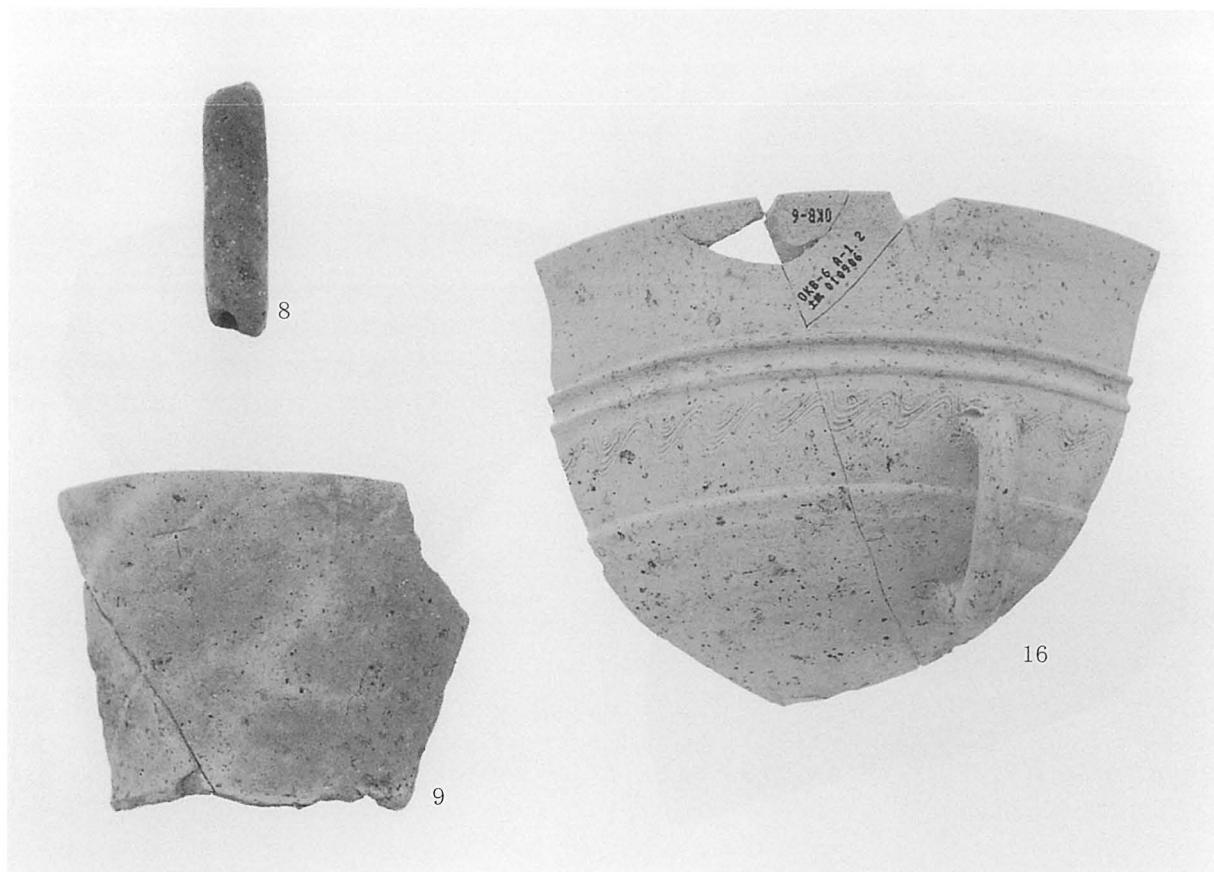


SK17出土（1～6）

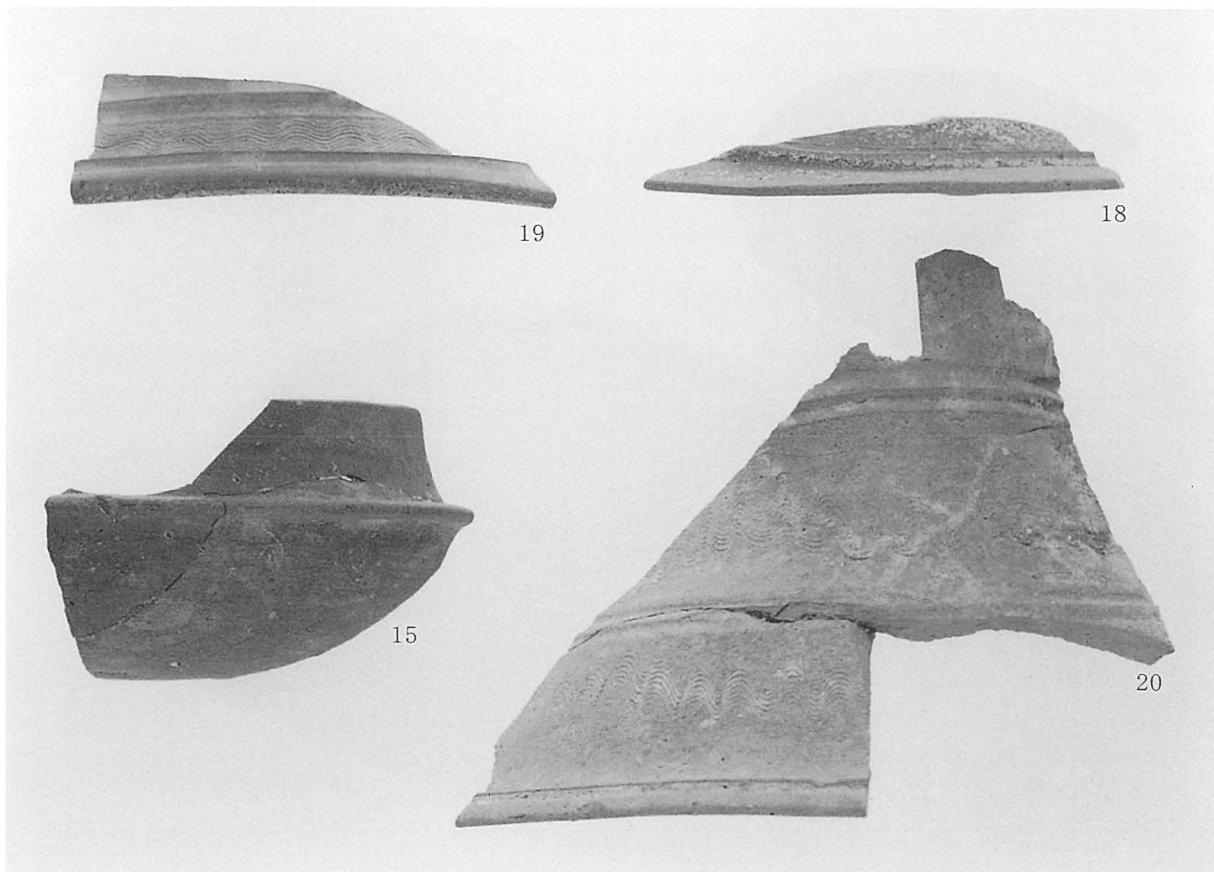


SK17他出土（7・11・14）

図版 9 意岐部遺跡第6次調査 遺物



SK17出土 (8・9・16)



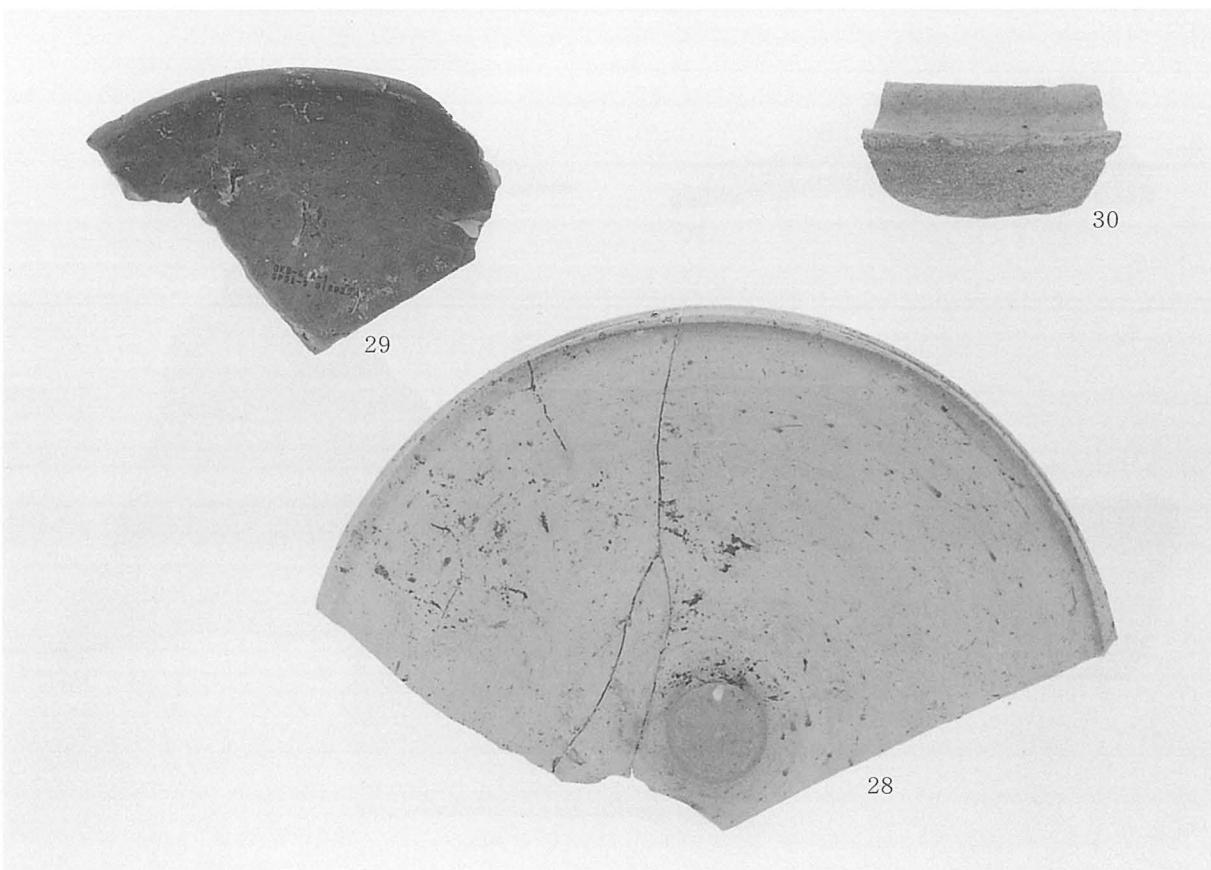
SK17出土 (15・18~20)

図版 10

意岐部遺跡第6次調査  
遺物

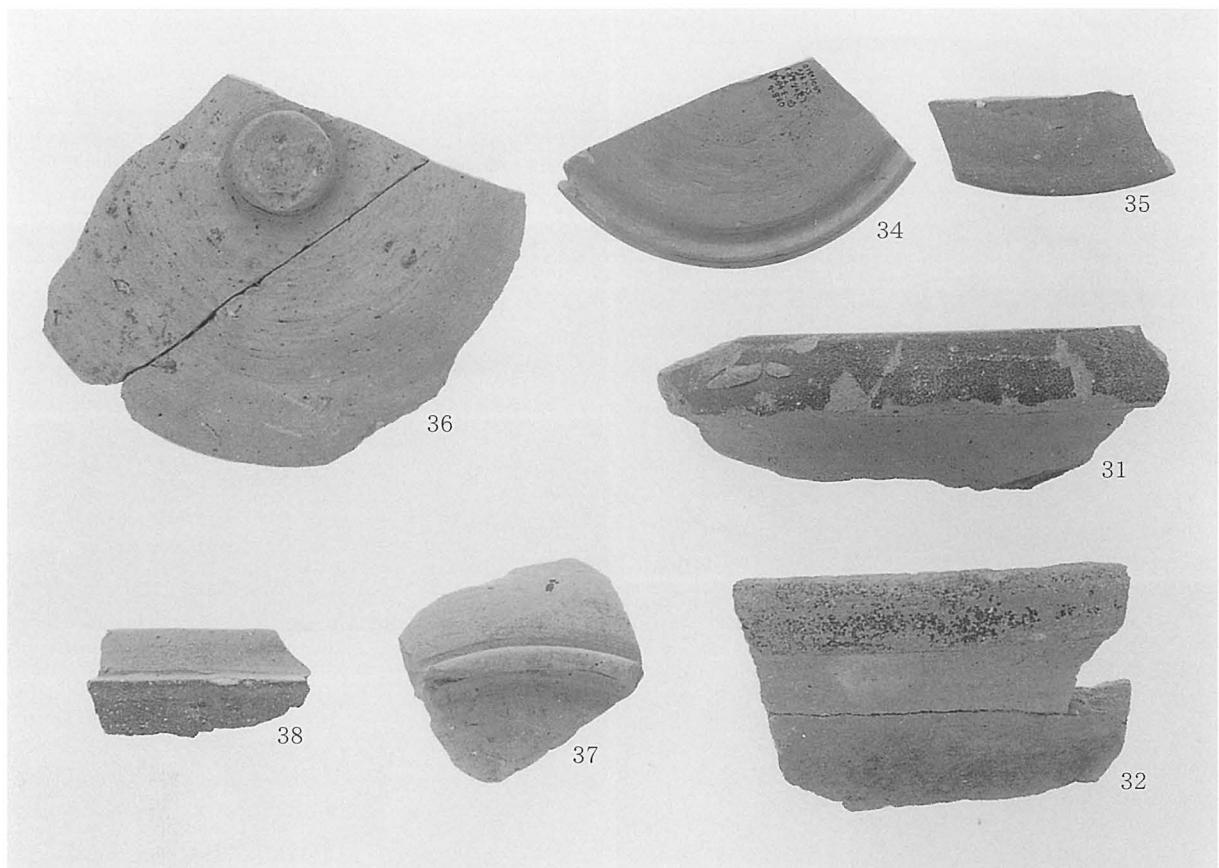


SK19出土 (22) SK12出土 (24) SK 1 出土 (26)

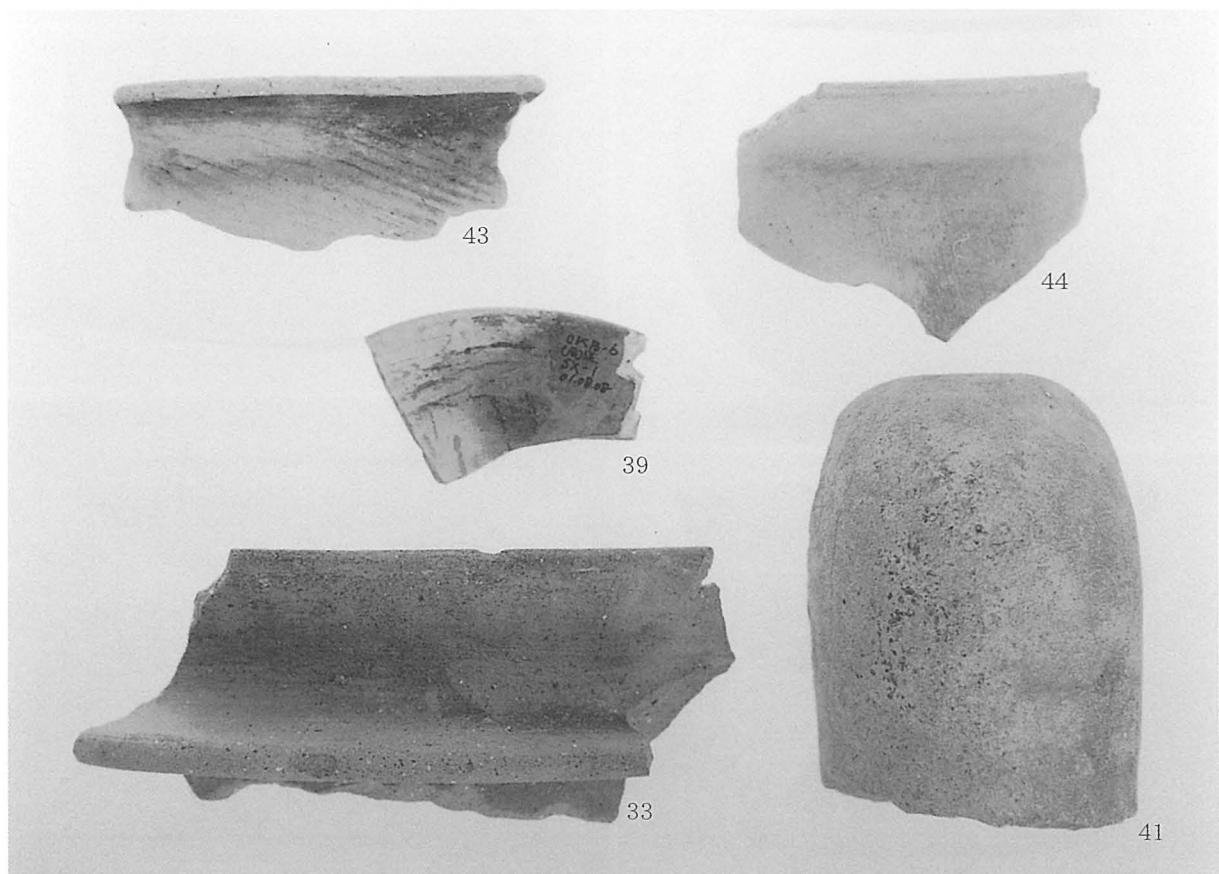


SP31出土 (28・29) SD 3 出土 (30)

図版 11 意岐部遺跡第6次調査 遺物



SX 1 出土 (31・32・34~38)

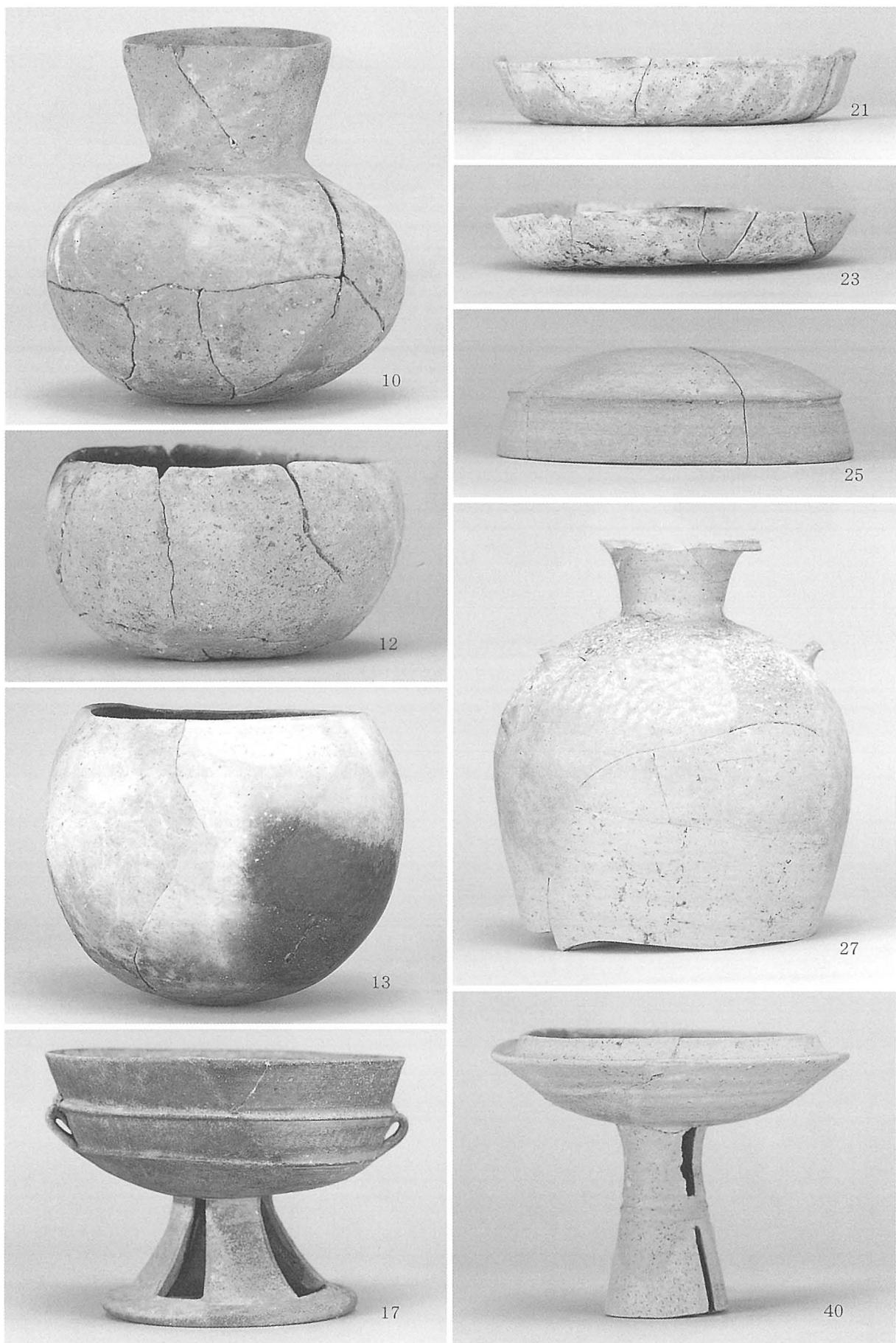


SX 1 出土 (33・39・41・43・44)

図版  
12

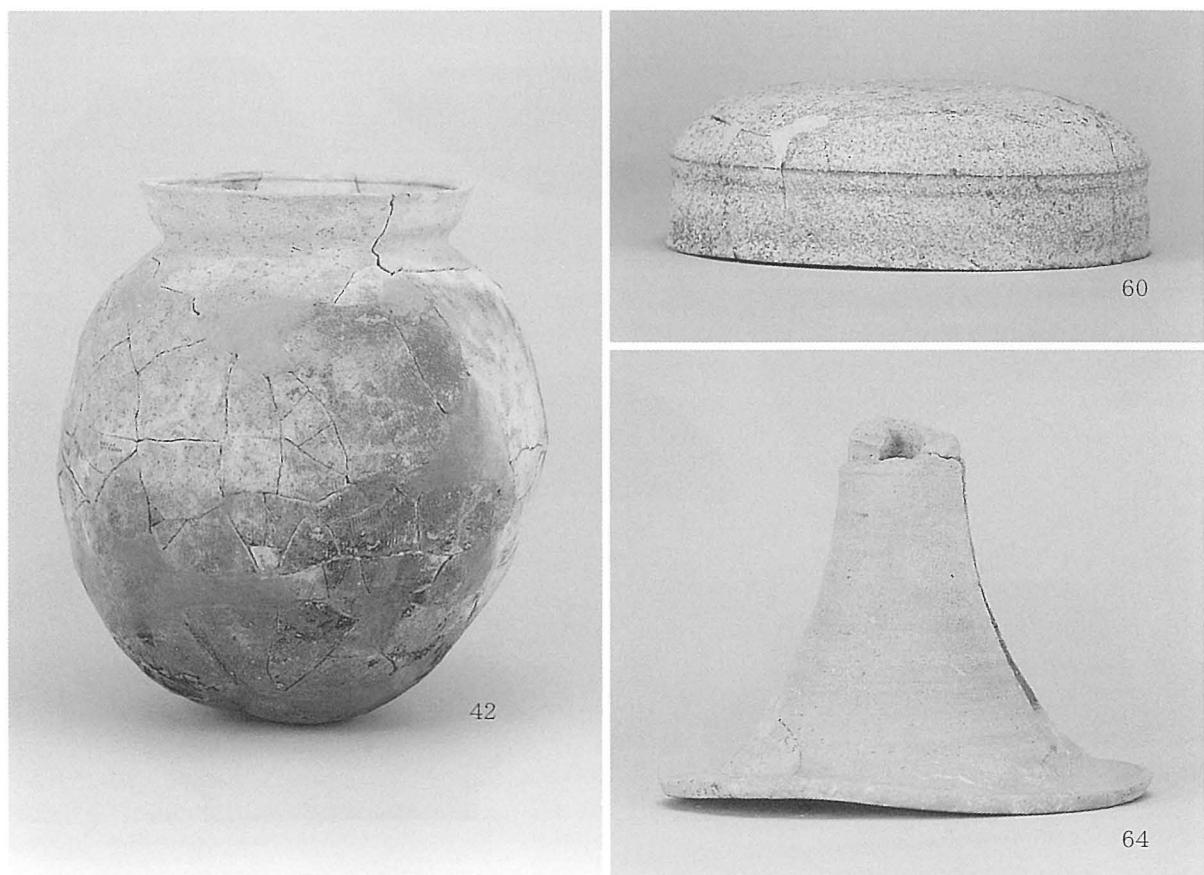
意岐部遺跡第6次調査

遺物

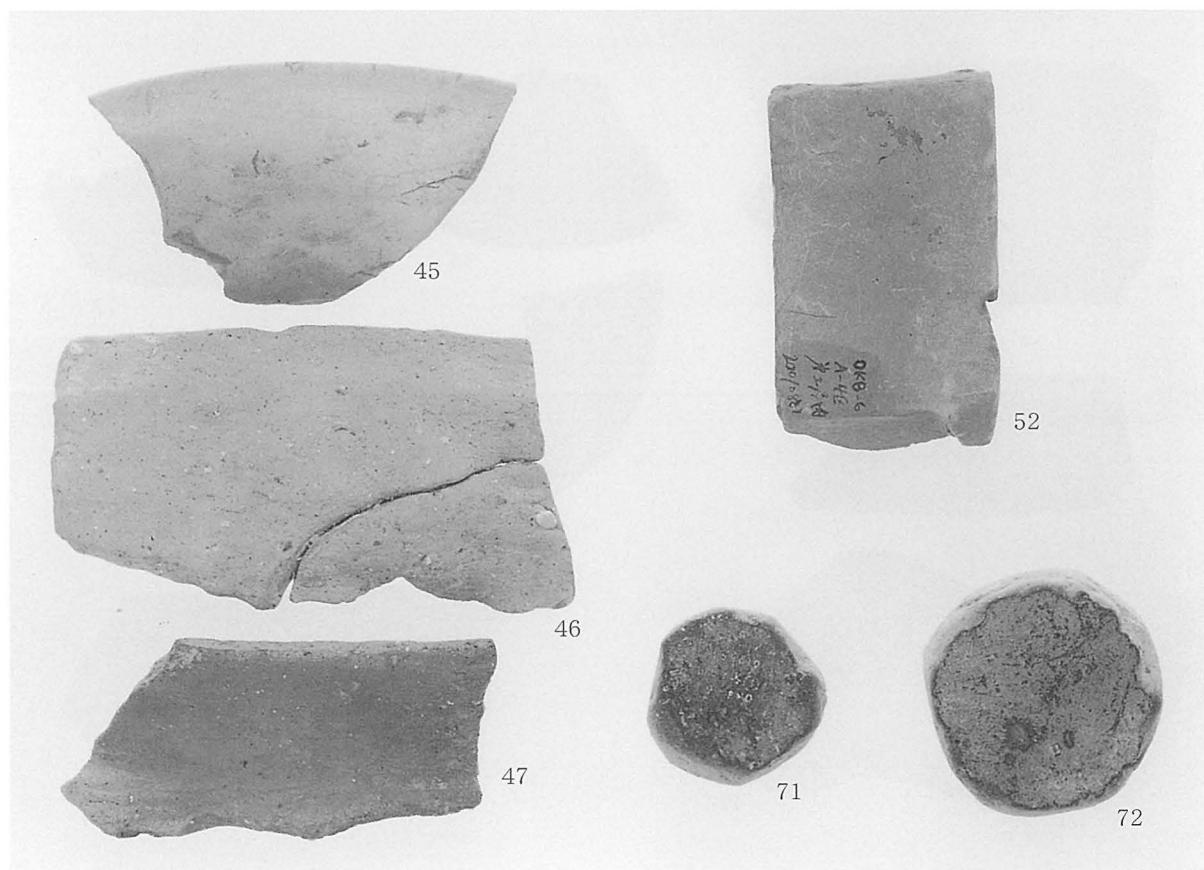


SK17出土 (10・12・13・17) SK10出土 (21) SK13出土 (23) SK1出土 (25) SP71出土 (27)  
SX1出土 (40)

図版 13 意岐部遺跡第6次調査 遺物



SX 1 出土 (42) A地区第6層出土 (60・64)

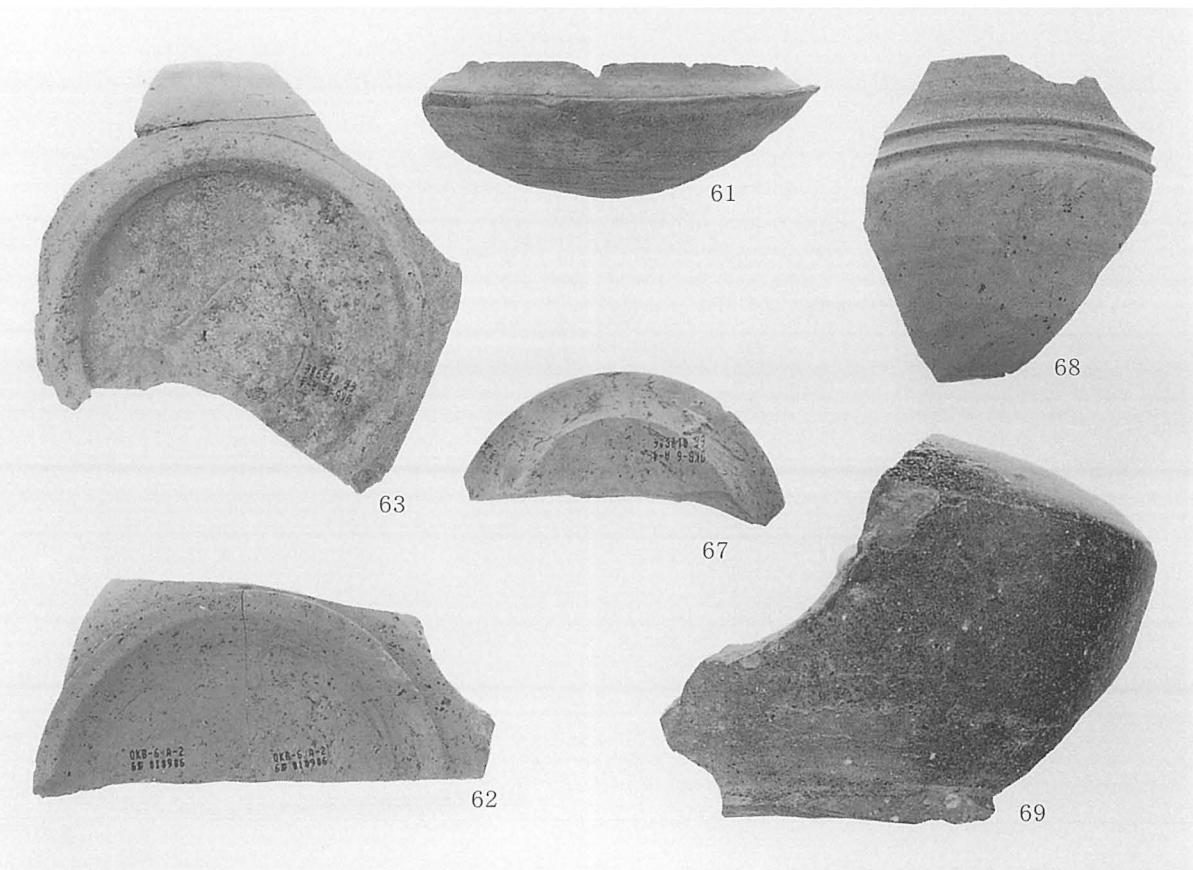


A地区第2層出土 (45~47・52) B地区第2層出土 (71・72)

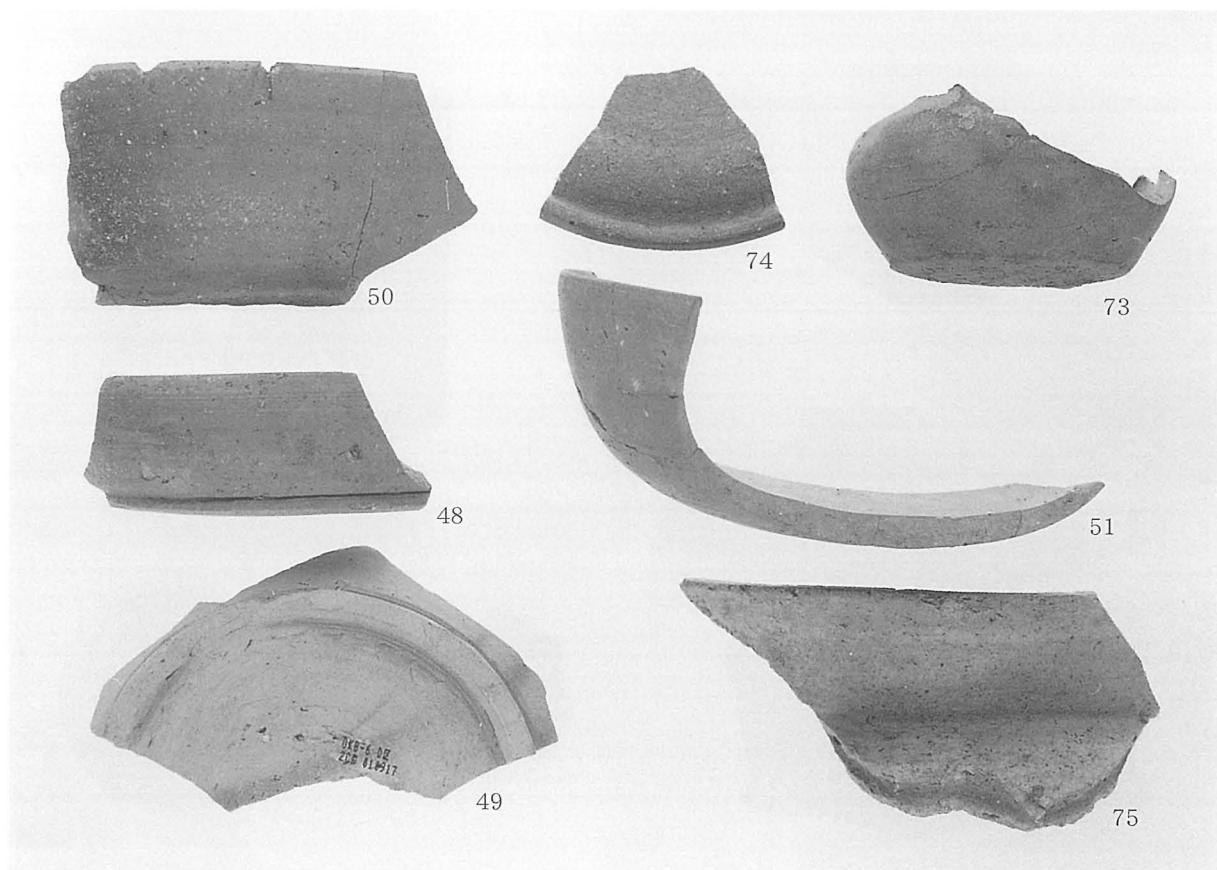
図版 14

意岐部遺跡第6次調査

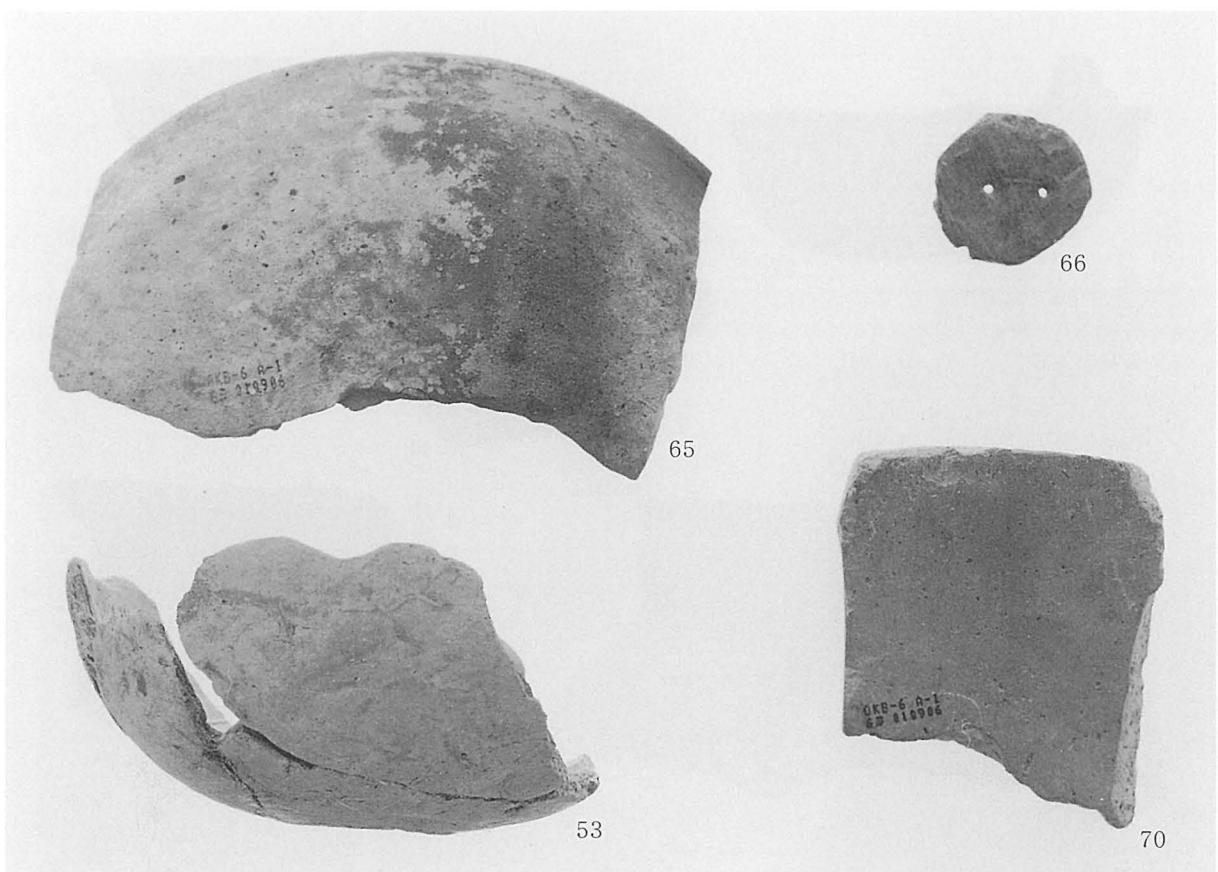
遺物



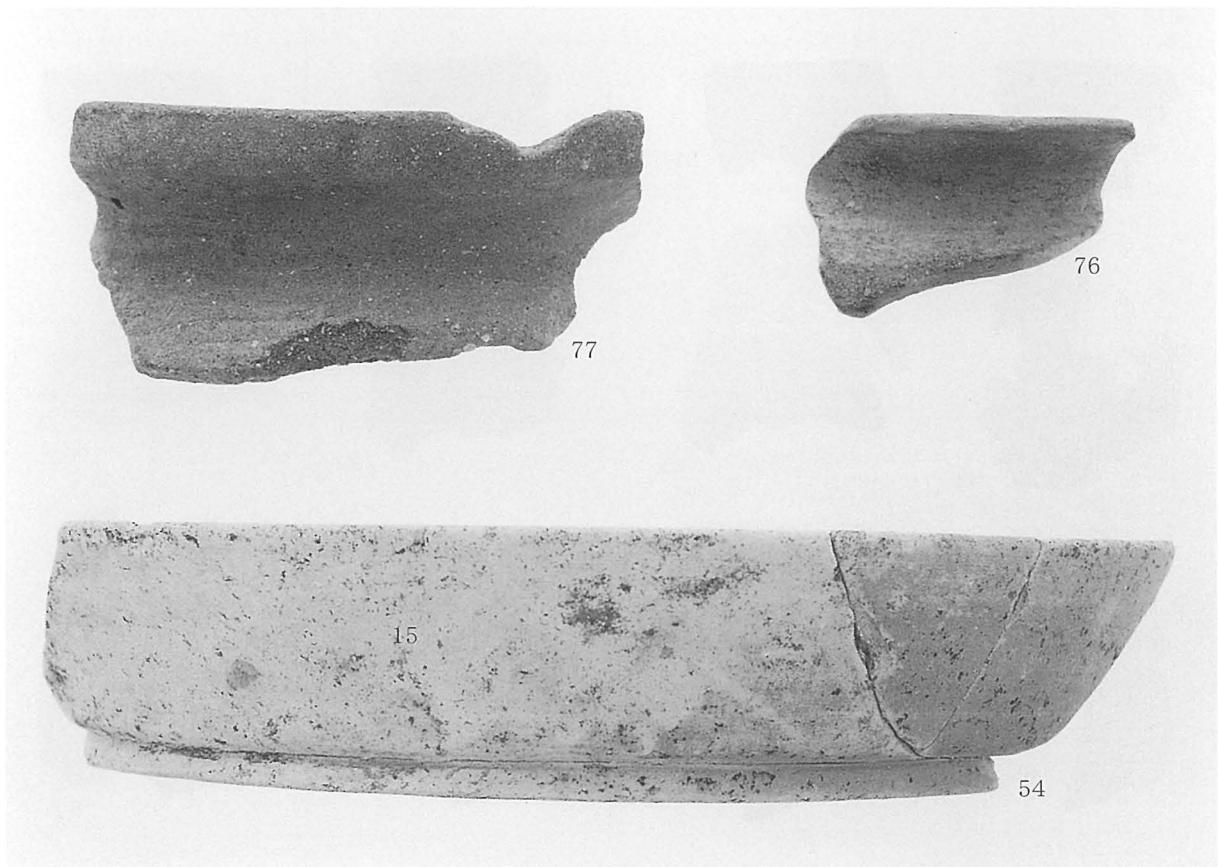
A地区第6層出土 (61~63・67~69)



A地区第2層出土 (48~51) B地区第2層出土 (73~75)



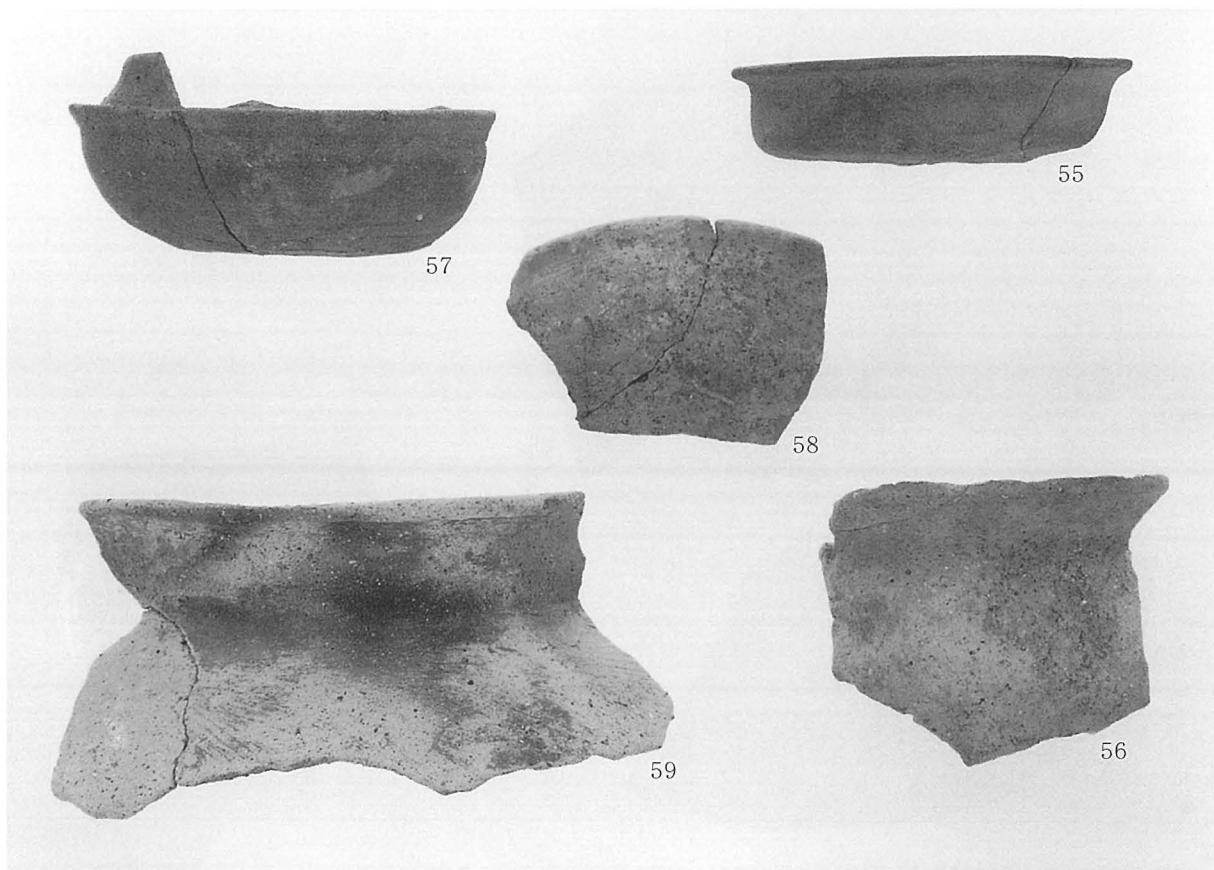
A地区第7層出土 (53) A地区第6層出土 (65・66・70)



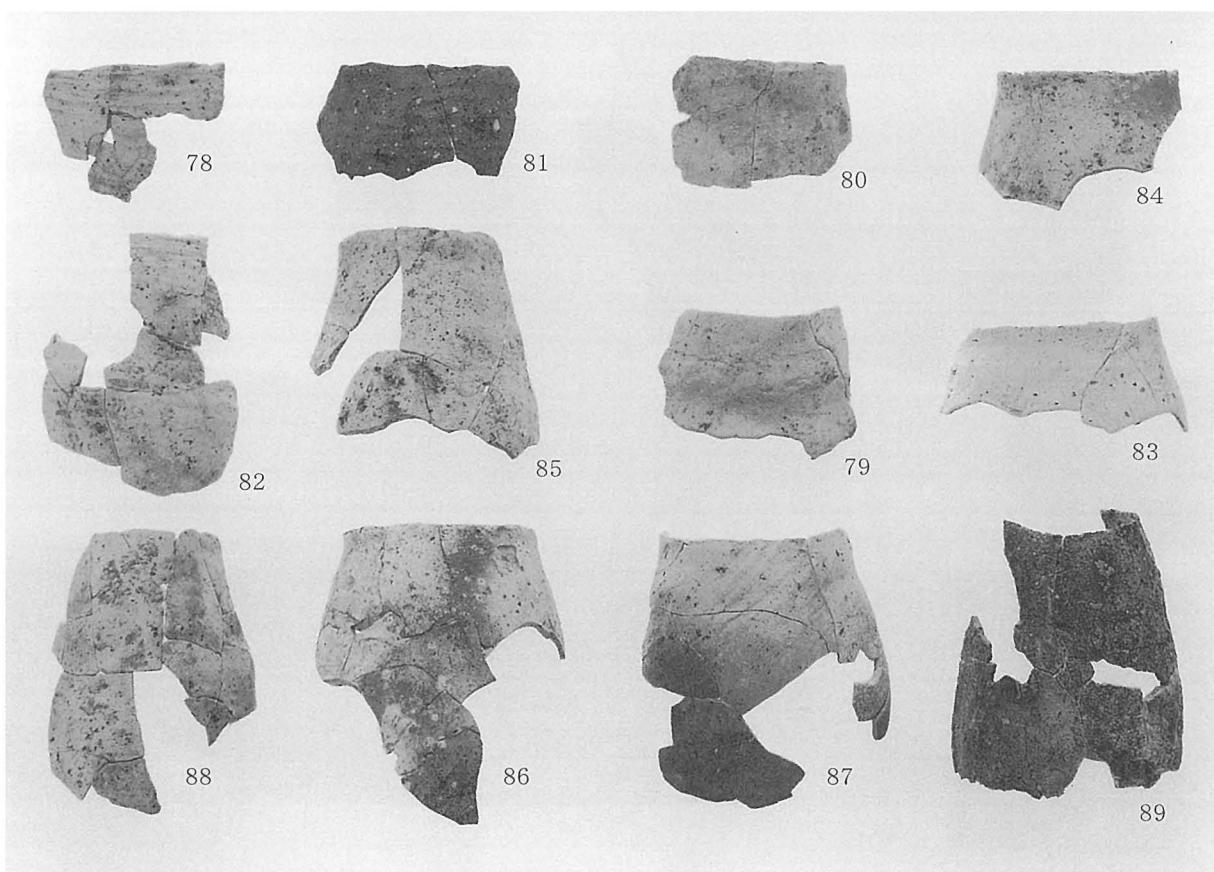
A地区第3層出土 (54) B地区第3層出土 (76・77)

図版 16

意岐部遺跡第6次調査  
遺物



A地区第2～3層出土 (55・56) A地区第5層出土 (57～59)



SK17出土 (78～89)

## 第6章 芝ヶ丘遺跡第12次発掘調査

### 1) はじめに

芝ヶ丘遺跡は、東大阪市北石切町・中石切町4丁目を中心に一部日下町2~3丁目・中石切町2丁目ほかにわたる、縄文時代から近世期にかけての複合遺跡である。音川(辻子谷渓)の右岸に位置し、同渓が形成する扇状地上に立地する。昭和34年北石切町で宅地造成工事の際弥生土器や土師器が発見され周知されるようになった。その後市立石切中学校内施設建設工事、下水管埋設工事、共同住宅建設工事等で11次に及ぶ調査が行われている。調査の結果、古墳時代中期の掘立柱建物や平安時代のピット群などが検出され該期の遺物が出土したほか、縄文時代後期～晚期の土器も発見されている。縄文期の集落は市立石切中学校の東側に広がると推定されている。遺跡発見の契機となった宅地造成は北石切町一帯に及び、大掛かりな切土工事のため、確認調査等では盛土直下で地山層が露出することが多く調査例は多くない。今回の調査地は遺跡の中央部にあたる。

平成13年9月、個人住宅建設に伴い、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。基礎工事の実施により埋蔵文化財への影響が懸念されたため、工事に先立って確認調査を実施することになった。確認調査では基礎掘削の範囲では埋蔵文化財は検出されなかったが、地表下-1.4mで後述の遺物包含層が発見されたため浄化槽部分を対象として発掘調査を実施した。調査は平成13年10月4日に行った。

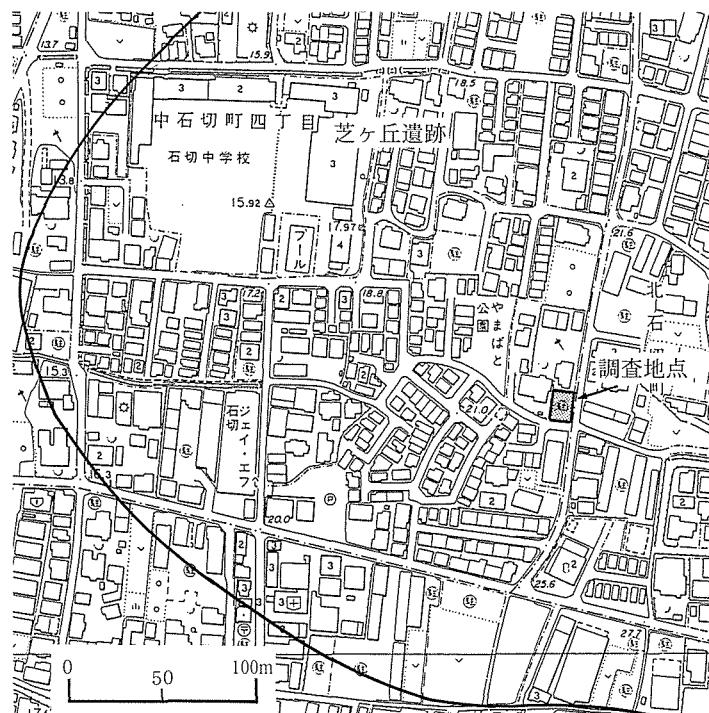
### 2) 調査の概要

調査の掘削にあたっては主として重機を使用し、遺物の採集や包含層の掘り下げは人力で行った。浄化槽部で確認した盛土以下の層位は次のとおりである。

第1層 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質細粒砂。第2層 5B5/1青灰色細礫混じり細粒砂。旧耕土層。第3層 5Y6/4オリーブ黄色粘質細粒砂。床土層。第4層 10G5/1緑灰色中～細粒砂混じり粘土。第5層 7.5YR4/4褐色中～細礫。第6層 7.5Y4/1灰色粘質シルト混じり中～巨礫。

断面観察の所見によれば、第1層は現代の土層である。第4層は無遺物であった。第5層・第6層から古墳時代～奈良時代の遺物が中量程度出土した。遺物の時期は層位的に区分されず、いずれの層にも古墳～奈良期の遺物が認められた。遺物の量も時期の偏りはなかった。基本的に両層とも礫層でとくに第5層の下部には巨礫がみられた。浄化槽埋設の掘削底面で調査を終了したため、遺物包含層の基盤となる層は確認していない。遺物包含層は湧水点となっており、自然流路の堆積層と推定される。

出土遺物は第6図に掲げた。1～5は土師器である。1は古墳時代の壺。2も古墳時代の鉢とみられる。3～5は壺。3は少し時期の下る資料か。4は内外面とも明赤褐色(5YR5/6)を呈する。6～8は須恵器である。6は壺、7は甕、8は壺の底部と考えられる。推定される器形や成形法から、7は古墳時代、8は奈良時代に属すると思われる。



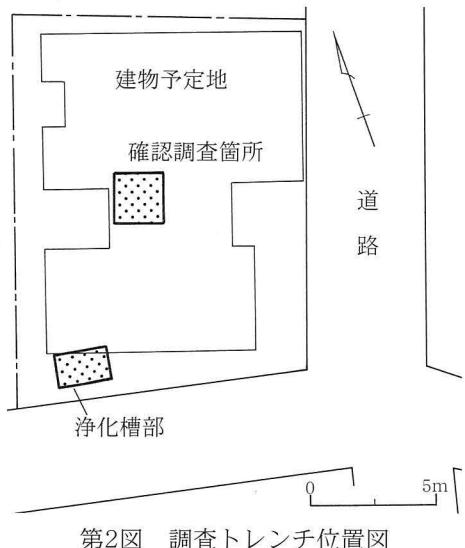
第1図 調査地点位置図

### 3) まとめ

今回の調査では、古墳～奈良時代の遺物がみられた。調査地の周辺ではこれまで調査例は少ないが憶測を交えつつ考えてみたい。第1図によると洞心池の南辺から西へ流下する小河川が見え、調査地の南端を通過している。現行の河川路線図で「北島川水路」と呼ばれているものに該当する。今回検出の礫層は現行小河川に先行する河川に由来すると考えられる。一方、遺物はさほどローリングを受けておらず、調査地の付近に該期の集落が存在した可能性が考えられる。これを市立石切中学校敷地で検出の掘立柱建物と関連付け、集落の範囲を推定するには、さらに周辺での調査進展が望まれる。



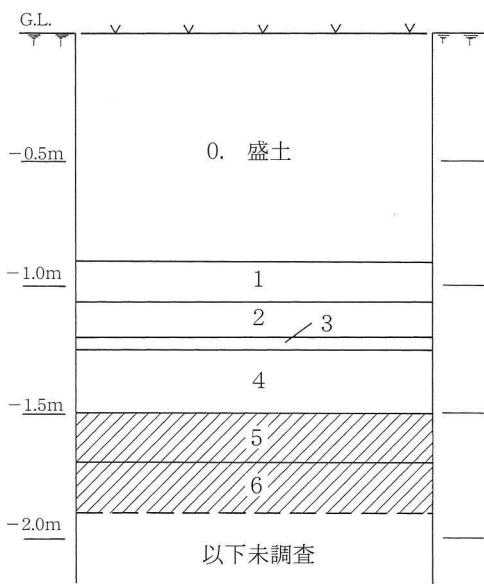
第4図 機械掘削の状況



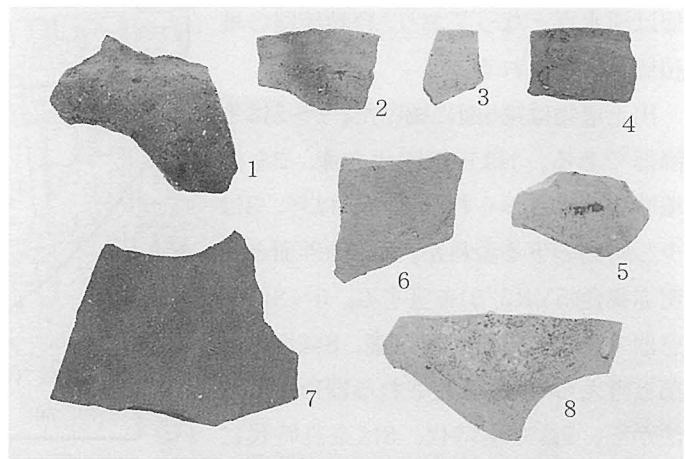
第2図 調査トレンチ位置図



第5図 浄化槽部の断面



第3図 浄化槽部断面柱状図



第6図 出土遺物

## 第7章 巨摩廃寺遺跡第9次発掘調査

### 1) はじめに

巨摩廃寺遺跡は、東大阪市若江西新町3丁目から一部同町2丁目にわたる、弥生時代から中世期にかけての複合遺跡である。弥生中期の拠点集落である瓜生堂遺跡の南に接する。本遺跡は旧大和川が形成する微高地上に立地すると考えられる。昭和39年、府道中央環状線建設工事の際に旧河内市教育委員会によって発掘調査が実施された。調査の結果、中世期の基壇状の土層や礎石が発見され、周知されるようになった。その後は樟蔭東学園の校舎建設工事や下水管・ガス管の埋設工事に伴って発掘調査が行われてきた。平成13年10月、個人住宅建設に伴って「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設工事では基礎工事として簡易鋼管杭を打設する予定で、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査を国庫補助事業として実施することとなったが、钢管杭の根入れの兼ね合いから、協議の上、打設の影響のない箇所(2×2m)を選定した。調査は平成13年10月31日に行った。

### 2) 調査の概要

調査の掘削にあたっては主として重機を使用し、遺物の採集や包含層の掘り下げは人力で行った。確認した層位は次のとおりである。

第0層 盛土。 第1層 7.5Y2/1黒色シルト質粘土。 焼けたワラ材を多量に含む。 現代の土層。

第2層 5B5/1青灰色粘土。 旧耕土層である。 第3層 10Y5/2オリーブ灰色シルト質粘土。

第4層 5Y5/3灰オリーブ色細粒砂混じり粘土。 第5層 7.5Y5/1灰色細粒砂。

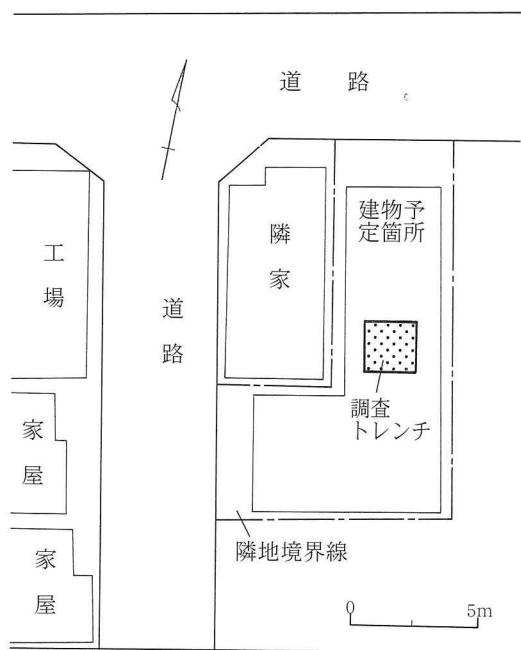
遺物採集は第3～4層を一括して行った。断面観察において分層できたものである。第5層の細粒砂層は湧水点となっており、第3図のようにトレーナーが浸水して壁面崩壊の危険性が生じた。また前記のようにトレーナーを拡張することもできないため、地表下-1.8mで調査を中止した。第3～4層には奈良時代から中世期の遺物が中量含まれていた。断面の観察から第5層の細粒砂層をベースとして第3～4層が堆積したことが知られた。出土遺物は第5図に掲げた。1・2は土師器の小皿である。2の底部は突出しており、15世紀代に属すると思われる。3～5は須恵器の破片である。4は鉢の破片か。5は甕である。いずれも推定の器形や成形法から奈良時代ごろに属すると思われる。6は奈良時代の平瓦である。遺物では平瓦の出土が多く、注目される。

### 3) まとめ

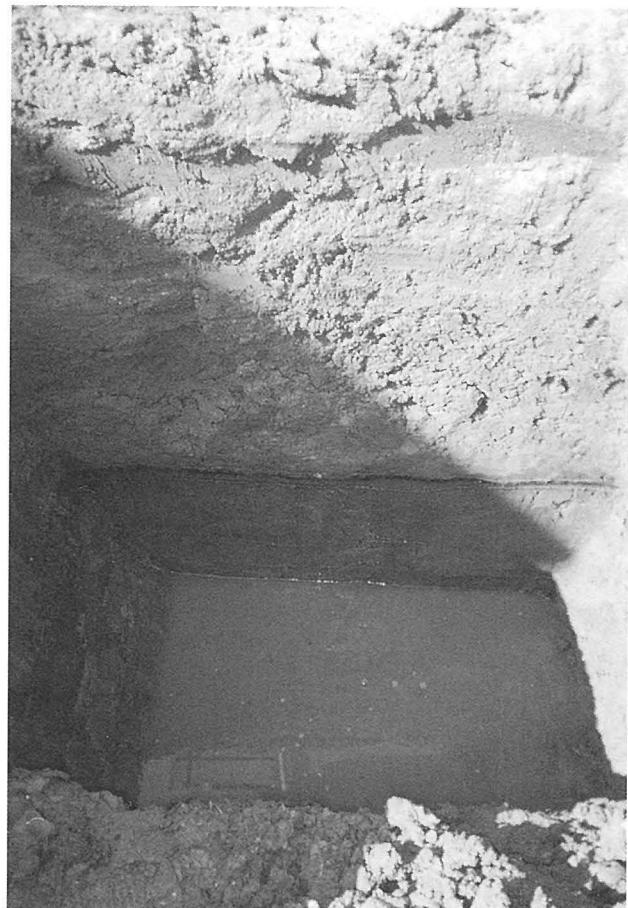
今回の調査では、奈良時代・中世期の遺物がみられた。樟蔭東学園の本館建設工事に伴う第2次調査では古墳～奈良時代のピット群などの遺構が検出されている。平瓦の出土が多いことから該期の建物が周辺に存在した可能性がある。また調査地は巨摩廃寺遺跡の南西端に位置しており、遺物の包含状態からも、巨摩廃寺遺跡は確実に西へ拡大することが判明した。



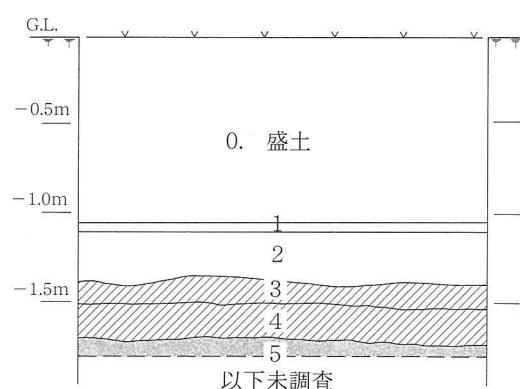
第1図 調査地点位置図



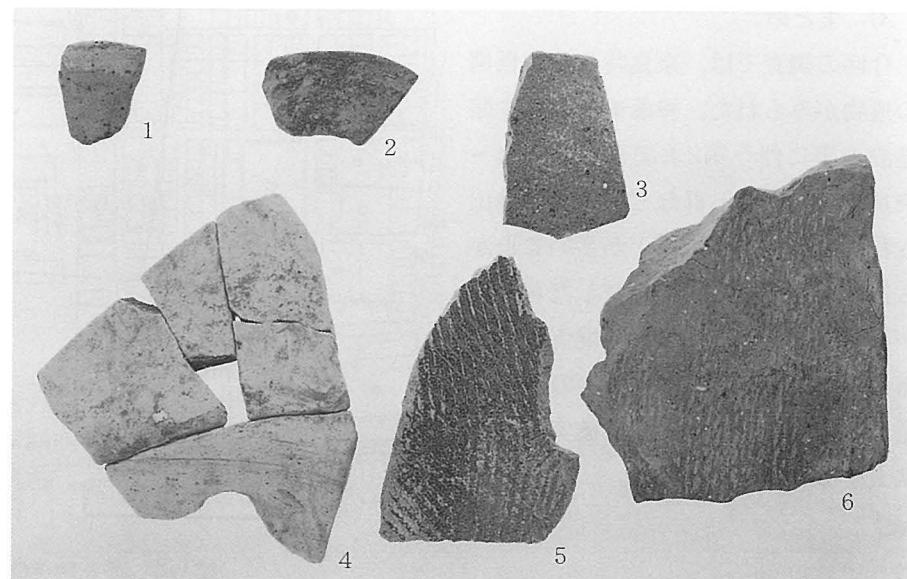
第2図 調査トレンチ位置図



第3図 西壁断面の状況



第4図 西壁断面柱状図



第5図 出土遺物

## 報告書抄録(その1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう -へいせい13ねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報 -平成13年度-
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	第1章 勝田邦夫 第2・3章 若松博恵・槇原美智子 第4・5章 菅原章太・槇原美智子 第6・7章 菅原章太
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
みずはやしやかたあと 水走氏館跡	東大阪市五条町 1320番地	27227	59	平成13年 1月15日～ 2月8日	183m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
やまはたこふんぐん 山畠古墳群	東大阪市瓢箪山町 89-1番地	27227	66	平成13年 2月13日～ 3月28日	200m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
にしのつじいせき 西ノ辻遺跡	東大阪市弥生町 1414-6番地	27227	45	平成13年 5月9日～ 5月25日	27m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
おきべいせき 意岐部遺跡	東大阪市御厨東 2丁目716-1,5番地	27227	101	平成13年 7月23日～ 9月20日	191m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
しばがおかいせき 芝ヶ丘遺跡	東大阪市中石切町 4丁目2178-3番地	27227	23	平成13年 10月4日	7m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
こまはいじいせき 巨摩廃寺遺跡	東大阪市若江西新町 3丁目6-20,13-5, 13-6番地	27227	96	平成13年 10月31日	4m <sup>2</sup>	個人住宅 建設

## 報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水走氏館跡 (第2次調査)	館 跡	鎌倉時代～江戸時代	ピット・溝・土坑	土師器 陶磁器 貨錢	
山畠古墳群 (第20次調査)	古墳群集 落	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物・ ピット・土坑・溝	弥生土器 須恵器 韓式系土器 土師器	
西ノ辻遺跡 (第44次調査)	集 落	縄文時代 弥生時代 平安時代	ピット・溝・土坑	縄文土器 弥生土器 土師器 石器	
意岐部遺跡 (第6次調査)	集 落	古墳時代 奈良～平安時代 鎌倉～室町時代	掘立柱建物・ピット・ 土坑・溝・池沼	土師器 須恵器 瓦器 砥石 製塩土器 滑石製有孔円板	土馬出土
芝ヶ丘遺跡 (第12次調査)	集 落	古墳時代 奈良時代	—	土師器 須恵器	
巨摩廃寺遺跡 (第9次調査)	集落 寺院跡 古 墓	奈良時代 室町時代	—	土師器 須恵器 平瓦	

**東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報**

－平成13年度－

発 行 日 平成14年3月31日  
 編集・発行 東大阪市教育委員会  
 〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号  
 Tel. 06-6728-9361  
 印 刷 所 グランド印刷（株）